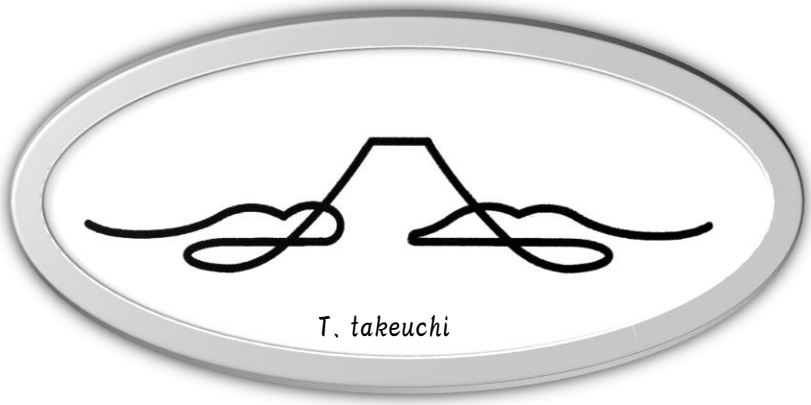
複雑学

日本文明物語＆哲学

（日本習合論からの発信）



Theory of complexity

A JAPAN CIVILIZATION STORY & PHILOSOPHY

序説・中村純二

本著・田中文夫

（個人研究著作、非売品）

【著作権上の取り扱いについて】

「**著作権法**」上における「**著作物**」とは、同法第２条１項に定義されています。
「**著作物**　　**思想又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するものをいう。**」　その作品は広範に及びます。

他方、「**思想又は感情を創作的に表現したもので無いもの**」は、「**著作物とみなされません**」。
著作にともなう権利は、著作権に帰属し、複製権、上演権、演奏権、上映権、口述権、公衆送信権、翻訳権、翻案権、展示権、領布権、譲渡権、貸与権、等々。その他では、著作権者、著作者人格権、著作財産権、著作隣接権、著作権の制限、等もあります。

一方、「**著作権の対象とならないもの**」として、事実の伝達にすぎない、雑報や時事の報道（10 条 2 項）、憲法や条約、国・地方公共団体・独立行政法人が発布する法令類（13 条 1 項）、裁判所の判決等（13 条 2 項）、等々があります。

また、「**著作権の制限**」においては、**私的使用を目的とした複製**（30 条）、付随対象著作物の利用（30 条の 2）、図書館における複製（31 条）、**引用（32 条）、営利を目的としない**上演等（38 条）、行政機関情報公開法等による開示のための利用（42 条の 2）、公開の美術の著作物等の利用（46 条）
特に「**引用**」において、本書では**他者の著作物の一部や新聞報道**の**引用**をしていますが、**研究目的**のための一次資料として利用するとともに、営利を目的としない研究書でもあります。

日本の法体系において、最上位「法」は「**憲法**」であり、「**著作権法**」は憲法の下位法規となります。憲法に定められる基本的人権と、その権利や義務と公共の福祉において、思想及び良心の自由（第 19 条）、信教の自由（第 20 条）、表現の自由等（21 条）、学問の自由（第 23 条）、財産権（第 29 条）等々が優越します。著作権法は憲法が定める諸権利や自由については、憲法を上回るものでありません。

それらを熟慮した上で、本著は「**個人研究著作、非売品**」としてまとめたところです。

Cover Logo
Drew by Tamio Takeuchi
2019.08
It is look like Eye of Providence,
As look like Eye of Buddha’s,
And look like Eye of climber on looking down from the summit.

国体とは ＝ ❶ 象徴天皇を戴き、国民が統治する「政体（国民主権における象徴天皇制）
（国体＝政体＋國體＝対な存在） ❷ 祭祀天皇を戴き、国民が生活する「國體（国民家族における象徴天皇制）

人類の文明は日本で習合 ＝ ワン・ワールドの完結（第二次世界大戦と太平洋戦争の結末）

日本国憲法の二重規範 ＝ ❶ 独立国憲法（日本国規範） ❷ 人類憲法（ワン・ワールド理念）

今日の社会 ＝ アナログからデジタル文明への進化と人工知能（デジタル技術で社会がロボット化）

近未来社会 ＝ ポスト・デジタル、ＳＮＳ社会と人間原理（デジタル思考で人間がロボット化）

知が欲する ＝ 真・善・美・そして自由（ホモ・サピエンスの普遍的人間原理）

プロローグ

私が生まれた太平洋戦争終戦の翌年、1,946年11月3日は「**日本国憲法**」が公布され、その後「文化の日」として国民の祝日となりました。憲法制定時、第一次吉田内閣で憲法担当国務大臣としてあまたの国会答弁をおこない、憲法案を取りまとめたのは、**金森徳次郎** 憲法担当国務大臣です。世界に例のない**戦争放棄**をかかげ、**国民主権、象徴天皇制、基本的人権の尊重、平和主義**、を内容とします。

人類が集団生活を始めて以来、人類の歴史は戦争の歴史でした。そこに突如、「**戦争放棄**」をかかげた**平和憲法**の誕生は、**歴史上二度目**となる特異な「**日本文明**」の原点です。**一度目の原点**は604年、**聖徳太子**らによる「**十七条憲法**」発布です。**二度目の原点**は第二次世界大戦に敗れた後、1,946年公布の「**日本国憲法**」です。しかし今日の**安倍晋三**内閣は、**日本国憲法改正**をかかげます。従来から「**日本文明はない**」、と揶揄されてきましたが、「**現行憲法に基づく日本の成熟**」こそが、「**人類の未来文明**」であると私は考えるに至っています。

憲法論議は別として、金森国務大臣はその後、国立国会図書館＝初代館長に就任されます。そして東京本館ホールに掲げられた金森館長の書、『**真理がわれらを自由にする**』という生き方こそが、これから展開する『複雑学 **日本文明物語＆哲学**』研究の核心となります。

「**真・善・美**」のイデアを唱えたのはプラトンとされますが、**美学**と**哲学**には二つの方法論が考えられます。一つは「**真理と同調の美学**」、二つ目は、「**真理に抵抗する美学**」です。**同調**（ハーモニー）の中で自我は消え去り、**抵抗**（レジスタンス）の中で自我は必然から解き放たれます。この二つの中に、**自我**という執着心から開放されて**自由**になれる、「**美の本質＝真理**」を見出すことができるのです。

これまで半世紀以上にわたる私の**登山**と、**ヒマラヤ遭難死亡事故体験**は、次のように私の**知性**に語りかけます・・・・・「**美の真理が自我を必然から解き放ち、そして自由な感性を味わうことができる**」・・・・・と。このことは、「**生命の必然＝生と死**」からも**自我は開放**され、最も**文化価値**を高める「**人間の自由な存在**」を体感することになります。

私が**山岳文化**について2,003年来師事させていただくのは、東京大学名誉教授（理学博士＝宇宙光学）＝**中村純二**先生です。先生の令夫人＝**中村あや**様は**金森徳次郎**・憲法担当国務大臣の**次女**で、ご自宅の応接間には『**四時灌花** 徳次郎』の書（次頁）が掛けられています。

中村あや様（88 歳）　中村純二先生（93 歳）

2017 年 7 月＝表丹沢　水無川　戸沢出合にて

＜ **中村純二**先生 ＞

東京大学名誉教授（理学博士）、

第 1～3 次南極観測隊員（第 3 次越冬）

東京大学スキー山岳部（元：部長）

日本山岳会（元：副会長）

日本山岳文化学会（元：理事）

応接間に掛る金森徳次郎先生の書

中村先生宅応接間にてご夫妻と著者

2015 年 9 月

複雑学

日本文明物語＆哲学

プロローグ　……３

もくじ　……５

はじめに　……７

序説　……１２

日本文化の原点について・・・中村純二

第一章　日本文明のルーツへ

一・　生誕地の歴史から世界文明へ・・・１７

二・　世界文明の原点・・・３２

三・　シュメールから古代イスラエルへ・・・３３

四・　シュメール文明と日本文明の関連・・・３４

第二章　世界文明は日本で習合

一・　人類移動～神話からＤＮＡハプログループの流れまで・・・４１

二・　太平洋戦争はワンワールド勢力の終着点・・・６３

三・　日本文明のスタート・・・６９

第三章　日本文明から世界へ発信

一・　現代の世界文明・・・７７

二・　日本文明から世界へ発信・・・８３

三・　若手政治学者＝白井聡氏「国体論」への異論・・・８７

四・　朝日新聞による元号報道と天皇制記事・・・９３

第四章　トインビーの文明史観から

一・文明の始源・・・１０６

二・文明始源の因子は人種か、環境か・・・１０９

三・トインビーの歴史研究を離れて・・・１１９

第五章　文明と文化のちがいは

一・歴史学者、社会学者、の定義から・・・１２３

二・生物学者の発想から・・・１２５

三・電気技術者、物理学者、の理解から・・・１２６

四・複素（数）的世界観から・・・１３１

第六章　知が欲する＝真・善・美・そして自由

一・真理・・・１４０

二・善　・・・１４２

三・美　（一）美の感性・・・１４５

（二）美の様態・・・１４６

（三）美の価値・・・１４９

四・そして自由　・・・１５１

第七章　明日の社会＝人間原理と人工知能

一・カオスの中で自己組織化と進化・・・・・１５４

二・新しい人間原理と人工知能・・・・・１７１

三・デジタル文明の自立（粒子性）と依存（波動性）の複素性・・・１８２

エピローグ　・・・・・１８６

参考資料

古代＝天皇系図　・・・１９０

世界史年表１～７　・・・１９３

主著参考図書　・・・２０１

中村純二・田中文夫・著作物　・・・・・２０７

はじめに

学者ではない、電気技術者の私が、本書の課題に取り組むことは無謀といえます。しかし私は「**文明論**」を学説として立証するのではなく、あくまでも**思考実験**たる「**一つの物語**」としてまとめてみたい、と考えたのです。

デジタル時代の現代、専門・細分・深化された学説から立証するのは、誰においても限界領域の外となります。それゆえ、「**事象の全体像**」を思考実験がごとく「**一つの物語**」としてまとめることは、過去・現在・未来を連続時間軸上に捉える、**アナログ思考**にほかなりません。

デジタル時代の現代、膨大な断片知識を積み上げ、全体像を正確にとりまとめることは、事実上不可能です。後述する人間の「諸限界」があり、たとえれば浦島太郎が竜宮城から現在を語るようなものに類します。それゆえに暴挙を覚悟の上で、身の回りの書物を糧に、机上の**思考実験**成果を取りまとめることにより、「**一つの文明物語**」を創作してみることにしました。

しかしすでに**中村純二**先生は日本文化を概説され、その論を日本山岳文化学会・機関紙第一号（2003 年）に、「**日本文化の原点について**」を述べられています。拝読してから早や 17 年が過ぎますが、私の論考はここ3年程です。

６８歳で生業（設計事務所）をたたみ、以後自由な身となり思いっきり論考できる時間を得たからです。断片的な雑学は半世紀来続けていましたので、雑学の**デジタル情報**（断片知識）を**アナログ物語**（本書）へと紡ぐのは、難しいことでありませんでした。バラバラだった知識のニューロネットワークは、シナプスへのゲート情報を通して、一つの物語へと組み上がります。

これもまた、生業であった「**設計**」の**技**です。

「**文化**と**文明**」の違いは本論で述べるところですが、中村先生標題の「**文化**」を「**文明**」と読み替えても支障はない、と考えました。そこで本論の始めに、「**序説**」として掲載させていただきました。そして本論は、「序説」の根源や中身に迫るとともに、デジタル時代の未来展望を加えたものとなります。

「**歴史**」は読み込むほどに要素が加わり、理解が深まり、加筆・修正が生じます。トインビーも述べるよう、歴史は固定でなく、順次上書きのバージョンアップを繰り返す、「**時間軸情報**」でもあります。

今＝2,020 年 2 月、世界の人々は、「**人類社会**」とする統一概念はあっても、**民族**の独自色主張を強めています。その原因は、**宗教**、**思想**、**貧富の格差**、**武力格差**、つまり「**文明**（生活）**の格差**」という小さな違いをことさら際立たせた**境界**を設け、国家、民族、地域へと収斂させて**孤立**させる、内向きな**文化環境**にあります。**孤立**は、**自立**と異なります。**自立**ならば、**周縁**との関係を調整しながら共存共生できるのですが、**孤立**は周縁を相対化して敵対視する不寛容さをもち、連携、共存、共生を困難にします。

この**小さな違い**が何から生じるかを考えると、「**人類の歴史への無関心さと不理解**」が、**人々を不寛容にさせている**といえます。今、「**人類の全体像を模索し、語り、自立とともに社会での連携～共存を再認識する努力**」が不可欠です。

精緻な学説を紡ぎだす**演繹法**は**部分の真**を導きますが、**部分の真**から**全体像**に迫る**帰納法**により、・・・さらにもう一歩、**フラクタル**（自己相似）に**全体像を模索**して、「**人類社会**」への理解を深めることが重要と考えるのです。

「**日本文明はない**」とされてきましたが、「**実は日本文明こそ、人類社会が目指す世界の全体像ではないか・・・・・**」と今、改めて考える次第です。

「ない」ということは、「すべてがあるから気づかない、裏返しの表現」とする仮説が、この論考の始まりです。

そんなことを考えている私に先立ち、やはり学者でないが同世代技術者の一人、鈴木弥栄男氏と2,016年に出会いました。横浜国立大学技術士会の一員である鈴木氏は、同じく同会会員で、私の建築設計仲間だった建築構造専門家の小林茂氏から紹介されます。

鈴木氏との初対面は、秦野戸川公園内で開催した、中村純二先生の「ポルトガル紀行」講演会々場でした。英語の得意な鈴木氏は、『ポルトガル憲法』の対訳や、アーノルド・トインビーの大著、『図説　歴史の研究』の対訳を手掛けておられます。そして2,017年11月、7年間にわたって対訳完了された労作、『図説　歴史の研究』の電子データ（PDF）を頂戴します。

トインビーの歴史研究は知っていましたが、「歴史」ゆえに著作は読んでいませんでした。さっそく対訳書の目次に目をやると、何と、これから私が展開しようとする、「文明論」が整理されています。対訳書は、英文和文併記式A4版794頁の大作。アーノルド・ジョゼフ・トインビー(Arnold Joseph Toynbee＝1,889～1,975年）の原書『A STYDY OF HISTORY, ILLUSTRATED（図説　歴史の研究）』は、1,972年の発行です。それは46年前、私が初めてヒマラヤ登山（1,974年）に立ち向かっていた頃でした。

翻訳書の内容を現在の私の目線で読み解くと、トインビーの視点と異なってきます。トインビーも『まえがき』に述べるよう、「歴史は変幻自在であり、時代遅れとなる運命にあるので、常に付け加えていく必要がある(対訳P-12要旨)」、としています。

特に今（2,020年）、第一次産業革命（18～19世紀）以来の大変革時節＝電子情報産業革命（21世紀）の中にいます。

電子情報産業革命とは、次なる要点を示します。

❶ 電子技術の超小型高速大容量汎用化
❷ コンピュータ情報通信ネットワーク・ウエブの未曽有な拡がりと接続連系
❸ 人工知能とロボット化の進展（人間機械論＝ウィナー以降）
❹ アナログ（連続性）からデジタル（離散的瞬時性）信号への移行がもたらす、文明・文化変遷（人の意識変遷）

これにより、生活様態、思考方法は、これまでの人類を大きく変えていきます。反面、「文明を形成する概念要素＝宗教と思想と政治」は、未だ「古代」を色濃く引きずっているアナログ思考が続きます。このデジタル思考とアナログ思考を意識統合することが、本書における「複素的世界観」の試みです。

半世紀前にトインビーは、「まえがき」で次のように述べます。

『人類は政治的にはまだ固く結びついてはおらず、各地域でお互いに異邦人としていまだに生活し、「距離感が消えうせた」現代よりずっと前の時代から受け継いできている。二つの世界大戦や、現在の世界的規模に亘っている不安・欲求不満・緊張・暴力が、それを物語っている。もしも単一家族国家のようなものにまで共に成長するまで進まなければ、人類は確実に破滅に向かうであろうと思っている。（対訳書P-5）』

原書が発行された1,972年から現在に至るまで、時は半世紀を過ぎました。この間の知性、テクノロジーの変化は、電子情報産業革命の特徴に示す前記❶～

❹をもって大転換される途上にあります。トインビーの世代から知性も進化を続けていますが、特に**アナログ思考**（信号）と**デジタル思考**（信号）**との違いに着目した論文**を、浅学な私は目にしていません。

電気技術者の私が理解する**信号様式**の違いは、**人間知性の変化に根本的な影響をもたらせる要因**として、着目しています。

デジタル信号化は、「**文明を形成する概念要素＝宗教と思想と政治**」の「**情報エントロピーを増大**」（分からないことが増える）させます。「**要素**」はことごとく裁断、断片化（ビット）され、**素粒子**のごとく他の**素粒子**と構造的に連系して実態を得、機能となります。

それはあたかも**素粒子**の**不確定運動**が**確率的**に結合して**原子**を作り、その**原子**が組み合わさって**分子**となり、**分子**は**物質**の最小単位となる宇宙の原理と、**相似作用**（フラクタル）を果たします。しかし人間の**人間たる特性**は、この宇宙の原理に対し、**意図的に逆らって必然を解き放つ**「**自由の感性**」、そこに人間独自な「**感性の美**」を味わうことにあります。このことを**身体**で表現し、**作品**に転化させ、**記憶**に刻み込む作用を、私は「**文化行為**」と捉えているのです。

トインビーが用語の定義に示す「**文化**」（対訳書P - 50）とは、異なる考え方です。

トインビーは同じ用語の定義の中に、「**文明**」についても述べていますが、抽象的文脈の中で、定義（対訳書P－50 ～ 52）が定かでありません。

第一部「**歴史のかたち**」の冒頭では、**国家＝文明**という大枠を示しています。

さらにトインビーは、**文明**を歴史的観点から分類ユニット化し、次なる**三つのモデル**を示します。（対訳書P - 12）

❶ **ヘレニズム文明**・・・古代ギリシャとローマが祖、多神**信仰**（古代ギリシャ神話）と知性（人間性、理性、合理性→科学）

❷ **中国文明**　・・・儒教

❸ **ユダヤ文明**　・・・ヘブライズム（ユダヤ教、キリスト教）、一神教**信仰**（啓示、啓展、予言、戒律、終末思想）

それに対して私は、次なるユニット分類を提示し、**文明＝広域生活技術の普遍性**（都市、産業、科学、法規範）と捉え直してみます。

❶ **一神教文明**・・・ユダヤ教、キリスト教、イスラム教**信仰**における有神論と無神論と科学崇拝社会 → **二元論社会**

❷ **多神教文明**・・・ヒンドゥー教、ヘレニズム（多神信仰）文明における階層（カースト）社会 → **多元論社会**（ドグマ＝教義）

❸ **崇拝文明**・・・自然崇拝（神道）、人物崇拝（儒教）、オカルト（道教）→ **信仰崇拝社会**

❹ **無神修行文明**・・無神な人間中心社会 → 成仏（仏教）・・・システマチックな教義・法典 → **思想社会**

❺ **融合文明**・・・無神論者および前記❶～❹のあらゆる習合と、信仰や思想を許容する社会 → **日本社会**（八百万（やおよろず）神習合）

→ **世界融合モデル社会 ＝ 日本**

以上を理解した上で、「**好き・嫌い**」の小さな諍（いさか）いは許容しつつ、**戦争と武力による国際紛争解決を放棄した憲法**（第9条）を制定した「**日本文明**」は、**世界統一人類社会の実験モデル**として、1,946年以降の70年余を過ごしてきた・・・、と私は理解するのです。

1,946 年 3 月生れの私が過ごした日本は、まさに「**実験国家 → 日本文明**」の真っただ中にあったといえます。

トインビーがいう「**単一家族国家**」に代わる統一概念として、「**日本文明・文化**」から発して「**ホモ・サピエンスの統合**」へと発展する・・・、人類社会での理解と普及が進むことを望むところです。

他方、熱力学における第二法則「**エントロピー増大の法則**」から考えると、「**単一家族国家＝ホモ・サピエンスの統合**」が想定する「**穏やかで、平和で、格差の少ない、なめらかな社会**」は、**人間活動エネルギー**を失っていくものと考えられます。結果、差別の少ない「**フラットな社会は人間活動エネルギーを失って不活性状態に陥り劣化する**」、という理解に至ります。

では、どうすれば良いのか・・・、「**ホモ・サピエンスが希求する自主・自立・自由を尊重し、個体能力の差異の相対性を認めた上で、各々に欠ける部分を補い合う、相補的思想と制度の実現を目指す**」ことを提起します。

これらを物理現象として熱エネルギーで考える反面、**人間活動エネルギー**を刺激する、目に見えない「**人間欲求＝心のエネルギー**」が重要となります。

人間欲求（**心エネルギー**）は、**格差、差別、疎外、自己意識、等が高まるほどに増大する**、「**負のエントロピー＝ネゲントロピー**（欲求が増す）」という性質を帯び、その様態は、「**情報エントロピー**（ビット）」に似ています。

「**心**」は「**情報**」を集積し、「**創発**」により、創意工夫の「**エネルギー**」を生み出すからです。

※ 熱力学における**第一法則**（自然）＝「**エネルギー保存の法則**」（エネルギーは作られることも無くなることもなく、一定を保つ）

※ 熱力学における**第二法則**（自然）＝「**エントロピー増大の法則**」（エネルギーは自由に変換できるが、その時々で仕事に変えることができない無駄な（負）エネルギーを発生させ、無駄な（負）エネルギー総量は増大する）

「**情報エントロピー**」は、増大するほどに正確さが補強される反面、相関が撹乱されてバラバラになる、二つの面があります。人の欲求が増し、お互いが自己主張を展開すると、まとまりがつかなくなり、そこで**リーダー**（統率者）の出現が望まれます。

人間の組織では、構成員の中からリーダーを選出するか、あるいは外部にリーダーシップを求めるか、さらに全権をもったリーダーに指揮されるか、さまざまに組織の構造化が図られます。

はたして「**世界単一家族国家**（トインビー）」という**リーダーシップ**概念（思想）で人類がまとめられるかといえば、私は「**ノー**」と答えざるを得ません。

人間の心は、ある規範の統率による強制・制限は許容できても、まったく**個体的自由を失うことには同調できません**。

そして 21 世紀の現実は、「**何でも有り**」な無秩序の拡散と、情報の海に溺れ、自立できずに孤立した個体が、波間に彷徨っています。その様態は、「**宇宙における人間の量子化**」に見えてきます。

「**人類の知性**」は、「**どのようなリーダー**」を欲するのでしょうか？？？

※ **情報エントロピー**（人為）＝情報量（ビット）が増大すれば、選択肢は増えるが、不確定さや、分からなさ、が増える

人間活動エネルギーは、**自然**を**人工物化**させる**文明技術進化**として、さまざまな**物**を生産し、**都市**を形成し、**国家**の境界を定め、**生命の代謝**（生と死の自然循

環）をも人工化させ、「人類文明の閉じた系」を築いて進化をとげます。その舞台は、人類を生物種として許容する別な系＝地球の中にあります。「人類文明の系」は、宇宙を大系とすれば、太陽の中系に抱えられ、地球の小系の中にあります。

人間活動エネルギーは、地球の自然や生態に大きな影響を与えるまでに肥大化し、その事態を人類文化は人間にとっての「地球環境問題」としました。それは人類にとっての問題ですが、地球の自然が変容するまでに人工作用が大きくなった現代、地球自身の問題へと化しました。今や人類生命活動の累計が、地球自然の小系にとり、大きく作用するまでの量となったからです。

地球は、太陽からエネルギーを受けて自然変化を生じる、「太陽系惑星の一つ」です。太陽の変動は、地球の自然に大きく影響を与え、地球の自然変化は、人類社会にとっての恵みと災害の、背反性を帯びています。

人工化にともなう文明エネルギーは、「地球の系 ＜ 人類の系」として関わり合う現実の中で、どこまで許容されるのか・・・？ その関係を逆転できるのか・・・？ 逆転しても良いのか？

人類が人工化を図り続ける知性（文明・文化）は、現世人類が滅亡するまで続けられることでしょう。亡んでみなければ分からない愚かな感性の面と、滅びを予知・察知できる理性の面と、欲望を抑えて感性を生かすことができる知性の面、この三すくみなバランスシート。

はたまた地球の系を離脱して別な系へと人類文明の拡大を図るのか・・・・二十一世紀社会は、これまでにない人類変容の大きな岐路に踏み込んでいます。

人類の文明や文化活動は、宇宙がもたらす自然に抗する作用（人工・人造・人為）として、宇宙原理に抵抗する行為を美と感じ、喜びとして味わう、「特異な生命体活動」といえましょう。この特異な感性をもつ生命体「人類」が、どのように宇宙に発生し、存するのか、現世人類は今一度見直す必要があります。

子供の頃、生誕地にある「相模國第四之宮 前鳥神社」へ、祭りのたびに出掛けましたが、特別その歴史に興味はありませんでした。「皇太子殿下（令和天皇）がきたことがある」、という噂話は聞いたことがあります。

しかし近年改めて神社におもむき、『前鳥神社ものがたり』を購入し、読んでみて驚きました。その内容は本書に述べるものですが、相模國 第四之宮 前鳥神社からは、現生人類文明のルーツである、古代シュメール～ウバイド文明へと遡ることになりました。

そして現代に立ち返り、未来文明・文化を考えてみると、あるイマジネイションが湧きあがります。

すでに一昨年（2,018.06.07）『雑学 日本文明物語』として上呈しましたが、本書はさらなる推敲・加筆を加え、複雑学の哲学書に改変してみました。

本書は、そこから思い描いた一つの思考実験＝「複雑学 日本文明物語＆哲学」であります。

※ 複雑学としましたので、難解な部分は読み飛ばして先に進んで下さい！

序説　（山岳文化学より）

日本文化の原点について　・・・・・　中村純二

最終氷河期が終わった約一万二千年前、北極圏の氷床が溶けて海水位が上がったため、日本列島はユーラシア大陸から切り離されることになった。原初「**日本**」の風土誕生である。

日本列島は南北に長く、季節風による日本海からの水蒸気の補給により、世界有数の多雨豪雪地帯となっている。また四大プレート（ユーラシアP、北アメリカP、太平洋P、フィリピン海P）の境界に位置するため、地形も極めて複雑である。これらのため、榕樹（ガジュマル）や照葉樹、暖帯落葉樹などを含む暖帯林、ブナやミズナラなどの温帯落葉樹を主とする温帯林、並びにシラビソやトドマツなど常緑樹の茂る亜寒帯林などそれぞれが各地で良く育ち、四季折々の変化に応じて雪月花の趣きある景観を作り出している。土壌も良く肥え、雪解け水や雨水も十分浄化されて清冽な渓流となり、虫や魚、鳥や野生生物など動物の生態系も豊かである。こんなに自然が美しく、変化に富んだ国は世界でも珍しい。

そこに住む原初「**日本**」の人類は、大陸や朝鮮半島から移動して来た**西方民族**、シベリアや千島列島から流入してき来た**北方民族**、南方やフィリピンから北上して来た海洋民である**南方民族**などで、いずれも狩猟生活を送っていた。琉球語とアイヌ語の対比から、千島海流を利用した沖縄と北海道の交流もあったようで、琉球・アイヌ方言と内地方言は我が国の二大方言として扱われているが、いずれにしても、**日本列島は移動種族の終着点**となっていた。このため、列島内では盛んに**混血**や**融和**が行われ、文化的にも複合・混成が生じて、ここに日本独特な**ハイブリット文化**が生まれることになった。

縄文時代の人々は、列島の穏やかな自然と共生し、太陽光や水、陸海からの食糧を大自然からの恩恵として感謝して受け取ると共に、地震や噴火、暴風雨などには畏敬の念で対処していた。文化的には各部族の奉じていたアニミズムやシャーマニズムが**習合**され、山や岩や巨木に**神が宿る**という、天地や自然を神として崇める**原始信仰**が芽生えていった。当時の神の依代（よりしろ）（神羅万象が成りうるもの）としては、しめ縄を張った山上の大岩、巨木の洞穴、ストーンサークル、貝塚などが挙げられる。

三内丸山遺跡の、高さ十六メートルにおよぶ六本のクリの大木の柱列の方向は、冬至の日の出の方向と一致するが、これは太陽が次第に強くなる節目の日を畏敬したしるしである。

法螺貝と褌の文化は、ハワイマウイ島のカフナ族をはじめ、東南アジアや中南米でも見られる、環太平洋的な古代海洋民族の文化といえるのではなかろうか。

食料は木の実や魚介類、動物や鳥など数百種に上がったが、縄文人は木の実のアクを抜くために、これを土器で煮る術を覚えた。その後、神々に対する捧げ物の器ともなった土器には、自然の循環やエネルギーを象徴する渦巻文がつけられた。同様な渦巻紋様はアイルランドの巨石文化遺跡にも見られる。

以上、原初「**日本**」の民族や文化は、本質的に**融合共生的**であった。しかも、美しい風土を構成する大自然を、畏怖畏敬する姿勢がとられたため、融合は無節操ではなく、**調和**と**秩序**の中でおこなわれ、そこに**美的洗練**や**詩情**まで秘められる結果となった。このことは私共の原点に横たわる、**良き特徴の一つ**と考えられる。

弥生時代に入り、農耕が主となると、生活の基盤となる水や森、あるいは災害に対して安全な場所などに、**祠**が作られるようになった。

北陸の地滑り地帯は、生命力に溢れ、農作物も良く育つので、人々は敢えてそこに住み着き、その中の地盤のしっかり土地に**社**を立てた。産土（うぶすな）（産土神＝産まれた土地の守護神）の社は災害時の避難場所となったのである。ニュージーランドのマオリ族の聖地も、地滑り地帯の中の堅個な地盤の上に設けられていることが最近明らかにされた。

三原山は当時御腹山と呼ばれ、溶岩は大地の子宮から産み出される御神火の恵みと考えられていた。一九八六年に起こった大噴火の際にも、山頂の三原神社に溶岩流は到達しなかった。島の人々は永年の体験や直観から、ここを安全な場所と知り、社を建てて感謝の気持ちとしたのであろう。

この頃、**天孫民族**や、神武東征民族**応神族**など、北方**騎馬民族**にも関係する侵入征服者が数回にわたって倭の国に攻め入ってきた。**古事記**や**日本書紀**は、**征服者の記録**であるため、**万世一系**との伝説的**神話**になっているが、発掘調査の結果では、これらは夫々独立な建国であったことが明らかになりつつある。

唯、この場合も、我が国では**征服者**が**被征服者**を抑えるのでなく、互いに**混血**し、**融和**して、より**包括力のある民族**へと進化して行った点に特色がある。

伝説的神話では、天皇系の天照大神や高皇産霊尊などを「**天津神**（あまつかみ）（高天原の神）」とされた。それら神は、各地域の守護神となった。天地創造の大物主命や、国譲りの大国主命、伊勢の地、出雲、九州、沖縄、関東などにも祀られている猿田彦命などは「**国津神**（くにつかみ）（土着の神）」とされた。

天津神は、**国津神**より優位に立たされ、国津神を祀った地域の種族、熊襲（くまそ）、蝦夷（えみし）、土蜘蛛（つちぐも）、国巣（くず）などは、蔑称で呼ばれている。しかし真実は、天津神も国津神も日本民族にとっては**八百万神**（やおよろずのかみ）の一員であり、天孫族熊襲や蝦夷も互いに**混血**を繰り返し、文化的にも**混成**を遂げるという**受容力の大きい生き方**であった。

その一つの証しとして、**伊勢**では天照と猿田彦が祀られ続け、**三輪山麓**には、山自体が御神体である大物主を祀る大神神社と、天照を祀る桧原神社が共存し続けている。

古墳時代に入ると、唐から**仏教**や政治制度としての**儒教**がもたらされた。聖徳太子は仏教受け入れに対し、**神仏習合**である国家宗教構想（日本教確立）を打ち出して平和裡に解決した。天智天皇と藤原鎌足は、儒教的な宮廷律令制度と異なる日本独自の律令制度に改め（大化の改新）、初めて「**日本国**」を名乗り、種族の**習合**を達成した。

文化といえば、**万葉集**は、原初日本文化の集大成ともいえる芸術性豊かな作品であるが、仏教を採り入れた後の、**源氏物語**や**古今和歌集**は、さらに芸術性が高められた最高傑作といえるのではなかろうか。

平安時代には、空海らによって**密教**が日本に導入された。密教は本来多神教である上にヒンズー教の神様まで採り入れられている。これらも併せて、当時の官民に受け入れられていったが、役の行者は密教をさらに、わが国独自の**山岳修験道**に変身させ、山紫水明な山岳の中で霊性を磨き、法力を得るという、**自然崇拝**を含んだ厳しい道へと発展させていった。

大峰山（おおみねさん）をはじめ、英彦山（ひこさん）、石鎚山（いしづちさん）、出羽三山（月山、羽黒山、湯殿山）、白山、御嶽山、立山、富士山、劔岳など、開拓の物語は、山岳文化や登山史の面からも、大変興味深いものがある。

鎌倉時代に入ると、個人の救済を目指した法然、親鸞、一遍らによる**浄土宗**や、日蓮による実践的な**法華経**、あるいは栄西、道元による武士階級に対する悟りの**禅宗**などがもたらされ、仏教上多くの聖人が輩出された。しかし宗教形態としては、本地垂迹（ほんじすいじゃく）（八百万の神々は、仏が化身して現われた権現である）、反本地垂迹などの説が出され、**神仏習合**様式であり続けた。

このような傾向は、豊臣秀吉を豊国大明神として祀った安土桃山時代から、徳川家康を東照大権現として祀った江戸時代まで続き、儒学、朱子学、道教、垂加神道などが**習合**した。人々は講を組んで伊勢や各地の霊山に参詣したほか、夜を徹して東北での剣舞（けんばい）の祭、中部近畿での田楽や花祭、九州での夜神楽などに参加した。その一方では、お盆に精霊を迎え、願寺で死者を送る仏式行事もおこなっていた。

明治維新に入ると、政府は天皇制と民主主義議会を両立させるため、**祭政一致**の立場から、**天津神を崇拝の対象**とすることを法律で定め、**廃仏毀釈**（はいぶつきしゃく）（釈迦の教えを壊す）を実行した。同時に国津神を祀っている「となりのトトロ」的洞穴の小祀や、鎮守の杜の小社などは統廃合され、村の中心の神社に合祀されることになった。

これでは天然林の木が伐られたり、生活文化の中心であった伝統的な祭が損なわれてしまう。南方熊楠（みなかたくまぐす）（博物学の巨星）は、心の原点であった美しい日本の自然が壊され、貴重な生物種まで絶滅しかねないとのエコロジカルな立場から猛然と反対し、投獄されるに至った。

このような精神は、アイルランド人の血を引くラフカディオ・ハーンが出雲の社に入った時、この場所にこそ神が宿ると感得し、法華経の菩薩行の実践者でもあった宮沢賢治が、イーハトーブ（宮沢賢治の造語＝心象世界の理想郷）である「くらかけ山の雪」に、日本人としてほのかな望みを託した心にも通ずるものであった。

文明開化の波に乗り、登山に関してはアルピニズムが導入された。ウエストンと小島烏水、岡野金次郎の出会いが機縁となって日本山岳会が創立され、戦後はマナスル（ネパール、世界第八位、8,163 m）初登頂にも成功して、多数のアルピニストが輩出した。しかしその場合にも、美しく趣きのある日本の山が忘れ去られることはなく、静観的登山、マタギ（狩猟を専業）も歩く自然のままの山、深い森の中でawe（畏れ、畏怖、畏敬）ともいうべき、日本人の原点にも通じる厳かな気持ちが味わえる山などへの回帰が見直され、山岳文化の面からも再評価されつつある。

第二次世界大戦が終わると、わが国は天皇制から解放され、信教の自由も獲得できた。阪神・淡路大震災の慰霊祭では、神主・僧侶のほか、牧師・ヒンズーの教師まで一堂に会して、祈りや踊りが捧げられた。

ただ、**科学万能主義**と**経済成長の影響で**、国土は急速にリゾート開発され、国

立公園内まで**車道**がよく延び、至る所に**ダム**が造られ、川岸や海岸の大半が**コンクリート**で固められ、国の「**まほろば**（素晴らしい場所、住みよい場所）」ともいえる**見事な自然が、次々に失われていくのは誠に残念である。**

またそれ以上に、**日本人の心の原点**ともいえる「**正しい神話**」が、**歴史の教科書に見出せないのは、淋しいことである。**

私達は今こそ、神話にも想い至って、自然に対する畏敬・畏怖の念（awe）、**循環と共生の哲学など、先人の心を次代に伝えていくと共に、エコロジカルな配慮が、人類存続のためにも今や不可欠であり、山岳文化を含む伝統文化への心配りが、ますます大切であることを真剣に訴えていきたいものである。**

※日本山岳文化学会機関紙「山岳文化」第1号、2003年10月1日発行から

（カッコ内）は田中が説明を追記

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

序説から【雑学 日本文明物語】への波及・・・・・田中文夫

中村先生の論文、『**日本文化の原点について**』を読んだのは、発行直後に日本山岳文化学会会員への配本を受けた時です。私はまだ日本文化への関心は薄く、単に「**文化と文明のちがい**」を模索していた時節でした。その面から明確な答えは得られませんでしたが、「**日本独特のハイブリッド文化**」というフレーズが、鮮明な記憶として今も残っています。

日本山岳文化学会が設立したのは2003年3月ですから、機関紙第1号『**山岳文化**』の発行は同年末となります。設立時における**中村純二先生**は理事に、私は評議員として参画し、この学会活動が中村先生と出会いの場となりました。

以来17年にわたるご指導の中で一昨年（2018年6月）、私は『雑学**日本文明物語**』をまとめ、私製版製本して国立国会図書館蔵書となりました。さらに今、推敲・書き直しの中、中村先生の「**日本文化の原点について**」を読みなおしてみると、先生との**志**が極めて似通っていることを再発見しました。中村先生と私は23歳も離れ、親子に類する時間差がありますが、奇しくもその**志**に違いはないことを、改めて再発見しているこんにちです。その面から、中村先生の『**日本文化の原点について**』を「**序説**」として掲載させていただき、「**日本文明・文化概論**」として、通読していただくのが最良であると考えた次第です。

「**日本独特のハイブリッド文化**」をさらに掘り下げると、**ホモ・サピエンス**発祥にまで遡りました。ホモ・サピエンスの種族移動の**終着**において、「**日本習合**」という考え方は奇しくも同じで、中村先生の論旨をさらに拡大解釈・展開させました。また私の出生地（四之宮）にある前鳥（さきとり）神社の祭神が、**菟道稚郎子命**（うじのわきいらつこのみこと）（応神天皇第六皇子）であることから、**天皇系統**に興味が湧きます。それを辿ると現生文明発祥の地とされる、**ウバイド、シュメール、メソポタミア、古代イスラエル**、中東の地へと至ります。さらに今、現代文明は**アナログ**から**デジタル**へと、**ホモ・サピエンス**そのものを変革しています。私は電気通信技術者として**電磁波**を学びました。中村先生は宇宙光学博士であり、**オーロラ**（光）は**電磁波**の一種で、**粒子の性質**（デジタル）と**波動の性質**（アナログ）を併せ持ちます。宇宙を理解する科学思考においても共通性があり、不思議なご縁を感じています。

第一章　日本文明のルーツへ

一・ 生誕地の歴史から世界文明へ

太平洋戦争終戦（1,945年８月）の翌年（1,946年３月）、私は中郡大野町**四之宮**（現＝平塚市四之宮）の地に生まれました。この地は相模川河口に隣接した平野部で、南に下ると平塚駅を経て砂丘となり、相模湾の深い海溝に飲み込まれます。「**相模國**」は、**足上**、**足下**、**余綾**、**大住**、**愛甲**、**高座**、**御浦**、**鎌倉**の八郡に分かれ、中郡大野町は「**大住郡**」に含まれます。鎌倉時代中期、「**相模國**」の国府は大住郡にあったという記載（鎌倉中期の『拾芥抄』）があり、その地は現在の平塚市四之宮付近、という説があります（『徐福王国相模』P-99 ）。しかし「**四之宮**」の地はそれよりも古く、奈良時代の国郡郷里制度で、『**天平七年相模國封戸租交易帳**』（東大寺正倉院文書）には「**大住郡埼取郷五十戸**」と記されていたそうです（『前鳥神社ものがたり』P-120、『大野誌』P-88）。「**前取**」の名は、「**埼取郷**」の地内にある「**前取庄**」が、八条院を本家とする蓮華心院の荘園だったと記述され、鎌倉時代の『**昭慶門院御領目録**』にある、とされます（『大野誌』P-89 ）。

中郡大野町**四之宮**（現＝平塚市四之宮）で生まれた私は、少年期を毎日、庭先の畑から西の正面に**富士山**を、その右手に**大山**を仰いで暮らしていました。地元の神社は、「延喜式内社　**相模国第四宮**　**前鳥神社**」。主祭神は、**菟道稚郎子命**です。さらに、**大山昨命**と**日本武尊**も合祀しています。

菟道稚郎子命は人皇第十五代＝**応神天皇第六皇子**で、**命**の資質と学殖に秀で、**立太子**（29 才）以前から高句麗、百済、新羅との外交政策に努め、帰化した工人を庇護して産業振興を図ったとされます。応神天皇崩御による皇位継承では、第四皇子と皇位を譲り合い、決着がつかず、長幼を重んじる儒教思想もあって、**菟道稚郎子命**は 312 年、32 歳の若さで自ら命を絶ったとされます。**第四皇子**＝**大鷦鷯皇子**＝後の**仁徳天皇**は弟の亡骸を葬り、鎮祭されたところが現在の京都宇治市にある**宇治神社**といわれます。（『前鳥神社ものがたり』より）

一方で応神天皇第二皇子＝**大山守命**は、皇太子になれなかったことを恨み、応神天皇崩御後に数百名の兵をもって挙兵します。しかし、**大鷦鷯皇子**（後の仁徳天皇）と、皇太子＝**菟道稚郎子命**の知るところとなり、菟道川の渡し守に扮する皇太子の計略によって船を転覆させ、水死させたといわれます。その亡骸は那羅山に葬られた（那羅山墓＝奈良市）とされます。

しかしそれとは別な、もう一つの超古代史物語もあります。

富士北麓**阿祖谷**（富士高天原の故地＝現・富士吉田付近）には、秦の始皇帝から不老長寿の薬草を探す命を受けて渡来（BC219年）した方士＝**徐福**一族が、BC210年頃に定住したとされます。**徐福**一族が住み着く以前にこの地は、「**富士山麓高天原**」といわれ、日本神話の神々が暮らしていたともいわれます。始皇帝が崩御し、帰化した**徐福**とその子孫は、阿祖谷で聞き知った神代以来の事績や系譜、古記録（神代文字）をまとめ、『**徐福十二史談**（別称＝**徐福伝**）』を残し、**不二阿祖山太神宮**（富士浅間神社の元宮＝世界最古の神宮）に宝物として奉納します。**阿祖山太神宮**の宮守司長（宮司長）＝**尾羽張田彦命**は、**祖佐男命**の末裔とされます。

尾羽張田彦命を初代とする８代目＝**福地佐太夫命**のとき、**大山守命**は『**徐福伝**』を学ぼうと、阿祖谷に来ます。そして佐太夫の娘を妻に迎え、この地に住み着きます。**大山守命**は『**徐福伝**』に加え、史書や古老の伝承を自らまとめ、さらに父母（応神天皇＆高城入姫命）を祀る神社を創祀し、その宮の下に移り住んだことから、後の子孫は「**宮下**」姓を名乗るようになったといわれます。そうしてまとめられた書は、『**宮下文書**』と呼ばれます。

『宮下文書』の内容は、おおまかな分類をすると、次の四つに分類されています。（『富士王朝の謎と宮下文書』）

❶ **富士王朝伝承関係**・・・太古に富士山麓を拠点とした超古代王朝の諸記録。

①＝富士山麓が高天原と呼ばれた「**神代**」時代。

②＝富士山麓から九州高千穂に遷都した「**神皇**」時代＝神武天皇以前に2,700年続いたウガヤフキアエズ朝、神皇五十一代と神后摂政二十五代。

③＝九州から大和に遷都した「**人皇**（天皇）」時代。富士山麓に鎮座する**阿祖山太神宮**の歴史。

※中国神話や道教では、天・地・人・の三皇を、天皇・地皇・人皇と呼ぶ。日本では神武天皇以後を**人皇**と呼ぶ。

❷ **宮下一族伝承関係**・・・応神天皇第二皇子＝**大山守命**の末裔となり、阿祖山太神宮宮司を代々世襲してきた**宮下家**の歴史や系譜を記したもの。

❸ **南朝伝承関係**・・・南北朝時代の、南朝史に関する記録。（南朝の天皇や皇族、遺臣らが潜伏したという記録）

❹ **その他**・・・明見村や近隣の村落、寺社が関係する様々な証文、書状、過去帳など。

宮下家は古文書や書写本を保管していましたが、AD800年（延歴19年）、富士山大噴火により、**阿祖山太神宮**は溶岩流に飲み込まれ、史料を納めた宝蔵が被災します。時の宮司＝第26代宮下源太夫元秀は、古書を携えて相模國高座郡寒川に避難します。この地に「**寒川神社**」を祀り、傍らの宝蔵に正史を収めます。

これ以降、**阿祖山太神宮**は「**山宮**」、**寒川神社**は「**里宮**」と呼ばれ、いずれも宮下家が宮守となります。しかしAD1,282年（弘安5年）、相模川の氾濫で寒川神社の古文書（正史）は全て流失します。幸いにも写書が山宮に収められていたため、『**宮下文書**』は継承されます。

もう一方で応神天皇第六皇子＝**菟道稚郎子命**は、正史による自害とは異なり、蝦夷方面に向け出奔していた物語があります。（『前鳥神社ものがたり』）

日本海溝の深さはエベレストの高さに匹敵する8,000m余におよび、その大きな枝分かれした先端が相模トラフとなり、相模湾へ突きあがります。そこに流れ込んでいるのが「**相模川**」であり、水源頭は富士山麓・**山中湖**となります。

それよりも小規模なスケールで、表丹沢・**塔ノ岳**を水源頭とする「**水無川**～**金目川**」も、相模湾に注いでいます。金目川河口は別名「**花水川**」とも呼ばれ、相模トラフ先端へとつながっています。**花水川**河口は、古代＝**金江ノ入江**＝**余綾ノ水門**として、海上交通の中心になっていたそうです。

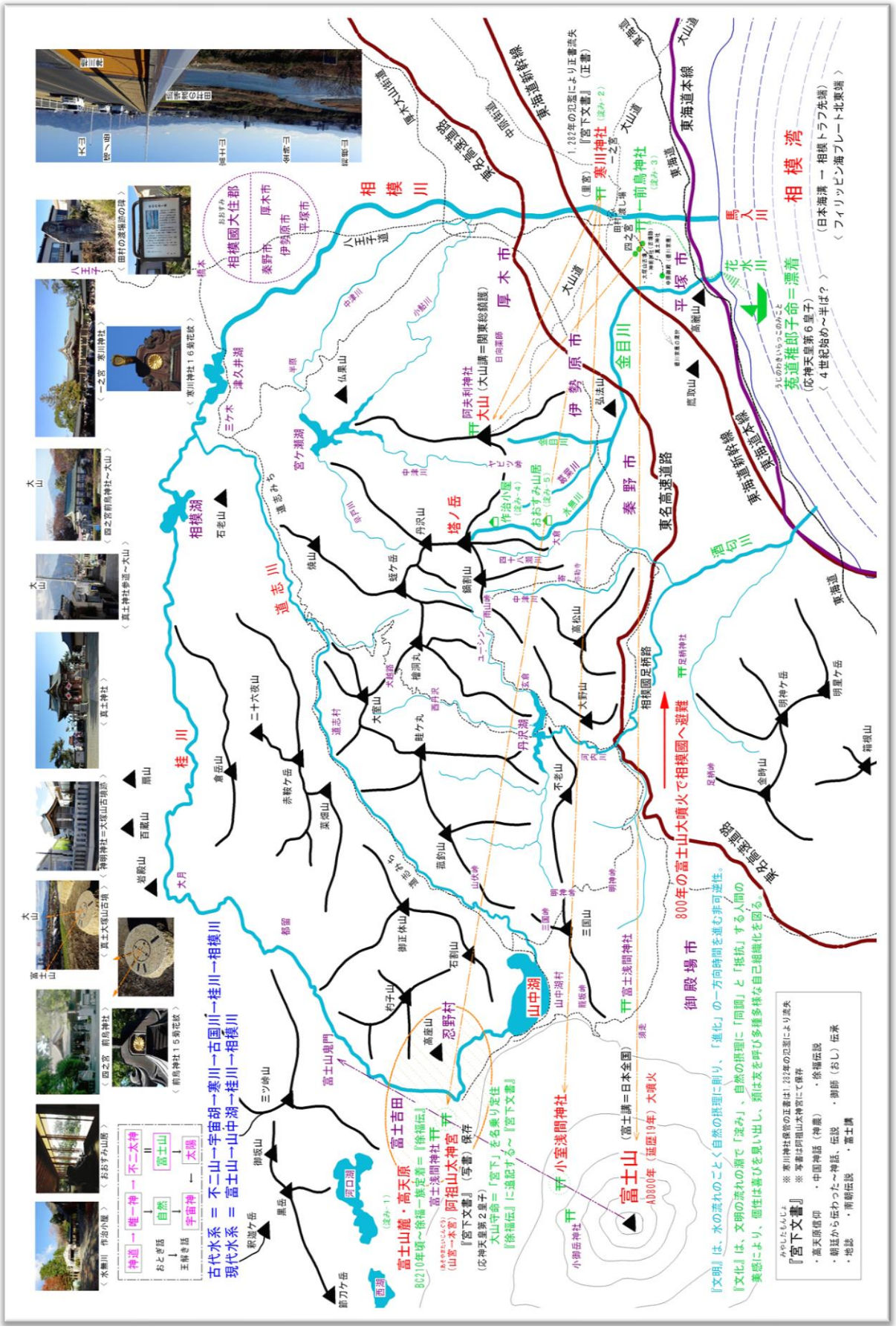
四世紀初め、**菟道稚郎子命**は各地の水門を辿って**金江ノ入江**＝**余綾ノ水門**にたどり着き、この地に上陸します。進路を北東に進みましたが、すぐに**相模川**が行く手を阻みます。一行は渡河を諦め、川のたもと「**サキトリ**」の地に、宮を定めたとされます。この宮が「**相模國第四之宮**」であり、命の亡骸を安置したところが「**サキトリ神社**」、葬ったところが「**真土大塚山古墳**」と言われます。

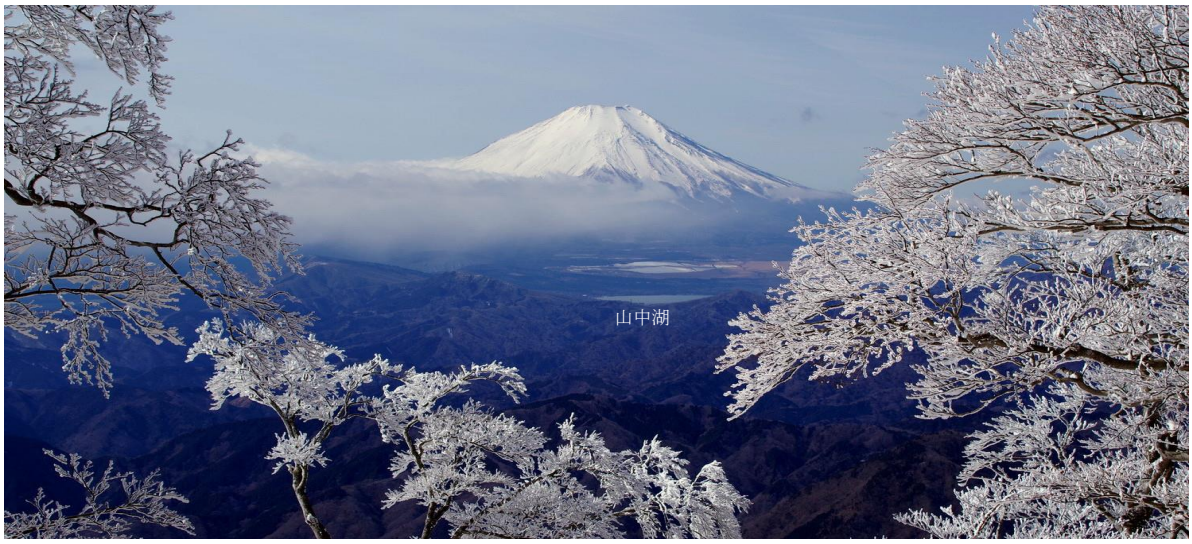
「**サキトリ**」の地は砂丘列の先端であったことから「**埼取**」とよばれ、「**前取**」～「**前鳥**」へと改名され、そして現在は、「**四之宮 前鳥神社**」となっています。

前鳥神社と**真土大塚山古墳**の真西が**富士山**となり、その北方向30度に**塔ノ岳**、40度に**大山**があります。（次頁図参照）

富士山麓～丹沢山塊と相模國

（ 作図 ＝ 田中文夫 ）





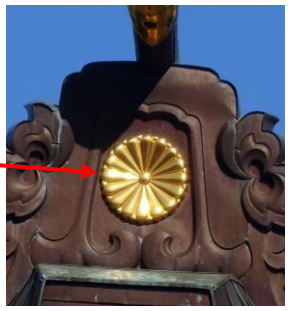
丹沢山塊　檜洞丸からの富士山と山中湖　2,019. 02. 11　高田篤氏撮影

古代＝田村の渡し場、から現在の展望　　2,019. 01. 04　筆者撮影

真土大塚山古墳　　2,019. 01. 02　筆者撮影

箱根、富士山、大山
古墳方位盤

寒　川　神　社　　2,019. 01. 04　筆者撮影



寒川神社の **16 菊花紋**

「**相模川**」水源頭の富士山北麓には、前記の応神天皇第二皇子＝**大山守命**が住まい、相模川河口には第六皇子＝**菟道稚郎子命**が住まい、この相模川の流れが取り巻く山塊を、「**丹沢山塊**」と呼びます。第四皇子＝**大鷦鷯皇子**は**仁徳天皇**（第十六代）となり、死んだはずの二人の皇子が富士山北麓と相模川河口に住まう構図からは、「**神奈川**」の意味を推考することができます。

富士山は日本列島が合掌した「**神**」の姿といわれますが、日本列島のほぼ**中央**に位置し、**中央**＝「**奈**」となります。**富士山**は、始源神であり宇宙の創造「**神**」たる「**富士太神**（不二太神）」を祀る日本最古の神宮＝「**不二阿祖山太神宮**」を、鬼門に配しています。「**川**」は、富士山と相模湾を結ぶ「**桂川**」・「**道志川**」（上流）と「**相模川**」（下流）。これらを併せ、『**日本の中央部**＝「**奈**」、で始源神の**富士山**＝「**神**」を宿す地から流れ出る水が桂川・道志川＋相模川＝「**川**」となり、太平洋（相模湾）へ注ぎこむところ』＝「**神奈川**」と解釈することができます。

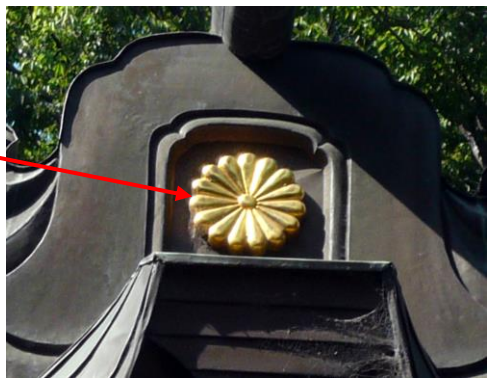
海の水は蒸発し、雲となって天に昇り、ふたたび富士山や丹沢山塊に降り注ぎ、川となってふたたび海に戻る。この水循環の途上のように、人々は「**生命の営み**」を続けています。この**自然のサイクル**に、古代人は「**神のご意思**」を読み取ったのかも知れません。

前鳥神社は 1,909 年（明治 42 年）、四之宮大火で社務所が類焼し、社宝や縁起書一切を焼失します。

1,960 年、私が大野中学校三年生の時でした。平塚市により、「**真土大塚山古墳**」の発掘がおこなわれました。中学校は隣接地であることから、**大野中学校社会クラブ**（私が部長でした）も参加します。その時に発掘されたのは、下の写真のような**勾玉**を見た記憶は残っていますが、**前鳥神社**や**菟道稚郎子命**との関連は全く知らされませんでした。

相模國 第四之宮　前鳥神社正面

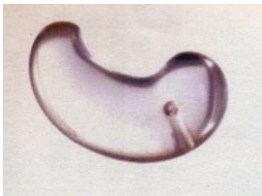
2,014. 06. 01　筆者撮影



前鳥神社の **15 菊花紋**

天皇家＝**16 菊花紋**より **1** 葉少ない

狛犬像
（向かって左側）



勾　玉
（平塚市ＨＰより）

三角縁四神二獣鏡
（にこにこ写真館掲示板より）

獅子像
（向かって右側）

真土大塚山古墳は土着豪族の墓ともいわれますが、自らの意思で天皇継承を辞退した**菟道稚郎子命**の墓であるならば、勾玉や神獣鏡の出土とともに、**前鳥神社**の紋章が**「十五菊花紋章」**であることとの整合がとれます。儒教思想に秀で、長兄に敬意を払って自ら身を引いたことが、**天皇家の「十六菊花紋章」**よりも一葉少ない、**「十五菊花紋章」**であることの理解は容易です。**菟道稚郎子命**の処世は、**「譲り合いの美徳」**として日本人の精神形成に影響を与えたとされますが、日本人の特性とされる**「内向き志向」**が、見事に読み取れます。

「内向き志向」の精神はこの私にも大きく作用し、後に**アルピニズム登山**（より高く、より困難をめざす）の自己統合へ向かう哲学的内向性に合致します。

さらにもう一つ、天皇家の**「十六菊花紋章」**は、**「シュメール王家の紋章」**に酷似しているという説があります。

岩田明・著＝『**十六菊花紋の謎**』（潮文社、2,003年）によりますと、BC 600年頃バビロンのカルデア王朝のヌブカド・ネゼル二世が築いたといわれるイシュタル門（※）の両壁には、ライオン像が多数画かれ、その周囲を**「王家の紋章」**といわれる**一六菊花紋**が取り囲んでいるさまを、現地に出掛けて確認してきたと書かれ、写真も添付されています。

※ イシュタル＝イナンナ ＝ 金星・豊饒の女神、戦いと愛の女神、
ギリシャ神話ではヴィーナス

一等航海士として世界を船で巡った**岩田明**氏の見識から、「航海民族でもあったシュメール人の王家の**一六菊花紋**は、航海計器の一六方位盤（コンパス）をデザインしたものではないか・・・」、と推測されてもいます。しかし定説としては、太陽神をシンボル化したものとされています。ユーラシア大陸東の果て、日出国（ひいづるくに）**日本**では、**天照神話**や**国旗**に見られるよう、太陽を神と見たてる関係は深い。それはともかく、**一六菊花紋は古代イスラエル、エルサレム神殿の城壁**にも見られ、**ライオン像**（神社では獅子像～狛犬像）は玉座の両側に立っていた、とされます。

BC 721年、北イスラエル王国はアッシリアに亡ぼされます。北イスラエル王国の**十支族**は世界へ離散し、**「失われた十支族」**と呼ばれます。それから半世紀以上を過ぎたころ、アジアの東端、日出国＝**倭国の皇室**が幕を開けます（BC 660＝神武天皇元年）。今も天皇家が参内し、神道の総本山ともいえる**伊勢神宮**の構成・構造はエルサレム神殿に似ており、その参道の石灯篭にはイスラエルのシンボル＝ダビデの星（△▽の重なり）が刻まれている、と諸書に写真付きで解説されています。

それらの仔細は別として、**十六菊花紋はシュメール王家に発し、古代イスラエル神殿に残され、世界中に離散した「失われた十支族」によって、倭国＝日本の天皇家へと引きつながる「物語」**として、無理なく理解できます。

さらに一葉少ない**十五菊花紋は、立太子でありながら皇位継承を兄に譲り、前鳥（さきとり）の地に隠匿されたとする、菟道稚郎子命の地元四之宮伝承の「古代物語」**を重ね合わせてみると、さらに大きく合点がいきます。

古代イスラエル**「失われた十支族」**の離散経路の一つに**シルクロード**を採り上げてみると、その途上で**「徐福**《正しくは**徐市**（じょふつ）》」の**秦氏**が加わっても不思議でありません。秦の始皇帝から不老長寿の薬草を探す命を受け、BC 219年、童男童女や百工500 ～ 6,000人（古文書により差異）を従えて九州、佐賀地方に上陸したといわれます。また一部は黒潮に乗り、日本列島に沿って日本海沿岸を北上し、男鹿半島や津軽半島小泊へ達します。一方、太平洋岸は、常陸 → 鹿嶋や八丈島へと達します。その主力は九州から四国、紀伊半島 → 新宮 → 熊野 → 東三河、等を経て、**富士山麓**へと達します。しかし富士山噴火により安

住の地ではなくなり、やがて丹沢山塊を越えて**秦野**→**伊勢原**へと拡がります。**秦野**の「**秦**」は**秦氏**にちなむ由来があり、丹沢から大山にかけては薬草を探す「**蓬莱山**」と呼ばれたそうです。これらの物語は、『**徐福**』（著・池上正治）や、『**徐福王国相模**』（著・前田豊）にあります。

富士山～丹沢～相模平野にかけての古代史は、大きく三つの流れがあります。

❶ **富士山麓高天原伝承**（超古代の神話　～　不二阿祖山太神宮、宮下文書）

❷ **蒐道稚郎子命伝承**（相模國　第四之宮　前鳥神社と真土大塚山古墳　～　天皇家ルーツ　～　古代イスラエル）

❸ **徐福伝承**（徐福伝　～　富士山噴火　～　秦野方面移住、寒川神社）

さらに**そのいずれもが古代イスラエル～シュメールへとつながり**、ひょっとして「**私のルーツに関わるのではないか**」と思うと、**古代物語**から**富士山～丹沢～相模平野**を読み解く楽しみが増します。

ちなみに**古代イスラエル人の特徴は**、次のようなものとされます。

① ＹＡＰ（一）遺伝子（真面目、勤勉、親切、自分を捨てて他人に尽くす、縄文人固有の遺伝子ではなく、古代イスラエル人と日本人に見られる。Ｙ染色体ＤＮＡのＤ系統は日本人・チベット人・中近東のセム系）

② 黒目・黒髪（縮れ毛）

③ 褐色の肌

④ 背が低く日本人とそっくり

⑤ 鼻が高い、等々・・・

誤解を恐れずにいえば、**その多くが私にも当てはまります。さらに自立心が強く、集団に馴染みにくい性質**までもが、私の性格とよく似ています。

少年期の私は頭髪の縮毛に悩み、長男も同様な悩みを抱えていたようです。さらに長男の長男（孫）もまた、同様な悩みを抱えるかもしれません。その兆候は少しずつ現れ始めています。ＤＮＡ検査をすればよいのでしょうが、ロマンが消えてしまいそうで、未だかってＤＮＡ、ＲＮＡ検査はしていません。

「**延喜式神名帳**」は延長5年（927年）にまとめられ、「**官社**」に指定した全国の神社一覧であり、相模國式内社は１３社となります。その中で「**前鳥神社**（さきとり）」は**相模國第四宮**となり、「**四之宮**（しのみや）」の地名はこれに由来するとされます。

ちなみに**相模六社**をあげれば、**一宮**＝寒川神社（寒川町）、**二宮**＝川匂神社（二宮町）、**三宮**＝比々多神社（伊勢原市）、**四宮**＝**前鳥神社**（平塚市四之宮）、一國一社**五宮**＝平塚八幡宮（平塚市浅間町）、**総社**＝六所神社（大磯町）であり、毎年五月五日に行われる「**国府祭**（こうのまち）」では、六社の神々が高麗山に集まって天下泰平・五穀豊穣を祈ります。私が成人（二十歳）を迎えた時も、級友は白装束で神輿を担いで神々の対面の場におもむきましたが、内向的な私は恥ずかしさから、神輿を担ぎませんでした。

「**四之宮**」に隣接する南側は「**八幡**（やわた）」と呼ばれ、その先で「**平塚八幡宮**」の広大な社へと続きます。「**平塚八幡宮**」は相模國一國一社の位置づけとなる立派な宮で、祭神は**応神天皇**（おうじんてんのう）、**神功皇后**（じんぐうこうごう）、**武内**（たけのうち）（竹内）**宿禰**（すくね）です。

応神天皇は**現皇統の始祖**とされます。**神功皇后**は、第十四代**仲哀天皇**（192～200年）から第十五代**応神天皇**（270～310年）の間をとりもつ神話的存在。女だてらにAC200年に朝鮮出兵し、三韓征伐の勝利を治めたとされます（日本書紀）。天皇系図としては、**神功皇后**の子が**応神天皇**となっていますが、諸説あります。一説には、**倭建命**（やまとたけるのみこと）の兄弟となる五百木之入日子命の子、**品陀真若王**（ほんだまわかおう）を密かに北朝鮮の**羅津**へ送り、**八幡天孫族**（騎馬人系と海人系の融合体）として育て、**神功**

皇后の凱旋とともに連れ戻して**応神天皇**にした、という説があります。**神功皇后**は魏志倭人伝にある「**卑弥呼**」ではないか、とする説もありますが、第十四代・**仲哀天皇**（192～200年）～第十五代・**応神天皇**（270～310年）を取り持つ空白期間が七十年もあり、諸説が取りざたされる由縁です。

「**応神天皇**」**は現皇統の始祖**とされるので、この辺りの経緯は日本史にとって大切な部分となりますが、学校教育で学習する内容から外され、「**本質を隠す日本文化の特徴**」を、よく表わしています。

現皇統と朝鮮とのつながりを、何となく感じている人々はいますが、それらの部分を記述する書は、最近出版されてきました。本書で採り上げることは、その**応神天皇**を祀る神社が「**八幡神社**（やはた）」であり、日本の中核神社であることです。そのカギをにぎる人物が「**品陀真若王**（ほんだまわかおう）」であり、一説では「**応神天皇**」同一説があります。

神功皇后が三韓征伐（200年10月～200年12月）に出向いた拠点は現在の福岡地方であり、**八幡製鉄所**（現＝新日鐵住金→日本製鉄）という日本の基幹製鉄産業を担い、その地域から、**麻生太郎**（1940年～）第九十二代総理大臣を輩出。

神功皇后が三韓征伐を終えて連れ戻したのが**品陀真若王**（ほんだまわかおう）であり、後に**応神天皇**となった説によれば、その最大成果は**黄金ファンド**の日本移転であり、その管理者を**応神天皇**として**日本皇統**に迎え入れたこととしています。（『天皇とワンワールド』、著・落合莞爾）

❶ **八幡信仰**（八幡大神＝戦争の神、宇佐神宮→八幡総本宮→皇室の祖廟）
❷ **富国強兵思想**（大陸騎馬武族思想）
❸ **農民社会統治術**（土地を与え租として作物徴収、分業体制の確立、移民生活補助）
❹ **持参金**（ケシ・大麻栽培による利益や黄金＝ワンワールド資金→**黄金ファンド**）
❺ **八幡ファンド**（黄金ファンドの利用権＝戦費調達）

北朝鮮「**羅津**（らじん）」で育まれた「**八幡天孫族**」は、現代文明の起点とされる「**ウバイド文明**（人）」離散ルートの融合を果たす役割であったとされます。それは「**ウバイド海人系**」と「**ウバイド騎馬人系**」が合流した、新たな文明を築くことにほかなりません。「**神武天皇**（初代）」を国の始まりとし、次なる欠史八代とされる「**綏靖天皇**（第二代）～**開化天皇**（第九代）」までの「**葛城王朝**」は、「**ウバイド海人系**（南朝）」であり、「**崇神天皇**（第十代）」からは「**ウバイド騎馬人系**（北朝）」へと「**國譲り**」がされたという説です。

「**ウバイド人**」はコスモポリタンとされ、その後に**古代イスラエルの十支族**が世界へと離散した状況が重なります。彼らは国家を持たず、**ウイルス**のように**各国首脳へ浸透**し、現在でも庶民が確認できない**ワンワールド組織**となって、世界情勢を大きく左右する存在とされますが（『天皇とワンワールド』著・落合莞爾）、日本文明成立に大きく関わっていた（いる）ことは、疑いの余地がありません。

理数に優れる**ウバイド人**の**幾何シャーマン的性格**は、測量・設計能力が高く、具体的な事象を抽象・概念化する能力にも優れる、とされます。

感覚に優れる**ウバイド人**は**波動シャーマン的性格**を持ち、口承や言霊（音）、類推と相似（フラクタル）感覚が優れ、アナログエンブレム（形象）の抽象化を得意とし、見識や知性も高く、無意味な権力や名誉を欲しない性格ゆえに、世界各地で**指導者**や**師**、**親方**となります。「**ウバイド文明・文化**」は、巨石、太陽信仰の下で精神性、思想性、情報力に優れていた、といわれます。

「**ウバイド文明**」は、それを引き継ぐ「**シュメール文明**」となり、さらに「**メソポタミア文明**」へと変遷し、**現生人類文明の始祖**といわれます。

シュメールの**ウルク**地方から**ウル**へと移った**ヤコブ**は**古代イスラエルの始祖**となり、その子孫から**ユダヤ教**、**キリスト教**、**イスラム教**が派生します。この**一神教三宗教**を信仰する人々は、**世界人口の半数以上**を占めていますが、一神教ゆえにお互いを許容し合えず、「**世界紛争の原点**」に今もなっています。

「ウバイド海人系」の〈南ルート（南朝系）〉

農耕、漁撈、定住（都市）、交易により、温和で知力に富み愛と和合で融和を図る、いわば〈女系的〉な性格を帯びています。BC3,000 年頃から南アジア湾岸を巡って日本列島へ到達し、この勢力が「神武天皇」に収斂し、日本列島で初代天皇を擁立します。

このルートの始祖はウバイドからシュメールの神＝「アン（60＝天神）」とギルガメッシュ（BC2,600 年頃シュメールの王）を信奉する人々といわれます。「アン」は天神と呼ばれるように、シュメールの神々の始祖であり、「アン」を誕生させた「ナンム」は、神々の母、海の女神とされ、人間創造もおこなったとされます。ユダヤ教、キリスト教の「聖書」よりも古く、「人間創造物語」はシュメールの神話でおこなわれています。シュメールの国璽（P - 37 参照）は「七枝樹二信仰」の生命の樹を表わすとされます。中央に七枝燭台を挟んで、牡牛神（男）＝「ハル」と蛇女神（女）＝「キ」の二神を配しています。七枝燭台は、ＤＮＡの四塩基と、遺伝子暗号トリプレットの三種の組合せを表わすと、桂樹佑氏（文学修士）により解釈されました。縄文時代に当たるこの時期に、すでにＤＮＡ理解があったとするなら、それは宇宙人がもたらせたとする俗説もあながち的外れでないのかも知れません。男女和合で子孫につなげ、その特性をＤＮＡに刻んで子に託す手法は、人類の知恵から出し得るものではないと考えられるからです。有機生命体は自己組織化により、自ら遺伝子情報を刻み込む発想がもてたか・・・、疑問だからです。

日本の神話に当てはめてみると、牡牛神（男）＝「ハル」は「イザナギノミコト」に、蛇女神（女）＝「キ」は「イザナミノミコト」に当たります。シュメールの神話の神様に当てはめると、男性は繁殖力や知恵と水の神＝「エンキ（40）」に、女性は「ニンキ（エンキの妻）」に相当します。「聖書」に当てはめれば、男性は「アダム」となり、女性は「エヴァ（イブ）」に当たり、これらは世界の神話の原点となっています。

一方、中国春秋時代（BC770～BC221 年）の後半、日本では「孝霊天皇（第七代 BC290～BC215 年）」の時代に、「ウバイド人系」の〈西ルート〉として、シルクロードから中国内陸部を経、BC1,000 年頃には安曇族（あずみぞく）（中国大陸の呉や他の農工商人）や、BC219 年には秦氏（はたうじ）（徐福一行＝童男童女百工）らが黄海や朝鮮を渡って北九州地方に渡来します。農耕（農民）、工業技術（工人）、交易（商人）を担い、その知見をもった人々は、古代日本列島の支配層へと浸透していきます。

「ウバイド騎馬人系」の〈北ルート（北朝系）〉

騎馬によりユーラシア大陸を移動し、日本へ到達しました。その特色は武器をもち、戦って勝ち取り、敗者の全てを略奪する、権力と力支配による〈男系的〉な性格を帯びています。

一族はカスピ海沿岸を発ち、バクトリア地方～ウラル地方～シベリア地方～モンゴル高原を経て、朝鮮に南下します。朝鮮では「羅津（らじん）」や「扶余（ぷよ）」を拠点とします。シュメールの神＝「エンリル（50＝風神）」を始点とした風神トーテム信奉族といわれ、武器を携えて馬にまたがり、広大な大陸で風のごとくなぎ倒していく様は、力がものをいう男系権力を象徴します。権力＝政権ですから、この騎馬人が為す男系権力は、「政治体制＝政体」の柱となります。

ちなみにシュメールの神には数値番号が付けられているとされ、エンリル＝50 だそうです。日本語では「五十」。この「五十」を意味づけ、呼称で表現する一例に「五十鈴（いすず）」があります。皇室の氏神さま＝天照大御神を祀り、神社の最上位に位置づけられる「伊勢神宮（正式＝神宮）」境内を流れる川を、「五十鈴川（いすずがわ）」

と呼ぶのは、その始祖に風神・**エンリル**を反映しているというのです。つまり現皇統は、ウバイドからシュメールに引き継がれた風（大気）の神さま・**エンリル**を始点とした**ウバイド騎馬人系**をルーツと考える、説明根拠の一例です。

「**鈴**」は、女性性器をシンボル化したものといわれます。「**男女和合**（sex）」の結果に生まれ出る「**子**」は、双方ＤＮＡの部分を書き換えた**融合の象徴**とされます。次に述べる「**任那天孫計画**」は、「**ウバイド海人系**」（南朝系）により、「**ウバイド騎馬人系**」（北朝系）を取り込んで**和合**し、「**在外國体天皇**（スメラミコト）」を確保する、最初の企てといわれます。

孝元天皇第一皇子＝**八重事代主**（やえことしろのぬし）（海人系）は、日本から朝鮮の「**任那**（みまな）」へと渡り、やがて**任那**（みまな）の地に「**任那日本府**」を設けます。ここで大陸を風神のごとく駆け抜けてきたウバイド騎馬人系と出会い、**和合融合**して、「**任那天孫族**（みまなてんそんぞく）」と呼ばれる「**在外國体天皇**（スメラミコト）」を確立させます。「**天皇**（男）」は、**力と権力**をもって治世をおこなう「**政体**」を成し、「**皇后**（女）」は、**愛と和の知恵**をもって「**國体護持**」の務めを果たすのだそうです。**そこから日本の治世は、「政体」機能と「國体」機能を併せもった「天皇家」を中心としてきました。**

しかし**天皇**として「**政体**」の持続は困難で、やがて言論と形質に優る「**公家**」が政治権力を増し、次には**武力**を保持し行使する「**武家**」へと移行します。さらに**民主主義社会**では、「**国民**」が政体の**主権者**となりました。

単なる国民では「**烏合の衆**（うごうのしゅう）」となり、まとまりません。現代は国民を代表するリーダーを選挙で選びますが、「**政体＝政治権力行使**」ですから、結局のところ**武家的性格**（タカ派）となるか、**公家的性格**（穏健派）となるか、はたまた**独裁的性格**（皇帝～神）となるか、その性格は時代を反映します。時代の適格性が決まる要件は**宗教**や**思想**であり、それを支える**技術と経済のシステム**です。そのことの適合性判断を促すのが、**文明論**といえましょう。

孝元天皇第二皇子は、葛城王朝で第九代「**開化天皇**」となります。

孝元天皇妃皇子（彦太忍信命）は、朝鮮「**羅津**（らじん）」へと渡り、「**八幡殿**」と呼ばれます。さらに、アルタイ地方を経てたどり着いた別なウバイド騎馬人系と出会い、融合して、「**八幡天孫族**（はちまんてんそんぞく）」と呼ばれる「**在外國体天皇**（スメラミコト）」を確立させます。**八幡**の「**八**」は」数字で「**8**」となります。

シュメールから派生した古代イスラエル、**ユダ族**のユダヤ占星術における数字「**8**」は、末広がりで無限を示し、人類の発展を表わす社会的意味をもつのだそうです。このように**8**の数字を持つ人は、肉体的・精神的に非常に強く、バイタリティがあって果敢に戦う物質主義者と説明されます。さらに、権力や経済力に憧れて勝ち取る傾向があり、集団を統率する力をもって集団の頂点に君臨するタイプ、との解説もあります。これは占いですから統計処理的確率の問題ですが、**八幡神社**、**八幡宮**の「**八**」と、無縁ではなさそうです。

最初に「**在外國体天皇**（スメラミコト）」を日本に帰国させて天皇交代を図ったのが、第九代＝**開化天皇**から、第十代＝**崇神天皇**への引継ぎであり、古事記や日本書紀では「**葦原中国の国譲り**」として、「**海幸彦**＝海人系天皇＝**開化天皇**」から「**山幸彦**＝騎馬人系天皇＝**崇神天皇**」への、皇位継承とされます。

開化天皇までは天皇・皇后ともに**海人系**であったものが、「**国譲り**」により「**天皇**（男系）**は騎馬人系＝政体**」となり、「**皇后**（女系）**は海人系＝國體**」になったというのです。

この**和合融合により、ウバイド海人系**（南朝系）**とウバイド騎馬人系**（北朝系）**とが合流**します。第十代＝**崇神天皇**は歴史上確認できる最初の天皇とされ、**開化天皇以前**の天皇は「**欠史八代天皇**」とされていましたが、近年の資料開示で実在が明らかにされつつあります。（特に落合莞爾氏の著作）

二度目に「**在外國体天皇**（スメラミコト）」を日本に帰国させて皇統交代を図ったのが、第十五代＝「**応神天皇**（270～310年）」とされます。

「**八幡天孫族**」は、「**神功皇后**」の三韓征伐にともなって日本に戻り、「**品陀真若王**」が第十五代「**応神天皇**」になった、という説です。正史によれば、**応神天皇**は**神功皇后の子**とされますが、「**倭建命**」と兄弟になる「**五百木之入日子命**」の子「**品陀真若王**」が羅津へ渡って「**八幡大神**」となり、日本に戻って「**応神天皇**」になったという説があります。「**応神天皇は現皇統の始祖**」とされるゆえに、「**戦の神＝八幡総本宮**」が**日本の神社の頂点**にあったことは、容易に理解できます。

「**八幡神社**」は「**八幡宮**（略称＝八幡さま）」とも呼ばれ、日本全国に約**44,000**社あり、大分県にある「**宇佐神社**」は「**八幡総本宮**」として、**八幡大神**（応神天皇＝誉田別尊＝品陀真若王）と**比売大神**、**神功皇后**が祀られています。

「**四之宮**」に隣接する部落「**八幡**」や、その南に続く「**平塚八幡宮**」の祭神は、**応神天皇**、**神功皇后**、**武内宿禰**であり、「**相模國第五宮**」とも称され、一國一社の「**宮**」たる存在となっています。

相模川は**富士山**を源頭に、**大山**・**丹沢**山麓の田園地帯を流れ、**相模湾**（相模トラフ）に至ります。「**四之宮**」の地は、奥地と河口を結ぶ水上交通の要所であるとともに、ときどき氾濫する相模川の肥沃な堆積地帯でもあり、田畑が広がっていました。

「**真土大塚山古墳**」は、弥生時代につながる**古墳時代**（応神天皇270年～推古天皇592年）の権力者の墳墓で、確かな年代と、誰を埋葬したのか解明されていません。しかしながら、**応神天皇**第六皇子＝**菟道稚郎子**皇子を埋葬したのなら、年代と伝承からの整合がとれ、一つの**古代物語**は成り立ちます。

「**真土大塚山古墳**」は砂丘凸地の最高所（海抜19.5 m）にあり、砂丘利用の前方後円墳とも、円墳、双方中円墳、前方後方墳等諸説ありましたが、決着つかぬまま消滅（現＝真土大塚山公園内に復元）します。**1,960**年の第二回発掘調査に、中学三年生だった私たち大野中学校・社会クラブは参加しました。

相模川河口に続く相模湾の海溝は深く、平塚海浜は遊泳禁止地帯です（茅ヶ崎、大磯は遊泳可）。相模川流出による、三角波が原因。エベレストの高さにも相当する日本海溝からせり上がってくる相模トラフの先端は、平塚沖合の相模湾となり、相模川河口へと続きます。

古代、太平洋海流・黒潮に乗った**菟道稚郎子**皇子一行が、相模川に隣接する金目川河口（花水川）に漂着した必然性は、この地形からも合点がいきます。押し寄せる海流により砂丘は隆起・拡張され、その頂点に**真土大塚山古墳**（海抜19.5m）が位置したのは、合理的に理解できます。

この「**四之宮**」の地に生まれた私は、電気通信の初歩を学び、電磁気学から社会現象を理解するのが得意でした。しかし今、そのテクノロジーは大きく変わり、社会も相転移の時節にあります。二十世紀までのテクノロジーは、**原因**と**結果**が連続性の上に成り立つ**アナログ技術**でした。しかし二十世紀末から進展した電子化の波は、**デジタル技術**が主流となる時代へと移行しました。

歴史の真実は、時代の権力者によって隠蔽・歪曲され、消去もされます。時が過ぎ、開示された頃に**真実はボケテ**しまうことが多くあります。時が過ぎれば**記録**（Encodeエンコード）の**復元**（Decodeデコード）もままならなく、結局のところ「**真実の全て**」は、誰にもつかめないことになります。そのことは、人間思考の論理的**自己矛盾**（Paradox パラドックス）にあり、「**部分**（個）が**全体**（人類）」を述べることの**限界**です。

ゆえに本書は、個別的「**事象**」を読み解き、新たに「**一つの物語**」へと組み立て直し、その中に「**新たな普遍的命題**」を見出そうとしています（帰納法）。さらに現代の**デジタル思考**は、**スケーリング**と**フラクタル**（相似）手法により、「**宇宙の法則はどこにあっても不変である**」と理解されます。**個別事象**をデジタル時限と捉え、それをアナログに組み立て直した**物語**もまた、**人類社会を反映**させていることに、間違え無いかもしれません。

デジタル制御技術は、その全てを**プログラム**（ソフトウエア）により命令動作しますので、**プログラム制御機能**を人の頭脳に例え、「**人工知能**」と呼びます。

３７兆か、はたまた６０兆か、ヒトの体細胞は自己組織化により、人体を作りあげています。その中で神経細胞のネットワーク（ニューラルネットワーク）は、意識や記憶・保存、思考や運動指令をつかさどり、現代のＳＮＳウエブ（World Wide Web＝WWW）と似ています。人体のニューラルネットワークから、人間社会の情報ネットワークをフラクタル（自己相似）に拡張してみると、電子端末（人体）とインターネット・ウエブ（社会）の類似性が見て取れます。

ではインターネット・ウエブ上で人と同じように、意識や記憶・保存、思考や運動の指令パルスはどのようになるのでしょうか。人体は脳機能とする**中央制御装置**（CPU = Central Processing Unit）を一人一組としますが、人類社会を一組の超大容量 CPU で制御することが出来ると仮定すれば、人類は一人の**指令者**（CPU＝皇帝→神）と、**受令者**＝人類社会＝ロボット民の構成へと変化します。

しかし人類には古来より、電子機械の CPU でなく、人々を制御・統制する別な仕組みがあります。それは、**思想**と**信仰**であり、それを担保する**政治力**（権力）、**武力**（軍隊）、**経済力**（富）です。すでにこの方法は古代から実行されてきましたが、地球統一規模でない、地域限定的なものでした。実際には、国家、民族、部族、集落、集団単位への適用であり、さらに地政学上の棲み分けゾーニングにより、思想や信仰だけでない多様さを含み、地域にまとまる多民族国家、多宗教国家、地域共同体（ＥＵ＝欧州連合）もあります。

自治方法のちがいにより、自由主義国家や社会主義国家、共産主義国家へと**思想は介入し、信仰**は自治より広域ゾーンへと波及してきました。そして地球統一規模での組織には、国際連盟、国際連合諸機関がありますが、それは人類の**文明統治**をめざすものではありませんでした。限られた分野での世界統合機能を備えた組織といえば、**オリンピック**を頂点とする、各種スポーツの**世界競技団体**が政治に先行しています。

スポーツは単純に、進化の成果を競うもので、弱肉強食原理に等しく、「**強き者が勝つ**」、「**勝った者が強い**」、単純で分かりやすい「**二元原理**」です。

しかしヒト個人に限ってみると、組織中央統制は個体の**自由意識**に抵触し、ロボットでない自由意志をもつ個体の制御は容易でありません。ある体制維持を図る最も簡単な方法は、個体の自由意志に**恐怖を植えつける**ことです（北朝鮮）。

制限のない、全く自由なインターネット・ウエブがどのように変化していくかを考える上で、私は「**人間性悪説**」を採用し、「**人類は破滅に向かう**」と考えます。

グレシャムの法則（悪貨は良貨を駆逐する）は、**進化の法則**＝**弱肉強食**（適者生存・弱者衰退）と**自己組織化**の欲求が、そのようになっているからそうなる、ことの理解に立ちます。

さらに、**動的非平衡な宇宙**の中で、人類はかろうじて**人工手段**（文明力）を駆使して**動的平衡バランス**を保つ**人間的努力**（文化力）を重ねているからです（『人類が絶滅する６つのシナリオ』）。

世界の四大文明は今、次のような状況を招いています。

❶ 儒教文明（13億人）の信義は崩れ去り、平民支配へ転化されようとしています（中国＝習近平政権）。仏教の修行～成仏も、努力することの文化的意味を失い、確率・統計的に思考・実践結果を予測する。

❷ キリスト教文明（25億人）の世界覇権意欲はふたたび勢いを増し、自己組織化（アメリカンファースト＝トランプ大統領）により異教徒・異民族弾圧を強化。

❸ イスラム文明（15億人）はそれに反発し、一部の極端なイスラム教徒はテロリストとなって反撃します。

❹ ヒンドゥー教文明（10億人）はカーストが崩壊し無秩序な平等は混沌を招く。

それゆえ、現生人類の文化を習合させた日本文明（1.2億人）、特に日本国憲法に示す理念を、世界に向かって積極的に説明することが大事と考えるのです。

この「日本国憲法前文」に示されている理念こそが、ワンワールド・コスモポリタンの理念であり、人類が目指すべき理想である、と私は読みました。

「ワンワールド・コスモポリタン」という言葉を知ったのは、落合莞爾氏の著書『天皇とワンワールド』です。また、ワンワールドが広義な意味でのフリーメーソンを指すことを、同書は書いています。

フリーメーソンやユダヤの陰暴論を書いた書籍は四半世紀前に盛んで、ずいぶんと読み漁りました。しかし平民たる私達のあずかり知るところでなく、「へー」と思って読みますが、あながち的外れでもありません。落合莞爾氏の同書の中に、「國体銀行・横浜正金の設立ウラ事情」というのがあります。横浜正金とは「横浜正金銀行」のことで、日本で最初の外為専用銀行として1,880年に設立されたものです。「國体天皇が、ワンワールドのための国際金融をおこなう國体銀行（同書P-104）」としています。

現＝神奈川県立歴史博物館
旧＝横浜正金銀行本店

復元の記録
1,995年
神奈川県

1,904年竣工の本館建物は、ドイツ・ルネッサンス様式で、妻木頼黄博士による設計です。1,923年の関東大震災をくぐり抜けましたが、太平洋戦争では焼け落ちます。しかし積石造の重厚な建物は残り、1,969年、国の重要文化財指定を受けます。

建物はその後、東京銀行横浜支店と呼称は変わりますが、1,964年（東京オリンピックの年）に神奈川県（内山岩太郎知事）が「県立博物館」として買収し、新館を増築、ドームを復元し全ての内装を博物館へと更新します。

さらに1,994年には「歴史博物館」へと改修します。

この時、電気設備・昇降

機設備の計画・設計・工事監理を担当したのが私でした。設計に際し、今では見られない重厚な積石構造や地下倉庫など、往時の面影が偲ばれました。

（『重要文化財　旧横浜正金銀行本店本館　復元の記録』、神奈川県、1,995年、㈱国設計）

落合莞爾氏の著書には、**ワンワールド**に関わる人物として、日本史に登場する数多の人物名があります。

その中で一人の人物「**武内**（竹内）**宿禰**」がいます。第八代**孝元天皇**の妃皇子として生まれ、朝鮮・羅津へ渡り、「**八幡殿**」になったとされる「**彦太忍信命**」を始祖とした、四世代目＝第一世**武内宿禰**です。第一世**武内宿禰**は第十代**崇神天皇**の**國體参謀総長**を務めたとされる、南朝系血縁に連なります。

以来、この名前は代々継承され、現世においては第七十三世**武内宿禰**（竹内睦泰）が存命でしたが、2020.1.13ご逝去されます。その役目は代々の口伝により継承されたそうですが、歴代の伝承から「**竹内神道**」が出来上がり、後南朝子孫の口伝と合わさって、**正統『竹内文書』**がまとめられた、とされます。

これらのことを明らかにされたのが、現世＝七十三世**武内宿禰**＝**竹内睦泰**氏です。氏は、『正統　**竹内文書の謎**』（著・竹内睦泰）を刊行され、秘伝を明かされます。**正統『竹内文書』**による「**古神道**」が祖になり、**ユダヤ教、キリスト教、イスラム教**の亜流がつくられたとされ、さらに、**バラモン教、仏教、ヒンドゥー教**も「**月読命**」（天照大神の弟神・説＝伊勢神宮・月読神社）の流れをくんだ**万象同根**であり、「**竹内神道**」へと**万教帰一**する、とされます。

現代に生きる**竹内睦泰**氏は、「**個人的にはおおげさだが、そう伝わっているので、そのまま伝える**」、と書いています。

しかしここに出てこないのが「**儒教**」であり、儒教は神に代わって**天**＝聖人＝**皇帝**となるので、神への**信仰**ではなく、人間の**思想**だからでしょうか。また「**仏教**」は、**人間が精進修行**して成仏するシステムですから、これも神への**信仰**ではなく、人間の**思想**と**修行システム**と云えます。

正統『竹内文書』には「**石切彦**」（石切剣箭神社祭神）が登場します。

「**イシキリ**」とは、イエスキリストの弟（聖書のマルコ伝）に当たるそうです。**イシキリ**＝**石切**＝**石工**＝**フリーメーソン**（初期は石工組織）と連なります。石を切って積み上げた造営物の最大は**ピラミッド**であり、その形状は三角（△）です。もう一つの逆三角（▽）を重ねると「**ダビデの星**」となり、イスラエル国旗のシンボルです。このシンボルはユダヤの神殿、伊勢神宮の石灯篭にもあり、アメリカの一ドル紙幣にはピラミッドの上部に目が描かれています。

つまり、アメリカ紙幣を支配しているのは、ユダヤ・フリーメーソンであり、その最高機関がビルダーバーグ・ソサイエティ（会議）だ、と竹内氏は明記されます。

その第十七回会議＝アジア経済人会議に、**竹内**氏は参加されました。その他の日本人参加者として、**安部晋三**現総理、**麻生太郎**元総理、**武田恒泰**氏（旧皇族・竹田宮家＝北朝第三代崇光天皇男系第十九世）らがおり、竹内氏と共に写った写真が著書に掲載されています。

ロックフェラー財団が主催で、質問内容は「**日ユ同祖論と世界同祖論**」とされ、「**日本人は**ユダヤ人から、**ユダヤ人だ**と認定されている」、とまで書かれています。

ユダヤよりも先に**シュメール**があり、**シュメール**よりも先に**ウバイド**があり、ゆえに、「**ウバイド文明**」こそが**現代文明の始祖**である、とするのが昨今の定説だそうです。

＜ピラミッド頂部に
プロビデンスの目＞
１＄紙幣のマーク

正統『竹内文書』では、その始点は日本にある、とされますが、今の私の理解では逆となり、始点はウバイドで、終点が日本ではないか、という推考です。

この推考は私よりも先に岩田明氏がされ、そのことは、『消えたシュメール王朝と古代日本の謎』（著・岩田明）に詳しく書かれています。

「大和」を素直に考えれば、「大同に和する」という理解となり、「聖徳太子十七条憲法」は世界に先駆けとなって示し得た「大同」ではないか、と考えられます。ウバイド～シュメールを始点として世界を巡り、「大同に和する國＝大和＝日本」となった仮説は、あながち神話の世界だけでなく、現実味を帯びてきます。それを立証するのは遺伝子情報の伝搬であり、言語の変遷などありますが、大きな民族移動の潮流は、右の仮説を裏付けています。

混迷をきたしている昨今の世界情勢において、日本文明へと至る歴史解釈物語から、「民族習合の新たな意味＝聖徳太子・十七条憲法から→日本国憲法前文の理念」を、広く世界に向けて再発信できたなら素晴らしいものです。

アーノルド・ジョセフ・トインビー（1,889～1,975）が自省したように、歴史（現実）は絶えず変化し続けているので、付け加えや修正をし続けなければなりません。日本国憲法の細部における条文改正は、時代の進化へ適合するために仕方ありませんが、「憲法前文に明記された理念こそが、人類の平和な理想を言語化した事実」であると、高く評価するものです。現在の「日本国憲法は、改正する前に、まず、世界遺産に登録すべき」、と考えます。

「日本国憲法」には複素性（二重規範）が読み取れます。

一つには、独立国たる日本国の「実体憲法」。

もう一つには人類史を背景として人類習合の結果となる、人類があるべき地球共同体の理想を示す「概念憲法」です。

前者において国際紛争の解決に武力を用いないことを明記した憲法九条は、後者の概念憲法を人類のために主張できる立場を担保しています。（戦争の放棄）

二・ 世界文明の原点

・シュメール人＝文化をもたらした者
・シュメール文明＝最古の都市文明
・シュメールは現代世界文明の始まり

「シュメール文明」は、現代文明最古の文明とされていますが、それに先立ち「ウバイド文明」が存在し、「ウバイド ↓ シュメール ↓ メソポタミア」へと変遷していったことが、近年の歴史理解です。それらの地で発展～離散した文明が、海洋の「南ルート」、大陸シルクロードの「西ルート」、大陸シベリア～モンゴルの「北ルート」を経て日本で習合。「小異を尊重しつつ、大同に和した」とする和合が、この『複雑学 日本文明物語＆哲学』の結論です。二十世紀までの世界は、「敵 ／ 味方」で対立する二元論文明が、世界の覇権を握りました。しかし二十一世紀初頭で行き詰まります。そして今、「小異を尊重しつつ大同に和する」、日本型多元論文明への理解が必要な時節と考えるのです。

新石器時代のBC 7,000～BC 2,500年頃、インダス川の西域で麦やナツメやナツメヤシを栽培し、羊、山羊、牛を育ていた「メヘルガル文明」がありました。やがてそれらは、インド、パキスタン、アフガニスタンにまたがる「インダス文明」へと吸収されます。「インダス文明」は、BC 2,600～BC 1,800年頃にわたりますが、森林伐採による砂漠化やアーリア人の侵入によって滅びます。代表的なモヘンジョダロやドーラビーラ遺跡に残すよう、周塞に囲まれた集落と、沐浴場、火の祭壇、穀物倉庫や学問所の特殊な建物を配します。王宮や神殿はなく、戦いの痕跡や王のような強い権力者がいなかったことを示します。しかしその文明が、世界へ展開された様子は見当たりません。

その西方、イラクの地、チグリス川、ユーフラテス川にはさまれる沖積平野には、BC 5,500年頃からウバイド人による「ウバイド文明」が勃興します。新石器時代から青銅器時代にわたり、幾何学模様の彩色土器や車輪が考案され、灌漑農業の跡も発見されています。農耕や家畜の飼育が発達し、定住による大きな規模の村落、神殿や日干し煉瓦造りの家などが登場し、「都市化の始まり」といわれます。余剰食料が生じると、シャーマンや霊媒師が職業化し、神官の誕生となります。

「ウバイド文明」にあっては、分業化により社会が階層・分極化をきたして平等さを失い、家族どうしの競争社会に入った時期といわれます。

ウバイド人がどこからやって来たのか、シュメール人の起源と連動するそうですが、一説にはザグロス山脈（イラン高原の南西山脈）のスーサあたりから来たという説があります。もう一説には崑崙（こんろん）山脈の麓、崑崙（こんろん）や巨丹（こたん）から来たという説もあります。巨丹（こたん）は別名蘇民（すめ）と呼ばれ、スメ ↓ スメル ↓ シュメールへの転訛（てんか）（本来の発音がなまって変わること）は容易に考えられます。

ウバイドはメソポタミア南部に位置しますが、次なる三つの社会集団で構成されていたとされます。

❶ 農 民＝北メソポタミアで開発された穀物や家畜の農産物を生産し定住
❷ 遊牧民＝家畜を追ってテントで暮らす ↓ 騎馬民（騎馬人）
❸ 漁労民＝漁労をし、葦で作った家に住む ↓ 海洋民（海人）

「ウバイド文明」の平和的な拡散主義は、BC 3,800年頃から、前記「❷＝騎馬人」となり、「❸＝海人」となり、文明成果をともなって外の世界へと離散します。ウバイド海人は「海洋民族」として「舟」で東西へ。ウバイド騎馬人は「大陸騎馬民族」として「馬と馬車」で、ウルタイ草原から東西へと離散します。

「❶＝農民」定住者たちはエリドゥからウルク地方へと移住したようで、これにより「ウバイド文明」は衰退します。その原因は、乾燥の広がりによる湖水面の低下や、砂丘の拡大により、耕作活動が難しくなったという説があります。ウバイド人は「ウル」に住んでいたシュメール人と混じり、シュメール文明に浸透していきます。

三・ シュメールから古代イスラエルへ

「古代イスラエル」は、アブラハムの時代からユダヤ戦争が終わるまでの間をさし、その多くはユダヤ教聖書（キリスト教「旧約聖書」）により、神話となって語られています。

聖書には、初代族長アブラハムがウルの地で生まれたことが書かれています。アブラハムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を信仰する民の始祖として、神による人類救済の出発点とした、選ばれし祝福された最初の予言者、「信仰の父」と呼ばれます。

アブラハムの父テラは、セム族系遊牧民の族長として、BC 2,000 年頃、ウルに来たとされます。テラは、シュメール文明真っ盛りのウルの地で妻をめとり、三人の男子の父となります。長男がナホル、次男がアブラハム、三男にはハラン、と名づけました。したがって、アブラハムの父テラはセム人、母はシュメール人、という理解となります。

次男アブラハムは成人すると、ウルの地で血縁のサライと結婚します。二人の間にはなかなか子が生まれませんでしたが、年老いて二人の息子を授かります。一人目はイスマエル ＝ エジプト生まれの下働き、ハガルとの間にできた子といわれます。二人目はイサク ＝ サライが 90 歳を超えてからできた子とされます。イスマエルは、アラブ十二部族の祖となり、イサクは、ユダヤの祖になります。さらに末裔にて、イスマエルの後裔となるイスラム教の祖＝マホメッドの誕生となります。マホメッドはアブラハムの正統な後継者であるとして、天地の主で絶対神「アラー」を尊崇します。他方、イサクはユダヤの族長として、アブラハムの意思を継ぎます。イサクの後裔＝ダビデ王まで十四代、ダビデ王の子＝ソロモンから二十七代後の世に、「イエス ・ キリスト」が誕生します。

今も世界を二分して戦うキリスト教徒とイスラム教徒、その始祖はアブラハムに発っする同祖であり、一神教は絶対神であるがゆえに、互いに譲り合うことができず、敵対せざるを得ないのでしょう。「正 (yes)」、「反 (no)」、二極対立（二元論）の典型であり、現代のデジタル思考にも大きな影響を与えています。

二極対立の解決策はドイツの哲学者、ヘーゲルが定式化した「正 → 反 → 合」の弁証法にあるのですが、弁証法というよりも、東洋的な世界観、「三すくみ」を理解したほうが良いでしょう。「三すくみ」の一例に、「ジャンケン」があります。グー、チョキ、パーの三様態には、絶対勝者がありません。組合せの偶然を繰り返し、勝者と敗者がランダムに入れ替わります。つまり弁証法の合意形成にはジャンケンのようなルールが必要で、それを民主主義体制は三権分立に定めています。しかし民主主義のルールも、公平、公正、平等な立場の基準をどこにおくかにより、様変わりします。一神教のキリスト教徒とイスラム教徒の関係において、本来多神教と多元論だったシュメール文明から発した、古代イスラエル人とその末裔の論理（兄弟）げんかは、今も世界の紛争の種です。紛争解決の道は、どちらか一方が滅亡するか、割って入れる「三すくみ勢力」の出現です。

イサクの母＝サライのシュメール人は、世界最古の都市文明を展開していました。その文化は太陽や月の信仰とともに多神教であり、哲学、数学、天文学、生物学等の学問や、美術、工芸品技術者らが活躍し、活気に満ちていたといわれます。 なかでも BC 2,600 年頃に実在したとされる、ウルク第一王朝のギルガメッシュ王による、『ギルガメッシュ叙事詩』は、世界の神話の下敷きになっています。日本の神話にも影響をおよぼし、勿論のこと、ユダヤ教聖書（キリスト教「旧約聖書」）の下敷きにもなっています。その主題は「不老長寿、永遠な生命」です。

中東ウルク地方では、「シュメール文明」に先立つ BC 5,500 年頃 ～ BC 3,500 年頃まで、「ウバイド人」による「ウバイド文明」が勃興していたとされます。

四・ シュメール文明と日本文明の関連

「シュメール文明」は、BC 3,500～BC 3,100 年にわたり、チグリス川とユーフラテス川に挟まれた、**メソポタミア**（現在のイラク～クエート）南部を領域とする、「**初期のメソポタミア文明**」ともいわれます。「**ウル**」の地を拠点とした「**シュメール人**」は、どこから来たのか定かでないとされますが、農耕を営む「**ウル族**」と、漁労・製塩を営む「**ドウア族**」の合流ともいわれます。それ以前から、隣接する「**ウルク**」の地に住んでいた「**ウバイド人**」も、牧畜、農耕、漁労を営んでいたことを併せて考えると、それらを総称して「**シュメール人、シュメール文明**」といっても不思議でありません。現在でも**シュメール人**は「**謎の民族**」とされ、イラクの人々は誇りにしているそうですが、**物語**としては、**ロマン**を感じさせてくれます。

「**シュメール**」という呼び方と、「**スメル**」という呼び方の二通りがあり、アッカド語の原音は「**スメル**」が最も近いそうです。「**シュメール**」と標記されたのは、アッシリア学の先達＝中原与茂九郎（1900～1988、京都大学名誉教授）だと、『**シュメル～人類最古の文明**』（著・小林登志子）は書いています。

※ SUMER ＝ **シュメール**（英語読み）、**スメル**（ラテン語読み）

「**シュメール文明**」の特徴は、高等学校教科書「**世界史**」で、次のような事項が一般的となります。

① **楔形文字** ＝ 粘土板に残した記録＝手紙、帳簿、文学、法律、等
② **60 進法** ＝ 時間表示等、現在も使用
③ **都市国家** ＝ 最初といわれる都市国家
④ **灌漑農耕** ＝ 余剰食糧を生産 ～ 支配者と労働者の階層が分かれる

「**シュメール語**」は「**膠着語**（こうちゃくご）」といわれます。

言語の分類は、**❶ 膠着語**（こうちゃくご）、**❷ 孤立語**、**❸ 屈折語**と、大きく三種類に分けられます。その中で、**シュメール語**や**日本語**は**膠着語**（こうちゃくご）に入ります。

日本語はさらに 儒教、仏教、道教の影響から**孤立語**も含まれ、また、西欧社会の**屈折語**も加わるといわれます。このように「**日本語への習合**」は、「**人類文明は日本で習合した**」という本論の仮説を、裏付ける要因となります。

系統不明な「**日本語族**」として、独自に分類する見解がありますが、生活領域にともなうコミュニケイション言語とその「**祖語**」は、細胞の遺伝子（DNA）とともに、民族移動にともなう文明変遷へ、大きな手掛かりを与えてくれます。

次に、関連するいくつかの「**語族**」を並べてみましょう。

❶ 膠着語（こうちゃくご） ＝ **「て、に、を、は」のような接頭辞や接尾辞を付け加えることで、単語の中で文法関係を示す特徴を持つ**

① チュルク語族 ＝ 中央アジア全域、モンゴル高原以西のアルタイ山脈から東ヨーロッパ、北アジアのシベリア
（トルコ語、ウイグル語、ウズベク語、カザフ語、他）

② ツングース語族 ＝ シベリア東部～沿海地方、樺太の一部、満州
（満州語、女真語、ナナイ語、オロチョン語、他）

③ モンゴル語族 ＝ モンゴル高原、中央ユーラシア各地
（ダウール語、ブリヤート語、モンゴル語、トンシャン語、バオアン語、他）

アルタイ諸語

④ ウラル語族 ＝ シベリア中北部、北ヨーロッパ、東ヨーロッパ
（約 2,500 万人）（ガナサン語、ネネツ語、セリクプ語、ハンガリー語、マリ語、フィンランド語、エストニア語、他）

⑤ドラヴィダ語族＝南インド、スリランカ、パキスタン、アフガニスタン、ネパール、バングラデシュ、ブータン
約２億人超（タミル語、マラヤーラム語、カンナダ語、テルグ語、他）

⑥**日本語族**＝**孤立した言語**　↓　**日本列島**
（日本語＝本土、八丈語、奄美語、沖縄語、国頭語、南琉語群、他）

⑦**アイヌ語族**＝**孤立した言語**　↓　**北海道、樺太、千島列島**、現在は拡散（口承により伝承、2009年２月＝国連教育科学文化機関により「極めて深刻」な消滅の危機を認定）

⑧朝鮮語族＝朝鮮半島
（朝鮮語、済州語）

⑨扶余語族＝満州南部、朝鮮半島北部　↓　日本語・扶余語同系説もある（扶余語、高句麗語、百済語、他）

⑩その他

❷孤立語＝**一語一形態を表わす**～シナ・チベット語
◎シナ・チベット語族＝中国、東南アジア　↓　儒教、仏教、道教
（シナ語、中国諸語、ビルマ語、チベット語、他）

❸屈折語＝**語の中に文法機能を有する**～ラテン語、ギリシャ語、ロシア語、ドイツ語、アラビア語、他
◎**インド・ヨーロッパ語族**＝インド、ヨーロッパから現在は世界各地
※**英語**＝膠着語、孤立語の要素を含む

「シュメール文明」は、最古の文字「**楔形文字**（くさびがたせっけい）」とされますが、実のところは「**絵文字**」から進化したもので、発祥の地は、「**ウルク（Uruk）**」といわれます。「**ウルク（Uruk）**」は「**ウバイド文明**」が栄えた地、「**ウル（Ur）**」は「**シュメール文明**」の都市国家であり、お互いに隣接しています。それゆえに、楔形文字の始祖は**ウバイド文明**であって、絵文字紋様。その文様は、牛、羊、水、ナツメヤシ、小麦、パン、油、壺、太陽、星、等々、生活関連を表わしているとされます。

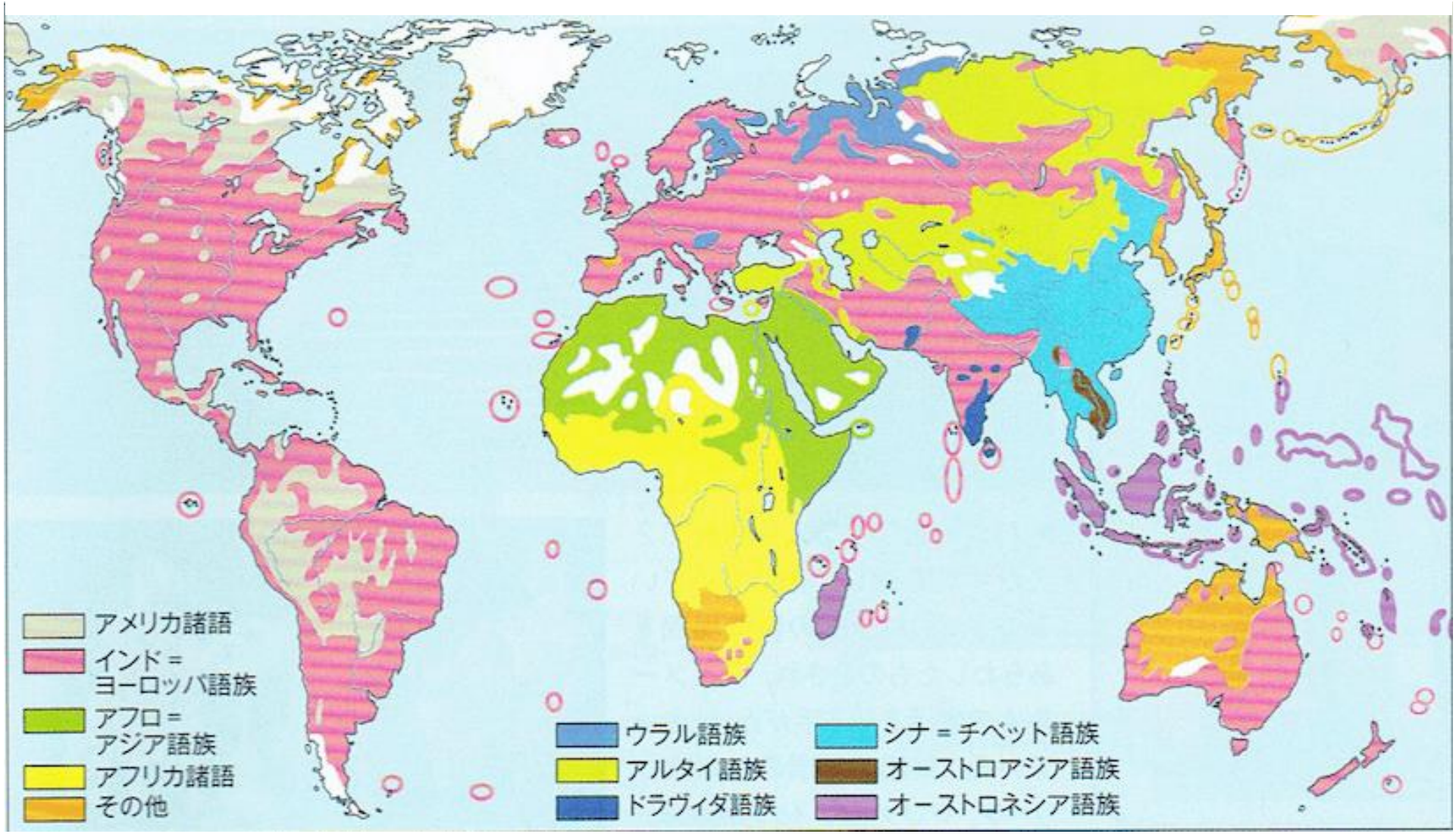
絵文字紋様に先立ち、「**トークン**」と呼ばれる絵文字同様な、直径２cmほどの小型粘土製品があり、それを「**ブッラ**」と呼ばれる直径10cmほどの中空な粘土ボールに入れ、取引や契約の証として使用したそうです。

それが**シュメール文明**では記号のように進化した楔形文字となり、粘土板に**記録**されたことから、確認された世界最古の文字であったとされます。さらには、「**国璽**（こくじ）（印章）」の使用が分かっています。

シュメールで使用された「**国璽**（こくじ）（印章）」の図柄は、**生命の創造**を示している、という解釈があります。（『日本の始まりはシュメール』著・坂井洋一）　中央に七枝

世界の言語分布図

（世界の歴史まっぷ）より

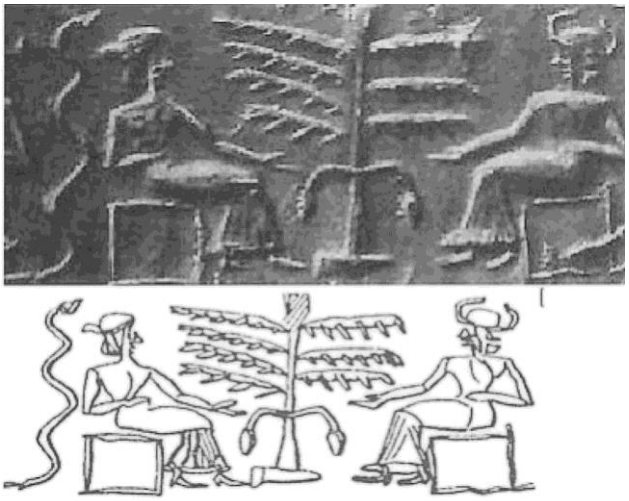


樹の「**生命の樹**」、向かって右に**男性**を象徴する「**牡牛神**（ハル）」、左に**女性**を象徴する「**蛇女神**（キ）」を配しています。「**生命の樹**」は男女の間に配され、右に三枝、左に四枝、併せて七枝とした生命の遺伝子を表わしている、という解釈です。

右の三枝は DNA 塩基の三つの組合せ遺伝情報（トリプレット）、左の四枝は DNA の四塩基（アデニン、グアニン、チミン、シトシン）となります。

このことは、人間創造の「**七枝樹二神信仰**」と呼ばれ「**国璽**」に刻んだと説明されます。

多神教であるシュメールの海の女神、そして全ての神々の母は「**ナンム**」といわれます。誕生した神の祖は、**天神**「**アン**」と**天女**「**キ**」。**天神**「**アン**」は数詞表現（**60**）とされます。（**60**）はシュメール語で「**アッシャム**」。それが転訛して →「**アッサム**（インド、アッサム州）」→「アッカム」→「**カムイ**（アイヌ語の神）」→「**カム**（日本古語の神）」→「**カミ**（日本の神）」になるとされます。



【シュメールの国璽】

http://group.ameba.jp/thread/iEQTM_vq_8S/c より

神武天皇は「**カム・ヤマト・イワレヒコ・スメラミコト**」となりますので、「**天神アン**」系統（**60**）の天皇と解釈されます。「**天皇**」を「**スメラミコト**」と呼びますが、「**シュメール**（スメル）→**スメラ**」への転訛も、同様です。天神「**アン**（**60**）」と天女「**キ**」の子は、風神「**エンリル**（**50**）」、知恵と水と男性繁殖の神「**エンキ**（**40**）」、火山女神「**ニンフルサグ**（**5**）」がいます。（「古代＝天皇系図-1（神武～景行）」＝シュメールの神々と日本の神々：参照）

風神「**エンリル**」は、数詞表現（**50**）とされます。（**50**）という数は、シュメール語で「**イシュ**」。「**イシュ**」が転訛して「**イセ**」になるとすれば、「**伊勢神宮**」の呼び名は素直に納まります。「**伊勢神宮**」には風の神様「**風日祈宮**（かぜひのみのみや）」が祀られ、「**伊勢**」につく和歌の枕詞は「**神風**（かんかぜ）」となります。伊勢神宮の境内を流れる川は「**五十鈴**（いすず）**川**」、「**イシュ**」の発音に似ています。

元寇の戦で「**神風が吹いた**」や、太平洋戦争での「**神風特別攻撃隊**」など、**天皇～伊勢神宮～神風**の連携は、**日本文明の核心**となっていました。

知恵と水と男性繁殖の神「**エンキ**」は、数詞表現（**40**）とされます。仮説上の惑星「**ニビル**」に「**アナンキ**」という生命体が存在しており、3,000 年周期で地球に近づき、地球の文明を進歩させるという物語の中で、「**エンキ**」はニビルの科学者がモデルになっているそうです。また別な面で「**エンキ**（**40**）」は、ユダヤ教の聖書＝キリスト教の旧約聖書に登場する「**アダム**」でもあり、日本の神話に登場する「**イザナギ**」に当ります。さすれば「**エンキ**」の妻「**ニンキ**」は、聖書の「**イブ**」や日本神話の「**イザナミ**」に当ることとなります。

火山女神「**ニンフルサグ**（**5**）」と、その夫「**アンギビル**（**6**）」は火山神となります。「**ニンフルサグ**」の数詞表現は（**5**）、「**アンギビル**」の数詞表現は（**6**）

とされます。「**ニンフルサグ（5）**」は比較言語学を駆使した解釈からすると、日本の祭りに登場する「オカメ、ヒョットコ」の「**オカメ**」に行き当たり、さらに転訛すると「**オカミサン**」や「**山の神**」になるそうです。「**ニンフルサグ（5）**」の別称「**イ・ダ・ギンナ**」＝数詞（**5**）＝山の女となるそうです。夫「**アンギビル（6）**」は火山神ですから、比較言語学からの転訛を考察すると、「火山神 → 火男 → ひおとこ → **ヒョットコ**」となり、火山神夫婦は「**オカメ＆ヒョットコ**」に当たる解釈があります。また日本神話の火山女神は、富士山本宮浅間大社（浅間神社）の祭神、「**コノハナノサクヤビメ**」となります。「**アサマ**」はシュメール語で、「**火山**」という意味に当たるそうです。

『**日本の始まりはシュメール**』（著・坂井洋一）によりますと、**富士山**の名前の由来は「**ニンフルサグ（5）**」にあるとされます。「ニン＝女神」は省略し、フルサグ＝ＨＵＲ　ＳＡＧ → ＨＵＲ　ＫＡＧ（ＳＫ転訛）→ ＨＵ　ＫＵＪ（常陸国風土記の「福慈（ふじ）」）→ ＨＵ　ＪＩ → 「**フジ**」へと、レーマンの子音転訛による解説があるそうです。

もう一つ、**太陽**（日）**神**「**ウトウ**（ウツ）」は、数詞表現（**20**）とされますが、日本での対照は、「**日光**」や「**宇都宮**」となります。**日光**と**宇都宮**で共通するのが、「**二荒山神社**」。両社とも「**下野国一之宮**」を称するので、「**日光二荒山神社**」、「**宇都宮二荒山神社**」と呼び分けられます。

「**日光二荒山神社**」のご神体は山で、「**男体山**（二荒山）＝父」、「**女峯山**＝母」、「**太郎山**＝子」となり、「**日光三山**」と呼ばれます。祭神は、**男体山**＝大己貴命（オオナムチノミコト）、**女峯山**＝田心姫命（タゴリヒメノミコト）、**太郎山**＝味耜高彦根命（アジスキタカヒコノミコト）。日光開拓の始まりは、**勝道上人**（735～817年）が修験を求めた山岳地であり、伝承に**空海**（774～835年）が登場することから、神道よりも仏教の影響が大きかったといわれます。

「**宇都宮二荒山神社**」の祭神は、第十代・**崇神天皇**（BC97～BC30）の第一皇子＝**豊城入彦命**（トヨキイリヒコノミコト）。

古語の解釈からは、「**ふたあら**」や「**うつのみや**」はいずれも「**山**（小高い丘）**の崩落部**」を意味するといわれます。一方、「二荒＝ふたあら→にこう→日光」と転訛する説もあり、シュメールの神、「**ウトウ**（ウツ）＝**太陽神**＝**日光** → **宇都宮**」との関連理解は、表象的なものなのでしょう。

「**シュメール文明**」は、粘土版に**楔形文字**で残します。手紙、帳簿、文学（神話）、法律、等々ですが、円筒印章を契約に使うなど、ウバイド文明の契約や証書などから進展します。法律や役人、学校などが整備された「**都市国家**」が成立し、現代社会の原点とされています。

法律は、「**やられたら、やり返す**」式の復讐法ではなく、お金等で代替賠償を可能とする、現代に通じる進歩的な規定といわれます。それにしては現代のパレスチナ問題、イラン・イラク戦争や、古くからの十字軍によるキリスト教とイスラム教対決など、法的理性を超える**信仰の対立**は、解決しがたい問題を残していますが、シュメールの多神教から分岐した、**一神教文明だから**でしょう。

一神教社会では、「**やられたら、やり返す**」式の**二項対立**（二元文明）となりますが、**多神教社会**にあっては、絶対価値、絶対勝者、絶対真、等の「**絶対**」がなくなるので、「**三すくみ**」以上の複雑関係となり、その場における「**最適解**」を求めることになります。

しかし**多神教や無神論者の複雑関係**はバランス調整に**時間がかかり**、絶対的勝者がいないために、専制権力や武力、空気（同一感情で固まった雰囲気）にも弱く、文明進化が求めるスピードも鈍らせます。しかしこれまで文明進化の結果、地球人口増加と環境破壊を進めてきた二十世紀までを省みて、二十一世紀文明に

おいては、一番大事な要素として、**多神教や無神論者の多元的世界を二元文明に組み込み、複素世界認識として再構築する必然**にあります。

シュメール文明が**学校**をつくり、知性と理性を等しく向上させる制度は、現代社会に通じています。**現代の日本社会**は、多神教以上の神・仏・科学・無神が習合した「**八百万**（やおよろず）（＝なんでもあり）**社会**」となり、**人類の理想社会実験国家**ではないかと、思わずにいられません。

楔形文字で残した**文化**には、神々、創世神話、洪水伝説と聖舟、楽園神話（エデン、パラダイス）、男女神の性的ゲーム、天上神と冥界神、大地母神、不老不死、戦争、不妊、天災、等々があり、以降の文明にさまざま反映されます。（『シュメール神話の世界』著・岡田明子・小林登志子）

楔形文字には **60 進法**に対応する、**1～59** までの数字があり、最後の空白は **0** を意味します。**60** 進法は、**10**（両手の指の数＝10 進法）と、**12**（太陰暦の 1 年＝12 カ月）の最小公倍数＝**60** となり、約数（2,3,4,5,6,10,12,15,20,30）が多く、除算に便利といわれます。現在も時計が示す時間は **60 進法**であり、暦の **1** 年 **12** カ月も同じです。この一例のように、現代文明で用いる論理性、抽象化、デジタル思考（時間差）や、ギルガメッシュ叙事詩に代表される神話の原型等々、世界の文明や日本文明物語の始まりといわれます。

南部メソポタミアの地には、BC 6,000 年頃から「**ウル族**」と「**ドウア族**」が住んでいました。「**ウル族**」は農民で、守り神が「**牛**」。「**ドウア族**」は漁民で製塩もおこない、「**蛇**」を神聖なシンボルとしていました。

この両者が**対婚**を重ねながら混じり合い、「**シュメール人**」になったという説がありますが、シュメールの「**国璽**」は、向かって右に「**牡牛神**＝**ハル**」、左に「**蛇女神**＝**キ**」を配していることから、あながち根拠なき説ともいえません。

動物をシンボルとする**動物トーテム族**は、世界各地に離散していますが、日本の「**神社**」には、次なる動物五大トーテムが揃っています。

❶ **牛**トーテム族 ・・・ **牛**冠は王の印 ↓ 聖牛信仰（生命創造の神＝ハル）
↓ スサノオ（イザナギの子）系神社

❷ **馬**トーテム族 ・・・ 神**馬** ↓ 伊勢神宮、全国八幡神社 ↓ 現・天皇家のルーツ ↓ アルタイ地方の騎馬民族

❸ **犬**トーテム族 ・・・ 狛**犬**、獅子（向かって右＝獅子、左側＝狛犬）

❹ **蛇**トーテム族 ・・・ **蛇**口（蛇の口）、しめ縄（絡まり合ったオス蛇とメス蛇の和合象形）

❺ **鳥**トーテム族 ・・・ **鳥**居

「**シュメール文明**」は BC 2,350 年、アッカド帝国樹立により、「**メソポタミア文明**」へと飲み込まれていきます。

（右＝獅子像）

（左＝狛犬像）

【 四之宮　前鳥神社 】

第二章　世界文明は日本で習合

一・ 人類移動～神話からＤＮＡハプログループの流れまで

「**ニビル説**」があります。

アフリカに出現した**人類**（黒人種＝ネグロイド＝Ｙ染色体アダム A0・A1＝ミトコンドリア・イヴ）は宇宙人によってもたらされた、という物語です。アフリカとともにオーストラリア原住民（黄色人種＝オーストラロイド＝Ｙ染色体アダム C1b2）も宇宙人によってもたらされた、という説もあります。

それを証明するように、アルジェリア南東部にあるタッシリ・ナジール壁画や、オーストラリア、キンバリー州にあるワンジナ洞窟壁画とされます。また宇宙飛行士のＤＮＡが、宇宙滞在によって適応変化した結果は、逆説的証明になるかも知れません。

※ ニビル説 ＝ 仮説上の惑星、アナンキという生命体が存在し、3,000 年周期で地球に近づき、地球の文明進化への痕跡を残すという説。

「**学術的正確さ**」もさることながら、アバウトに全体像を描く「**大きな物語**」は、人間思考による概念形成を展開しながら、方向性を示してくれます。

タッシリ・ナジェール壁画（アルジェリア）
（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ ＝ ｳｷﾍﾟﾃﾞｨｱより）

ワンジナ洞窟壁画（オーストラリア）
（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ ＝ ｳｷﾍﾟﾃﾞｨｱより）

素粒子物理学によると、「**物質は、宇宙のたった５％未満なエネルギーを示すにすぎない**」ことは、後で述べます。だから・・・といって、**物証**はどうでも良い、とするものではありません。それよりも**事実**とは、観察する**視点**によってその実相が**変化して見える**のであり、「**人間の宇宙観察には自己矛盾が含まれているから、完全に把握することはできない**」ことを確認しておきたいものです。

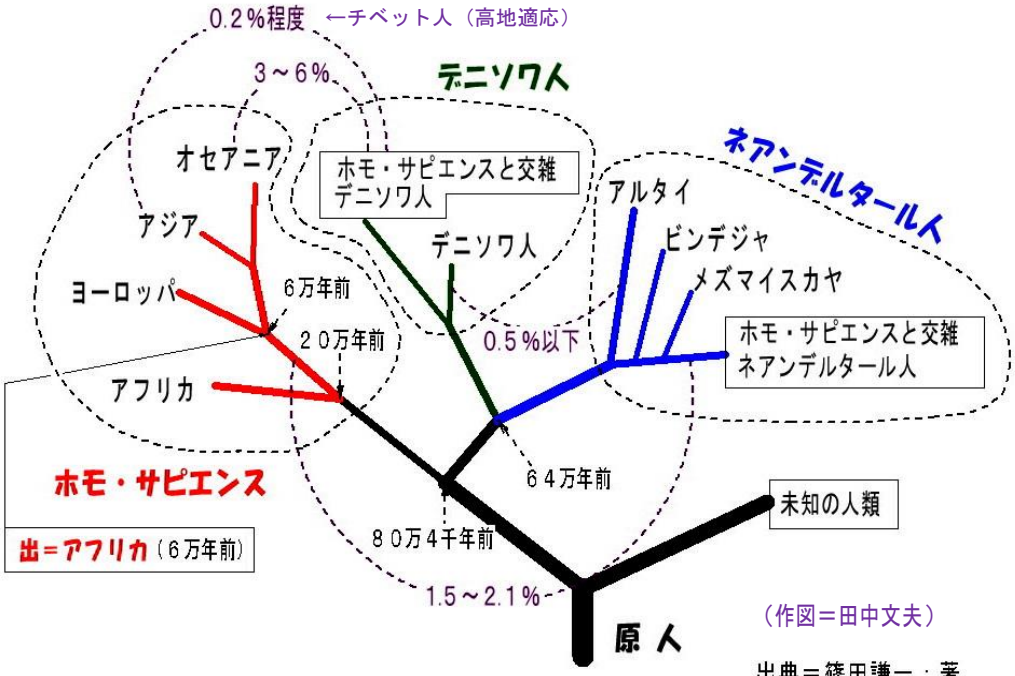
ここでいう「**大きな物語**」とは、古代人が描いた小さな物語集＝「**神話の数々**」とフラクタル（自己相似）なスケーリング意識を湧き上がらせた**概念**（拡大解釈）、を語るものです。人類の世界展開と同様に、「**神話の数々**」もその地域の環境に適応した変遷をとげながら、人々の心に定着してきましたが、それは「**大きな物語**（ストーリー）」と**フラクタル**（自己相似）な関係から理解できます。

今から二十万年前、**現生人類**（ホモ・サピエンス）は**原人**から分岐して、アフリカ・サハラ砂漠南側に出現した、とされています。その後六万年前にはアフリカ大陸を出て、「**南方ルート**」はアラビア半島の南岸から中東方面（現イラク等）へ至り、「**北方ルート**」はナイル川沿いに北上して中東方面（現イラク等）へと至り、そして合流します。

中東の地（現イラク等）で原人のネアンデルタール人とわずかな**混雑**（混血）となり、さらにそこを起点として、**西**（ヨーロッパ）、と**東**（アジア）へ拡散し、次なる「**世界四大人種**」へと分岐していきます。

世界四大人種

① **ネグロイド**　（黒人種）＝アフリカ大陸
② **モンゴロイド**　（黄色人種）＝アジア方面
③ **コーカソイド**　（白人種）＝ヨーロッパ方面
④ **オーストラロイド**（原始人種）＝オーストラリア大陸



（作図＝田中文夫）

出典＝篠田謙一：著
『DNAで語る　日本人起源論』

ホモ・サピエンスと他原人との交雑系統

マックスプランク人類進化研究所の**スバンテ・ペーボ**（Svante Paabo、ｽｴｰﾃﾞﾝ1955～）らは2010年、ネアンデルタール人（N）のゲノム解析に成功した。1～4％ の遺伝子がホモ・サピエンス（H）と共通していることを突き止め、NとHとの交雑があったことを証明。N人の特徴＝胸板が厚く、脳が大きく、肌は白く、彫は深い、碧眼で髪はブロンドやブルネット（N人は白色の美男・美女かも？・・・Hの♀とNの♂だけがミトコンドリア遺伝子を残せる）

北方面へ向かった集団は、およそ五万年前にアルタイ山脈付近を経由して東アジア方面に展開し、**黄色人種**たる「**モンゴロイド**」の前身となります。ヒマラヤ山脈、アラカン山脈が障壁となり、中東やインド亜大陸との交流が断たれ、遺伝的・環境的に独自な適応進化を果たし、「**モンゴロイド**」となります。モンゴロイドの展開領域は、広くユーラシア大陸中央部から東側一帯、さらにエスキモーから南～北アメリカ大陸や、小さな島々にまでおよびます。

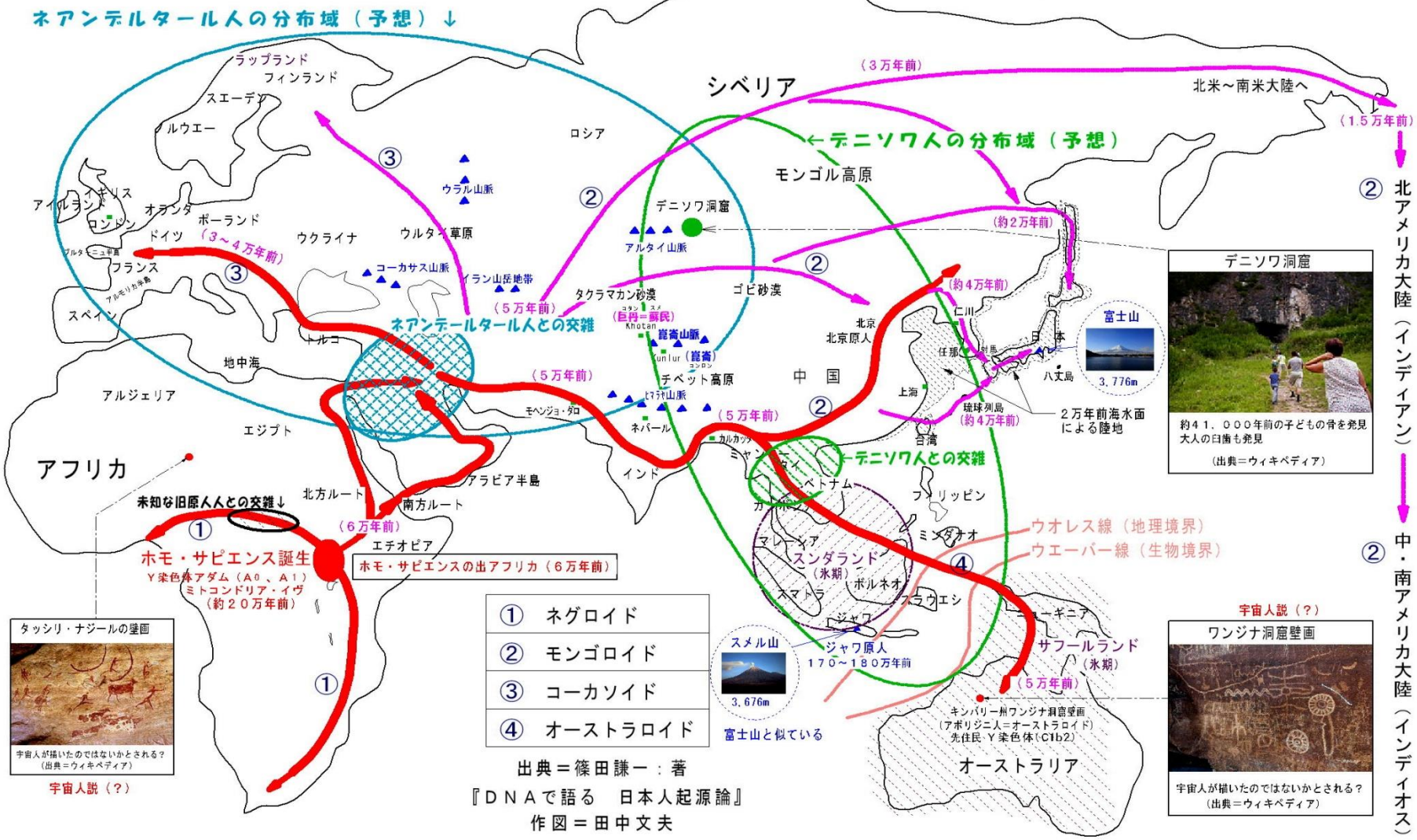
西方面へ向かった集団は、およそ三～四万年前に西アジア、地中海を経てヨーロッパや北アフリカ方面に展開し、**白人種**たる「**コーカソイド**」の前身となります。その後この方面には、インド・ヨーロッパ語族（インド・アーリア語族）として展開されます。

南方面へ向かった集団は、およそ五万年前に　サフール大陸（オセアニア地域）へと展開し、「**オーストラロイド**」の前身となります。現在この方面は小さな島々の飛び地になっていますが、五万年前の「**氷期**」には海面水位が下がり、「**スンダランド**」や「**サフールランド**」と呼ばれる大陸となり、オセアニア地域への移動は可能とされています。アジアとオセアニアを分かつ地理的境界を「**ウオレス線**」と呼び、生物的境界を「**ウエーバー線**」と呼ぶそうです。

篠田謙一氏の著作『ＤＮＡで語る　**日本人起源論**』（岩波書店、2017年）によると、これまでの定説では、現生人類＝ホモ・サピエンと原人＝ネアンデルタール人やデニソワ人との交雑・混血はなかったとされていましたが、近年の研究・発掘等でその定説は修正され、わずかながらもその痕跡となる遺伝子が確認されたそうです。

※次頁図「**ホモ・サピエンスと他原人との交雑**」参照

ホモ・サピエンスと他原人との交雑



前頁の図「**ホモ・サピエンスと他原人との交雑**」において、混雑の比率＝ 0.5％～６％までとなる研究成果です。遺伝子交雑の結果、ホモ・サピエンに不足する原人の強い遺伝子が組み込まれると、平均的なホモ・サピエンの特性を抜きん出た人類の発現となる可能性があるとされます。今後の遺伝子研究から、さらに明かされることでしょう。

およそ六万年前にアフリカを出立した現生人類＝ホモ・サピエンスは、二万年前の「**氷期**」にあっても移動を続け、海水面の低下にともなう大陸の出現によって北極圏を通過し、**北アメリカ大陸**～**南アメリカ大陸**へと南下します。

同様に東南アジアを南下したグループは**オセアニア大陸**へと進出し、すでに五万年前にはオーストラリアへ達していたとされます。

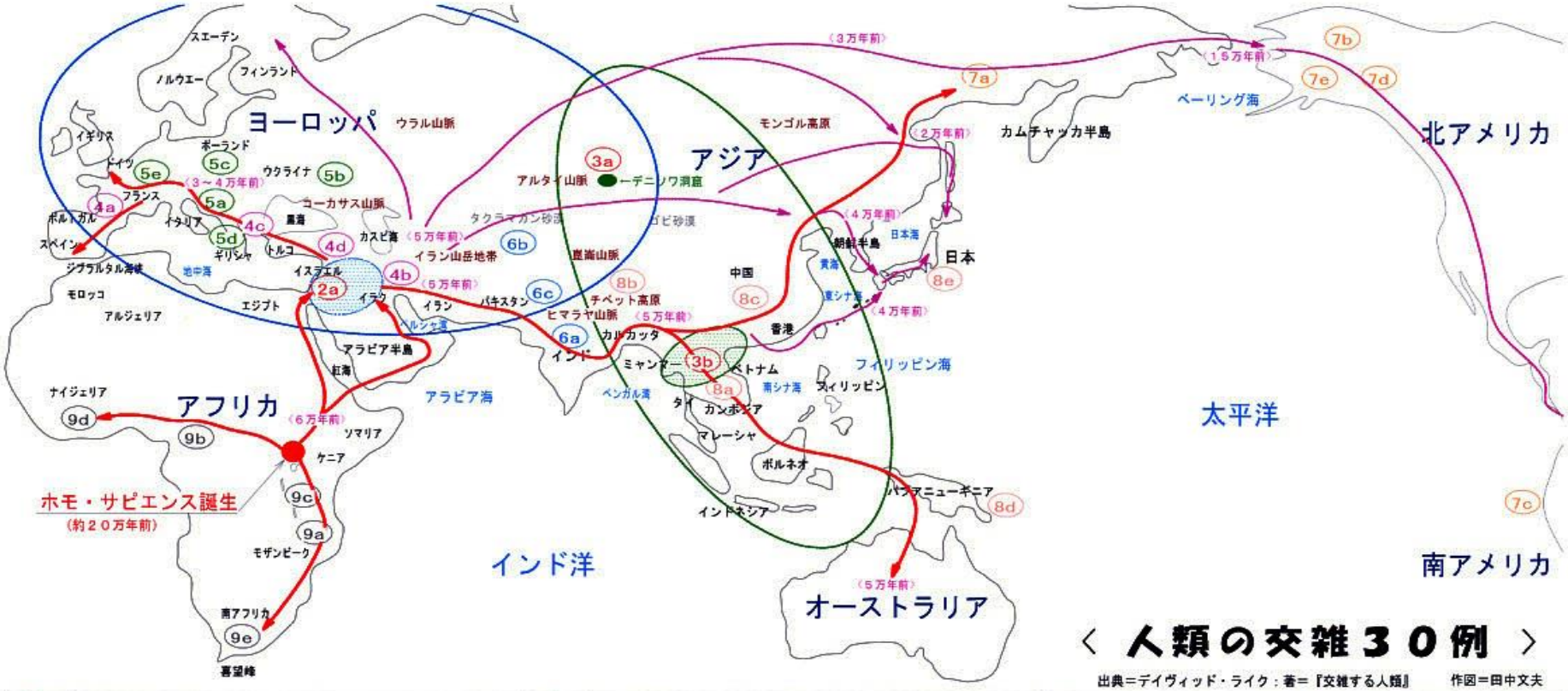
これら現世人類の生活は、洞窟に住み、**狩猟採取**により**食料**を得ていました。居住領域の**食料**を取りつくしてしまうと、新たな地域へと**移動**せざるを得なくなります。また一方では、人口増加により**食料不足**をきたし、やはり新たな**食糧確保**をめざして**移動**しなければなりません。このようにして大陸をくまなく**移動**することにより、**集団を維持**していきます。

しかし氷期が終わって温暖化になると、溶けだした氷は海面を上昇させて陸地を切り離していきます。さらに大気の水分までが氷として蓄えられていた氷期が過ぎると気候が変動し、大気に含まれた**水の循環**が始まります。氷期以降の現在のように、海水が蒸発して大気の雲となります。雲は移動して山岳で上昇気流になると、高所で冷却されて雨や雪となって地表に降りそそがれます。水は高所から低所に向かって流れ、集まると川となり、ふたたび海へと戻っていきます。この**大気と水の循環過程**で、降水や河川を活用した人類は、**水田・農耕作物を食料**にすることができるようになりました。最初は自然な河川の流れを、やがて道具を用いて人為的に変更したり、灌漑水路を構築したり、道具の活用をはかります。このような**農地水田耕作**には定まった**土地**を必要とし、**定住生活**をうながします。安定した食料摂取は、さらなる**農耕技術**を生み出し、**人工栽培技術**は**余剰生産**を生み出し、**余剰生活**は**文化**も育んでさらなる**人口増加**をうながし、**集団は拡大・安定化**へと向かいます。

このように氷期後の温暖化にともない、一万年前頃になると、人類のライフスタイルは**狩猟採取生活**から、**農耕定住生活**へと大きく変わり始めます。やがて同族集団は、**集落**から**村落**へと拡大発展していきます。しかし気候変動やその土地での適応状況によっては、さらなる移動も余儀なくされます。こうして随時移動を余儀なくされ、**民族の移動**は続けられます。

地球全体へと拡がりをみせた現生人類＝**ホモ・サピエンス**は、気候変動や人口増加にともなう環境への適応過程のなかで、**集団**、**部族**、**民族**の安定生活を求めて**適地移動**し、「**交雑**」が繰り返されます。その途上では**戦闘や略奪**、**和合・混血**が図られ、複雑化してきました。

次頁の図『**人類の交雑三十例**』は、デイヴィッド・ライク著の『**交雑する人類**』の裏表紙にある地図を参考に、「**ホモ・サピエンスと他原人との交雑**」ルートを重ね合わせたものです。いずれもＤＮＡ解析から導き出した結果として、おおよその流れは合致しています。**ネアンデルタール人**や**デニソワ人**との**交雑**、さらに局地的な**ホモ・サピエンス**諸民族との交雑により、現生人類は複雑な遺伝子継承を重ねてきましたが、本稿ではその流れに注目しています。そして**篠田謙一**氏が述べる「**日本列島は人類にとって一つのゴールだった**」（『ホモ・サピエンスの誕生と拡散』P-182）という帰結は、**本著主旨を、ＤＮＡ検証からも裏付ける**ことになります。重ねて記述すると、「**アフリカを出発した人類は枝分かれするようにしてさまざまなルートをたどりながら世界に広がり、そして日本列島でまた一つになったというわけです。**（『ホモ・サピエンスの誕生と拡散』P-183）」



〈 人類の交雑３０例 〉

出典＝デイヴィッド・ライク：著＝『交雑する人類』　　作図＝田中文夫

2a	54,000～49,000 年前	あらゆる非アフリカ人 ネアンデルタール人 ＋ 現生人類	5d	3,500 年前以上前	エーゲ海青銅器時代 イラン農耕民 ＋ ヨーロッパ農耕民	8a	5,000～ 4,000 年前	オーストロアジア語を話す人々 揚子江ゴースト集団 ＋ 先住南アジア狩猟採集民
3a	70,000 年前以上前	シベリアのデニソワ人 超旧人類系統＋ネアンデルタール人関連系統	5e	3,500 年前 ～ 現代	現代ヨーロッパ人 北 ＋ 南青銅器時代集団	8b	5,000～ 3,000 年前	チベット人 黄河ゴースト集団 ＋ チベット狩猟採集民
3b	49,000～44,000 年前	パプア人とオーストラリア先住民 デニソワ人 ＋ 現生人類	6a	4,000 年前以上前	祖型北インド人 イラン農耕民 ＋ 先住インド狩猟採集民	8c	5,000～ 1,000 年前	現代漢族中国人 黄河 ＋ 揚子江ゴースト集団
4a	19,000～14,000 年前	マドレーヌ文化の拡散 オーリニヤック文化 ＋ グラヴェット文化系統	6b	4,000～ 3,000 年前	祖型南インド人 ステップ牧畜民 ＋ イラン農耕民	8d	4,000～ 1,000 年前	南西太平洋諸島先住民 パプア人 ＋ 東アジア人
4b	14,000 年前以上前	後期中東狩猟採集民 基底部ユーラシア人 ＋ 初期中東狩猟採集民	6c	4,000～ 2,000 年前	現代インド人 祖型南インド人 ＋ 祖型北インド人	8e	3,000～ 2,000 年前	現代日本人 アジア本土農耕民 ＋ 先住の狩猟採集民
4c	14,000 年前	ベーリング・アレレード拡散 南西 ＋ 南東ヨーロッパ狩猟採集民	7a	15,000 年前以上前	最初のアメリカ人 古代北ユーラシア人 ＋ 東アジア人	9a	8,000 年前以上前	マラウィ狩猟採集民 東 ＋ 南アフリカ古代狩猟採集民
4d	8,000～ 3,000 年前	鉄器時代と青銅器時代の中東 イラン ＋ レヴァント ＋ アナトリア農耕民	7b	5,000～ 4,000 年前	古エスキモー 極東シベリア人 ＋ 最初のアメリカ人	9b	4,000～ 1,000 年前	バントウー族の拡散 カメルーン起源集団 ＋ 東・南アフリカ先住民族
5a	9,000～ 5,000 年前	最初のヨーロッパ農耕民 先住の狩猟採集民 ＋ アナトリア農耕民	7c	4,000 年前以上前	アマゾン流域先住民 集団Y ＋ 最初のアメリカ人	9c	3,000 年前以上前	東アフリカ牧畜民 レヴァント農耕民 ＋ 東アフリカ古代狩猟採集民
5b	9,000～ 5,000 年前	ステップ牧畜民 イラン農耕民 ＋ 先住の狩猟採集民	7d	2,000～ 1,000 年前	ナ・デネ語を話す人々 古エスキモー ＋ 最初のアメリカ人	9d	2,000 年前以上前	現代西アフリカ人 ２つ以上の古代アフリカ人系統
5c	5,000～ 4,000 年前	北ヨーロッパ青銅器時代 東ヨーロッパ農耕民 ＋ ステップ牧畜民	7e	2,000～ 1,000 年前	新エスキモー 極東シベリア人 ＋ 最初のアメリカ人	9e	2,000～ 1,000 年前	コエ＝クワディ語を話す現代の牧畜民 東アフリカ牧畜民 ＋ 先住サン族

BC7,000 年頃、崑崙山脈（コンロン）の麓、巨丹（コタン）＝蘇民（スメ）にいた崑崙族（コンロン）は、パミール高原を越えて南下していきます。崑崙族（コンロン）は閣蔑族（コウメイ）へと変わり、米作を始めます。やがて彼らは、ペルシャ湾を経てウルの地に至り、ウバイド人となってBC5,500 年頃、ウバイド文明を興します。この「ウバイド文明」こそが、現生文明の始源であるとされています。ウバイド人はBC3,800 年頃、さらなる海洋民族となり、東南アジア沿岸に沿い、やがてBC1,400 年頃、終着の地＝日本まで到達します。

他方では地中海へと進出します。各地に定住しながら漁撈・農耕・交易を得意とし、ウバイド海人族として情報文明を発達させたといわれ、広く世界各地へ浸透します。一方、ウルの地に残ったウバイド人は、ウルクのシュメール人に浸透し、BC3,500 年頃、「シュメール文明」を花開かせます。シュメール文明はメソポタミア文明へと拡がり、文明進化とともに多様な文化を生みだします。

シュメールの神々は、名前を変えて日本神話に登場する説や、逆に日本の神々がシュメール、メソポタミアへ遠征し、舞い戻って再び日本神話の神となる説（竹内神道＝万象同根）等々、神話の世界は変幻自在なワンワールドです。

前出、篠田謙一氏の著作においても、『日本人の成立を考える際には、日本史や世界史という分け方自体に意味がない。（P-119）』とされ、さらに「日本だけでなく他の国や地域集団を理解するためにも、日本人の成立の物語を列島内部の記述にとどめたり、ましてや神話のなかの話しとして語るのではなく、世界の集団の成立のなかで説明しいく視点が必要です。」（『日本人起源論』P-119）とされます。まさに本論を展開するがごとく、的を得ています。

さらに前記の東廻りに加え、中東から西廻りに展開したホモ・サピエンス（白人一神教）は、1,853 年ペリー来航に始まり、1,945 年の太平洋戦争終戦をもって日本列島へ到達し、地球周回ワンワールドの完成を終えた、と考えられます。その結果、連合国軍最高指揮官＝ダグラス・マッカーサー元帥（フリーメーソン）と昭和天皇の会見は、人類ワンワールド達成の象徴的できごとと理解できます。

そのことは、日本が単なる敗戦国であるだけでなく、BC 3,800 年以来世界へと浸透したウバイド人や、BC 722 年アッシリアに滅ぼされ、世界へと離散した北イスラエル十支族（古代イスラエル人）末裔が合流し、ワンワールド再認識となったのではなかろうか・・・と、本論における推考です。

特に現代の情報ネットワーク社会にあって、ワン・ワールド思考は不可欠となり、そのことは「天皇制」と直結するものでもなく、ましてや「ワン・ワールド勢力」とした組織を特定するものでもありません。アフリカの「ミトコンドリア・イヴ」と「Y染色体アダム」から発祥し、世界へと展開した「ホモ・サピエンス＝ワン・ワールド」の理解であり、その辺々における「日本人民～日本民族」の考察となるわけです。その中でも「日本人民～日本民族」の特徴は、日本列島が通過過程でない地政学的行き止まり、つまり「ゴール」の位置にあることが特徴です。それゆえに、聖徳太子の「十七条憲法」や、太平洋戦争敗戦後に制定された「日本国憲法」に大きな意味を生じます。つまり、聖徳太子の時代に行き止まりだった日本は、太平洋戦争敗戦を経て、ワン・ワールド地球周回が完成したことへの理解です。その意味から、ホモ・サピエンスの視野をもって二十一世紀世界を考え直すことには、大きな意味を生じてきます。

十七条憲法　＝　一に曰く、和を以て貴しと為し、・・・略・・・

日本国憲法　＝　国民主権と象徴天皇制。平和主義（戦争放棄・戦力不保持）。基本的人権の尊重（自由・平等・福祉）、三権分立。法による支配。特に「憲法前文」はワン・ワールド理念を表象している。日本国憲法の二重性＝人類憲法＆独立国憲法

第一章第一節にも記した『十六菊家紋の謎』の著者＝岩田明氏は、さらなる著書＝『消えたシュメール王朝と古代日本の謎』の中で、日本へ渡来した主要三民族の潮流を示されました。

❶ **毛族**（もうぞく）＝氷期が過ぎたBC10,000年以上前、日本海の水深が増して（160m ＋ 200m）現在の地形となり、日本列島に取り残された**原日本人＝縄文人**。沖縄から本州各地の山地～北海道まで分布し、狩猟や野生植物採取をしていた、古文書（記紀・他）に出てくる「**毛人**（えみし）」。

❷ **海人族**（あまぞく）＝シュメールを発し、南インド ～ 東南アジアの海洋ルートを経て日本列島へ渡来してきた「**海人族**」。米作や漁労により定住生活を図る。（閤蔑海人族）閤蔑（こうめい）→米（こめ）

❸ **銅鐸部族**（どうたくぶぞく）＝シュメールを祖とし、アーリア人（アライ族）と同化、陸路でユーラシア大陸を東へ移動、中国 ～ 朝鮮 ～ 対馬を経て、日本へ渡来した「**銅鐸部族**」。

これらの三民族は、時には激しく**争い**、また時には手を結び合いながら**融合**し、現在の**日本民族**を形成していった、とされます。その融合の手がかりは「**神話**」の中にあるとされ、「**神話には何らかの事実を反映している**」、といわれます。

公式な「**日本神話**」は、「**古事記**」と「**日本書紀**」にされていますが、「**公式＝時の権力者の判断**」という理解から、権力者にとって「**不都合な史実**」は、いつの世でもかき消されてきました。**神話**＝然り、**歴史**＝然り、ゆえに**真実**（事実）の多面性は、公式や定説に捉われることなく、直感をもって気づき、それを客観的資料と論理により、再構成し直してみる作業で、さらなる肉付けされた新たな様相を表わします。つまり、「**真実の多面性**」を**唯一な定説**や**公説**に絞り込む作業とは別に、様々な資料を読み解き、**自ら物語を推考してみる**ことも一つの立場となります（本論の作業）。それらの事実連系を説明する「**思考実験**」により、**歴史物語**を思い描き再構築することになります。宇宙を語る**人間のパラドックス**（自己矛盾）により、「**完全は → ない**」からです。

そこで前記・岩田氏による融合三民族を、他の資料からの説明も加え、もう少し詳しく省みることにしましょう。さらに前記三民族に加え、第❹として「**北方民族ルート**」を追加することにします。

これら民族は、移動にともなって融合・混血が進みますので、単一化した民族呼称よりも、伝搬ルートで表現するほうが分かりやすく、次の❶～❹に整理してみました。

❶ 原住縄文人　❷ 南ルート、　❸ 西ルート、　❹ 北ルート

❶ 原住縄文人（縄文人＝毛人（えみし））

氷期が過ぎ、日本海の水深が増して日本列島に取り残された BC10,000 年以上前からの**縄文人**。沖縄から本州各地の山地～北海道まで分布し、狩猟や野生植物採取をしていた「**毛人**（えみし）」。日本各地で、貝塚が発見されています。

❷ 南ルート（海人系＝國体・母系）

ウバイド～シュメールを発し、海のシルクロードを経て BC2,000 年頃に日本列島へ渡来してきた、**母系＝稲作・定住**民族 ～ スメル系**閤蔑海人族**（こうめい）（海部・物部・宇佐）→ **高千穂**（高天原→天照大御神）→ 橿原宮**神武天皇**即位（葛城王朝＝天孫族）→ **欠史八代天皇** →〈**國譲り**〉→ **崇神天皇**（三輪王朝＝八幡天孫族）→ **応神天皇**（大和王朝＝八幡天孫族）→ **欽明天皇**（大和～飛鳥中継ぎ王朝＝八幡天孫族）→ **大化の改新** → **天智天皇**（飛鳥時代＝日本国）→ 稗田阿礼・太安万侶（**古事記＝日本の正史**）→ 舎人親王・藤原氏（**日本書紀＝日本の正史**を書き直す）。

皇統の「**天孫族**」として、「**國体＝母系**」を護持する勢力となる。南ルートのスメル系**閤蔑海人族**（こうめい）は創成期の天皇系を形成しますが、歴史上確認できないからとして、初代の**神武天皇**を除き、九代の開花天皇までを「**欠史八代天皇**」とされます。昨今では史実を明かす出版諸書やインターネット開示が見られ、実在

論が浮上してきました。それらを整理した推考系統図を、本論資料編「**古代＝天皇系図**」に示しました。

一方では、戦前～戦後の歴史学者＝**津田左右吉**氏（1873～1961年）の研究による『**古事記及び日本書紀の研究**』は発禁本とされましたが、一昨年（2018年5月）になり新書版として復刻されます。さっそく購入して目を通してみました。

その結論＝応神天皇以前の歴史記述（古事記、日本書紀）は不確かなものである。応神天皇以前、神武天皇へと遡る万世一系とする皇統は「系譜の形をもった説話（P-287）」である、とされます。この「**津田史観**」にあっては、人骨解析、ＤＮＡ解析という現代科学技術解析を経た結果でないことから、一つの思考実験成果の位置づけとなります。その最大な成果は、綿密な**古事記**、**日本書紀**の検証により、それら**記紀**を「**説話＝物語**」であることへ、位置づけたことにあると考えられます。

本論は、初代**神武天皇**から第九代**開化天皇**までを「**南ルートの天皇**」と理解し、第十代**崇神天皇**からは「**北ルートの天皇**」に入れ替わったのではないかとの推考に沿った**物語**なのです。より正確を期して整理したものの、**歴史の真偽を確かめる意図はありません。**

南朝系から**北朝系**へと「**國譲り**」がおこなわれた**神話**が、古事記にある「**葦原中国の國譲り**」、といわれます。**南朝系**は「**國體＝護國、母系＝皇后**」の役割、**北朝系**は「**政体＝権力、父系＝天皇**」の役割分担をし、**両者和合合体**により**皇統維持**を図ってきたとする理解です。

國譲り後の**南朝系**は、**皇后**を軸とした和合護國体制維持と、それを補佐する國體参謀総長＝**武内宿禰**（竹内宿禰）として、南朝系人脈の継続が図られてきました。現世の第七十三世・武内宿禰こと、**竹内睦泰**氏は、『正統　**竹内文書の謎**』を2013年に出版されました。

❸ 西ルート（青銅系＝文明・文化）

シュメール神話の**牡牛**（ハル）と**蛇女**（キ）から発し、**アーリア人**（アイラ族）と同化しながらユーラシア大陸を東へ移動。青銅文明を携えて、中国～朝鮮～日本へと渡来。超古代中国最初の皇帝＝**庖羲**（ふっき）（顔は人・牛の首・身体は蛇・虎の尾）と、女神＝**女媧**（じょか）（首は人、身体は蛇）から生まれた「**神農**（しんのう）（姓＝姜）」神話が「**素戔嗚**（すさのお）**神話**」へと変遷　～～　**父系＝青銅騎馬人族**（銅鐸・銅剣）　～～　**殷**（いん）の滅亡（BC1,024年）以降、「**箕子**（きし）」の末裔が中国（連雲港）→　朝鮮（仁川）→ 対馬 → 九州（筑紫）→「**出雲**」へ渡来、**青銅器文明**を伝えます。

「**出雲族**」、「**安曇族**」、「**秦氏**（徐福・弓月君）」等、**士**（方士）・**農・工・商・老若男女**が渡来。西ルート渡来者の特徴は、政権を補佐する宮廷官僚や占術、農・工・商＝技能の発展に寄与した者たちです。

BC722年、アッシリア侵攻により、北イスラエル王国が滅亡します。北イスラエル王国に住んでいた**十支族**はアッシリアの虜囚となりますが、その後の足取りが記録されず「**失われた十支族**」と呼ばれ、世界へ離散したとされます。その主たる勢力がこの西ルートにも重なり、中国の**殷族**や**秦氏**、日本へ渡来した**出雲族・安曇族・秦氏**（徐福・弓月君）らに浸透された可能性は、諸書に記述されています。「**失われた十支族**」の**古代イスラエル人**は、王や皇帝・天皇などのトップリーダーとなって国を支配することでなく、トップリーダーを支える**官僚**や**参謀**、**財政**などの分野でその高い能力を発揮したとされます。つまり、「**國體**」護持能力です。

古代イスラエルの神殿様式や作法と、日本の神社様式・作法らが類似していると、俗説書物は多々出版されました。さらに古代イスラエルの祖となるシュメールやウバイド文明・文化も混合され、長い年月を経て今に至る世界文明・文化の複雑さは、一般人の理解を超えるものです。

現在の国連や国際機関にあっても、その世界基準の**ダブルスタンダード**（建前と本音）に気づきます。その根底の一つに、人間は生きる上での**自己矛盾**（パラドックス）があるからです。二つ目には、**古代イスラエル人**の**知恵**による、裏方に回って表を操作する**戦術**の巧みさがある、とかねがね考えていました。

二つ目の代表格にアメリカ大統領の存在がある、と述べる俗説本があります。しかし冷静に組織を観察してみると、**人間組織の統治**に**ダブルスタンダード**（建前と本音）の巧みな使い分けが有効であることは、歴史の検証に多々見いだせます。俗説本はそれらを「**ユダヤの陰謀**」などと呼びますが、呼称はどうであれ、「**人間生存の欲望と希望**」が織り成す「**人間ドラマ＝歴史**」は、**人間存在の本質**である裏（本質）の**欲望**と、表（社会）の**理性**とがせめぎ合い、それらの**バランス**を図って生活する人間の**知恵**が、ホモ・サピエンスたる由縁なのでしょう。

※明智光秀は、ユダヤの宮廷管理人を代弁（貸借対照を理解）した人物である＝という俗説本がありました。

❹ 北ルート（騎馬系＝政体・父系）

ウバイド～シュメールを発し、イラン山岳部からコーカサス山脈～ウラル山脈やアルタイ山脈を越え、ユーラシア大陸北部を移動し、モンゴル高原を経て南下し、朝鮮～北九州地方へ渡来してきた民族。

牧畜民として定住都市を造らず、寒冷地帯を**騎馬**で移動するために戦闘や略奪によって制覇し、大陸の東端に至ると、**扶余**（ぷよ）や**羅津**（らじん）で他のルートを辿った民族と出会います。**扶余**（ぷよ）→**任那**（みまな）を経、**任那天孫族となった**北ルート民族は、第十代「**崇神天皇**」となり、皇統の「**政体＝権力、父系＝天皇**」を担う勢力となります。後に**羅津**（らじん）を経て**八幡天孫族**となった北ルート民族は「**八幡大神**」を名乗り、第十五代「**応神天皇**」となります。「**応神天皇**」第六皇子＝「**菟道稚郎子**（うじのわきいらつこ）」は私の生誕地、「**相模國 第四之宮 前鳥神社**」の祭神です。さらに応神天皇第四皇子が、第十六代「**仁徳天皇**」になったことは、先にも記したとおりです。

前記の流れを確認するには、民族の言語分布やＤＮＡ分布など、世界展開への流れを検証する必要があります。

① **インド・ヨーロッパ語族**
② **セム・ハム語族**
③ **ウラル・アルタイ語族**

右の分類はかつて**世界三大語族**とされていましたが、現在ではウラル語族とアルタイ語族は分離されているそうです。そして「**日本語の起源**」として**アルタイ語族説**があるように、朝鮮語・高句麗語・扶余語との関連もあるとされ、言語族の分布はＤＮＡ分布とともに、民族の移動を理解する手がかりです。

古代は日本列島各地（敦賀、出雲、北九州、等）からも朝鮮へと渡り、**任那**（みまな）の「**任那日本府＝任那天孫族**」や**羅津**（らじん）の「**八幡大神＝八幡天孫族**」として、南ルートの**海人系と融合**して「**天孫族**」となり、ふたたび日本列島へ渡来して「**皇統**」に入ったとする説明本（落合莞爾氏著作諸本）があります。

最初はBC97年＝**任那天孫族**から第十代＝**崇神天皇**を誕生させた「**三輪王朝**」。次はAD270年＝**八幡天孫族**から第十五代＝**応神天皇**を誕生させた「**応神王朝**」。**応神王朝**は「**政体＝権力 → 父系＝天皇**」を確立し、現皇統の始祖とされます。しかし先に記した津田左右吉・著『**古事記及び日本書紀の研究**』にもあるように、**本当のところは、誰にも分かりません。**

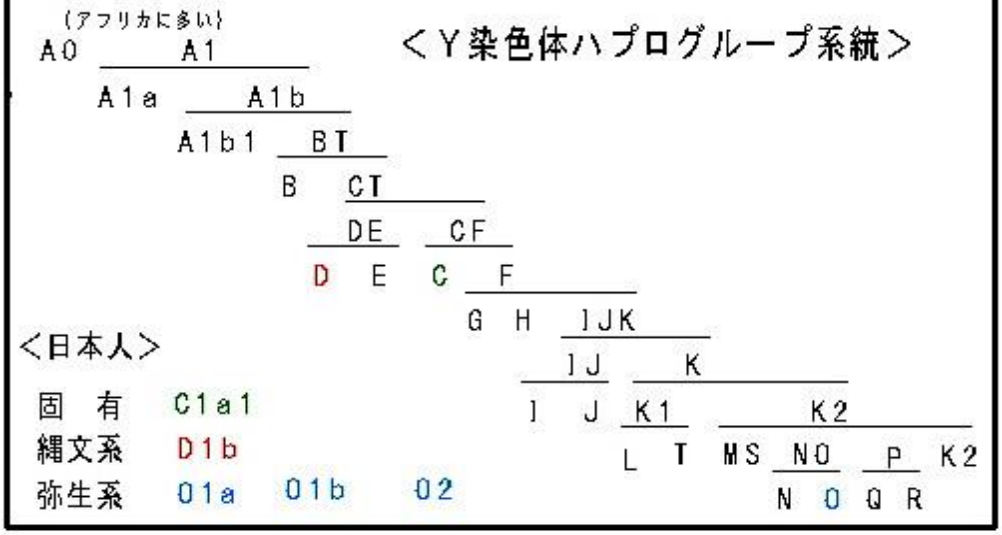
以下、**ＤＮＡ検証**による人類の移動概要図を示し、民族移動と交雑（混血）の資料と、**社会構成図**や「**古代＝文明・文化の世界展開**」を提示します。

<ハプログループ>（ haplogroup ）

単一の一塩基多型（SNP）変異を持つ共通祖先集団

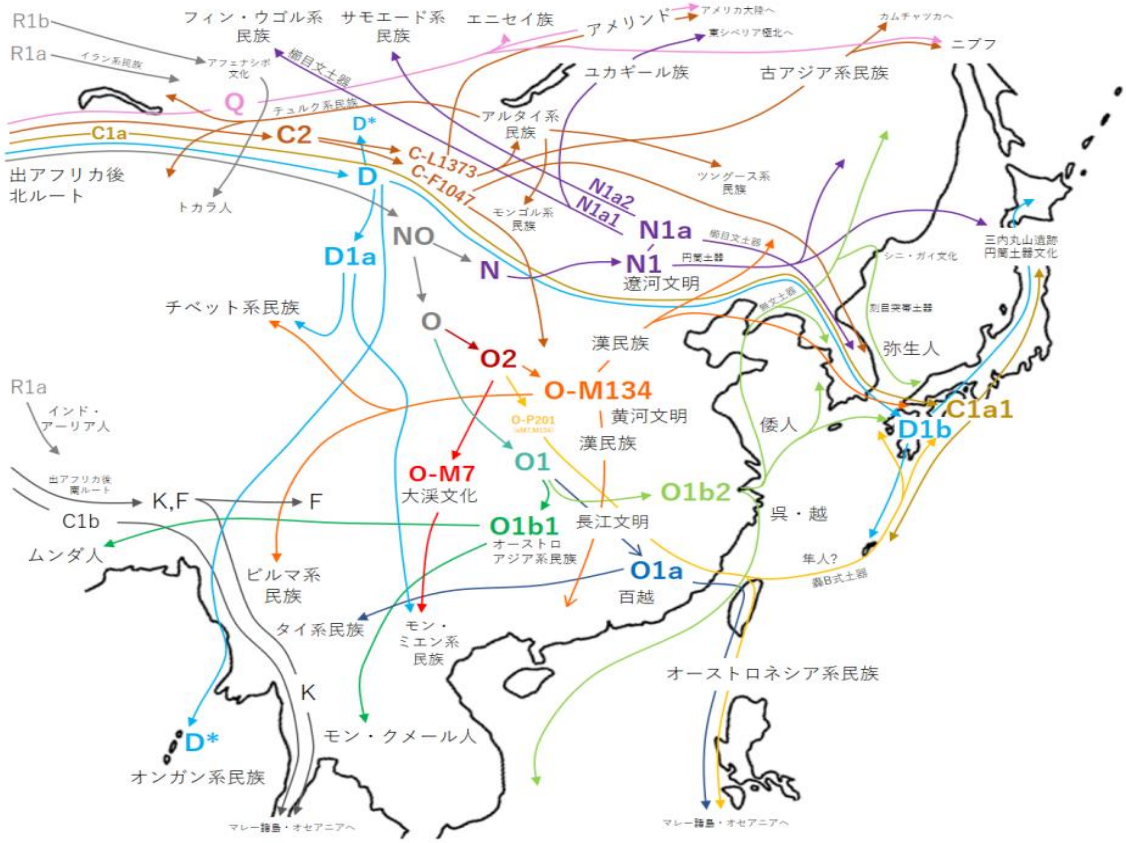
・ミトコンドリア（女系）・・・人種との相関が高いが、混血多様化
〈ミトコンドリア・イブ〉

・Y染色体（男系・アダム）・・・言語上の区分（語族）分布に近い

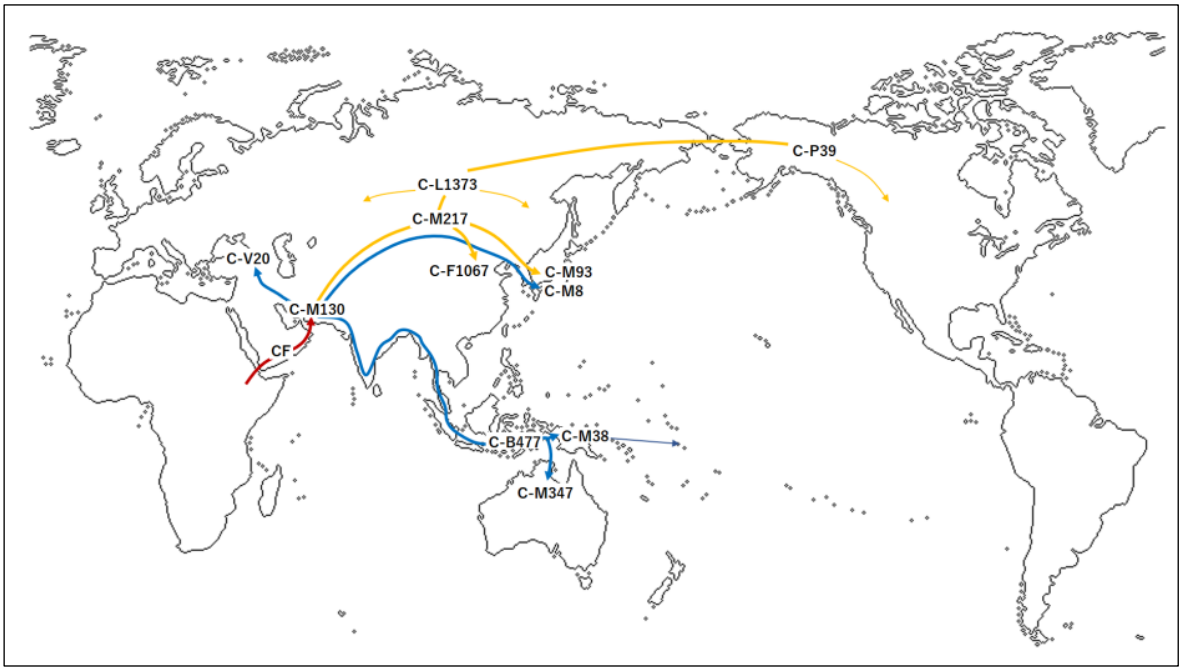


Y染色体ハプログループからみる東アジアでの移動図

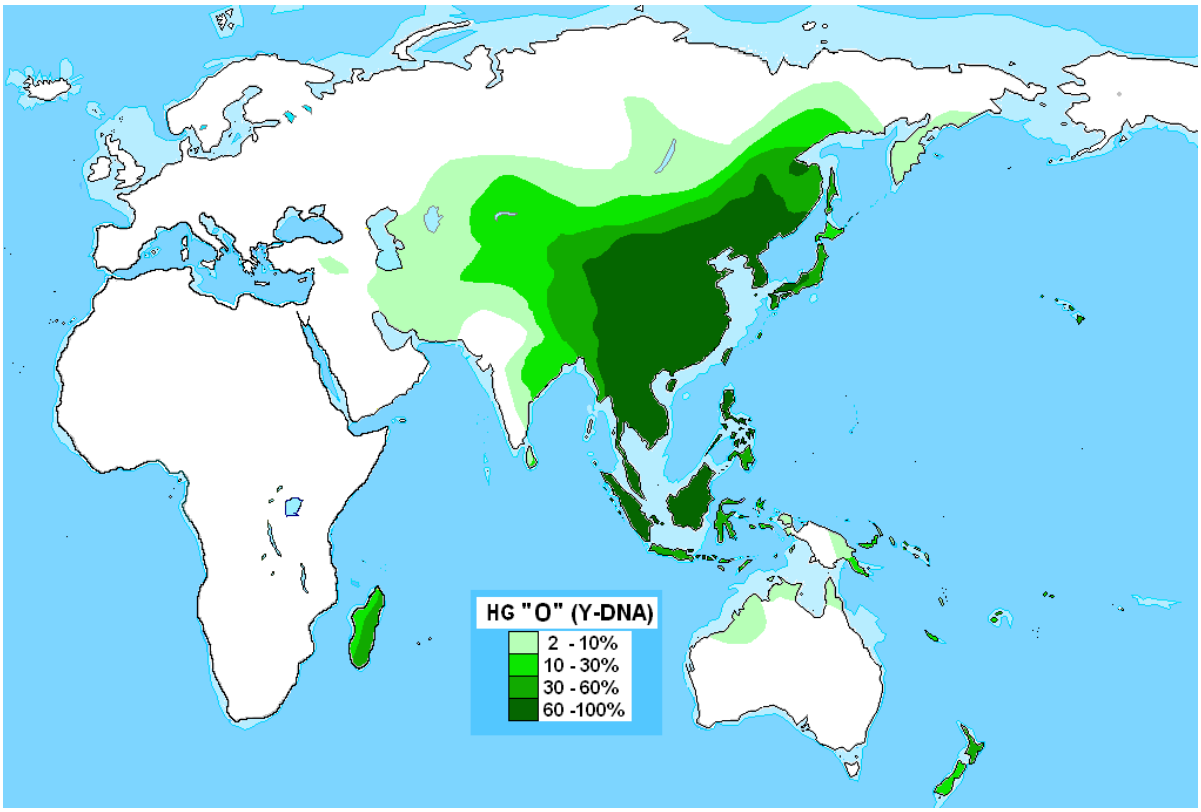
（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ=ｳｷﾍﾟﾃﾞｨｱより）



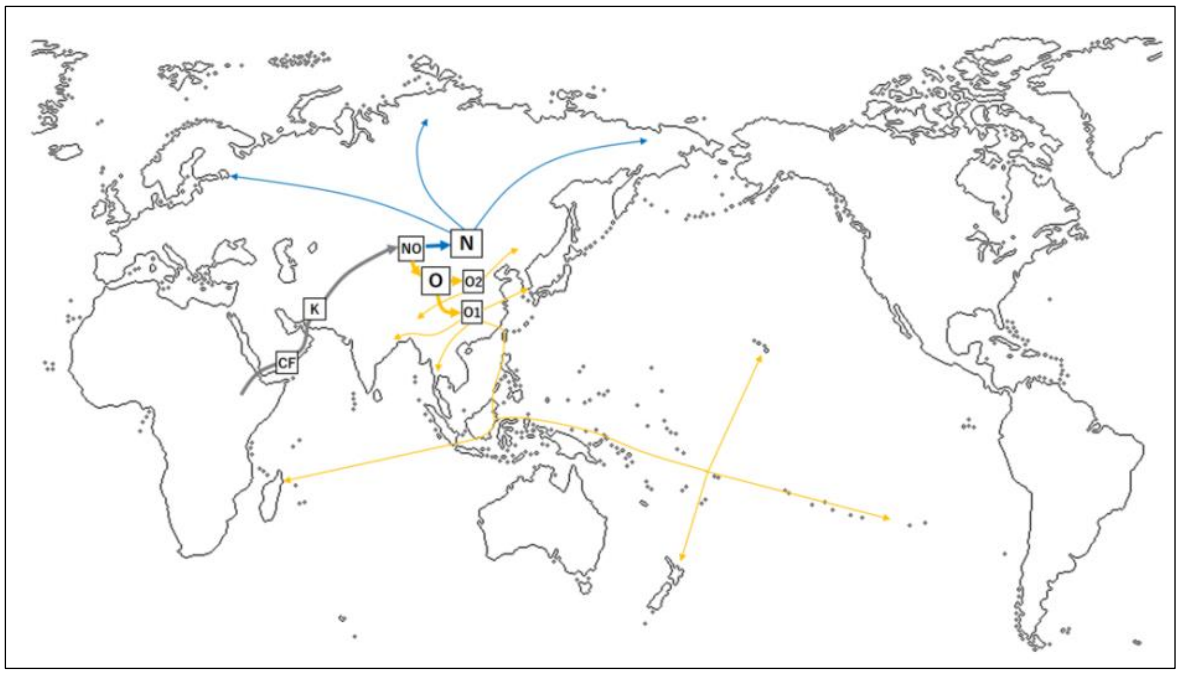
Ｙ染色体ハプログループ　Ｄ



Ｙ染色体ハプログループ　Ｃ

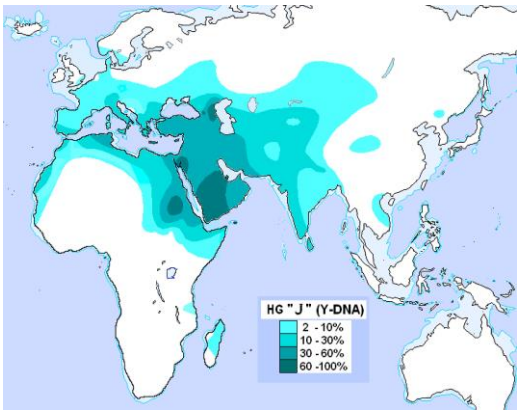


Ｙ染色体ハプログループ　Ｏ

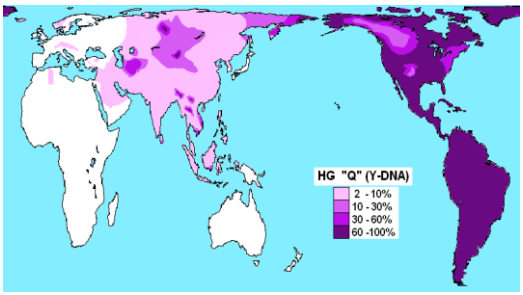


Ｙ染色体ハプログループ　Ｏ

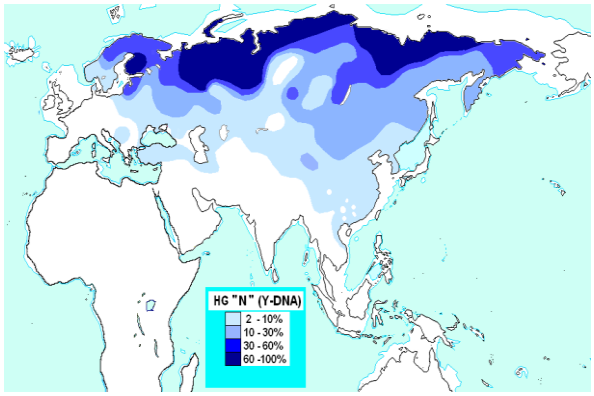
ハプログループ「E」の分布



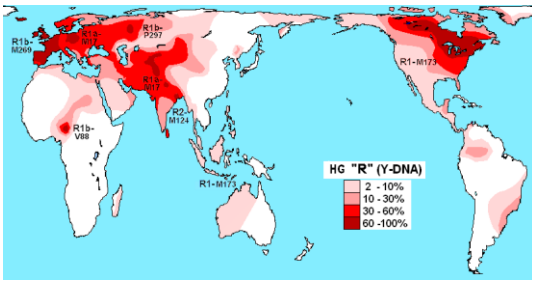
ハプログループ「J」の分布



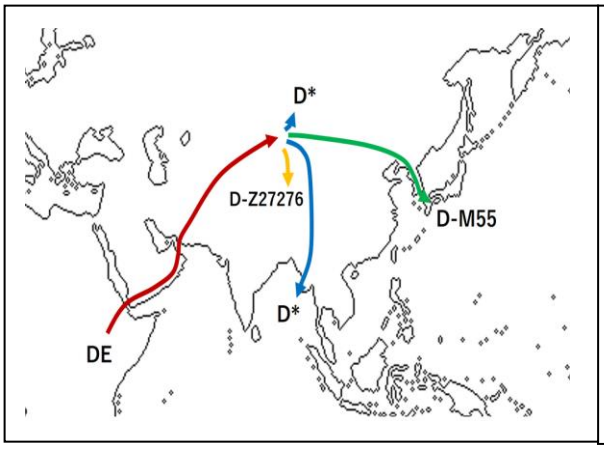
ハプログループ「Q」の分布



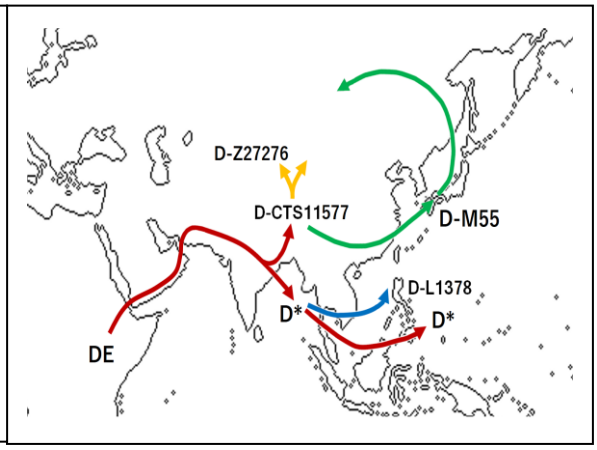
ハプログループ「N」の分布



ハプログループ「R」の分布

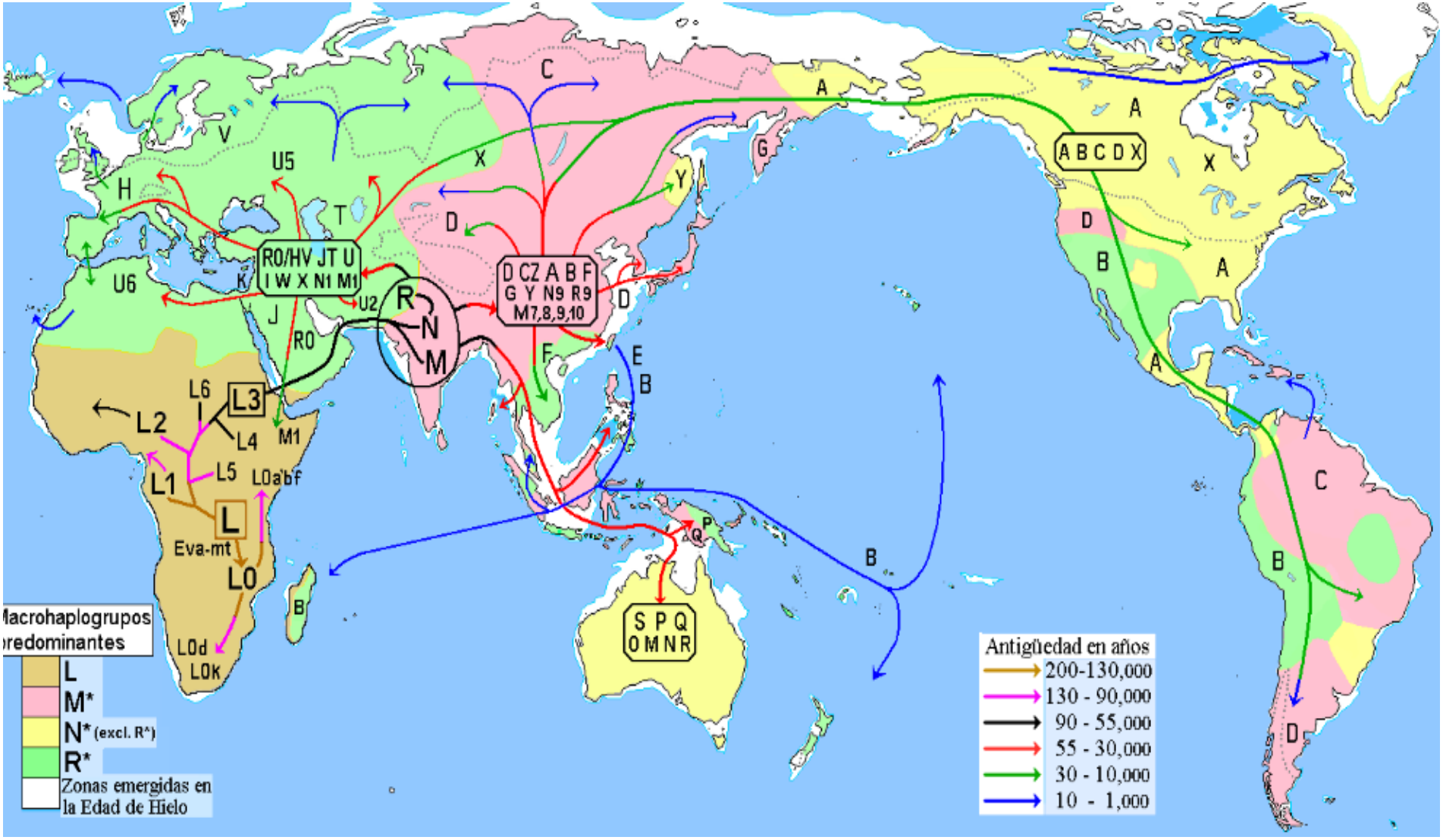


Y染色体拡散「北方ルート」

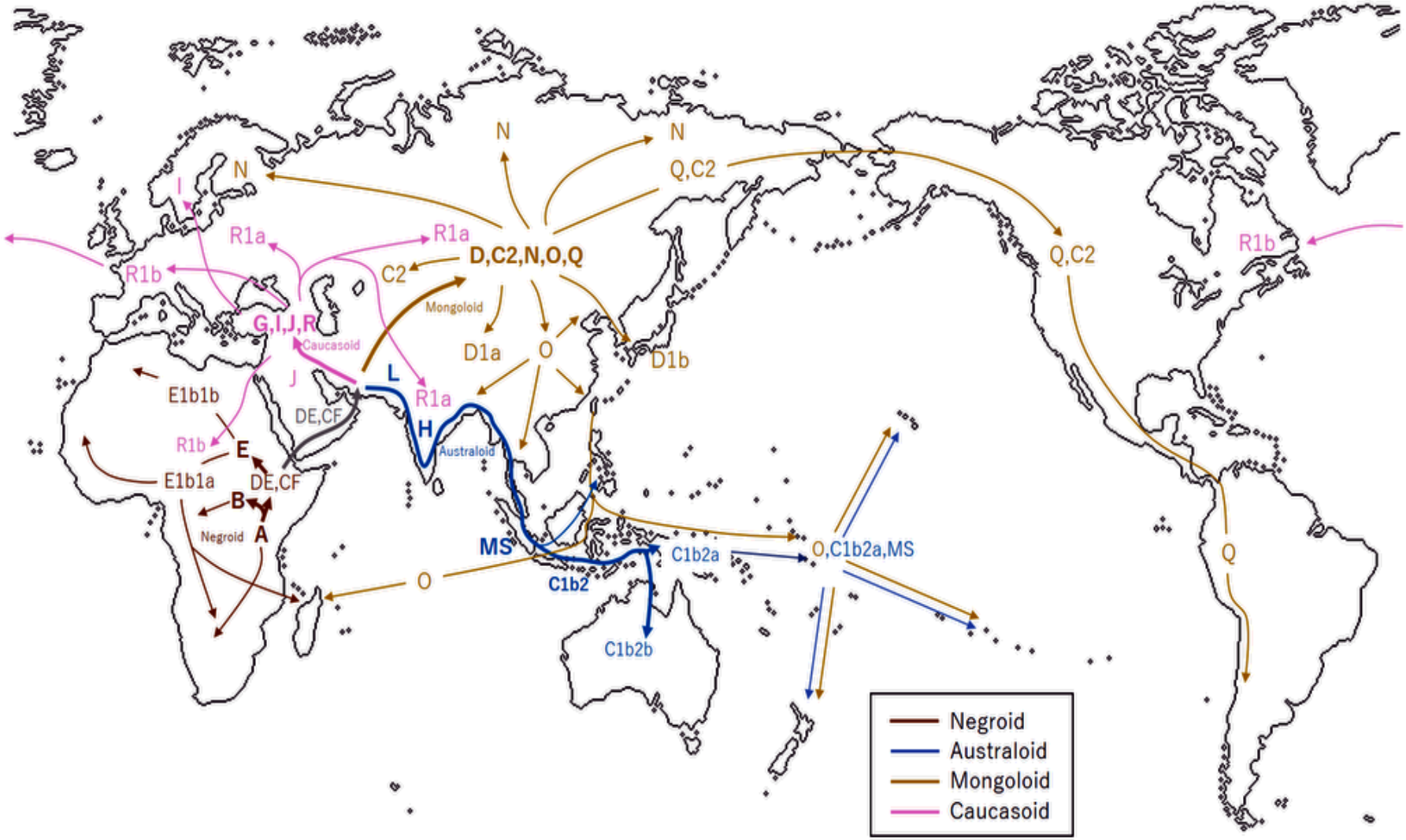


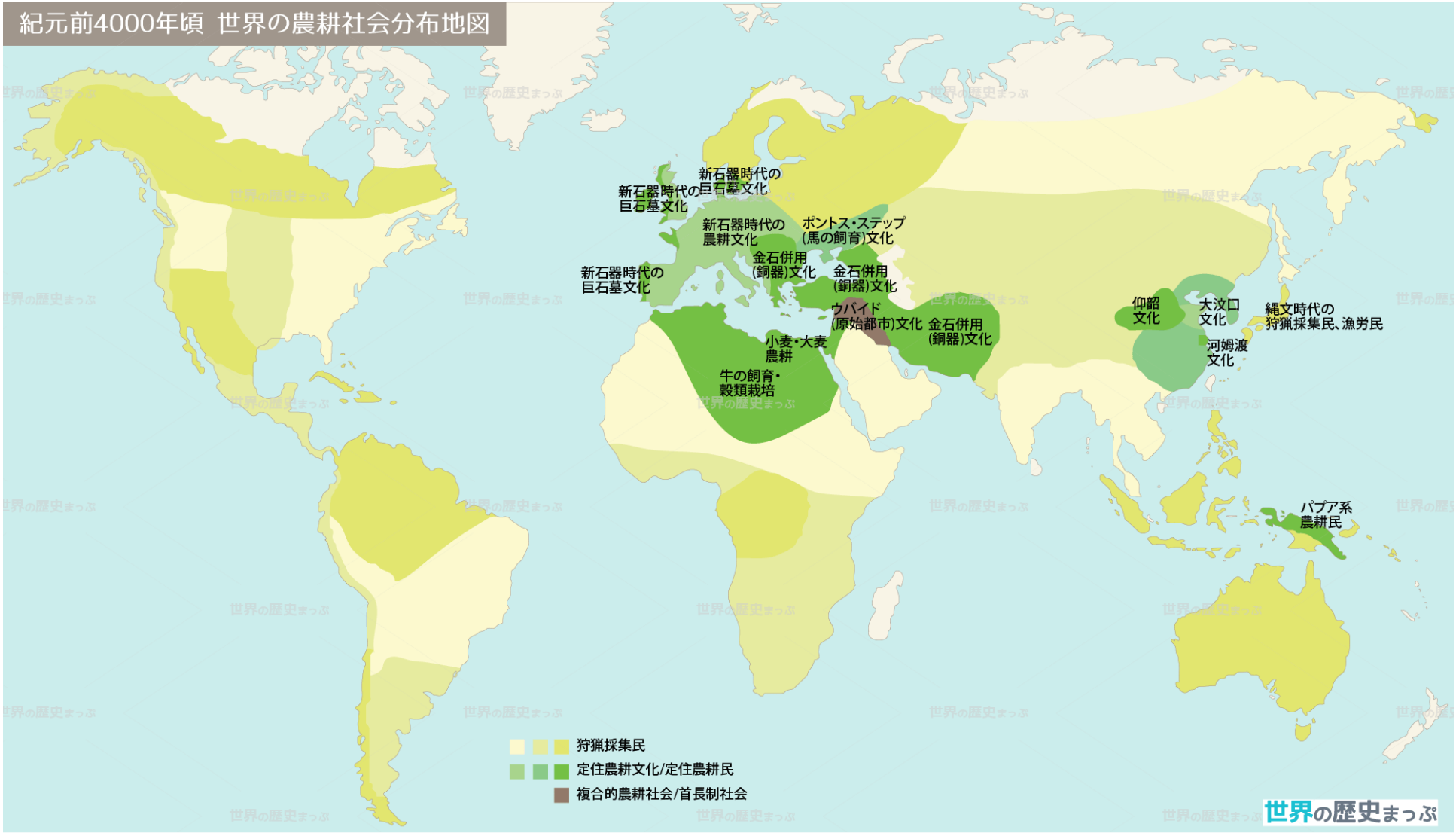
Y染色体拡散「南方ルート」

ミトコンドリア・イブからみる現生人類の移動図

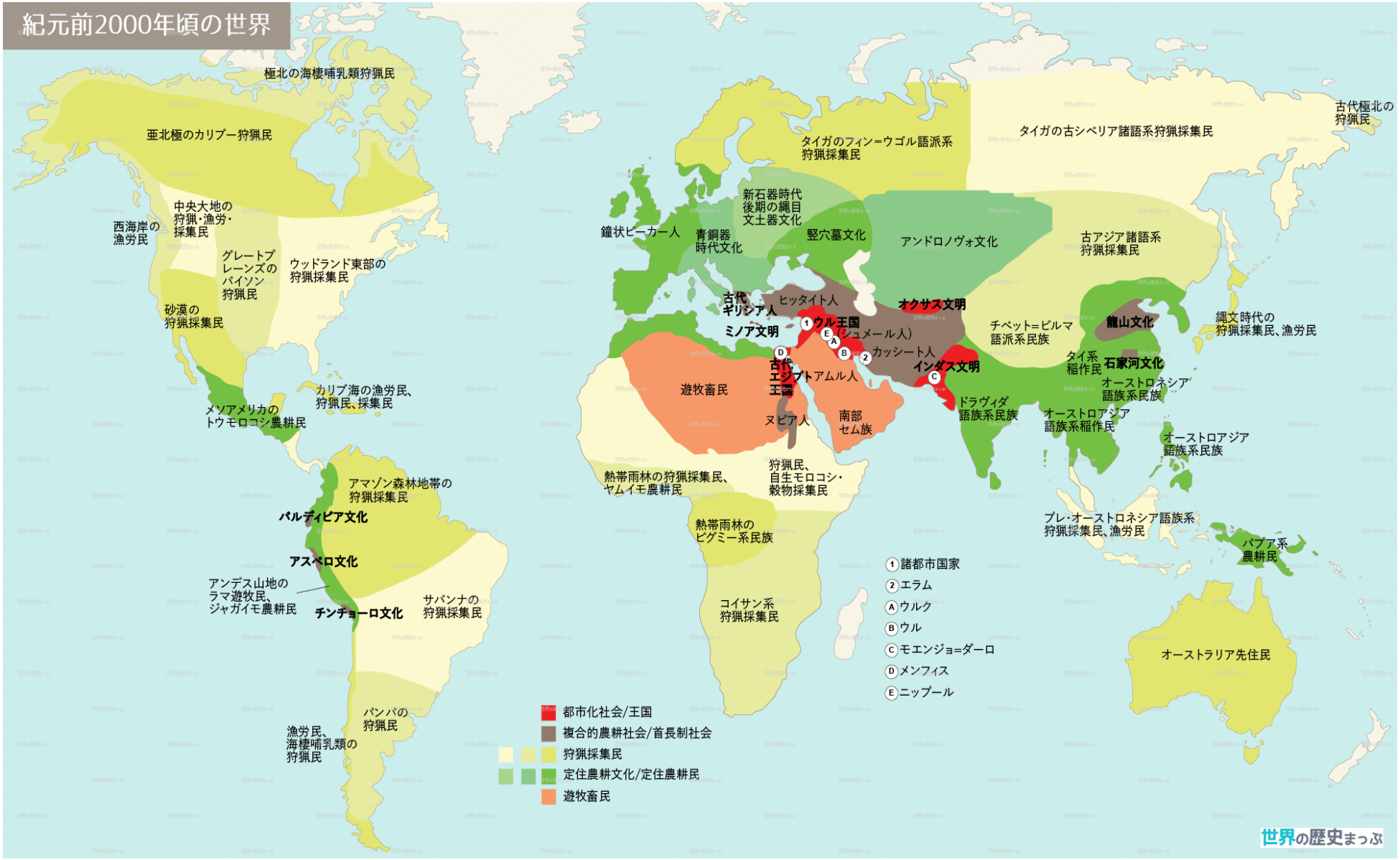


Ｙ染色体ハプログループからみる人種の移動図




紀元前4000年頃 世界の農耕社会分布地図
新石器時代の巨石墓文化
新石器時代の巨石墓文化
新石器時代の農耕文化
ポントス・ステップ(馬の飼育)文化
金石併用(銅器)文化
新石器時代の巨石墓文化
金石併用(銅器)文化
ウバイド(原始都市)文化
金石併用(銅器)文化
小麦・大麦農耕
牛の飼育・穀類栽培
仰韶文化
大汶口文化
縄文時代の狩猟採集民、漁労民
河姆渡文化
パプア系農耕民
狩猟採集民
定住農耕文化/定住農耕民
複合的農耕社会/首長制社会
世界の歴史まっぷ

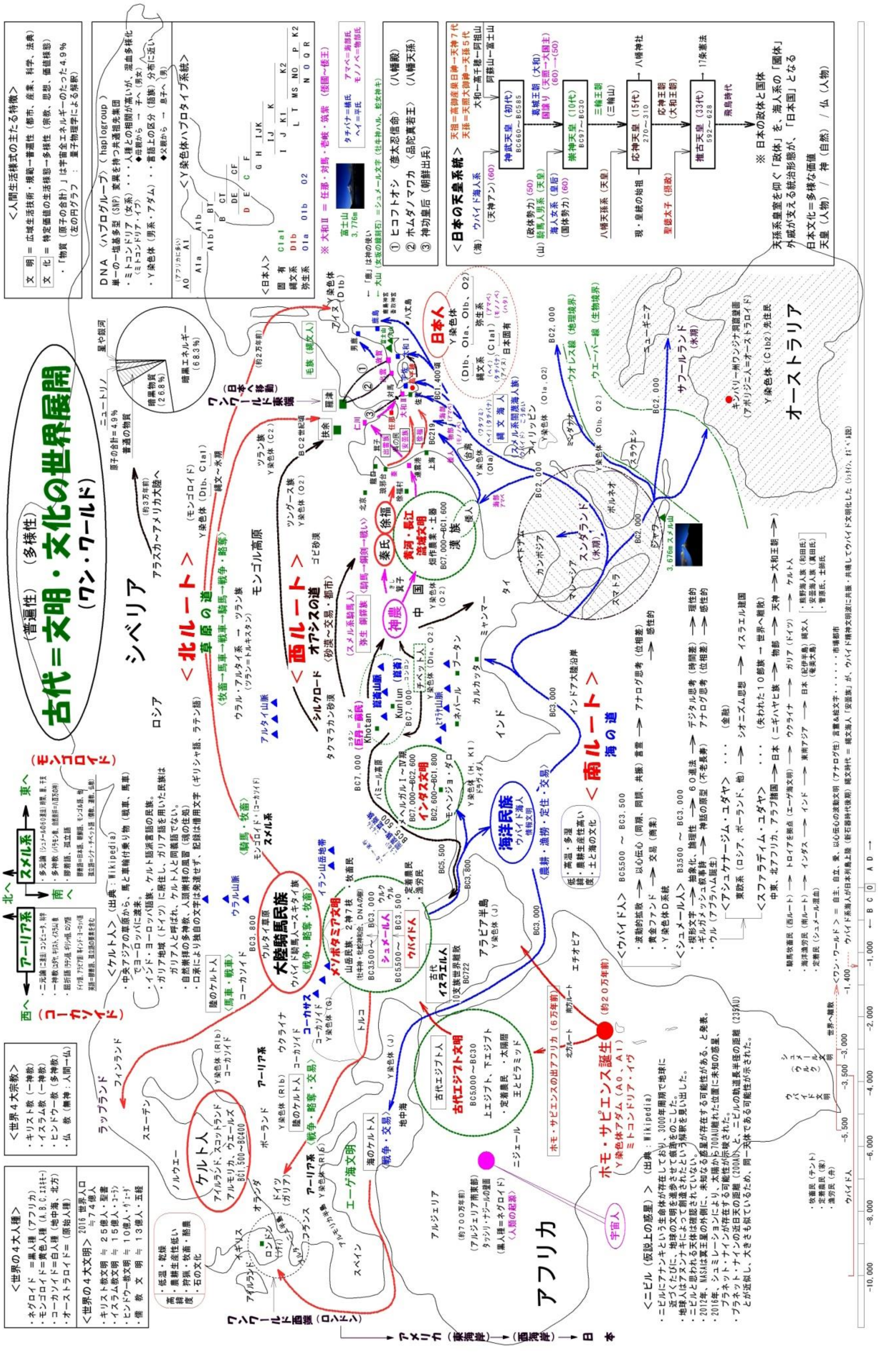
紀元前2000年頃の世界



東西交流の三つの道
南ロシア草原地帯
カザフ草原
ジュンガリア
アルタイ山脈
モンゴル高原
タラス
高昌
ハミ
ゴビ砂漠
甘粛
北京
黄河
天山山脈
疏勒
亀茲
タリム盆地
玉門関
敦煌
張掖
洛陽
長安
長江
泉州
広州
インドシナ半島
南シナ海
ローマ
コンスタンティノープル
黒海
小アジア
地中海
アレクサンドリア
エジプト
ナイル川
アンティオキア
ティグリス川
ユーフラテス川
クテシフォン
イラン高原
ペルシア湾
ホルムズ
マスカット
メディナ
メッカ
紅海
アデン
カスピ海
アラル海
シル川
アム川
サマルカンド
パミール高原
バクトラ
ヒンドゥークシュ山脈
莎車
于闐
スレイマン山脈
インダス川
チベット高原
ヒマラヤ山脈
ガンジス川
ナーランダ
アラビア海
カリカット
コチン
コロンボ
ベンガル湾
インド洋
マラッカ
マラッカ海峡
草原の道
オアシスの道（絹の道）
海の道
世界の歴史まっぷ

古代=文 明 ・ 文 化 の 世 界 展 開 図　（作図＝田中文夫）

＜ウバイド～シュメールから発した文明・文化が日本で習合＝大和＞



前頁「**古代＝文明・文化の世界展開**」は、これまでの記述説明を著者が図解したものです。

この図に加え、「**Y染色体ハプログループからみる人種の移動**」や、「**ミトコンドリア・イブからみる現生人類の移動図**」、「**Y染色体ハプログループにおける東アジアでの移動図**」等における民族移動の流れを重ねてみると、おおむねでの方向性が合致していることが分かります。**伝承**や**神話**による実証性の乏しい「**小さな物語**」を積み上げ、「**大きな物語**」へと組み立て直してみると、ＤＮＡや部族言語の展開に合致しているのも分かります。「**ミトコンドリア・イブ**」は、**女系祖先**の流れを理解するのに適し、人種との相関性が高いのですが、混血により多様化してきます。「**Y染色体ハプログループ**」は、**男系祖先**の流れを理解するのに適し、それぞれの部族が使う言語上の分布（語族）に近似してきます。

これらを「**小さな物語**」として、細部における検証は別な課題として残し、ここでは「**大きな物語**」を採り上げ、日本の位置づけを理解するものです。

つまり現生文明・文化は、アジアの中央部、**崑崙山脈山麓地域**に BC7,000 年頃に住まっていた**崑崙族**（こんろんぞく）が**西方のインド北部**へと移動します。BC5,500 年頃には**米作**を得意とする**閣蔑族**（こうめいぞく）へと変遷してベンガル湾へと達し、**海洋民族**へとさらなる変遷をとげます。**閣蔑海人族**となり、海洋を経て**ウル**地方へ至ります。彼らは**ウバイド人**と混じり合い、BC5,500～BC3,500 年頃の「**ウバイド文明**」を発展させます。**ウバイド**の**灌漑農耕**や**漁撈**の定住生活とともに、**海人**となって**舟**でエジプト方面やインド南岸方面へと展開し、さらにアジアの南岸を伝い、ニューギニアからオーストラリア方面へと進出します。

ウバイド文明は山岳地帯から進出してきた**牧畜民**が混じり合い、**ウル**から**ウルク**へと中心が移り、BC3,500～BC3,000 年頃には**シュメール人**となって、高度な「**シュメール文明**」を花開かせます。**シュメール文明**は「**メソポタミア文明**」へと変遷。やがて古代**イスラエル人**が枝分かれし、その中から**ユダヤ教**、**キリスト教**、**イスラム教**という、**一神教**が発祥します。コーカサス方面に展開した**コーカソイド**（アーリア系）は欧州へ、**モンゴロイド**（スメル系）は東へ展開し、日本に到達して**海人系**と**大陸騎馬系**が**習合**します。

欧州へ向かったコーカソイド（アーリア系白人種）は、**一神教**（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）を生み出したように、二元論、二進法や二項対立などの**デジタル分析的思考**と**屈折語**（特にインド・ヨーロッパ語族の英語、ドイツ語、アラビア語、ロシア語、等々）をもって**科学**を発展させ、**コンピュータ**を生み出します。**二項対立思考**による**合理的精神**は、敵／味方の争い、勝ち／負けの勝負、損／得の利害、強／弱の格差、速い／遅いの序列化、真／偽の判定、等々から、戦争、経済、裁判、スポーツ、ゲーム等々の**文化的多様性**を展開させます。

他方、**東に向かったモンゴロイド**（スメル系黄色人種）は、シュメール文明が生み出した**60 進法**の時間概念や暦、干支や占い、家族の概念、等々、日常生活の連続的かつ周期的変化をする自然現象の中から、**アナログ循環的統合精神**によって真理を学び取ります。原初の自然崇拝精神は**多元論**であり、**膠着語**（日本語、朝鮮語、モンゴル語、等々）、**孤立語**（シナ語、チベット語、等々）によって**多神教**（バラモン経、自然崇拝＝八百万の神）を生み出します。その精神は、連続的かつ周期的循環性の真理を解した後に統合へと向かい、曼荼羅として概念図の可視化を試みました。経典は論理の可視化であり、**可視化**（実相）によって他者への客観的説明や普及が図られます。可視化できない**情念**や**観念**の世界は、さまざまな修行や演舞の中に込めて**間接表現**（虚相）とします。この、**可視化**（実相）と**間**

接表現（虚相）との「**統合意識 ＝ 実相 ＋ 虚相**」こそが、「**人が認識している世界構造**」ではないかと考えられます。それを仏教では、「**一切が空**」と言い現わしました。そのことを私は、「**複素的世界観**」と定義してみたのです。

※ **複素数**＝実数＋虚数、から **複素的世界観 ＝ 実相 ＋ 虚相**

崑崙山脈山麓地域から**東に向かった、モンゴロイド**（スメル系黄色人種）は、中国北西部やチベットを経、BC4,000 年頃には「**黄河・長江流域文明**」と混じります。**黄河文明**の特徴には、**青銅器**や**銅鐸**、**甲骨文字**（亀甲獣骨文字）、**甲骨占い**（青海亀の甲羅）、などがあります。**殷王朝**の時代（BC1,600～BC1,024 年）、東シナ海に生息する海亀の甲羅を使った「**亀卜**」という甲骨占いは、日本の皇室にまで伝わり、平成天皇・令和天皇の「**斎田点定の儀**」（平成二年二月二十八日、令和元年五月十三日）でも使われました。

※ **斎田点定の儀** ＝ 大嘗祭で使われる米をつくる田んぼをどこにするか、占いで決める儀式

甲骨文字は漢字の原初形態とされ、亀の甲羅や牛、鹿の骨に、熱した青銅棒を使って刻み込み、占い内容などを記録したとされます。さらに甲骨に朱を塗り込め、神と交信する地位にある者としての王の神聖を示す意味も含まれるといわれます。

中国では、殷王朝後期の甲骨文字が、殷墟（小屯村）から大量に出土したそうです。殷族がつくり出した最初の**甲骨文字**は、シュメールの**楔形文字**に似ている象形文字だったそうです。しかしシュメールと殷族との関係は未だ不明といわれます。

殷族の「**イン**」は、**インド**に住まっていた「**アライ族**（アーリア系）」のバラモン教最高神、「**インドラ**」の「**イン**」に由来するのではないか、とするのが岩田明氏の説です。「**インドラ**」は後代に仏教へ組み込まれ、「**帝釈天**」と呼ばれますが、**バラモン教**の特徴は、「**カースト制を生み出した**」、ことです。**殷族**は、厳しい戒律と階級制度をもった、父子相続の父権中心社会だったとされますが、この思想が「**儒教**」に波及したのではないかと推察できます。

孔子（BC552～BC479 年）を始祖とする「**儒教**」は、宗教の神に代わり、**天の聖人**たる**皇帝**をもって治世をおこない、**君子**（官僚機構）によって**四民**（官僚、農民、職人、商人）統制をおこないます。

それは、神を信仰する「**宗教**」でなく、思考基準を平準化する「**思想**」といえます。春秋時代（BC770～BC403 年）の**四書**（論語、大学、中庸、孟子）、**五経**（易経、書経、詩経、礼記、春秋）により、父系な長幼礼節**思想**は、中国、朝鮮、近代日本に至るまで大きな社会的影響を及ぼしてきました。江戸時代の「**士農工商**」も、儒教の四民をなぞっています。

岩田明氏の説（『消えたシュメール王朝と古代日本の謎』）によれば、殷王朝が周の武王によって滅ぼされた BC1,024 年、武王は殷の「**箕氏**」に宰相就任を要請しますが断られます。代わりに朝鮮統治の要請を受け、**箕氏**は一族を引き連れて、BC973 年、中国の**連雲港**から東シナ海を船で渡り、朝鮮半島の**仁川**をめざしたのではないかと推考されています。

朝鮮語の「**仁川**＝インチョン」は、「**殷の川**」を意味するそうで、これが推考の根拠とされます。**仁川**から**平壌**へかかる一帯が、初期の**朝鮮王国**を形成していったといわれます。

箕氏の一団は、中国における高度な青銅器文明や神農神話、亀甲文字文化を携えて朝鮮へと渡りますが、その流れの先は対馬を経て北九州から「出雲（豊葦原の瑞穂の国）」へと至ります。この流れこそが、「出雲族」ではないかと、岩田氏は推察しています。

古事記の神話は、高天原から天降った「天津神（天照大御神）」と、地に現われた「国津神（大国主神）」があり、前者の社は「伊勢神宮」、後者の社は「出雲大社」として、互いに争ったり結びついたり、国を譲ったりする物語です。

天照大御神は伊邪那岐神と伊邪那美神の子。天照の弟が、素戔嗚命。素戔嗚の孫が大国主神となります。したがって、豊葦原の瑞穂の国＝出雲、へたどり着いた出雲族の始祖神は素戔嗚命となりますが、「素戔嗚＝神農」説からは、中国「箕氏」の末裔が 朝鮮～対馬～北九州を経てもたらせたことになります。

日本の神話は、シュメールの神話に似ており、参考資料に付けた「古代＝天皇系図・1」に記した、「シュメールの神々と日本の神」とを、一部対照しています。

『正統　竹内文書の謎』によると、神道の神々が先に日本にいて、その神々がシュメールへと出掛け、ふたたび日本へ戻ってくる、という筋書きですが、もはや誰にも証明できないからこそ「神話」となっているのでしょう。

しかし古代、民族移動の果てに日本で習合して実った「日本文明」こそが、「現世人類の英知」ではないか、と私は考えるのです。

英知の最初の成果は聖徳太子の「十七条憲法」であり、第二の成果が太平洋戦争敗戦後の「日本国憲法」であると、理解するのが合理的です。

二・ 太平洋戦争はワンワールド勢力の終着点

BC5,500 年頃、チベットの北、崑崙山脈の麓に住んでいた崑崙族は、パミール高原を越えて中東「ウル」の地へと移動し、ウバイド文明を興します。米作をおこなっていたことから「閣蔑族」とも呼ばれます。隣接する「ウルク」の地に住むシュメール人と混じり合い、BC3,800 年頃より「閣蔑族」は、ウバイド文明～シュメール文明を離れて世界へと離散、展開を始めます。そして「シュメール・コスモポリタン」となり、東西に分かれて世界へと拡散していきます。

東側への展開は、ワタツミ（海神、綿津見）としたスメル系閣蔑海人族となり、BC2,000～1,400 年の頃に日本へ到達し、縄文人となります。インド亜大陸南端から海人サカイ族の援けを得て日本に到達した一族は「タチバナ」を名乗り、賜姓＝橘氏になります。支援したサカイ族は「ヘイ」を名乗り、日本に住み着いて賜姓＝平氏となりました。

他方、シュメールの地を離れた古代イスラエル人は BC1,000 年、ダビデ王により「イスラエル王国」を樹立します。しかし北イスラエル（多神教）と南イスラエル（一神教）分裂を経て、BC722 年、アッシリアの侵攻により北イスラエルは滅亡します。そして北イスラエルの十支族（多神教）は、世界へと離散します。これが有名な、「失われた十支族」です。

失われた十支族の一部は海路を辿って日本に渡来し、「アマベ＝海部氏」、「モノベ＝物部氏」となります。また別な一部は、陸路シルクロードを経て中国「秦氏」となります。その後「秦氏」一族の「徐福」は秦の始皇帝の命を受け、BC219 年に九州佐賀地方に渡来します。徐福は老若男女五千人と百工（技術者）を従え、日本文明に大きな影響を及ぼしながら、富士山麓まで到達。そのほかのルートでは、中国～朝鮮を経て、「出雲族」や「安曇族」となり日本へ渡来し、日本文明・文化を振興します。

これらの古代神話は、戦後の占領政策と社会変化によってかき消されていますが、昨今では開示が進み、上田家伝承の「アヤタチ」や、「欠史八代天皇」実在資料等々が公表され、今の時代でこそ歴史を見つめ直すべき時節到来です。

近代になり、日本の種子島にポルトガル人が漂着し、鉄砲（種子島）を伝えたのは、1,543 年となります。少し遅れ、1,549 年にはフランシスコ・ザビエル（スペイン）が鹿児島に上陸し、キリスト教（イエズス会＝カトリック）を布教します。人皇一〇五代＝後奈良天皇の時代にあり、キリスト教宣教師は白人侵略の先駆的存在とされます。

鉄砲（火縄銃）は、八坂金平により模倣製造され、時の戦国武将、織田信長や豊臣秀吉らの戦法を大きく変えます。それまでの刀による対面式二次元（平面）戦闘は、飛び道具と呼ばれた銃弾が飛び交う空間伝搬式三次元（立体空間）戦闘に代わります。目に見える平面至近戦闘から、目に見えにくい立体空間戦闘へと戦法が変わり、敵対距離と領域は飛躍的に拡大されます。

豊臣（西軍）と徳川（東軍）が、日本統一の覇権を競った「関ヶ原の戦」は、一説によると西欧白人勢力の代理戦争ともいわれます。東軍＝徳川家康軍には「イギリス東インド会社」が加担し、西軍＝石田光成軍には「イエズス会とスペイン、ポルトガル」が加担した、という説です。

その真偽はともかくとして、「イギリス東インド会社」は、イングランド銀行を母体とした世界初の株式会社で、宗教色よりも交易を主体とした「ワンワールド勢力」といえます。「イエズス会」は、キリスト教カトリック教会の男子修道会。キリスト教は宗派においての対立が絶えず、一神教内部での権力闘争は、宗教・宗派戦争へとエスカレートします。カトリックとプロテスタントの対立は、その好例といえます。それよりも古く、1,096 年から始まる「十字軍遠征」は、

聖地＝エルサレム奪還を名目としますが、第九回遠征で大敗し、1,291年終結します。そしてパレスチナは、イスラム圏となります。

十字軍遠征失敗でローマ教皇の権威は墜ち、国王の力が強くなり、絶対王政（君主制）の独立国家が増えることになります。

1,600年、イギリスは「**東インド会社**」を設立し、東南アジアへ進出して植民地化を図ります。1,602年にはオランダも同様に「**東インド会社**」を設立し、東南アジアの植民地化を図ります。この植民地化の目的は、金・銀・財宝の搾取とともに、香辛料・紅茶・アヘンの搾取と、キリスト教布教といわれます。

ユーラシア大陸中央内陸部では、13世紀末から17世紀にかけて、イスラム多民族国家の**オスマントルコ帝国**が栄えます。時を同じくして、**チンギス・ハン**（カン）を創始者とする**モンゴル帝国**がオスマントルコ帝国に迫りますが、17世紀前半で潰えます。それに取って代わったのが**ロシア帝国**ですが、1,917年の**ロシア革命**によりロマノフ王朝は崩壊します。マルクス・レーニン主義という、宗教色を排除した唯物論を掲げる共産党が、「**ソ連邦**」を立ち上げます。しかしミハイル・ゴルバチョフ（1,931～）のペレストロイカ（改革）とグラスノスチ（情報公開）により、1,991年に連邦制を廃止し、ふたたび独立共和国としての**ロシア復活**となり、現在に至ります。

「**シュメール・コスモポリタン**」の**西側展開**は、フェニキアからカルタゴを経てヴェネツィアに本拠を構えます。さらにネーデルランド（オランダ）やロンドンへと拡がり、終着はニューヨークとなります。

これら中東メソポタミアの地から欧州へと展開した**コーカソイド**（アーリア系白人種）は、**一神教**（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）を生み出しました。その中で特に**キリスト教徒**（カトリック系）と、**金融ワンワールド勢力**（ユダヤ、プロテスタント系）は世界へ向けて活発に展開し、スペイン、ポルトガル、イタリアを始めとして、大航海時代の幕を開きます。

大航海時代の大きな目的は、**金**（ゴールド）の獲得と**キリスト教の布教**と言われます。

1,492年、西方に航路をとった**コロンブス**（イタリア）は、新大陸を発見し、サン・サルバドル島に到達し、インディアスに出会います。さらに1,498年には、アメリカ大陸へと到達します。

1,498年、**パスコ・ダ・ガマ**（ポルトガル）はアフリカ喜望峰を廻るインド航路を発見し、東南アジアへと進出します。

1,519年には**マゼラン**（ポルトガル）が、スペイン王の支援を受けてスペイン艦隊を率い、世界一周を試み、南アメリカ南端を通過して（マゼラン海峡）太平洋へと乗り出します。マゼランはフイリッピンの戦闘で死亡しますが、残された艦隊は1,522年に世界一周を完遂。

1,529年、スペインとポルトガルは「**サラゴ協定**」を結び、東経135度（日本）をもって世界を二分したとされます。

他方**アメリカ大陸**へは、1,620年**メイフラワー号**に乗った清教徒（ピューリタン）たちがマサチューセッツ州プリマスにたどり着きます。それ以降次々と入植を始め、先住民のインディアス（インディアン＝モンゴリアン）を征服しながら、西海岸へと到達。

1,775年、植民地軍はイギリス軍との独立戦争を戦い、1,776年に**アメリカ独立宣言**をおこないます。1,783年には**パリ条約**が締結され、**イギリス**は**アメリカ**独立を承認。

1,787年、アメリカ合衆国憲法が制定され、1,789年には初代大統領＝**ワシン**

トンが選出されます。

ヨーロッパでは 1,804 年、ナポレオンがフランス皇帝につくと、フランスとイギリスの間で戦争となります（ナポレオン戦争）。

アメリカは中立の立場をとりますが、農産物輸出に大打撃を受けたので、1,812 年イギリスに対して宣戦布告をします。先住インディアンたちはイギリスを支援したため、広大な土地を奪われてしまい、1,814 年 12 月に講話。先住インディアンたちは、次第に劣勢へと追いやられます。

やがて入植アメリカ人（白人）たちの西部開拓時代を迎え、1,890 年にスー族約 300 人虐殺事件を機にインディアンの抵抗は終わり、居留地に収容。こうして入植アメリカ人（白人）たちは、西海岸へと至り、広大な太平洋に対峙します。

1,853 年、アメリカ人＝ペリーは浦賀に来航し、アメリカ大統領親書を徳川幕府へ渡すとともに、鎖国にあった日本へ、和親・通商の開国を求めます。そして徳川幕府との間に、1,854 年＝日米和親条約、1,858 年＝日米修好通商条約を締結。しかし一説によると、日本は単なる寄港地、補給地として利用し、真の狙いは中国にあったという説もあります。

1,898 年、アメリカは、米西戦争（アメリカ VS スペイン）により、スペインの極東艦隊を撃破して太平洋の覇権を握り、ハワイ、ガアム、フィリピン、サモア諸島を奪取し、中国（清）へと迫ります。中国（清）へは、西からイギリス、ドイツ、フランスがアプローチしており、北からはロシアが迫ります。さらに 1,900 年代は日本もアプローチし、地球を周回する東西の流れが激突（第二次世界大戦）したことになります。その決着をみたのが、1,941～1,945 年＝「太平洋戦争」であり、アメリカを核としたワンワールド勢力が勝利します。

結果＝地球周回の成果は、「日本国憲法」に集約されたと理解できるのです。

「日本国憲法」は、戦勝国＝アメリカを中心とした連合国軍（ワンワールド）による、特に連合国軍最高司令官＝ダグラス・マッカーサーの押しつけ憲法であると、戦後日本の保守勢力は主張しています。

しかし前記の経過からは、「日本国憲法」の二重規範を理解するに至ります。

第一義には、人類普遍の原理と平和の理想を憲法前文にかかげます。

平和主義を憲法に書き込み、戦争放棄、戦力不保持、交戦権否認をかかげ、国際紛争を戦争で解決しないことを定めます。

第二義では、「独立国日本としたる社会規範」。

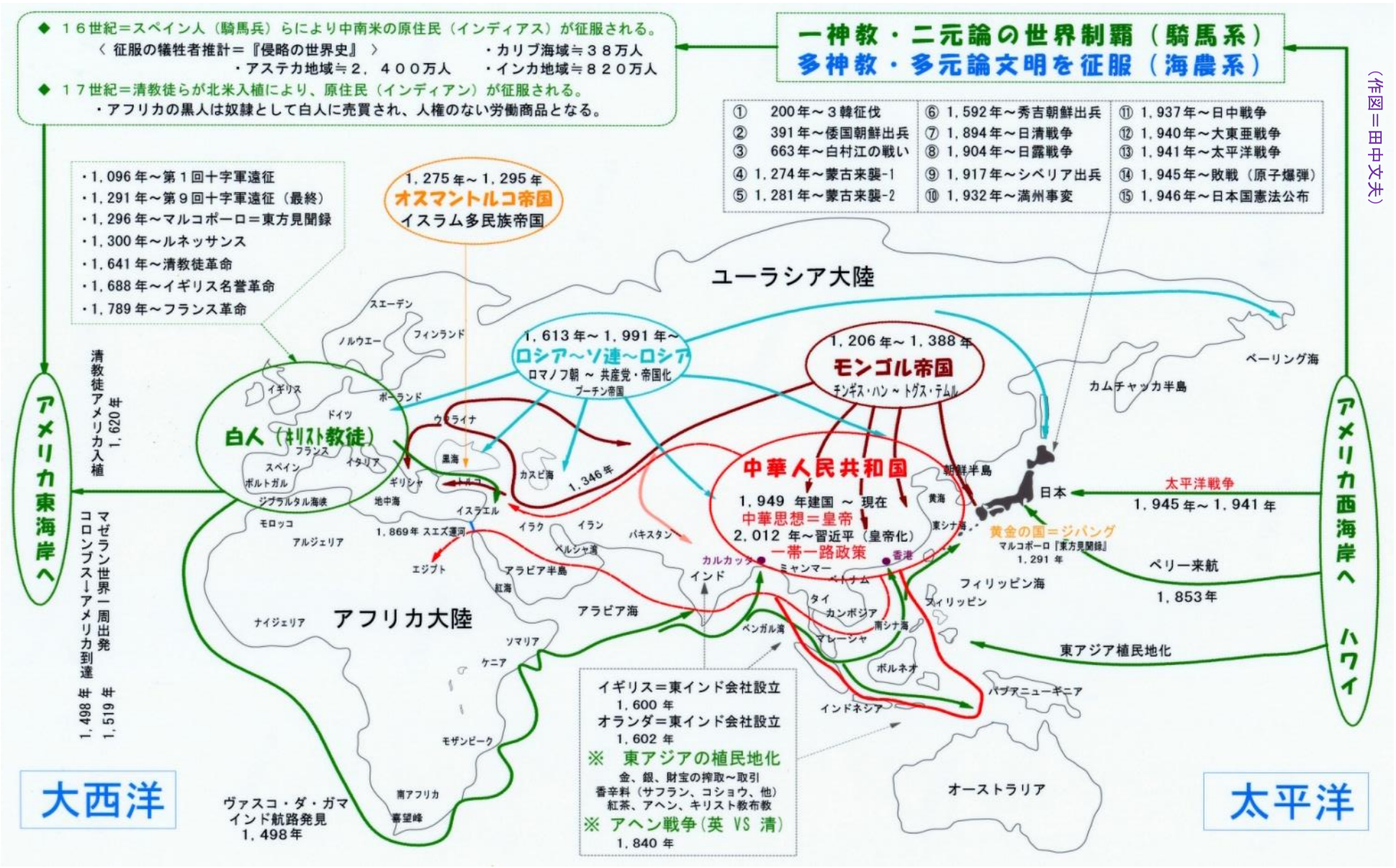
國體象徴に天皇（天皇+皇后＝家族）を位置づけ、国民の社会規範を示す。

国民主権、基本的人権の尊重、法の支配、権力分立制、これら社会規範は時代に応じ、手直し（憲法改正）はあり得るでしょう。

日本国憲法」の二重規範をとなえる論説・論調は見かけませんが、人類移動と文明変遷過程を理解してみると、歴史の時間軸は「人類ワンワールド」の時代であることが、強く認識できます。

この面から考えると、独立国たる「国境」の意味は薄れ、「国家」の概念さえも意味を失ってきます。地理・地形と生活基盤の最適化、生命代謝の継続性と生命環境の確保、そして未来をイメージしながら対処する現在の布石、等々、ホモ・サピエンスならではの新たな生き方が見えてきます。

ホモ・サピエンスの活動にとり、もはや地球は狭くなりました。


◆ １６世紀＝スペイン人（騎馬兵）らにより中南米の原住民（インディアス）が征服される。
〈 征服の犠牲者推計＝『侵略の世界史』 〉
・カリブ海域≒３８万人
・アステカ地域≒２，４００万人
・インカ地域≒８２０万人
◆ １７世紀＝清教徒らが北米入植により、原住民（インディアン）が征服される。
・アフリカの黒人は奴隷として白人に売買され、人権のない労働商品となる。
一神教・二元論の世界制覇（騎馬系）
多神教・多元論文明を征服（海農系）
① 200年～３韓征伐
② 391年～倭国朝鮮出兵
③ 663年～白村江の戦い
④ 1，274年～蒙古来襲-1
⑤ 1，281年～蒙古来襲-2
⑥ 1，592年～秀吉朝鮮出兵
⑦ 1，894年～日清戦争
⑧ 1，904年～日露戦争
⑨ 1，917年～シベリア出兵
⑩ 1，932年～満州事変
⑪ 1，937年～日中戦争
⑫ 1，940年～大東亜戦争
⑬ 1，941年～太平洋戦争
⑭ 1，945年～敗戦（原子爆弾）
⑮ 1，946年～日本国憲法公布
・1，096年～第１回十字軍遠征
・1，291年～第９回十字軍遠征（最終）
・1，296年～マルコポーロ＝東方見聞録
・1，300年～ルネッサンス
・1，641年～清教徒革命
・1，688年～イギリス名誉革命
・1，789年～フランス革命
1，275年～1，295年
オスマントルコ帝国
イスラム多民族帝国
ユーラシア大陸
1，613年～1，991年～
ロシア～ソ連～ロシア
ロマノフ朝 ～ 共産党・帝国化
プーチン帝国
1，206年～1，388年
モンゴル帝国
チンギス・ハン ～ トグス・テムル
ベーリング海
カムチャッカ半島
アメリカ東海岸へ
清教徒アメリカ入植
1，620年
マゼラン世界一周出発
コロンブス→アメリカ到達
1，498年
1，519年
白人（キリスト教徒）
スエーデン
ノルウエー
フィンランド
イギリス
ポーランド
ドイツ
フランス
スペイン
イタリア
ポルトガル
ウクライナ
黒海
ギリシャ
トルコ
カスピ海
1，346年
ジブラルタル海峡
地中海
イスラエル
モロッコ
アルジェリア
1，869年 スエズ運河
イラク
イラン
パキスタン
ペルシャ湾
エジプト
アラビア半島
紅海
アラビア海
ナイジェリア
アフリカ大陸
ソマリア
ケニア
モザンビーク
南アフリカ
喜望峰
ヴァスコ・ダ・ガマ
インド航路発見
1，498年
大西洋
中華人民共和国
1，949 年建国 ～ 現在
中華思想＝皇帝
2，012 年～習近平（皇帝化）
一帯一路政策
朝鮮半島
黄海
東シナ海
日本
太平洋戦争
1，945年～1，941年
黄金の国＝ジパング
マルコポーロ『東方見聞録』
1，291 年
ペリー来航
1，853年
カルカッタ
香港
インド
ミャンマー
ベトナム
タイ
カンボジア
ベンガル湾
マレーシア
南シナ海
フィリッピン海
フィリッピン
東アジア植民地化
ボルネオ
パプアニューギニア
インドネシア
オーストラリア
イギリス＝東インド会社設立
1，600 年
オランダ＝東インド会社設立
1，602 年
※ 東アジアの植民地化
金、銀、財宝の搾取～取引
香辛料（サフラン、コショウ、他）
紅茶、アヘン、キリスト教布教
※ アヘン戦争（英 VS 清）
1，840 年
太平洋
アメリカ西海岸へ
ハワイ

（作図＝田中文夫）

車椅子の天才物理学者＝**ホーキング博士**（1,942～2,018）は、没後出版の著書＝**『ビッグ・クエスチョン』**の中で、人類が宇宙へ進出していくことの必然性を述べています。人類が宇宙へと進出すればおのずから、地球上の人類は一つにまとまることも述べます。物理的理解からも、**「人類ワンワールド」**の必然は時間軸（歴史）の上に見えています。

しかし**政治権力者**は、**「〇〇ファースト」**と称して自ら**「境界」**を定め、**「独立」**によって境界を定め、社会を囲い込もうとしています。しかしその判断は、歴史に逆行し、宇宙の法則にも逆行する思考回路といえます。

現・アメリカ＝トランプ大統領を筆頭に、小池百合子東京都知事に至るまで**「〇〇ファースト」**を叫び、排他的自立を主張した政権運営をおこないます。そして、それを支えるデジタル社会の**「ポピュリズム化」**は多数派を獲得し、国民・市民の共感を得ています。

デジタル・テクノロジーは極めて便利で有効ですが、**「個の自由」**と**「民主主義の主権」**に大きな影響を及ぼし、現代社会を一大転換させつつあります。

半世紀前の中学校で習った**「グレシャムの法則＝悪貨は良貨を駆逐する」**ことの意味を改めて考え直してみる必要に迫られます。**悪貨＝人の欲望、良貨＝人の知性**、に置き換えてみると、**「知性というブレーキのない人の欲望はアクセルを踏み続け、人はその結果に破滅を導く」**。宇宙における**「エントロピーの法則」**から考えれば、当然な結果であることが良く分かります。

文明の進化は**アクセル**を踏み続け、**文化の知性**による**ブレーキ**を蔑視する。その結末は人類破滅に至るのですが、**進化**という人間の**麻薬**を断つのは難しい。**アメとムチ**の効用は、集団生活を維持するために不可欠要素であるからです。

このジレンマにもがくことこそが、人が生きていることの実感なのだから。

日本文明の特徴とする**「和の精神」**は、平和であることの半面、生命エネルギーのエントロピーを増大させる作用（無気力）を生みだします。現代社会の**「金太郎飴効果」**は人々の平準化を実現しますが、反面では**生命エネルギーの低下**（エントロピー増大）を招きます。エントロピーの増大は、秩序だった差異のエネルギーを失い、無秩序な乱雑さの増加からはエネルギーを生みだしません。つまりエネルギー発生は、各相において、その差異を埋めようとする作用にほかなりません。穴の無い平坦な土地には、穴を埋めようとする作用は生じません。砂の山は、砂粒が崩れて平らになることにより、位置エネルギーを失います。

「代謝」とは、有機体が生命維持のために、無機物や有機化合物を合成し、化学反応により外部から取り入れることです。代謝過程には**「異化」**と**「同化」**の作用があります。**「異化」**とは、取り入れる物質を分解することによってエネルギーを生みだす過程となり（例＝細胞呼吸）、**「同化」**とは、異化で得たエルギーを使って物質を合成する過程となります（例＝タンパク質合成）。この二つの作用により、新しきものを取り入れます。この過程で不要となった物質を廃棄し、入れ替え（代謝）を続けながら、**同一有機体（個体）**として継続される現象を、**「生命」**と呼んでいます。**「代謝」**をともなわない無機質に**「生命」**はなく、親子のように個体を別にした継承は**「種の保存」**となります。

「生命」の代謝には**エネルギー**が必要で、代謝が途絶えたとき**「生命」**は滅んで**「死」**を迎えます。この代謝を促すエネルギーの元は、原子や分子の**「相対性とそのゆらぎ」**からもたらされるのでしょうか。**エネルギー保存の法則**により、代謝エネルギーは形態を変えて原子・分子へと還り、エネルギーは保存される。

「生命」を有機物たる**「個体の代謝」**で考えるとそうなるのですが、ホーキング博士は**「代謝」**作用をとりあげて、次なる物理的定義をしています。

「**生命は、無秩序に向かおうとする傾向**（エントロピー増大のこと）**に逆らって存在し続けることのできる、複製能力を備えた秩序ある系である**」と。（『ビッグ・クエスチョン』P-84）

生命の要素は、次にあげられます。

①＝**遺伝子**をもっていること＝繁殖する指示（情報と命令）を伝える（ＤＮＡ）

②＝**代謝**＝指示を実行するためのメカニズムを備えている（細胞）

生命の要素を備えているのは**生物**（細胞）ですが、**コンピュータ・ウイルス**と**コンピュータ・プログラム**もまた、生命の要素を備えていると、ホーキング博士は指摘します。つまり**人工知能**（ＡＩ）もまた、生命機能を獲得する可能性があることの指摘です。**人工知能プログラム**により**メカニカル**な**自己組織化**と、**自己複製**（コピー）が出来上がれば、生命の定義に合致することになり、**機械**もまた生命を獲得する可能性を論じているわけなのです。

コンピュータ・ウイルスは、ソフトウエア内部における「**プログラム生命**」といえるのでしょう。メカニカルな生命体であれば**可視**できますが、プログラム生命体は**不可視**となります。**物質**であれば光を反射させて**可視**となりますが、物質でない**信号**（記号）には形象がなく、**不可視**となるからです。信号を光に変換し（エンコード）、その光で**バーチャル・リアリティ**（ＶＲ）素子へと還元（デコード）すれば、**可視化**できることにもなります。

物質による可視化を**リアル**とするか、**信号**による可視化を**バーチャル**とするか、その方式の違いから人間が定義しているだけであり、**認識**をおこなっている**人間脳の作用は**、どちらも**同じ働き**をしているといえます。

生物（人間）も**機械**（ロボット）もその**認識作用**は、**信号**によってもたらされた**効果**（出力）であると考えられます。**信号回路**が細胞型ニューロンとシナプス（ニューロネットワーク）によっておこなわれているのが**生物**（人間）であり、光（電磁波）や電気信号（電子の移動）によっておこなわれるのが**機械**（ロボット）である、と読み替えることもできます。

神をも創造できる**人間脳**と、もはや神を不要とし、自ら神の領域に到達する可能性を予感させる**人工知能**（ＡＩ）、この両者がいかに**共存**するのか・・・・、喫緊な課題です。

三・ 日本文明のスタート

「日本文明」のスタートは、**BC 660** 年、「**神武天皇即位**」からとされます。**日本書紀**における**神武天皇**は、「**神日本磐余彦天皇**＝**カム ヤマト イワレ ヒコ スメラ ノ ミコト**」となります。この呼び名は、坂井洋一氏の著書＝『**日本の始まりはシュメール**』によると、シュメール語から次のように解釈しています。

「**カム**」は、シュメールの最高神＝「**アン**」の数詞暗喩（**60**＝アッシャム）からの転訛（てんか）とされます。数詞 **60** が最高なのは、**60** 進法からなる最高数だからです。

「**ヤマト**」の「**ヤマ**」はシュメールの王＝ギルガメッシュ暗喩から、「獅子・獅子＝ウグ・ウルマフ → ウヂュ・アンマ → ウヂャンマ → **ヤマ**」となり、**ギルガメッシュ大王**を暗喩します。「**ト**」は、ＬＵ → ＤＵ → ＣＨＵ → ＴＯ（**ト**）＝ **人** となり、「**ヤマト**」＝ **ギルガメッシュ大王を崇める人たち**、となるそうです。

「**イワレ**」は、こちらもギルガメッシュ暗喩から、ＬＵ Ａ ＬＵ（獅子と獅子＝バビロニア語）→ ＹＵ Ａ ＬＥ → ＹＩ ＷＡ ＬＥ（**イワレ**）＝ 双獅子 ＝ **ギルガメッシュ大王**、とされます。

つまり「**神武天皇**」は、シュメール最高神＝天神「**アン**」と、「**ギルガメッシュ大王**」を信奉する部族出身の「**王**」、という解釈です。シュメールの神殿警護は双獅子です。**四之宮前鳥神社**も、双方獅子です（P-21 ,39 ）。「**ヤマト**」は双獅子神「**ギルガメッシュ王**」、牡牛神「**ハル**」、蛇女神「**キ**」、天神「**アン**」を信奉する「**海人系民族**」により、「**神武天皇**」を初代天皇としてまとまります。

神武天皇即位は **BC 660** 年とされます。シュメール 60 進法を転訛する、中国**干支（えと） 60** 組の **58** 番目＝**辛酉**（しんゆう）（天命が改まる年～革命が起きやすい）を用い、**推古天皇** 9 年（601 年＝辛酉）から遡ること **1,260** 年が **BC 660** 年となるのです。

※［60 年（1 元）×21 元＝1,260 年＝1 蔀、 601－1,260 ＝ **－659**、西暦元年＝1 年となるので、－659－1 ＝ **－660** 年］

このような説を、明治時代の学者＝**那珂通世**（なかみちよ）が立てますが、史実に残されていない神話時代への見解が今や通説とされ、宮内庁ホームページに公表された「**天皇系図**」にあっても、神武天皇在位は **BC 660** ～ **BC 585** 年となっています。一方で落合莞爾氏が京都皇統へ訊ねたところ、「**神武が釈迦より下るわけにはいかぬ**」との回答を得たとされます（『天皇とワン ワールド』著・落合莞爾、P-241）。釈迦の生誕日は定かでありませんが、諸説ある中で BC 624～BC 463 年までとすると、**神武天皇即位**を BC 660 年、辛酉の年として「**記紀**」に書き込まれます。

その結果史実とのズレが生じ、史実に残らぬ「**崇神天皇**」以前が「**欠史八代**」になったとされるのです。

第二代「**綏靖天皇**」～第九代「**開花天皇**」までが「**欠史八代**」とされ、歴史上確認できない「**神話**」とされます。「**欠史八代**」とは、日本史学者＝**津田左右吉**（1873～1961 年）＝早稲田大学教授が、「**記紀**」に史実が記されていないがゆえに戦前に付した呼称とされます。

しかし「**欠史八代**」の実在を唱えるのは、日本古代史研究の最高峰とされる、『**上田アヤタチ伝承**』の保有者＝**上田正昭**＝京都大学名誉教授（1927～2016 年）です。『**上田アヤタチ伝承**』は、**BC 722 年、北イスラエル王国滅亡**にともない世界へと離散した、「**失われた十支族**」が日本へも渡来していたことを示す貴重な資料であるといわれます。そのバックボーンは**昭和天皇**（第 124 代）の末弟＝**三笠宮崇仁親王**（初代オリエント学会会長）とされます。「**ウルク**」や「**ウル**」の地から発する「**ウバイド人 → シュメール人 → 古代イスラル人**（失われた十支族）」は、離散（BC 722 年）から半世紀余を経て**日本の天皇**（BC 660 年）となる物語になっても、何ら不思議でありません。しかしこの真偽は天皇家が示す以外に道

はなく、**日本深奥のタブー**として、憶測が重ねられるばかりです。さらに『**上田アヤタチ伝承**』を封印したのは、太平洋戦争戦勝国＝アメリカの占領政策によるものだ、ともされています。

昨今になり、『**天皇とワン ワールド**』（著・落合莞爾、2015年）、『**天孫皇統になりすましたユダヤ十支族**』（著・落合莞爾、2016年）など著作の中で、「**欠史八代実在論**」が展開されています。落合莞爾氏は、**神武天皇～開花天皇**にいたる日本古代史の謎は、「**欠史八代**」実在論ですべてが解ける（『天孫皇統になりすましたユダヤ十支族』著・落合莞爾、P-81～82）、としています。

ここで登場するのが「**安曇族**（あずみぞく）」と「**任那**（みまな）」です。

「**安曇族**（あずみぞく）」は、中国・春秋時代（BC770～BC403）に北九州に渡来してきた、農耕民・工人・商人たちの**海人集団**です。**春秋文明**の柱は**四書**（論語、大学、中庸、孟子）、**五経**（易経、書経、詩経、礼記、春秋）です。**四書五経**は朝鮮の規範ともなります。中国・**春秋時代**の終わりは、**秦**の「**始皇帝**」が中国統一（BC 221年）を果たしたことによります。その**始皇帝**の命により、童男童女5,000（人数は諸説あり）人と百工（諸技術者）をともなって日本（佐賀地方等）へ渡来（BC 219年）してきたのが、「**徐福**（じょふく）」となります（『徐福』著・池上正治）。

「**徐福**（じょふく）」の「**秦氏**」は、中国大陸を浸透してきた「**古代イスラエル系**」といわれます。渡来は、第七代「**孝霊天皇**（BC 290～215年）」の時代であり、やがて第八代「**孝元天皇**（BC 214～158年）」の時代を迎えます。**安曇族**や**徐福一行**の先進知識は**葛城王朝**に取り込まれ、一方で先進技術・技能をもって日本各地へと移動、定着していきます。「**安曇**」や「**秦**」のつく地名は、日本各地にみられます。

「**任那**（みまな）」は古代朝鮮半島（高句麗、百済、新羅、伽耶、**任那**）南部をいい、伽耶の一部を含んでいる地とされます。**倭国**（日本）は統治出先機関として「**任那日本府**」を置き、百済や新羅、伽耶との戦や交易をおこないます。

葛城王朝から**三輪王朝**に代わったことを、『**国譲り**（「記紀」神話）』と称します。**神武天皇**以降～第八代「**孝元天皇**(BC214～BC158)」～第九代「**開化天皇**(BC158～BC98)」へと続く「**海人系天皇**」から、第十代「**崇神天皇**(BC97～BC30)」の「**騎馬人系天皇**」へと「**政体移行**」をします。このことにより、「**政体＝騎馬人男系天皇**」、「**國體＝海人女系皇后**」として、「**政体**」と「**國體**」の役割分担となります。そして両者が**和合**した「**護國体制**」により、**大和朝廷**はできあがります。

この「**護國体制**」は今日まで脈々と続きますが、歴史伝承の伏流となり、知る人ぞ知る皇統解釈なのでしょう。

「**政体**」と「**國體**」の役割分担こそが日本の特徴を成し、特に**平成天皇**が体現された「**象徴天皇**」としての来し方は、世界に類をみない「**立憲象徴天皇制**」の在りようを示されたものと理解します。

『**國譲り**』のシナリオは、第八代「**孝元天皇**（海人系）」から始まったとされます。鉄製兵器と騎馬・馬車を用いた戦争や略奪を得意とする**男系騎馬人勢力**の侵略・浸透を察知した、農耕・通商・交易を得意とする**母系海人勢力**の裏技とされます。**ウバイド～シュメール～古代イスラエル**に発し、東欧～ユーラシア西・北・東部をめぐって日本へ到達する**騎馬人系**と、北アフリカ、ユーラシア大陸南岸沿いやシルクロードをめぐって日本へ到達した**海人系**との合流は、戦ってどちらか一方のみが勝ち残るのでなく、「**和合～融合**」により**双方生き残ることこそが、人類にとって重要な意味＝戦争放棄**の実現です。

「**和合**」は男女の必然であり、そのことを繰り返して「**子**」を残し続けることは、「**人類代謝**（親→子→孫）」による**継承の理**です。この戦略が、**葛城王朝**（開化）から**三輪王朝**（崇神）へ引き継ぐ、「**國譲り計画**」とされるのです。

計画は、第九代「**開化天皇**（海人系）」を経て、第十代「**崇神天皇**（騎馬人系）」への移譲となって実現されます。**ウバイド海人系**「**政体**」（＝海彦）から、**ウバイ**

ド騎馬人系「政体」（＝山彦）への移譲です。ウバイド騎馬人系は「天皇＝政体」に、ウバイド海人系は「皇后＝國體」となり、両者和合による「護國体制」の確立を図るのです。

「天皇＝政体」は「父親」の役目。「皇后＝國體」は「母親」の役目。「護國体制」は「家族」の存続に例えると、理解しやすくなります。平成天皇が退位の希望を述べられた際の「家族」とはこのような意味を指すのでしょう。また平成天皇の「象徴天皇」たる来し方とは、民主主義国家として「政体」は「国民の代表者」が担い、「國體」を維持する心（精神）の中心として「国民統合の象徴天皇たる天皇・皇后＝家族」一体となって国民（人類）に寄り添い、国民（人類）の幸せを祈る。これまで歴史になかった「象徴天皇へ家族＝国民へ人類」の摸索、世界史でも唯一な「立憲象徴天皇制」を体現されたと考えるのです。

第十代「崇神天皇」は、歴史上確認できる最初の天皇といわれます。それ以前の天皇は確認できないがゆえに、初代の「神武天皇」に加え、二代目から九代目までを「欠史八代天皇」とされ、神話の中に封じ込められます。しかし落合莞爾氏の著書＝『天皇と黄金ファンド(P-63～67)』によれば、落合氏が京都皇統舎人から得た情報として、氏は次の推論を図ります。

① 初　代＝神武天皇即位＝BC50 年
② 二　代＝綏靖天皇～八代＝孝元天皇までの期間＝25 年間×7＝175 年間
③ 九　代＝開化天皇即位＝AD150 年
④ 十　代＝崇神天皇即位＝AD175 年　↑　「國譲り」

さらに、「崇神天皇は二人、応神天皇は四人いた」と、京都皇統舎人からの回答を得たという記述に至りますが、下々の民は分かりません。

そういえば、宮内庁公式発表皇統経年から逆算してみると、初代＝神武天皇の在位＝75 年、二代＝38 年、三代＝38 年、四代＝33 年、五代＝82 年、六代＝101 年、七代＝75 年、八代＝56 年、九代＝60 年、十代＝67 年となり、公表天皇在位期間は、古代人の寿命を大幅に超えたものと考えざるを得ません。参考資料添付の天皇系図の三十八代＝天智天皇までにおいて、最長在位期間＝101 年（孝安天皇）、最短在位期間＝2 年（反正、顕宗、用明天皇）、一桁在位期間天皇＝15 天皇となります。

情報化時代の今、情報公開は進み、実在したとする著書出版やインターネット開示により、庶民レベルでもかなりな領域まで探索・思考できる時代にあります。公式記録の天皇在位期間には、当然ながら疑問が生じます。しかし落合莞爾氏が論じる天皇在位期間や、二世～四世天皇にまで至ると、一介の庶民にあってはもう、真偽を知る術がありません。落合氏にあっても、今は確定できないとされております。

しかし本書においては、皇統の年代確定や正確さを求めることが目的でありません。ホモ・サピエンスのアフリカ発祥から、「種」が分かれて民族移動となり、ユーラシア大陸の東端「日本で習合して平和裡な文明を築いた」流れを、アバウトに理解することにあります。それゆえに、宮内庁公表の「天皇系図とその在位期間」を用いています。

「平和裡な日本習合」こそが、次なる「國譲り計画」によりもたらせられました。その過程に紆余曲折があって現在に至るも、「戦争を放棄して共存・共生に収斂した日本文明」は、「二十一世紀人類の世界モデルである」ことの確認です。ホモ・サピエンスは今、歴史の様々な出会いから多様なハイブリッドＤＮＡ構造となっています。むやみに純血民族の自主・自立・孤立を煽り立てるのではなく、広く世界へ、人類へ、さらに宇宙へと、多様な視野へと見開くときです。

「大国主（オホクニヌシ）」ではないかとされる「孝元天皇」は、我が子をもって「國譲り計画」の実行を図ったとされます。皇后（鬱色謎命（うつしこめ））との第二皇子＝稚日本根子彦大日日尊（ワカヤマトネコホコオオヒヒノミコト）は、第九代「開花（かいか）天皇（海人系）」となり、第十代「崇神（すじん）天皇（騎馬人系）」

へバトン（政体）の渡し役を果たします。

皇后との第一皇子＝大彦命は、四道将軍の一人とされますが、仮に「八重事代主」であったなら、つじつまが合うといわれます。「任那天孫計画」により、「八重事代主」は南鮮の任那へ渡ります。その目的は、古代メソポタミアの地で東西に分かれたウバイド騎馬人系と、ウバイド海人系とを満州で合流させ、世界國體（ワン・ワールド）＝在外國體天皇（スメラ ミコト）の体制確立をめざすことだとされます（『天皇とワンワールド』落合莞爾）。ウバイド～アルタイ～モンゴル高原～満州南方から扶余を経て、任那へ達したウバイド騎馬人系の中から男系政体（天皇）候補を探し出します。そこで、ウバイド海人系天孫＝八重事代主系と和合することにより、在外國體天皇（スメラミコト）となる「任那天孫族」になります。八重事代主が誰に当たるのかはまだ解明できていないそうですが、落合莞爾氏は「八重事代主＝フトオシ（比古布都押之信命＝彦太忍信命）」とされていますが、「八重事代主＝大彦命」と推察したほうが、つじつまが合います。つまり、孝元天皇の第一皇子＝大彦命は任那へ渡り「任那天孫族」を作り上げたという理解です。第一皇子＝大彦命につながるのが、安倍氏といわれます。

皇后との第二皇子＝稚日本根子彦大日日尊は開化天皇となり、國讓りの実行者となります。

「孝元天皇」と妃（伊香色謎命）との皇子（海人系）、彦太忍信命（日本書紀、比古布都押之信命＝古事記）は、朝鮮「羅津」へ渡り、「八幡殿」を名乗ります。彦太忍信命は、扶余系濊狛族から騎馬術を学び、八幡騎兵隊を養成。やがて濊狛族の中にいたウバイド騎馬系天孫を父系（政体）とし、ウバイド海人系王統を母系（國體）として和合・融合した、「八幡天孫族」となります。「八幡天孫族」はケシや大麻の栽培、満州の砂金などで蓄財し、「八幡ファンド」を形成して黄金フアンドの利用権を確立します。「八」という数は、シュメール～ユダヤの聖数であり、実力 NO-1 を意味する権力者を示します。また彦太忍信命の子孫は屋主忍雄命 → 屋主武雄心命→ 第一世・竹内宿禰（崇神天皇の國體参謀総長）～蘇我氏へと続きます。第一世・竹内宿禰は、「和」を基礎とする「竹内神道」をもって、「崇神天皇」の國體参謀総長になったとされます。現世の竹内睦泰氏は、第七十三世竹内宿禰と公表されました（『正統 竹内文書の謎』著・竹内睦泰、2013 年）。

『正統 竹内文書の謎』では、日本列島を「黄金の龍」と位置づけ、「内八州外八州観」を述べています。「日本は世界のひな型である」、という世界観です。本州＝ユーラシア大陸、九州＝アフリカ大陸、四国＝オセアニア大陸、北海道＝北アメリカ大陸、等々です。大陸移動によって分かれましたが、元々大陸は一つであり、世界同祖、万教帰一という「古神道モデル」となり、「世界の神々は日本ルーツだ」と。ここまで名言されるとマユツバな話と感じ、私達には信じがたくなります。しかし逆に、「神々の日本習合」となれば、現実感と歴史感は一体化してきます。ここでいう神々とは、人間のことを指すのだそうです（同書）。

さらに『正統 竹内文書の謎』では、「ユダヤ・フリーメーソン」にも触れています（P-85）。現在、フリーメーソンを支配しているのは、ロスチャイチャイルド家とロックフェラー家であり、最高機関はビルダーバーク・ソサエテ（陰のサミット）で、白人のみの組織とされます。有色人種が参加できるのは、アジア・ソサエティであり、第十七回会議には竹内睦泰氏とともに、安部晋三総理（当時）、麻生太郎外務大臣（当時）らも参加されたと記され、一緒に撮影した写真も載せています。同会議は事実上のフリーメーソン会議であり、ユダヤ人からは「日本人はユダヤ人だ」と認められ、日ユ同祖論と世界同祖論について同書は記しています。フリーメーソン（Freemason）は 16 世紀後半～17 世紀初頭にかけて結成された友愛結社（石工組合）で、その秘密性から謎めいていましたが、近年は出版物やインターネット等で公表されてきました。

フリーメーソンリー（Freemasonry）は当初「石工組合」が発足でしたが、やがて世界の指導者層に浸透し、自由、平等、友愛、寛容、人道が基本理念とされます。フランス革命を指導した「啓蒙思想（自由・平等・博愛）」団体はそのシンボルとして、ピラミッドの上に目を配置した「プロビデンスの目」を用いましたが、今ではアメリカの１＄紙幣に描かれています。ピラミッドの△、頂点を逆にして▽を重ねると「ダビデの星」となり、現イスラエルの国旗に用いられ、伊勢神宮の石灯篭にも刻まれています。

【１＄紙幣のマーク】

『正統 竹内文書の謎』では「石切彦」が登場し、大阪平野の東、生駒山麓にある「石切剣箭神社（いしきりつるぎや）」の祭神とされます。「石切彦」は「石工」を反映したフリーメーソンだと、竹内睦泰氏は書いています（同書Ｐ-84）。

一方、落合莞爾氏は、「ワンワールドは広義のフリーメーソンですが」と、『天皇とワンワールド』(P-157)に書き、多数の著名人をあげています。

社会学者＝橋爪大三郎氏は『世界は四大宗教でできている』の中で、「どの文明も正典（基準になるテキスト）を備えているが、日本には正典がない（同書、P-24）」、としています。しかし前記の、世界同祖、万教帰一という「古神道モデル」が「日本文明の礎」であると仮定するならば、「古神道＝正典」と読み替えることができます。しかし現代、口伝による「古神道」をそっくりそのまま「正典」とするわけにはいきません。

現代における日本文明の正典は、「日本国憲法」に反映されていると考えるのが妥当です。歴史上いかなる国が努力しても成し得なかった **戦争の放棄** こそが人類の理想であり、日本はすでに七十余年の経験をもった事実です。多様と異質を認め合い、和合・融合により共存を図ってきた日本文明が、二十一世紀世界の礎になり得ることの再認識です。

ホモ・サピエンスの「知恵と文化」が習合した日本文明を、改めて確認・再認識し、世界へ発信する時節到来といえます。

日本では古代から「政体（せいたい）」と「國體（こくたい）」という異なった勢力があり、天皇系図では「政体天皇」だけを記録に残し、「國體天皇」は限られた少数しか知らない、とされてきました。

平安中期の院政による「上皇」が「國體事項」を担っていたといい、政体首脳でも、そのことを分かっているのはごく少数といわれます。平成天皇も2019年４月30日をもって退位となり、退位後の位階は「上皇」と「上皇后」となる特例法が閣議決定（安倍内閣）されました。それに先立つ一昨年八月八日、テレビ発表された天皇のお言葉の中に、「務め」というお言葉が七回、「家族が」というお言葉が一回あったと落合莞爾氏は書いています（『天孫皇統になりすましたユダヤ十支族』P-28）。さらに、政体憲法が定める「国事行為」のほかに、「國體」上の「務め」があり、これを実行しているのが「家族」であることを、落合莞爾氏は指摘（同書P-28）します。

第二次世界大戦（太平洋戦争）敗戦後、天皇は「象徴天皇」と位置づけられて「政体権力」から切り離された「オオヤケの代（落合莞爾氏造語）」となります。「オオヤケの代」とは「公儀政体」、つまり「政体・國體天皇」に代わる、新たな「天皇」の位置づけなのでしょうか。「象徴天皇＝公儀政体」という、落合莞爾氏流「天皇機関説」に思えてきます。

「天皇家」の中にあっても神道だけでなく、仏教への傾倒者や、昭和天皇はキリスト教に大いなる関心をもっておられた、という新聞報道記事（2018.05.31朝日新聞朝刊）があります。ウバイド～シュメール～古代イスラエルへとルーツをたどれば、本来多神教の「八百万な神」なのだから、皇室にあってそれらへの関心事は必然といえましょう。

聖徳太子（574～622 年）は「神仏習合」による國体護持と、「十七条憲法」による律令政体へと導きます。「神仏習合（しんぶつしゅうごう）」による「日本教」の確立は、次の❶～❸の習合から成ります。

「摩尼教（まにきょう）」の二元的対立＝生・死、善・悪、光・闇、物質・精神、からの救済形式。「大乗仏教」の人間が修行により仏となる行動規範。「古来神道」の自然をも神とする多神教信仰の心根。それらを併せて「國体護持」へと導きます。

「十七条憲法」は世界最初の「立憲主義」と称されるよう、その第一に「和を以て貴しと為し、・・・」として、「小異をもって、大同に和する」日本精神の基底を示します。権力や暴力によって「小異」を切り捨てる、二元論的対立思考ではありません。「絶対勝者を生まない＝三すくみ体制」＝ジャンケンの構造、なのです。この「三すくみ体制」こそ、立法、行政、司法に分けて三権分立とする、近代民主主義に先駆けた聖徳太子の着想と考えられます。

❶ 神　道 → 道の根本 → 信仰 → 精神（カミへの信仰 → 神＝八百万の神とする自然崇拝）

❷ 儒　教 → 道の枝葉 → 道徳 → 形式（天命 → 聖人＝皇帝 → 忠＝君子＞官僚＞→ 孝＝一族、親族、親子）

❸ 仏　教 → 道の華実 → 精進 → 行動（凡夫→修行→悟り→成仏）

明治維新以降の「政体」が、「神道」をあたかも一神教のごとくに利用して、「カミ＝唯一絶対神＝現人神＝天皇」と国民意識に刷り込み、為政で強要した終焉が太平洋戦争の敗戦であった、と考えることができます。

敗戦とともに「戦争政体」は解体させられ、「昭和天皇でさえ、神道＝一神教、とした政体の呪縛から開放された」、と推察できます。しかる後、新憲法制定の下で「国民統合の象徴」と位置づけられた「象徴天皇」は、時の権力が織り成す「政体」に惑わされることがない「公儀政体＝象徴天皇・皇后＝家族＝国体」となります。

とくに「平成天皇・皇后」は歴史を良く理解され、国民安寧への祈り、先の大戦で被害を及ぼした国内外人々への巡幸行脚、天災に見舞われた国民への慰問、各国元首や王族たちとの交流、等々、「象徴天皇 → 国民 → 人類」へと、国境を超えた人類の心の拠り所となれるような振舞いを続けられました。

この「平成天皇・皇后」30 年の「お務め」は、「象徴天皇」としての来し方を世間に知らしめるのですが、国民は敬愛と親しみをもって受け入れました。

「平成のお務め」が終わり、新たなる「令和天皇のお務め」が始まりましたが、人類文明の「象徴」となれれば、日本文明は国境を超えて世界（人類）を導ける灯火（ともしび）となります。ちなみに「登山」がお好きな令和天皇は、山頂から俯瞰の目で、「水」が天と地と海を循環するように、自然の摂理を理解されているのでしょう。このことからだけでも、令和天皇が理知的な騎馬系男子 DNA を引き継がれておられるだろう様子が類推できます。

一方、令和天皇を支える雅子皇后の「馬アレルギー」からは、海人系の資質を思い起こさせます。外交官出身の理知的さに加え、隠し様がない「馬アレルギー」という DNA 資質からは、やはり・・・海人族の系譜と思われます。

現皇室の祖、第十代・崇神天皇、第十五代・応神天皇が大陸騎馬系であることは、諸書が論じています。第十代崇神天皇の御代における「國譲り」において、初代・神武天皇の海人系は母性としての「皇后＝國體」となり、大陸騎馬系は父性としての「天皇＝政体」となり、併せて「天皇家族」と為す「国体」が確立されたことは、すでに記しました。

このことに鑑み、令和天皇＝騎馬系、令和皇后＝海人系の組合せが、まさに紀元前後の国家形成時節の「和合」を彷彿させる事象として、「歴史は繰り返さ

れる」ことに改めて思い至ります。「和合」こそが、日本の日本たる手法であり、今、二十一世紀人類共存のモデルであることを、世界に知らしめたい。

立憲民主主義は「権力政体」を、選挙によって国民が選択します。これが世界の趨勢で、主権者の「多数決」により政策は決定されます。これまで主権者の行動は表に現われて、明確に理解できました。しかし近年の電子情報化社会にあって主権者は、情報の裏に隠されて行動が見えなくなりました。現わされた情報そのものは、情報の自己組織化によって多数（ビッグデータ）を構築し、その多数が権力と化すようになります。かつては見えない権力を「空気＝ムード」と称し、大衆が「空気＝ムード」に左右される様を観察してきました。山本七平氏の著書＝『「空気」の研究』（文芸春秋 1977年）は、もはや古典となります。

ムードを煽る操作者を「アジテータ」と呼び、デモや騒動をたきつける補助エンジン機能を果たしていました。しかし現代の電子情報化社会の中で「情報操作者」は、背後で、あるいは遠方で、さらにはプログラミングによって、必ずしも現場で直接煽動する必要がありません。情報操作者の実体はつかみにくくなり、世相の「空気」という、漠然とした雰囲気＝空気は、無自覚な権力者（人）となります。その面において、「象徴天皇という機能を利用しようとする空気が公儀政体」となり、権力の代執行をする危険をはらんでいるといえるかも知れません。

民主主義の「多数決」による決定は、とかく「少数者の切り捨て」を無意識の中に秘めてしまいます。本来、聖徳太子による「十七条憲法」でみるように、「多数決の意味」は、過半数以上の意向をもって物事が決まるので、意向に沿わない「少数者の立場を尊重しなければならない」、という考え方が基礎にあります。しかし一神教や無神論科学思考等による二元的思考からは、「勝てば官軍、負ければ賊軍」、「正 ／ 反」、「勝 ／ 負」となり、どちらでもない曖昧な領域は排除されてしまいます。それらの経過において、民主主義はポピュリズム（大衆迎合主義）に陥りがちです。

しかし最も大切な領域は、「グレーゾーン」と呼ばれる決めがたい自然の多様な存在領域です。自然の多様な存在は、一面の切り口から見れば優劣、強弱、大小、明暗、さまざまに差別化され、階層をもって見ることができます。しかし別な視点から見れば、前者の関係が逆転もします。

それらを総合する複素（数）的視野とは、古代人からイマジネイションされていた「カミの視点」と言い換えることができそうです。しかし現代に生きる私たちにとって、「カミ（神）を概念化」するのでなく、「宇宙の真理への目覚め」と理解した方が良いのでしょう。特に山を登りながら頂の彼方に見透かす虚空や、山頂から俯瞰する地球の自然の美しさは、カミに代わる人の無窮な意識の不可思議さを感じることができます。

人間はいかに発祥し、どこへ向かって生きているのか・・・、人間が宇宙を探索する、部分が全体を把握しようとするパラドックスの中にいるので、明確な答えは出せません。いつの世にあっても重要なのは、生活環境（國體）の充実と、ホモ・サピエンスたるリーダー（政体）の資質です。

［十七条憲法］　最初の部分　～

一に曰く、和（ヤワラギ）を以て貴しと為し、忤（サカ）ふること無きを宗とせよ。人は皆党（タムラ）有り、また達（サト）れる者は少なし、或いは君父（クンブ）に順（シタガワ）ず、乍（マタ）隣里（リンリ）に違う。然れども、上（カミ）和（ヤワラ）ぎ、下（シモ）睦（ムツ）びて、事を論（アゲツラ）うに諧（カナウ）うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん。

第三章　日本文明から世界へ発信

一・ 現代の世界文明

現代の世界四大文明圏の人口は、世界人口約７４億人に対して次のような概要となります。（『世界は四大文明でできている』著・橋爪大三郎）

❶ **キリスト教文明圏**　２５億人（33.8％）
❷ **イスラム教文明圏**　１５億人（20.2％）
❸ **ヒンドゥー教文明圏**　１０億人（13.5％）
❹ **儒教文明圏**　１３億人（17.6％）

各文明圏を細かく展開すれば、膨大なものになってしまいますが、ここではごくごく短く、簡単な把握を試みます。

現代文明の発祥は、中東ウルク地方の「**ウバイド文明**」といわれます。**BC 5,500 年頃**、ウルク地方で「**ウバイド人**」による「**ウバイド文明**」が勃興します。漁労民、定着農耕民、牧畜民と棲み分けていましたが、BC 3,500 年頃までに、一部は「**ウバイド海人**」となって海岸線に沿い、東西へと離散・展開していきます。また一部は「**ウバイド騎馬人**」となってユーラシア大陸を北東、北西へと離散・展開していきます。また定着農耕民たちは、次なる「**シュメール文明**」へと引き継がれます。

BC 3,500 年 ～ BC 3,000 年とされる「**シュメール文明**」は、**都市生活**を築き、**神話**とともに**楔形文字**で記録を残し、**文字文化**を発展させます。その中の一つ「**ギルガメッシュ叙事詩**」は、世界の神話の原典となり、やがてそれらの呼称は「**メソポタミア文明**」と呼ばれます。

メソポタミアの一都市「**ウル**」の地に、セム系遊牧民の族長「**テラ**」が来たのは、BC 2,000 年頃とされます。その地で「**テラ**」の次男として生まれたのが「**アブラハム**」、後にユダヤ教、キリスト教、イスラム教を信仰する民の始祖として、「**信仰の父**」と呼ばれます。「**アブラハム**」は「**ウル**」の地で、血縁の「**サライ**」と結婚します。その長男は「**イスマエル**」、後にアラブ十二支族の祖となり、この系統から**マホメッド**が誕生し、「**イスラム教**」の始祖となります。次男は「**イサク**」、後にユダヤの祖（族長）となり、この系統から「**ユダヤ教**」が生まれ、後に「**イエス生誕**」により、「**キリスト教**」が分派されます。

「**アブラハム**」を始祖とする一族は、約束の地「**カナン**（パレスチナ）」に移住します。さらにエジプトへ移住して奴隷となりますが、「**モーゼ**」に引き連れられてエジプトを脱出。ふたたび「**カナン**」の地に戻り、「**イスラエル王国**」を建国します。現代の「**イスラエル**」とは異なるために、「**古代イスラエル**」と呼びます。「**古代イスラエル**」は、南の「**ユダ王国**」と、北の「**イスラエル王国**」に分裂します。BC 772 年、アッシリアにより、「**イスラエル王国**」が滅ぼされます。「**イスラエル王国**」は十支族から成りますが、民はアッシリアの虜囚となります。十支族の民は、その後世界各地へと離散したために、「**失われた十支族**」と呼ばれ、離散の流れは、「**ウバイド海人**」や「**ウバイド騎馬人**」の拡散ルートと重なります。勤勉で知性が高い「**古代イスラエル人**」は、十支族の離散によって、**世界文明・文化の展開**にその一翼を担ったと、種々文献にあります。

「**バビロン**」の地、古代イスラエルから新バビロニアとなった「**イシュタル門**」には、王家の紋章、「**十六菊花紋**」が刻まれています（『十六菊花紋の謎』著・岩田明）。類似な紋章は、日本の天皇家の紋章でもあり、十支族の離散と関係するのか、想像が湧き上がります。それより一葉少ない「**十五菊花紋**」が、私の生誕地、平塚市四之宮にある「**前鳥神社**」の紋章であることは、前に述べました。この関係性は、私のルーツ探しに連なる拠り所でもあります。

しかしながら以上の記述は、ユダヤ教「**聖書**」、キリスト教「**旧約聖書**」にもとづく従来の一般的理解であり、昨今の多様な民族移動研究者たちからは、異なった見解も成されています。

「**アブラハム**」を始祖とする「**古代イスラエル文明**」からは、「**ユダヤ教**」が生まれ、やがて「**キリスト教**」、「**イスラム教**」という「**一神教宗教**」が分岐して世界へ拡がり、二千年を経た現代世界文明の中心となっています。

一神教、特に「**キリスト教**」は神と人間一人ひとりが、「**信仰**」という契約によって神の僕になる、とされます。原罪を負った人間の終末において、「**最後の審判**」で神から救いを与えられるか、破滅へと落とされるか、個の「**信仰**」によって決められるとされます。この神と人間との契約関係は、個人一人ひとりが神との間でおこなわれるため、ここから「**個人主義**」が発生します。種族、部族、民族等の集団にあっても、それを束ねる信仰が「**キリスト教**」であれば、思想としての中心は「**個人主義**」で落ち着きます。

現代人類 74 億人に占めるキリスト教文明圏人口 25 億人は最大勢力であり、次いでイスラム教文明圏人口 15 億人が続きます。それゆえに、「**個人主義**」に基づく「**科学的合理主義**」は現代文明・文化圏での最大勢力となっています。

「**イスラム教文明**」は「**キリスト教文明**」と兄弟関係にありながら、発祥の地、聖地を巡り、中世から今もって争っています。「**イスラム教**」は予言者、「**ムハンマド**（モハメッド）」の啓示から成る「**クルアーン**（コーラン）」により、神と人間が「**信仰**」を介して契約を結びますが、イスラム法典、**クルアーン**（最高法源）と**スンナ**（第二法源）により、細かく内容が定められます。「**イスラム教**」は、「**キリスト教プロテスタント派**」のような自由度がなく、神の目線に等しいような人間の客観的思考目線が育ちません。従って合理的精神による近代科学の発展に遅れることとなりますが、「**文明・文化の発展**」という「**成長・進化一辺倒主義**」に対し、「**信仰**」の果たす**ブレーキ役**となることができます。

一方で「**キリスト教文明圏**」に対抗しようとしているのが、「**習近平**」総書記（国家主席）率いる「**中国**」です。「**中華思想**」は儒教にその基盤をおき、「**神**」を設定しない**無神論**ですから、「**宗教**」ではなく、「**思想**」といえます。

「**中華思想**」では「**神**」に代わる「**天**」を定め、「**天命**」を代理するのが「**聖人＝皇帝**」となります。現代中国は、「**習近平**」が**皇帝**に当たり、他国の大統領や首相と立ち位置が異なります。「**聖人＝皇帝**」に「**忠**」を尽くして仕えるのが「**君子**（官僚統治機構）」、現代の「**中国共産党**」に当たります。人民は「**家族**」や「**親族**」、「**一族**」の「**族**」で掌握され、「**族**」の中で「**孝**」を尽くします。つまり、**天命**を受けた**皇帝**（習近平）が、**官僚組織**（共産党）により、**多民族・多人**

種な中国人民を統治するのです。

「儒教文明」は「キリスト教文明」のような、個人主義に基づく科学的合理思考による民主主義とは、全く異なる思想体系とされます。習近平が提唱する「一帯一路構想」を、二千年にわたる歴代王朝の中華思想に則って理解すれば、「一帯一路」領域を一つの「帝国」とみなせます。天命を受けた「習近平＝皇帝」が、「中国共産党（君子）」をもって「多民族を統治する」、という理解です。この構図は、儒教にもとづく歴代王朝路線への回帰に似た、「中華民族覇権主義」が明らかに見てとれます。

儒教文明から遺脱し始めたのは、一時日本に亡命し、日本人との関係も深く、日本女性を妻にした「孫文（1866～1925）」からです。「孫文」は「三民主義（民族主義、民権主義、民生主義）」を唱えます。これは、唯物論を基軸とする「マルクス主義（科学的社会主義）」の影響を受け、後に中国共産党の基礎となります。

第二次世界大戦後の中国内戦を経、中国共産党創設者の一人、「毛沢東（1893～1976）」は独裁権力を強化し、「文化大革命（1966～1976）」により、資本主義文化を弾劾します。しかしプロレリア（無産階級）文化大革命は、その手段とともに、世界の資本主義経済の繁栄と逆向きになり、権力闘争、統制、貧困、を激化させます。

毛沢東（第一世代）亡き後、「鄧小平（1904～1997）」は「改革開放路線」をかかげ、社会主義経済の下に市場経済導入を図ります。鄧小平（第二世代）没後、江沢民（第三世代）～胡錦濤（第四世代）～習近平（第五世代）と、中国共産党主席最高指導者は変わりますが、この間共産党は集団指導体制として、儒教思想は薄まります。しかし一昨年（2018年）、共産党大会で主席再任を果たした習近平は、自身の名を党綱領に入れた「習思想」へと格上げしました。

軍事力を強化し、一帯一路思想をかかげ、共産党統治体制の強化を図った習近平主席は、歴代中国王朝体制への回帰にも似た、儒教文明の覇権展開を図り始めた、と理解できます。日本において、聖徳太子が十七条憲法を定めた国造りのころ、儒教は法や制度への基礎的思想を与えていますが、戦後日本の民主化は、これまでの世界史にない新たなワン・ワールド体制を秘めています。

その考察は「日本文明、日本文化」として、新たな論考・整理を要するところです。

「一帯一路構想」を中華思想からではなく、単なる経済圏の設定と仮定するならば、人や物流、情報（価値交換）が交流するインフラゾーンとして、古代シルクロードのような役割を果たすこともできるのでしょう。

そもそも「経済」とは、中国古典にある「経世済民思想」を簡略化させた略語です。「世を経（おさ）め、民を済（すく）う」という意味で、「さまざまな価値を等価交換することにより（経済）、世のバランスを図り（政治）、その波及結果によって民の幸福に寄与する（思想）」、ことであると理解できます。

現代資本主義における経済の意味は、「さまざまな交換（経済）によって資本の利益を増大させ、その利益を資本に還元する」こととなり、本来の「経世済民」とは異なります。現代の資本主義経済は寡占によって不等価交換条件を創り出し、強者が弱者を搾取する弱肉強食取引となり、「経世済民」ではありません。

今の中国は社会主義市場経済体制であり、資本主義経済と社会主義経済との混合経済。その国内総生産量（GDP）は世界第二位ですが、国家資本投資にあずかる部分と、あずからない部分とでは大きな格差を生じ、その判断を官僚機構（君子）が握っているので、汚職が絶えません。習近平総書記（国家主席）は汚職摘発を徹底し、統治権力を強固にし、自ら皇帝の地位を高めつつあります。

多民族国家・中国における中核勢力は**中華民族**であり、多くの少数民族は国家資本投資の配分からこぼれ、古来の生活を継続しています。中国国家資本の投資は、帝国としての世界戦略に大きく関わり、現在では、「**経世＝手段**」が優越し、「**済民＝目的**」はおろそかとなる、「**経済**」の本末転倒状態が透けて見えます。

「**ヒンドゥー教文明**」は多神教。BC 2,600 年頃、「**アーリア人**」がインドに侵入し、「**インダス文明**」を興します。アーリア人の宗教は「**バラモン教**」ですが、先住民族（ドラヴィダ人）との混血が進み、先住民族が信仰する神々がバラモン教に入り込み、やがて「**ヒンドゥー教**」と呼ばれるようになります。

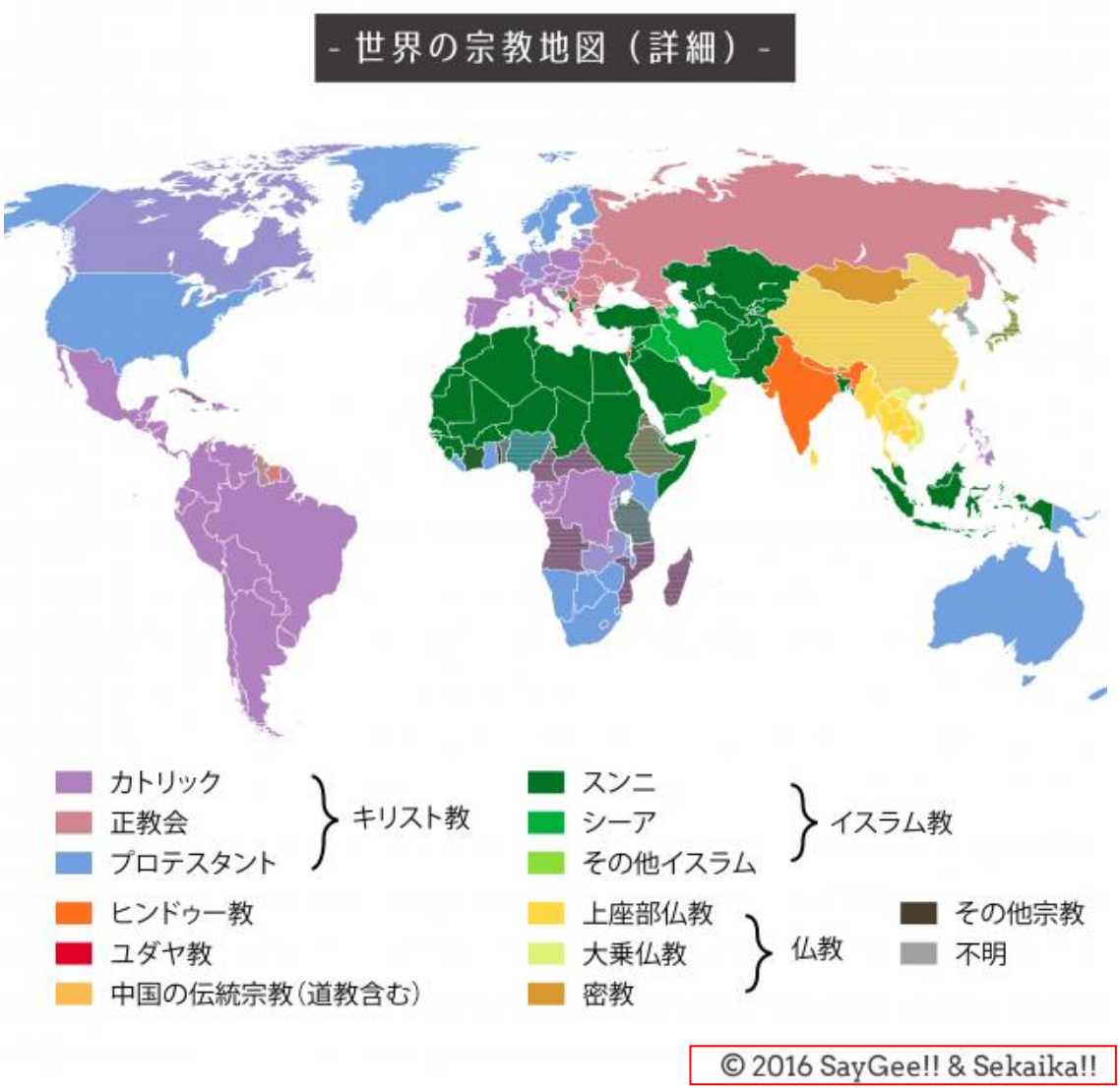
イラン北部から発祥した「**アーリア人**」は、インドへの侵入とともに西へ西へと移動し、ギリシャ、ローマ、ゲルマンへと拡がり、「**インド＝ヨーロッパ語族**」といわれる文化圏をつくります。アーリア人の支配階級は「**カースト制**」を導入し、①**バラモン**（宗教聖職者）→ ②**クシャトリヤ**（政治・軍事）→ ③**ヴァイジャ**（ビジネス全般）→ ④**シュードラ**（それ以外）という職業集団によるコミュニティを形成します。同じカースト同士で結婚するのでカースト内再生産が繰り返され、カーストは持続されます。異なったカースト間の結婚等、ルールに反すると**アウト・カースト**（ダリット）にされ、寺院に立ち入ることもできず、みじめな生活を強いられるようです。現代でも、インドの農村部ではカースト制度が残されているといわれますが、インドの現代法では違法。しかしグローバル化の現代社会にあって、**アウト・カースト**の人々は無視できないほどに膨れ上がっているそうです。

カースト制度は**閉鎖系社会**における一つの循環持続機構（輪廻）ですが、現代の情報化社会とグローバリズムは開放系社会を展開しています。**開放系社会**の中で適合する社会制度は、インターネット・ウエブのような、独立した単位がフラットに接続し合える「**なめらかな社会**」（『なめらかな社会とその敵』著・鈴木健）が望まれます。問題は「**独立した単位**」の在りようです。自立した個人、家族、地域、地方、領域、国家・・・？　昨今ではふたたび民族意識が高められ、国家の独立、国家の内向き引き締め（右傾化）が流行っています。その終局は・・・「**核戦争**」により、現世人類を一度リセットしてしまうのか・・・、大きな岐路に立たされています。

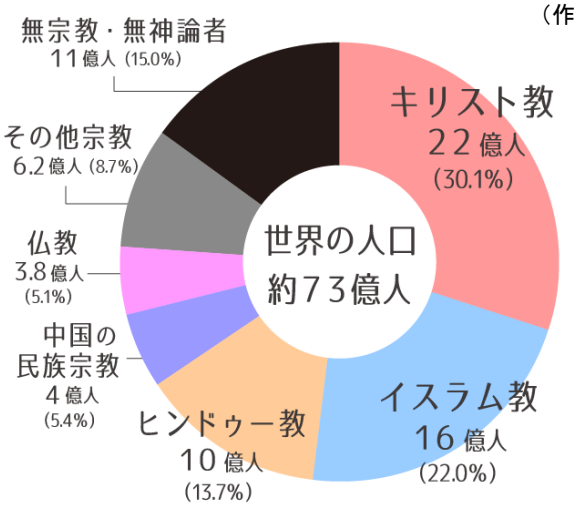
このように理解を深めると、「**文明**と**宗教・思想・政治**」は切り離せない関係が分かります。トインビーに「**文明＝国**」という概念があるように、**同一文明圏**とする領域は、**生活基盤を同じくしている**「**ゾーン**」であり、異なった**ゾーン**との境界が「**国境**」となります。さらに人為的に決めた**ゾーン**ですから、複数の国々にまたがるか、ゆるやかに連邦制としてまとまる場合もあります。

次頁には、2,016 年の世界の**宗教地図**と**割合**をインターネットから検索引用したので、概要を把握することができます。

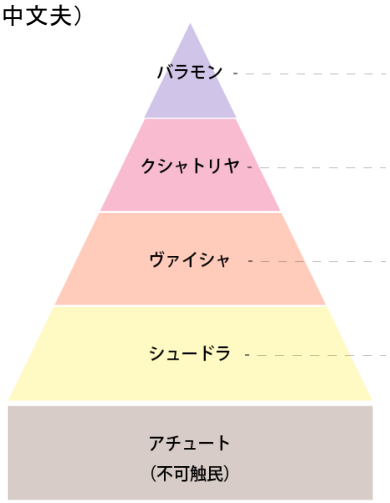
安心・安全・安定した**生活基盤**を保つためには、人々の思いや価値観を共有できることが重要となります。その最大な**様式**は「**宗教・思想**」であり、次なる**手段**は武力・暴力・支配強要をともなった「**権力＝政治**」の強制があります。最後は、経済的利益共同体となります。自主・自立・自己責任を尊ぶ「**自由な生活基盤**」の存続は脆く、**民主**による「**三すくみ＝三権分立**」体制が機能しなければ、ある一つの権力（政治）に、容易に支配されてしまいます。「**自由な生活基盤**」を持続するためには、**ホモ・サピエンス**の「**高度な知性による自省**（ネガティブ・フィードバック）」が不可欠となります。しかし、**ホモ・サピエンス**がここまで進化したもう一つの面＝**欲求・欲望を充足する生命エネルギー**を、どのように**制限・制御**（ポジティブ・フィードバック）できるかが課題に残ります。この**制御抑制機能**こそが「**知性**」であり、知性が織り成す「**文化**」の役割となります。



（作図＝田中文夫）



世界の宗教と人口の割合（2016年）



カースト制

人類は、原子核操作にともなう放射熱エネルギーを利用する知恵を得ました。良き利用法は「原子力発電」として、原子核分裂エネルギーを電気エネルギーへと変換利用します。しかしここでは、使用済み核燃料の廃棄処分が解決されぬまま、その量は増えるばかりです。2,011 年 3 月 11 日の東日本大震災において、東京電力福島第一原子力発電所の 1～3 号炉で炉心溶融（メルトダウン）を生じ、放射能被害を拡散しました。住民避難はもとより、原子炉廃棄処分もままなりません。

微量放射線は、レントゲン等の医療機器に使用されますが、人体への影響を制限しつつ、限定的に活用しています。

「必要悪」と位置づけているのは、「核兵器」です。すでに 70 余年前（1945 年）、広島と長崎に投下された核分裂型原子爆弾の壮絶な破壊力と、放射線被ばくが人体に与える致命的な影響を、日本人は目の当たりに体験してきました。放射線被ばくと人体への影響については、遺伝子(DNA)や分子レベルでの損傷、細胞レベルでの異常、臓器・個体レベルでの癌化の知見を得ています。

もはや現代、「核兵器が絶対悪」であることは人類の常識となり、廃棄に向けた「核兵器廃絶国際キャンペーン(International Campaign to Abolish Nuclear Weapons = ICAN) は 2,017 年、ノーベル平和賞を受賞したことでそれを証明しています。しかし政治的欲望は、これに逆行しています。（トランプ大統領）

原子力発電や核兵器に使用するウラン 235 の半減期は 7 億年、プルトニュウム 239 の半減期は 24,000 年、未来永劫までの過酷な被害を及ぼす決定を、現世人類がおこなうべきでないことは、自明なことです。また、原子力発電が止められない理由の一つには、使用済み核燃料が原子爆弾製造へ転用可能なことを、推進者が理解しているからです。ウラン 235 は、原子力発電、核兵器の双方に使用できます。発電原子炉のウラン燃料は、中性子を吸収させることによりプルトニュウム 239 を造り出すことができます。プルトニュウム型原子爆弾は、ウラン型よりも放射能破壊力が強く、より強力な武器。「国家」の覇権とする政治的思惑は、平和利用の名のもとに、核兵器原料を確保しておきたい願望が透けて見えます。

太陽エネルギーは水素の核融合により造り出されていますが、もちろん放射線も含んでいます。地球を取り巻く大気圏は、放射線が人体へ及ぼす影響を少なくしてくれ、その範囲に適応した人類が生存を続けています。原子を核とする宇宙の自然には、さまざまな放射線が飛び交っています。自然界にある放射線と、人工的に作り出す放射線との間には、人類が適応存続するための大いなる知見と抑制が不可欠です。人為的な放射線拡散については、「抑制の知性」を併せ持たなければなりません。

世界で唯一な「原子爆弾被爆国＝日本文明」だからこそ、二十一世紀文明は人類が制御しきれない全ての核爆弾、原子力発電を「廃棄」しなければならないという国際主張を、世界に向けて説得しなければならないのです。

依って立つその根拠こそが、「日本国憲法」に示す、「戦争放棄」という「理想」にあります。もし人類が「理想」を失ったとするならば、「人類文明は消滅」し、宇宙を飛び交う素粒子の如く、あてもなく漂う宇宙ゴミの一種でしかなくなるのでしょう。しかし分子の淀みたる肉体をもった「人間」が、同じく分子の諸現象に気づき→知識として蓄え→有効に活用すべく考え→活用の技術を生み出して適用し→生活空間を拡げてきた＝この文明と文化現象のエネルギーは、一重に「欲望と知性」がもたらせたものといえます。

「知性」とはフィードバック回路をもった判断機構です。だれでもが日常無意識におこなっている「人間知能」と、電子機械にアルゴリズムをもたせた「人工知能」が共存する中で、「理想＝ユートピア、ロマン」を保った「人類文明・文化」を継続したいものです。

二・ 日本文明から世界へ発信

「日本国憲法」は「戦争の放棄、戦力不保持、交戦権否認」の平和主義を掲げ、人類の理想を明文化しました。人類の歴史が戦争の歴史でもあるように、人類はこれまで「戦争」を放棄したことがありません。

第一次世界大戦を省み、その後の1928年8月27日、「パリ不戦条約」がアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、日本ら十五カ国が署名し、1929年7月24日に発効となりました。その後ソビエット連邦など六十三カ国が署名します。その第一条において、国際紛争解決のための戦争を否定し、国家政策手段として戦争放棄を宣言します。しかしこのことは絵に描いた餅で、各国の解釈はまちまちで、自衛権は主権が及ぶ領土だけに限らなかった。その結果において、第二次世界大戦（1939～1945年）となりました。

人類の歴史を振り返ると、「戦争放棄」を掲げた「日本国憲法」も絵に描いた餅であることは明白ですが、戦後七十年を経た現在の日本文明の在り様は、未来社会を考察する上で、極めて良き材料を提示してくれます。

戦争、戦闘なき「平和社会」が日本人にもたらせた七十余年の成果は・・・、一言では言い表せません。良い面は多いのですが、悪しき面も良く見え、この辺で一度、根本的に、論理的に、考えなければなりません。

おりしも安倍晋三政権は「憲法改正」を声高々にあげ、「戦後レジームからの脱却」をとなえています。しかし第三章三節に述べる若手政治学者＝白井聡氏らと同じ様に、日本が辿ってきた歴史的考察に欠けています。さらに、世界の潮流変化（世界史）における日本の位置づけが成されていないので、日米関係の二国間問題へと矮小化しています。とりもなおさずそのことは、戦後教育の中で、「天皇や古代史」を正しく取り扱ってこなかったことによるのでしょう。

この日本の歴史、世界の歴史を正しく認識する作業こそが、「戦後レジームの理解」であり、その結果において必要となれば、「憲法改正」へと踏み込むことになります。「憲法制定は自前でなく、ＧＨＱの関与・承諾によったから改正が必要」という根拠は局所的一面性であり、国民を、強いては人類を惑わす答えを導いてしまうことにもなりかねません。

日本国民は、特に戦後生まれの人々は、真の歴史から人類・民族・国家を学び直し、「日本国憲法」を理解し直す必要があります。

改正する前に、まず、そのことに取り組まなければなりません。

※ 戦後レジーム ＝ 第二次世界大戦降伏後、ＧＨＱの占領体制下で出来た憲法や諸法令、マスコミ、通貨発行管理等の基本的諸制度

「日本文明は＝ない」という指摘がありますが、「ない」という説明の背後には、「あらゆるものが有る」という、逆転発想による裏理解も生まれます。

「日本文明」を定義すると、外（世界）から見える特徴となるべき、他と異なった特殊な文明的共通事項が、見い出せないからでしょう。「八百万（やおよろず）の日本文明は、神羅万象、あらゆるものを含んだ総合」なのだから。

日本の「カミ」は「八百万（やおよろず）の神」であり、自然崇拝から人物崇拝、神話の「神々」まで、あらゆる事象が「カミ」となります。実態がなくても、一人ひとりの「心」に宿す「カミ」の意識として、形而下（形のあるもの）、形而上（形のないもの）の「八百万（やおよろず）（あらゆる）」に、日本人は「カミ」の意識を重ねてきました。このことは、近代社会をリードしている一神教（キリスト教、イスラム教、ユダヤ教）世界の人々からは、容易に理解できるものでありません。多神教の「ヒンドゥー教」においては、「神々」の上に「天」があり、「神」は最上位なランクでない、

とされます。同様な構図は日本やシュメールにもあり、「多神教 → 八百万の神」といえそうです。

カースト制により、階層が固定化されてしまう惰性を修正するために、インドでは「輪廻転生」という多神信仰による「ヒンドゥー教」を編み出しました。「現世が満足いかなくても、来世ではきっと良いカーストに生まれ変われる」という、「輪廻転生」を信じることができるならば、現世の不遇を転換させて丸め込む説得ができます。別な言い方をすれば、知性を誤らせるレトリックです。

他方ではそのことに気づき、カースト制に反対してヒンドゥー教に抗する伝統があり、そこから発祥したのが「仏教」とされます。仏教では、仏のほうが神より上位にあるとされ、「凡夫＝自ら」が「修行」に励んで「悟り」、「ブッダ＝覚った人」になれる教えです。仏陀は弟子を集めて、出家修行者集団（サンガ）をつくります。

「仏教」では、神を拝む代わり「修行」によって自ら覚りを得、覚りを得た人間は「仏」になって安寧を得るという、人間の成長過程を導く「思想」といえます。「神」への「信仰」でなく、自らの修行により覚醒に至る知性と体性の働きですから、「仏教」は「信仰」でなく、「思想」と理解するのが適切です。

しかし問題は、「仏」と「神」を同じものと思い込み、「仏」を「神」のような信仰の対象と見誤るところにあります。人間の本性（欲求）、「より良き品質、より良き性能、より良き成果」を求める近代の「成長・向上・進歩主義」思想は、すでに「仏教」の修行過程の中にありました。

日本への「仏教伝来」は538年、百済・聖明王の使者がもたらせた、とされます。その後、飛鳥時代に始まる遣隋使（608年、小野妹子）や遣唐使（630年、犬上御田鍬）らによる中国～インドとの交流から、仏教の解釈・理解は深まります。その中から、山岳自然環境の中で修行する「修験道（しゅげんどう）」が生まれます。

北アルプス「槍ヶ岳」の初登頂者（1828年）とされる「播隆上人（ばんりゅうしょうにん）（1,786～1,840）」を始めとして、山頂に「祠」が多いのもうなずけるものです。日本近代登山における「日本のアルピニズム＝より高く、より困難をめざす」登山思想は、すでに日本仏教の「修験道」に反映されていたことになります。

「ヒンドゥー教」に抗して生まれた「仏教」に、「神」は不要。神に代わり、人間が修行によって神より上位な「仏」となる、「修行思想」だからです。

同様に「儒教」も「神」ではなく、「神」に代わる「天」が最上位ランクとなります。「儒教」では、現世で「天」を代理する「聖人」として「皇帝」を位置づけ、「皇帝」が国家の主権者とされます。「天」に代わり、主権者「皇帝」が統治する対象が四民（君子＝官僚＝士、族＝一族、親族、家族＝農・工・商）。

日本の「神道」における「天皇」は、「天」にして「皇帝」であり、日本国 → 神国 → 天皇 → 現神（あきつかみ） → 神世（治世）の君主（主権者）という位置づけになります。しかし126代＝令和天皇へと至る天皇の歴史において、「國體（王権）」は万世一系と称して継承されてきたものの、「政体（政権）」は武家が武力で掌握した時代が長く（鎌倉幕府～徳川幕府）、明治以降は立憲主義にもとづき、国民による国会議員選挙で選ばれた議員と、その議員内閣が政権を執行します。しかし政権は武力と密接に関わり、軍部が実質掌握した時代もあり、太平洋戦争敗戦以降（戦後）は民主主義憲法の下、「国民」が主権者となります。

「神道」の高貴性、「仏教」の庶民性、「儒教」の倫理性、それら宗教や思想が入り混じり、権力奪取に欠かせなかった武力もからみ、実質な天皇の位置づけは変遷します。また、一神教を始点とした個人主義や、宗教に囚われない科学主義や自由主義からは、大日本帝国憲法立案に際して立憲主義の立場から、『国家

を法人とみなし、君主（天皇）を法人の最高機関と位置づけ、君主（天皇）の権力（主権）は憲法の制限を受ける』という「天皇機関説」が提起され、天皇の主権制限を考えます。しかし天皇を崇拝する軍部や右翼団体からの圧力によってつぶされ、逆に軍部は天皇を担いで戦争へと突き進んでいきました。

「天皇機関説」という解釈を提唱した憲法学者は美濃部達吉氏（1,873～1,948東京帝国大学教授→美濃部亮吉・元東京都知事の父）ですが、軍人や右派政治勢力の国体明徴運動（日本礼賛思想運動）により弾圧・排斥されます。国体明徴運動は「二・二六事件」へと発展し、時の岡田啓介内閣は責任をとり総辞職します。

時の法制局長官だった金森徳次郎氏（後の日本国憲法担当国務大臣）も標的となり、辞任に追い込まれます。金森徳次郎氏は、無職無役の浪人の身となって太平洋戦争を終えます。そして敗戦後に請われ、日本国憲法制定担当国務大臣として復帰され、日本国憲法誕生の「産婆役」を果たされました。

天皇機関説の背景にあったとされる、「個人主義と自由主義の思想」が、国体明徴運動による排斥対象であったからです。このことにより国家礼賛主義の暴走は勢いを増し、際限なく「天皇」と「國體」という錦の御旗を振りかざし、軍部主導による第二次世界大戦～太平洋戦争へとなだれ込みます。

※二・二六事件＝1,936. 02. 26 陸軍青年将校が起こしたクーデター未遂事件

1937.03.30 文部省（現＝文部科学省）は『國體の本義』と題した教材を全国の学校へ配布します。この書に示す「國體」とは、「君民共治ではなく、三権分立でもなく、法治主義でない、天皇の御親政である」とします。さらに、万世一系の「國體」における「天皇」が国の統治の主権者であり、一大家族国家として永遠に統治し、家族は奉体・忠孝の美徳に励む、という「國體 ＜ 政体」論（國體よりも政体が上位）でとなります。

天皇機関説は、明治維新以後に取り入れられた欧米思想＝フランス革命思想に類し、『國體の本義』に対極となる思想であったからです。

一方、日本人は、「カミ」も「神」も区別して使う意識がなく、曖昧なままに「カミ＝神」として、同義語のように使ってしまいます。しかし、大和ことばの「カミ」は最上位な位置づけとして、それ以上の存在はないとされます。さらに江戸時代の国学者、本居宣長（1,730～1,801）の整理による日本の「カミ」には、次の三種類があるとされます。

❶ 古事記、日本書紀に出てくるカミ（神話の神）
❷ 神社に祀られているカミ（八幡大神）
❸ 人間、動物、海山のような自然の中で、平均値を逸脱しているがゆえに感動して「あわれ」と思われるようなカミ

※ 現人神 ＝ 天皇・軍神・偉人等、
自然の神 ＝ 山・海・動物・樹木・植物等

前記のような「カミ」の概念であるならば、「カミ＝神」として使われても、問題はないのでしょう。このように、日本人社会の曖昧さは、差別や階層の少ない、一見「なめらかな平等社会」（『なめらかな社会とその敵』著・鈴木健）にあると、考えることができます。「日本文明」の中では、小さな争い事は当然あるものの、「一神教文明圏」では当然な、「敵／味方」の二極に分かれた「生死の争い」、つまり「戦争（文明の覇権争い）」を生じさせるエネルギー格差を生じない、安定社会（エントロピー増大の法則）を築いています。

その様態は、「**一神教文明圏**」からみると、「**はがゆい**」状態に見えるのでしょう。「**敵／味方**」、「**生／死**」、「**正=yes／反=no**」、「**1／0**」、「**有／無**」等、これら「**二極対立＝二進法**」のデジタル思考からは、「**核戦争**」で人類を滅亡させる「**終末思想**」が導かれます。キリスト「**最後の審判**」です。

しかし、「**なめらかでフラットな社会**」の「**はがゆさ**」に耐え、二十一世紀文明を主導するべく「**日本文明**」は、その成り立ちと意味を、世界の人々に向かって提言・説得すべき時が、「**今**」ではないかと考えるのです。

日本の「**カミ**」の概念は、一神教の神「**ゴッド**（キリスト教）」も、「**アッラー**（イスラム教）」も「**ヤハウエ**または**エホバ**（ユダヤ教）」も、多神教の「**ヒンドウーの神々**」も、儒教の最高位「**天**」も、すべてをひっくるめて「**なめらかでフラットな神々たち**」とした「**八百万の神**」となり、「**信仰主体を習合**」することができるはずです。

「**日本文明は＝ない**」といわれますが、「**戦後**（1946年～）**の日本文明**」は、「**二十一世紀世界文明の実験場**」ではなかったか・・・と考えてしまいます。

「**日本文明**」のルーツは、「**ウバイド**」～「**シュメール**」、そして「**古代イスラエル**」にあり、巡り巡って日本に終結したからです。

◇「**海人系民族**」はアジアの南東海岸を**船**で

◇「**騎馬系民族**」はシベリアやモンゴルの大陸を**馬**で

◇「**シルクロード交易**」による西方周辺諸国や**中国**～**朝鮮**を経

それら全てが**日本で習合**した「**ハイブリッド文明＝日本文明**」、と考えるのです。

「**なめらかな複層制度**（宗教的カーストでない構造構成的再編、かつ自立単位の複層制度）」、そのようなもので人類社会を再編成できないものか、これからの文明進化の要件ですが、「**日本国憲法の主旨**」は、すでに先取りしていたといえます。

三・ 若手政治学者＝白井聡氏「国体論」への異論

1977年東京生れ、の若手政治学者＝白井聡氏は、『国体論』（菊と星条旗＝サブタイトル）を出版（2,018年4月22日発行、集英社）された。「天皇とアメリカ・・・誰も書かなかった日本の深層」と標し、朝日新聞に大きく広告が載りました。

さっそくアマゾンから取り寄せると、出版日よりも早い4月16日に配送～落手となります。「情報化社会～恐るべし」。さっそく読み始め、序章、第一章、第二章・・・と読み進めますが、やがて精読から離れ・・・斜読へ。

白井氏が論じる「国体」と、落合莞爾氏が『天皇とワンワールド』、『天皇と黄金ファンド』、『天孫皇統になりすましたユダヤ十支族』で述べる「國體」との内容は、大きく異なります。

白井氏は明治維新以降の「国体」を論じているのに対し、落合氏は現代文明の始まりとされるシュメール文明と、さらにそれ以前となるウバイド文明からスタートさせ、そこから平成天皇が譲位のご意向を述べられた「お言葉」への説明に至ります。落合氏の著作は、一言で胡散臭い標題となっていて、信じるに値しないような印象をあたえますが、精読したその内容は、まさに私が探し求めていた秘事を説明し、理解を深めさせてくれるものでした。

さらに伊藤智永・著＝『「平成の天皇」論』（2,019. 4. 20第1刷）を重ねると、本論での指摘はより明瞭となりました。つまり、

①＝明治維新以降を論ずる「近代保守」・・・白井論

②＝日本草創からの歴史を踏まえた「保守本流」・・・落合論

前記の視点の違いは、必然ながらその答えも違ってくることとなります。時系列から見れば、①は②の部分となり、②の立場こそが全体を示し得ることになります。

安倍政権における「憲法改正論議」や、「平成天皇譲位論議」の思考基盤は、明治維新以降の「近代」という短いスパンでしかなく、白井聡氏も同様です。

現生人類（ホモ・サピエンス）は、約二十万年前にアフリカで誕生し、約六万年前にアフリカを出立して世界への移動を始めます。アラビア半島を渡り、中東に至ります。約五万年前にはユーラシア大陸を東へと向かい、アジア南方を経てオーストラリア大陸まで達していたとされます。他方では西のヨーロッパ方面へと向かうグループや、北に向かってシベリア地方の寒帯を通り、さらに北米～南米大陸へと移動します（P-43「ホモ・サピエンスと他原人との交雑」参照）。その間に、まだ生息していた原人＝ネアンデルタール人やテニソワ人たちと交雑（混血）し、環境適応能力を高めます。しかし、ネアンデルタール人やテニソワ人は絶滅し、ホモ・サピエンスのみが現代へ生き続けました。

それら最初の現生人類（ホモ・サピエンス）たちは、当然ながら日本へも到来します。最終氷期は約15,000年前に終了しますが、氷期には海面水位が下がって陸地が現われることから、現在の日本列島は北海道の北方で大陸とつながり、九州と朝鮮半島もかなり接近し、移動を容易にしていたようです。氷期が終わると海水面は上昇し、日本列島は島国となります。

列島に取り残された人々は土着民となり、日本人の祖となります。これら後期旧石器時代の土着民は、小集団で採集狩猟生活をします。文明たる技術は、採集、狩猟、石器、衣服、装身具、洞窟壁画、呪術程度なものでした。

一方、シベリアを経てベーリング海へと進出した一団は、氷床に遮られて数千年間停滞となりますが、氷期がゆるむと一気にアラスカ側へと渡り、北米から南米大陸末端までを南下します。

遺伝子解析が進歩した現代、**ミトコンドリア・ハプログループＤＮＡ**から**母系**の移動ルートは解析されます。一方、**Ｙ染色体ハプログループＤＮＡ**からは、**父系**での移動ルートが解析されます。

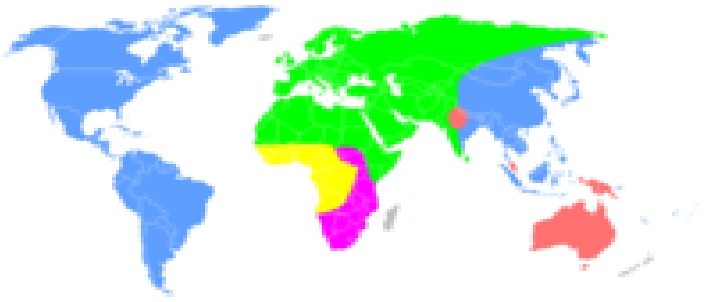
約二十万年前にアフリカで誕生した**ホモ・サピエンス**のＤＮＡは、環境適応変異や突然変異を起こします。変異したＤＮＡは交雑（混血）を繰り返すことによってさらなる分岐を繰り返し、ハプログループに整理されるほどに多様化します。その結果に知ることは、「**ＤＮＡを同じくする単一民族はいない**」、ことの理解です。多分、単一ＤＮＡどうしは生物として弱く、環境に適応しきれずに滅んでしまうからなのでしょう。つまり「**人類はハイブリッドの結果強化され、生存を続けられた**」として、ことさら「**単一民族を主張することの愚かさ**」に気づかされます。

「**民族**」という括りは、**ハイブリッドなＤＮＡ**を持った個体が集合し、同類性、同質性の概ねで括った呼称となります。そして、同一地域で生活を続ける中から形成された集落は、やがて「**部族**」や「**小国**」を名乗り、さらに自立・共生領域を広げた「**国家**」を名乗り、共同体や「**民族**」の自覚となります。

人類学者にとって、「**民族**」という概念はありますが、「**人種**」という概念はない（『日本人起源論』P-176）、とされます。「**日本民族、大和民族、○○民族**」等々表現されますが、「**日本人種、大和人種、○○人種**」は**ない**、というのです。つまり、**ハイブリッド**（異種の組合せ）**なＤＮＡ**なるがゆえに、科学的に「**人種**」の定義ができないのだそうです。研究者の間ではそうであっても、一般的に「**人種**」はさまざまな文脈で使われ、本論においても「**世界四大人種**」等に用いています。「**人種**」は、明らかに形質の異なりを分類し、遺伝子継承分類ではありません。「**人種**」は、「**人間の形質的特徴分類**」の文脈で用いられ、骨格、皮膚の色、毛髪、瞳の色などから分類します。

中曽根康弘（1,918～2,019 年）第 71～73 代内閣総理大臣（1982～1987 年）は、かつて日米関係を説明する中で、「**不沈空母**」発言や、「**日本は単一民族国家**」と発言して論議をよびました。言わんとする意図は、「**日本民族は一つのまとまった国＝日本を成している**」ことでしょうが、ことさら**単一民族色を強調**することが、**政治的混乱を招く原因**となりました。

ことの主因は中曽根氏が、近代保守勢力の一員として「**民族**」を正しく理解しなかったことです。「**単一民族国家**」の表現にみられるよう、「**国家**」を構



オーストラロイド
カポイド
コーカソイド
ネグロイド
モンゴロイド（アジア、アメリカ）
モンゴロイド（太平洋）

【人種の分布】

※カールトン・Ｓ・クーン（1904～1981 年）の分類

成している人々のルーツから現在に至るまで、**人類移動の歴史**が正しく教えてこられなかった**教育**の結果にもよります。

併せて古代日本では、**開化天皇**（第九代）から**崇神天皇**（第十代）へと引き継がれる「**國譲り**」に当たり、「**國體**」と「**政体**」を分離し、「**政体は天皇**」の役割、「**國體は皇后**」の役割とし、併せて「**家族**」とした役割を果たす、となります。この**役割分担**が、皇統の温存・継続に極めて優位に働きます。それゆえに、「**皇統一系の継続＝家族の継続＝単一民族国家**」という意識が、いつの間にか国民の間（社会）に埋め込まれたのでしょう。

なぜか。「**政体**」は**国の権力体制**を示します。「**政体**」は、古代初期から「**天皇**」が担っていましたが、やがて「**公家**」に実権を握られ、次には「**武家**」へと移行します。明治維新でふたたび「**天皇**」へと戻されますが、フランス革命以降、民主主義の潮流は世界に波及し、太平洋戦争敗戦後の新憲法制定をもって、「**国民の代表者＝国会議員**」へ委嘱されます。戦後の「**天皇**」は「**政体**」という**権力**の立場から外され、「**国民統合の象徴**（シンボル）」となる**権威**へと変遷します。

一方で「**國體**」という概念はこれまでも不明瞭で、現代においては「**国体＝国民体育大会**」と間違えられそうです。前記の古代「**國譲り**（開化天皇から崇神天皇へと引き継がれる）」以降、**皇后**＝母系皇統の脈を粛々と続けて国の解体を防ぐ、あたかも**家族の中核となる「母性」の役割**をもって国を支えること、この役割が「**國體**」とされます。「**母性**」とは、必ずしも「**女性**」を意味することでなく、「**母親の役割**」を示します。それですから、「**天皇＝政体＝統治**」を離れた太平洋戦争敗戦後の「**象徴天皇**」が意味するところは、男性的政体権力者でなく、「**国の母性的役割機能**」であり、そのことが「**国体＝國體護持**」と理解します。

平成天皇のお言葉にある「**家族**」とは、「**日本の国民総体**」であり、この国を護持していく「**母親のような務め＝象徴天皇**」と認識された上での「**家族**」、と理解するのです。つまり**母性国体**となり、**家父長的な父性ではない**のです。

生物学的生存にとっては、「**精子**」さえ継承できれば父親不在でも**生活**は営まれます。「**父親**」の役割が必要とされるのは、**集団生活**における**精神的中核**＝リーダーシップを発揮して集団を束ね、自衛力を強化して生きのびる役割です。その生活様式をマニュアル化（四書・五経）したのが「**儒教**」と理解できます。

明治維新は西欧流**二元論**に習い、**神道＝一神教**の如く、**疑似的**に「**現人神＝天皇**」として、「**神＝天皇＝政体＝國體**」の一致をみせました。歴史の例外になく、「**武力**（軍部）」が「**政体**」を掌握したがゆえに、その勢力が**疑似的**（形式的）に「**現人神＝天皇**」を国の柱にすえて「**國體**」としたことです。

それが敗戦により、**欧米流民主主義**が適用されます。

「**政体**」は**国民**から選挙で選ばれた「**国会議員**」が担いますが、「**國體**」の意識は、連合軍の検閲制度（プレスコード）により消滅します。戦後の政治学者＝白井氏が「**政体**」と「**國體**」を同一視して混同し、現代用語の「**国体**」として理解される様子は、容易に理解できます。

さらに**落合莞爾**氏流にいえば、「**家族＝國體**」を護持するためには資金が不可欠で、その資金のことを「**國體黄金ファンド**」というそうです。しかしその厳然たる事実は、日本史や世界史の中で常に隠蔽されていて、その運用こそが「**國體**」の要である（『天皇と黄金ファンド』2,016年）、と**落合莞爾**氏はいいます。

つまり日本の「**政体**」は時の権力によって、天皇から公家、武家や国民へと移り変わってきました。「**國體**」を護持する資金確保と運用こそが「**皇統＝國體**」の変わらぬ役目として、その役割を「**天皇**」が担ったり、「**皇后**」が担ったりしながら継続され、その指南役として「**國體参謀総長**」なる役職者が影となり、補佐しているというのです。

第十代・崇神天皇の國體參謀総長とされたのが、第一世・武内宿禰とされます。武内宿禰は現代まで引き継がれ、現世竹内睦泰氏（1,966～2,020 年）は、第七十三世武内宿禰といわれます。これまで後南朝に伝わる古神道の秘儀は、口伝とされていたそうです。しかし口伝の途上で書きとめられた「竹内文書」は、前記＝竹内睦泰氏によって『正統　竹内文書の謎』として出版されました（学研パブリッシング、2,013 年第一刷）。しかし今も、國體參謀総長の役割を果たされているのか・・・下々には不明です。

電子情報化社会の今、記憶として蓄積されていた記録（データ）は電子化され、あるいは言語となって出版されます。これまでは、特別な人々、階層、役職の方のみに限られていた諸々の古代記録検証が、現代では関心を寄せる一般人でも探し出せるようになりました。

専門外から多様な視点で考証してみると、定説にない新たな世界が見えることもあります。つまり、政治学者＝白井氏からアプローチする「国体論」ではない、電気技術者の複雑学から推考する「国体論」が、本書の立ち位置です。

古代から太平洋戦争へと至った日本正史の中で、「天皇」と「國體」はどのような位置づけであったかという視点、加えて「國體」と「政体」との分離、「国体」としての統合、この変遷を歴史的に把握することにより、より正しい日本史の理解ができます。

それはなによりも、日本国内だけの歴史問題でなく、現在も続く世界の民族対立や民族移動・移民の要因ともリンクしており、世界史を踏まえた上での日本史理解が不可欠な時代となります。

日米関係を、限られた政治局面からみるだけでなく、人類の移動と世界への拡散軌跡を踏まえてみると、単なる二国間問題だけでなく、民族が交雑・混血してハイブリッド化した現代の世界情勢そのものの、新たな姿が見えてきます。

太平洋戦争という不幸な過去を経て 1,951 年に結んだ「サンフランシスコ講和条約」、「日米安全保障条約」等々は、アフリカで発祥した現生人類（ホモ・サピエンス）が世界へと展開した末に地球を周回し、太平洋戦争終結をもって連結・収束した、人類移動の終着点ではないかと考えられます。

その結果、落合莞爾氏が述べる「ワン・ワールド」が完成し、「民族」の視点は「人類ワン・ワールド」へと移ることになります。この理解は、落合莞爾氏（1,941 年～）の一連の「落合秘史」や、本書参考資料に示した古代史関連諸書が、ネットワーク・ウェブのようにつながります。

「人類ワン・ワールド」の視点からは、世界の動静が良く見えてきます。

これまではとかくユダヤ陰謀論や闇の世界といわれ、宇野正美氏（1942 年～）の一連のユダヤ関連著作が出版され、代表作＝『ユダヤが解ると世界が見えてくる』がありました。それら諸書を 30 年前から読みましたが、当時は信憑性に欠ける書籍として、半信半疑でした。しかし古代史から読み解く「落合秘史」は、それなりに整合性が理解できる内容として、昨今読み込んでいます。

そこから見えてくる「ワン・ワールド思考」は、これからの人類を地球規模でどうすれば良いのか・・・、日本の立ち位置として、正面から論ずる時節と考えるようになりました。

日本の立ち位置は、スメル系多元論が習合した「小異（個）を尊重して大同（人類）に和する精神」＝それがホモ・サピエンスの文明・文化の未来への指針であるの・・・とする理解です。

しかし現実の世界は逆を向き、「〇〇ファースト」として、民族主義、孤立主義を煽っています。

それがどうしてなのか、未だ未解明なところですが、アーリア系二元論（二進法）と大陸騎馬系二元論（敵・味方）の究極的な成れの果て、かも知れません。

「戦争」は古代から国の基幹産業となり、雇用（兵士）を生み出し、生産（兵器）を促し、敵対する人・物・地域を破壊することよって生命や財産を消費し、人間破壊、環境破壊、を招いてきました。

トルストイの『戦争と平和』は、十九世紀前半、ナポレオンによるロシア遠征に抗する、若者の群像を詳細に描きます。

「平和時」における産業様態は、物質文明から精神文明へと転化し、さらに二十一世紀は電子情報産業のイメージ世界へと移ります。物質的実体のリアルから、情報のバーチャル・リアリティへの転換です。

「平和時」における「闘争心」は、今や「ゲームとスポーツ」に置きかえられますが、まだまだ「闘争本能」を失う段階ではありません。しかし、やがて「闘争本能」を失う時、「人類」は人工知能が普及した社会の中で「ロボット化」されており、従順な存在者となっているかも知れません。

逆説的としては、「戦闘ロボット」が人間から分離し、「闘争本能」は人間から除かれていくのかも知れません。そのことはまた、人類が文化を失う時ともいえ、エントロピーの法則に則り、人類は「金太郎あめ」のように均一化・均質化されているかも知れません。

人類に備わっている「闘争本能」は「抵抗する美の感性」であり、他方では自分自身や他人をも傷つける「凶器のエネルギー」となる両極面、相対的二面性を帯びているからです。その反面、ホモ・サピエンス（人類）は「同調の美学」という相補的文化をもって補い、「抵抗と同調の美学」の両立により生存（生きること）を楽しんできました。

白井氏の著作『国体論』は、2,016年8月8日、平成天皇がテレビ発表された「お言葉」から始まり、現・内閣総理大臣＝安部晋三氏の政治信条である「戦後レジームからの脱却」と、安部政権による日本国憲法の改正論議、それらに絡むアメリカとの関係を説明します。

しかしその説明は「政体」の皮相面を述べるものであり、「國體」を併せて論ずるものでありません。「政体」と「國體」の意味するところ、それを押さえてこそ「国体」を論ずることができると考えるのです。

「國體と政体の入れ替わりや、統合（母系）国体の経緯」こそが、皇統の歴史変遷そのものを成しているという理解です。さらに皇統の歴史変遷は、時の権力者（政体）によって真実は書き換えられ、ねつ造され、隠蔽・廃棄されてきた経過そのものです。

極論には、「崇神天皇（十代代）＝応神天皇（十五代）」説さえも浮上します。市井の国民にとり、宮内庁発表の公式天皇系図は正史となる位置づけであり、事実たる歴史の裏面は、国民が知る由もありません。正史といえども記録の断片であり、真の全体像は誰にも分からないからです。

特に戦後教育における日本史は、戦勝国アメリカの関与が著しく、そのことを白井氏は論じています。しかし「アメリカ → 連合国の実体」にまで、白井氏は迫っておりません。この「アメリカの見えない実体」こそが、落合莞爾氏が述べる「ワン・ワールド」とした世界勢力からのリーチでないかと理解し、その中に日本皇室も組み込まれている、ということなのです。

連合国最高司令官＝マッカーサー元帥は極東フリーメーソンの一員とされ、昭和天皇との初対面にあって、新たに「ワン・ワールドの根源を自覚し直したのではないか・・・」とは、私の推論です。

古代からの日本の歴史＝皇統史の変遷は、「ワン・ワールド」な流れの中で、時々の習合（歴史）を示すものとして、合理的納得を得ることができます。そして、「ワン・ワールド」における日本の立ち位置（習合）こそが「新たな国体論」である、と私は考えるようになりました。

これまでのいかなる国家においても、その国の、歴史の真実たる全てを把握することはできません。そのつどの**為政者にとって都合の良い真実は残され、不都合な真実は消され、真実でなくても事実はねつ造される運命**にもあるからです。

しかるに、古代からの永い歴史において、**真実の全ては誰にも分からず**、ある局面での**真実**に迫るためには、大胆ともいえる「**思考実験＝仮説＝物語**」によって理解する手法が残ります。

我が国におけるその代表作が「**古事記**」であり、「**日本書紀**」となります。戦前から**津田左右吉**氏によっておこなわれた『**古事記及び日本書紀研究**』は発禁本となり、**津田左右吉**氏は時の政権に拘束され、研究の中断を余儀なくされます。そして一昨年（2,018年）、発禁となった復刻本が新書版で出版されました。

「**過去のすべては分からないけど、今はこういう理解になっている＝定説**」、として提示されるのが、**歴史教科書**となります。しかしその中身は、ほんの断片でしかありません。「**もっと知りたい人は、自分で学んで下さい・・・**」というのが「**歴史研究**」ですが、結局は「**過去の全ては分からない**」、という真理へと行き着きます。

科学の物質による実証は、歴史の事実認定による物証と似ています。**物質**は宇宙全エネルギーのたった**5％未満な存在**でしかないものの、その微量な物質から宇宙を説明することの「**限界**」を、**ホモ・サピエンス**（人類）の**知能**は知ることができました。そして**文明物語＝歴史**による事実認識の「**限界**」も、**科学と同じように相似現象**（フラクタル）を成しているのだろうと考えるのです。

二十一世紀の**ホモ・サピエンス**（人類）は、「**陰謀支配的なワン・ワールド**」ではなく、「**小異（個）を尊重し、大同（人類）に和する精神をもった、ホモ・サピエンスの文明・文化ワン・ワールド**」を構築できたらなら、素晴らしいと考える次第です。

四・ 朝日新聞による元号報道と天皇制記事

2019年5月1日から、元号は「平成」から「令和（れいわ）」と変わりました。

平成天皇（125代）から、**令和天皇**（126代）への譲位による改元にともない、「**天皇制**」や「**日本の歴史**」が注目されます。その一連をとりまとめ、朝日新聞は4月29日朝刊からの連載で、ダイジェスト報道をしました。（次頁以降参照）

しかしこの朝日新聞報道においても、明治維新以降、現在に至るまでの時限で論じており、BC660年神武天皇即位以降、2,680年続く天皇の歴史変遷は視野の外にあります。

明治維新の大政奉還（1,867年）から**現在**に至る153年間の「**天皇制**」は、歴史の起源とその変遷から観ると、特殊な期間に見えてきます。つまり、**立憲君主制**でありながら、「**天皇を現人神**」と規定した**神権的天皇制**の中で、軍部が天皇の名をもって権力行使した第二次世界大戦敗戦までと、敗戦後の国民主権による**立憲象徴天皇制**へと劇的な体制変化を招いた期間です。

※ 立憲君主制＝憲法の下で君主（天皇）の権力は制限されるが、君主は議会や内閣よりも優越した権限をもつ体制。

※ 立憲象徴天皇制＝憲法の下で主権は国民にあり、国民の代表者をもって議会と内閣を構成。天皇は国民統合の象徴となり統治権力を持たない体制。（造語）

「**天皇を現人神**」と規定したことは、「**政体**」と「**國體**」を同一視した「**一体概念化**」＝「**国体**」により、「**実態政治権力者**（軍部）」が都合よく、「**天皇の神格**」を一元的に利用した期間といえます。

❶「**國體**＝**國を護持する体制**＝**家族**（国）の核となる母性的（皇后）役割体制。

❷「**国体**＝**国を営む権力体制**＝**政体**（権力＝天皇＝父権的存在）を主とし、**國體**（護國＝皇后＝家族＝母性的役割）の歴史的意義に気づかない体制。

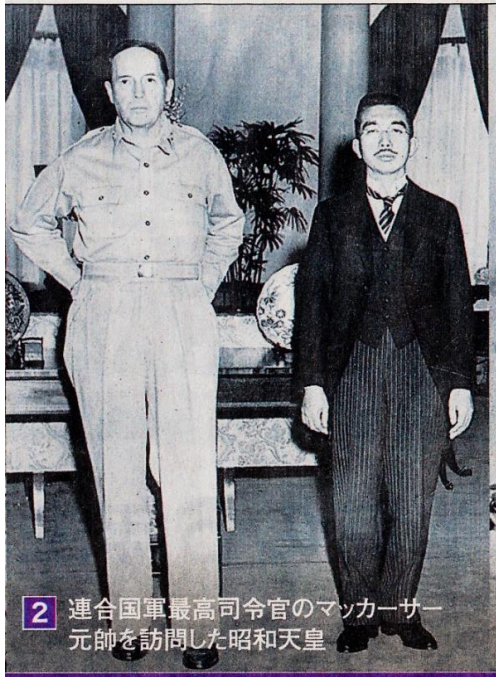
朝日新聞報道と、前節白井聡氏の「**国体論**」は、後者❷の体制から論じているものと理解します。

特に1945年、太平洋戦争敗戦にともなうＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）による占領政策、1945年9月19日発令、21日発布された30項目の「Radio Code for Japan＝**プレスコード**」（報道禁止・検閲事項、1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約発効により失効）による影響が大きかったと、後述の**藤誠志**氏は述べています。

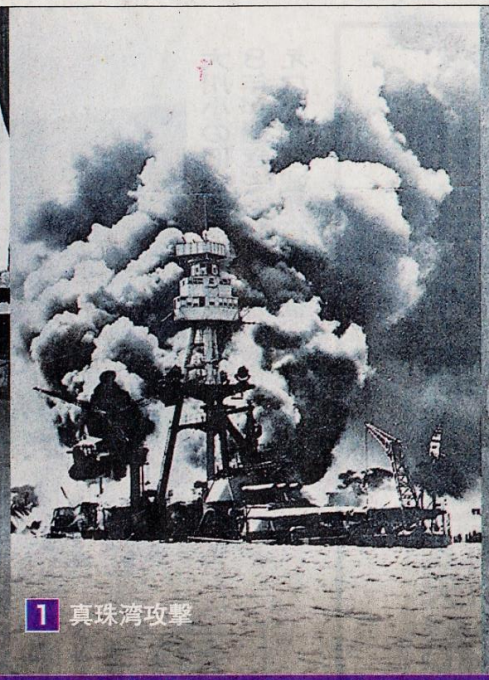
◆ **プレスコード**『理論近現代史学Ⅱ』（本当の歴史）著＝藤誠志、P-4～5

一、ＳＰＡＣ（連合国軍最高司令官もしくは総司令部）に対する批判
二、極東国際軍事裁判批判
三、ＧＨＱが日本国憲法を起草したことに対する批判
四、検閲制度への言及
五、アメリカ合衆国への批判
六、ソ連への批判
七、英国への批判
八、朝鮮人への批判
九、中国への批判
十、その他の連合国への批判
十一、連合国一般への批判
十二、満州における日本人取扱についての批判

新聞　2019年（平成31年）4月29日（月）　13版S　総合2　2



2 連合国軍最高司令官のマッカーサー元帥を訪問した昭和天皇



1 真珠湾攻撃

軍服姿の明治天皇

天皇制

をめぐる主な出来事

時代区分は川口由彦・法政大教授監修

天皇制国家への移行

1853年 ペリーが浦賀に来航する
1858年 幕府が日米修好通商条約を結ぶ
1867年 大政奉還
1868年 王政復古を宣言。戊辰戦争。明治と改元し、一世一元に

立憲君主制への模索

1881年 国会開設の勅諭。明治14年の政変
1882年 軍人勅諭を発布
1889年 大日本帝国憲法を発布、4条で天皇は「元首」かつ「統治権の総攬（そうらん）者」で憲法に拘束されることに。皇室典範の制定
1890年 教育勅語を発布
1894年 日清戦争始まる

立憲君主制の確立

1900年 政友会内閣成立、政党内閣の時代に
1904年 日露戦争始まる
1912年 大正に改元
1914年 第1次世界大戦に参戦
1920年 国際連盟に加入
1926年 昭和に改元

天皇観の膨張

1931年 満州事変始まる
1933年 国際連盟を脱退
1935年 天皇機関説事件起こる
1936年 2・26事件起こる
1937年 日中戦争始まる。宮中に

朝日

第3種郵便物認可

天皇が象徴であると共に国民統合の象徴としての役割を果たすためには

令和

象徴天皇制の時代

〈 神権的天

3 「南三陸町を襲う津波」 高橋勲さん 2011年 読者の新聞写真代表作

4

1 大本営設置 1941年 宣戦の詔書。太平洋戦争始まる

2 1945年 広島、長崎に原爆を投下される。敗戦。「玉音放送」流れる

昭和天皇が「人間宣言」。1946年 日本国憲法公布、1条で天皇は「象徴」となる

国立公文書館所蔵

1947年 皇室典範、皇室経済法公布 憲法施行。新

1951年 日米安全保障条約を結ぶ サンフランシスコ平和条約、

1972年 沖縄が日本に復帰

1979年 元号法施行

1989年 昭和天皇死去

平成へ改元

1995年 阪神大震災

2005年 天皇皇后、戦後60年「慰霊の旅」でサイパン島を訪問

2006年 教育基本法の改正

2011年 東日本大震災、福島原発事故。天皇が国民へのビデオメッセージを発表 3

2016年 天皇が退位の意向をにじませるビデオメッセージ 4

2019年 新元号「令和」を発表

十三、連合国の戦前の政策に対する批判
十四、第三次世界大戦への言及
十五、冷戦に関する言及
十六、戦争擁護の宣伝
十七、神国日本の宣伝
十八、軍国主義の宣伝
十九、ナショナリズムの宣伝
二十、大東亜共栄圏の宣伝
二十一、その他の宣伝、
二十二、戦争犯罪人の正当化及び擁護
二十三、占領軍兵士と日本女性との交渉
二十四、闇市の状況
二十五、占領軍軍隊に対する批判
二十六、飢餓の誇張
二十七、暴力と不穏の行動の煽動
二十八、虚偽の報道
二十九、ＧＨＱまたは地方軍政部に対する不適切な言及
三十、解禁されていない報道の公表

当初は事前検閲であったものが、検閲に時間がかかり、速報性というさらなる新聞の生命が失われるために、**自己規制・自己検閲**を強化し、事後検閲・承諾を迅速におこなえるようになったとされます。**自己検閲**をより厳しくすることで、ＧＨＱ事後検閲の信頼性が高められ、その命脈からＧＨＱ礼賛へと転向する検閲官も生じたそうです。**検閲官**に動員された**日本人高学歴者**は、やがて大学教授やメディア主導者、政治家や法曹界、大企業役員となって**社会的地位を得、戦後世論を形成していった**といわれます。

このような背景の下、**戦後保守派**は古代から続く日本の歴史を徐々に逸脱していきます。藤誠志氏が特に糾弾するのが**朝日新聞**と、**東京大学法学部**を中心とする**ステルス**（目に見えない）**複合体**による**言論統制**、としています（前著 **P-6～7**）。さらに**ＮＨＫ**（日本放送協会）も、当然ながら加わります。

※戦後保守＝富岡幸一郎（文芸評論家、鎌倉文学館館長、他）の分類
①親米保守、②改革保守、③経済保守、④反共・反マル保守、⑤皇室保守、
⑥風土論保守

「占領軍の検閲と戦後日本」のサブタイトルを掲げた**『閉ざされた言語空間』**を著したのは、**江藤淳**氏（1,932～1,999）です。巻頭の中村純二先生は、江藤氏の家庭教師をされたという逸話を、私は中村先生から直接聞いています。

文芸評論家としての**江藤**氏が、ＧＨＱの**プレスコード**にもとづく**検閲**（言論統制）がいかにおこなわれ、**それが日本人の心の内と外にいかなる効果を果たしたか、できるかぎり正確に知りたいとする動機によってまとめられた著作**です。

検閲効果は、「作家たちは、虚構のなかでもう一つの虚構を作ることに専念していた」とし、はたまた**日本国憲法**でさえこの虚構の一部を構成しているのではないか、と疑問を呈します。しかし占領期間中の検閲に関して残された資料が少なく、それゆえ著作の標題を**『閉ざされた言語空間』**としたのでしょう。

前記の**藤誠志**氏は**「ステルス」**という言葉で言い表しています。

日本国憲法でさえこの虚構の一部とする**江藤**氏ですが、第一章第二節で述べたように、**「日本国憲法」**には**複素性**（二重規範）があると考えられます。一つは**独立国**たる日本国の**実体憲法**、もう一つは人類史を背景とした人類習合の結果

としたる地球共同体の理想を示す概念憲法です。その後者こそが、江藤氏も感知された概念憲法＝虚構といえましょう。

複素性とは、数学でいう複素数＝実数＋虚数に類する概念ですから、複素的憲法＝実体憲法＋虚構概念憲法、と解釈できます。憲法構成の総合として、両者を異なった位相に位置づけ、それを複素的に統合理解することです。

日本国憲法の世界に類をみない斬新性は、すでに人類憲法の概念を取り込んでいることに気づかない、「虚構性」をともなっているといえます。

後述する金森徳次郎＝憲法担当国務大臣の著作、『憲法随想』の中においても、人類全体を視野に入れた虚構性＝理想の概念が記されています。例えば次・・・

・水晶体をくもらせたものは色々ある。伝統を無批判に受け継いだこともその一つ、世界を正視しなかったこともその一つであるが、根本に一元化させると、真理を尊重熱愛しなかったことが重点にある様に思う。

・真理の内容は何であるかと言えば、この発見は人類全体の共同責任だ。思想学問の自由を持った限り今後は各人の責任が深くなる。

・水晶体の実体は何か、その中心部は日本国憲法である。

・日本国憲法は文字の行列ではない。日本国民が及び日本国が真実を識別するための水晶体である。混濁の後を受けて清明な世界観、国家観及び人生観を正視するための水晶体である。

・八千万の国民の自由なる判断が結晶して出来た水晶体には絶大の信頼を置いてよかろう。

江藤氏は、米国ワシントン市にあるウィルソン研究所で1979年～1980年に至る九カ月にわたり、資料検索と通読に没頭されます。検閲の実体を明らかにさせた研究の成果は、随時に雑誌（諸君！）発表されています。一冊にまとめた著作発表は、刊行の機会をうかがっていた、と「あとがき」で述べています。

第一部＝アメリカは日本での検閲をいかに準備していたか

第二部＝アメリカは日本での検閲をいかに実行したか

「あとがき」で述べている江藤氏の趣意は、「人が言葉によって考えるほかない以上、人は自らの思惟を拘束し、条件付けている言語空間の真の性質を知ることなしには、到底自由にものを考えることができない」とする、簡単明瞭な原則として述べています。

江藤氏のほかに、ＧＨＱ検閲を考察した書は、山本武利氏（1940年～）の『ＧＨＱの検閲・諜報・宣伝工作』（2014年3刷）があります。

第一章＝ＧＨＱ／ＳＣＡＰによる多様な工作

第二章＝通信検閲と諜報工作

第三章＝活字メディア検閲

第四章＝放送・紙芝居・映画検閲

第五章＝日本人の対応

おわりに＝功を奏した多重的ブラック化装置

山本武利氏は江藤淳氏の成果を踏まえながら、さらなる考察を展開させます。ＧＨＱ、特にマッカーサーや彼の意を体した参謀や幕僚たちが黒子に徹し、天皇・政治家・官僚・メディアをブラック装置（ブラックボックス）として操作誘導し、日本社会に民主主義を浸透させることに成功した詳細をまとめています。

立憲君主制の国は現在、イギリス、スペイン、オランダ、デンマーク、ノルウエー、ベルギー、タイ、マレーシア、等々世界４２の国々があります。その中に日本も含まれます。日本の君主＝天皇とされる体系には、世界で最も長い2,600年余の歴史があり、さまざまな変遷がありました。

1,945年第二次世界大戦敗戦により、その結果として生まれた「日本国憲法」

第一条の中には、主権の存する国民の総意に基づく国民統合の象徴として、「**象徴天皇**」が位置づけられました。この「**象徴天皇**」には、他の国の「**君主**」には無い、特別な意味を見出すことができます。

一般論としての**立憲君主制**は、憲法によって君主の権限に制限が加えられているものの、極めて主要事項にあって君主の権限は、議会や内閣よりも優越する点があります。しかし「**象徴天皇**」の立場は、司法・立法・行政（三権分立）という国政（政体）に対する権限を有せず、形式上の承諾権＝**権威付与**の追認的役割を担う役目となっています。この点において、権威となれるか、なれないかは、国民統合の象徴たる「**国民からの敬愛や尊崇による総意形成**」が成された存在者であるか、否かにかかってきます。

どこの国においても、**政体権力者**は常に変動しており、恒久性はありません。その中で「**君主**」の**血統**による継承は、唯一**恒久性**を認められてきました。それが「**国王**」や「**王族**」、「**皇族**」たる血統となります。

「**天皇**」が「**天皇**」たるその由縁は、2,600 年余という**天皇の歴史**の長さと、**万世一系**とされる系統の単一連続性の中にあります。つまり、「**日本の歴史を体現し続け、今も継続している**」ことの**歴史上の重さ**であります。さらにこの歴史を国民が支持し、尊崇し続けていることの事実の重さにあります。そして国民統合の象徴たるバックボーン、国民総意の精神的支柱となれる核心こそが、天皇制継続から紡ぎ出された、「**尊崇と権威＝象徴**」の目に見えない「**歴史**」なのでしょう。日本の歴史を体現してきた**天皇と国民総和**こそが、「**國體**」という目に見えない「**虚構の概念**」なのでしょう。

この歴史性に踏み込まず、**時の政治権力**を論ずる、あるいは時限を区切り、切り取って論じることが、**歴史の展開を見誤る要因をつくる**ことになります。特に統治体制たる「**政体**」と、構成者の総和たる「**國體**」との概念区分をもたず、日本社会の歴史を述べることの錯誤です。加えて、**統治権力**（政体）に偏った国家概念としての「**国体**」を位置付けてしまうと、日本独特な「**和の精神**」をともなった歴史の変遷を、読み違えてしまいます。

朝日新聞の記事や、**白井聡**氏の「**国体論**」は、まさにこの特異な視点から論じたものといえましょう。

朝日新聞記事（P-94、95）よりも下に、次なる記事がありました。

『憲法制定を議論する議会では、第一条をめぐる激しい論争が起きた。「**国体**は変わったのか」という追及の矢面に、憲法担当の金森徳次郎・国務相が立った。

万世一系の天皇主権者とする国家体制としての「**国体**」は変更されたが、「**天皇を憧れの中心として国民がつながり、国が存在する**」という意味の「**国体**」は**変わっていない**。金森はこう答弁して審議を乗り切ったが、「二枚舌」と批判された。**象徴とは何か**。定義は定まらぬまま、日本国憲法は 47 年 5 月に施行された。』

日本国憲法制定時における**金森徳次郎**＝憲法担当国務大臣は、自著『**憲法遺言**（けんぽういげん）』の中で、「**国体**」について以下を記しています。

・「**国体**」という言葉は、非常に不明瞭な言葉であって、幾つもの意味が含まれている。

・「**国体**」という言葉を、古い時代の文章では、ことば通りに、国という土地の形の意味に使ったことがある。

・**明治以後になって**「**国体**」という言葉が用いられる場合には、一定の内容をもっておった。一つは、いわゆる教育勅語の中に用いられていた**国体**の文字で

あって、これは前後の関係から判断すると、道徳的な観点から眺めたところの国の**根本特色**という意味にとるのほかはない。

・ところが、法律的な面から見ると、学説的にはおのずから別の意味を持っている。穂積八束博士の考え方を採り上げてみると、氏は、国家には必ず他の国と区別することのできる**根本的特色**があるという前提をとり、国家の根本的特色が消滅する場合においては、この国自体が消滅するという結論をつくった。

・次に、その国の根本的特色当てはまるところの社会的な事実は何であるかという問題にふれて、それは**統治権者**の所在の問題であるとした。例えば、日本では統治権の存在は**天皇**（注＝明治憲法下）にある、従ってこれこそ国の**根本特色**であり、この特色が消滅すれば、日本国自体の消滅になるというふうの説明を加えて、**国体**は永久に変わることなしと断定した。

・この考え方が多くの人々に影響して、「**国体**」という言葉は、本来は法律上の言葉でなく、単純な学問上の用語であったにとどまるけども、それが**治安維持法**が制定される際に、法律用語に取り入れられて、**国体**の変更を企てる者を厳罰に付する旨の規定ができた。

・この法律の意味する「**国体**」とは何であるかといえば、従前の考えを受けて**統治権の所在による国の根本的特色という意味**に解釈せられ、「**国体**を変更する」ということは**天皇の統治権**（注＝明治憲法下）を消滅せしむる意味なりと解釈せられたのである。

・多くの国民は、この教えに従って、**国体**は変わるべかざるもののごとく考えてきておった。

・**昭和の憲法**において、**天皇は統治権の主体ではない**ことを明白に認めざるを得なくなったのであるが、それでは学説に従って日本国家は消滅したのであるかといえば、何人の頭にも**日本の国家が統一性を失ったと理解することはなかった。**

・**ここにおいて、今までの考え方が露骨に馬脚を現して、到底成立せざるものであることが明らかになったのであるけれども、しかし学者の頭がこの言葉の言頭にしみ込んでいるために、いろいろの不明瞭なる見解が現われてきた。**

・**ポツダム宣言受諾**の際においても、日本の為政者の頭に一番大きな問題を供給したのは、**ポツダム宣言を受諾すれば国体が変わるかどうか**という点であり、この**国体**が変更せざることを条件としてポツダム宣言を受諾しようという試みも考えられ、これに基づいて若干の国際的往復文書が生まれるようになった。

・憲法が議会において議論せられた道行においても、**新憲法**によって**国体**は変わったか変わらなかったかということが激しく論議せられ、議会の質問応答の相当の部分がこの問題に費やされたのである。

・**国体は変わっても国は変わらない**という結論が生まれざるを得なくなったのは、その議論の弱点は、**国の根本的特色の実体が天皇主権にあり**（注＝明治憲法同様）**としたところに存在している。**

・**天皇主権はなくなっても、国家が変わったと人々が意識しないことが事実であるならば、天皇主権は国の根本特色ではなかった**、即ち**国体の実体ではなかった**と冷静に判断しなければならない。

・**私の見解によれば、主権が天皇にあるかないかは国の根本特色ではない**と判断するのが**正しいと思う**。従って**この憲法**（注＝新憲法）によって、その意味の**国体**変革はなかったと断定することが自分としては正しい見解だと思う。

・従来の憲法学者の言ったように、**天皇主権が国体の実体であるということを固定させて考え**、即ち治安維持法に使った「**国体**」の意味をそのまま用いて議論を進めるならば、我々は**国体は変革せられたり**といって正しいのである。

・**国体が変わったかどうかの争いは、国体の意味をいかに解釈するか否かによっ**

て定まるのであり、この二つの争いは、実質的にいえば無意味なるものであることに帰着する。

・それでは根本的な意味においての日本の国体は何であるかという問題が起こってくるが、（略）現在の常識から判断してゆけば、歴史的に眺めた日本の国の根本特色は、天皇を国の中に持っているということである。

・歴史を通じて最大公約数的に認められる特色は、天皇が国民感情の中心であるということに帰着する。従って、大多数の人に了解させるためには、国体の実体は、天皇が国民の感情的中心であるといえば十分であろう。

・この考え方が絶対的に国体の内容として認めねばならぬものかといえば、必ずしもそうではないのであって、理論的にはもっと深いところに国体の本義を発見することができるであろうが、現在の実用的見地からいえば、この程度の説明をもって足るものとかんがえられる。

・明治憲法自身には国体という言葉はないのであって、（略）この議論というのは法律家特有の一種の趣味であったかもしれない。

金森徳次郎＝憲法担当国務大臣の別な著作、『憲法随想』の中では、「国体」と「政体」の違いを明確に述べている箇所があります。

明治憲法下の岡田内閣で法制局長官を務めていた時の天皇解釈と、戦後の日本国憲法制定担当大臣として、天皇についての国会答弁内容が、過去の学説を変更したことに対し、「変説」と激しく非難されたことが記されています。つまり、明治憲法下では、天皇が統治権の総攬者であることが「国体」の本義なり、と説明していたにかかわらず、新憲法制定議会では、前記のように異なった説明と結論を導いていることを「変説」とされて非難されます。

「しかし人間は生きていて、常に変化していくものであるから、人間の思想も常に進歩して行く。その意見の変化が良心的な根拠をもっているならば、過去と現在における知識識見に、分量の大小の差が起こって、意見を変更することは何ら非難すべきことではない」、としりぞけます。

大きな政治的変化を経た日本の国民の考えとして、総攬者が変わらざるものであると考えたことは、すこぶる想い到らざるものがあったと反省して、新たな考えを述べています。

・要するに日本国民の精神的結合の中心には天皇があるという歴史的関係があり、この点において「国体」という観念を築き上げて、結局「政体」は変わったけれども、「国体」は変わらないという結論としたのである、とします。

敗戦直後において、「国体」と「政体」を使い分けた考えが示されことは、当時として画期的なできごとと考えられ、私も右の見解に賛意するものです。

明治憲法下にあっては、天皇＝総攬者（統治して一手に掌握する者）＝政体＝国体であったものが、昭和の日本国憲法下では、天皇＝象徴（国民の総意）＝国体となり、国民主権＝国民の代表者（議員内閣）＝政体と、役割分担したことを、金森大臣はすでに認識されていたことになりましょう。

伊藤智永氏の著＝『「平成の天皇」論』（2,019. 04. 20、講談社、1刷）においては、元・皇學館大学学長＝田中卓氏（1,923～2,018年）の考える「国体」を採り上げています。

・昭和天皇の英断で旧時代の側室制度がなくなったのに、男系男子継承に拘る立場が動揺を招き、結局は皇統永続を危うくするのだと指摘する。

・日本の皇統を見れば、男系男子が基本だったのは事実だが、一方で十代八人の女帝が実在し、それぞれ立派な働きをされた。日本で女帝を認めない根拠は何もない。男系とか女系とか言い出したのは明治に西洋の学問が入ってからで、それ以前に議論になったことはなかった。男系とか女系の区

別より、父母で一家をなすというのが日本古来の考えだ。それを母系（女系）と言っても男系と言っても問題とはならない。

・男系男子も実は近代化に伴う「創造された伝統」の一つだ。

・皇室典範や男系男子論の底流にあるのは、中国古代に始まる男尊女卑思想であり、日本では腕力優位の武士の時代が長かったから広まっただけの話で、日本の伝統でも何でもないと断じる。

・田中卓の女性・女系天皇説は、男女の優劣や尊卑を認めない。かといって、近代の男女同権論に立脚したものではない。あくまでも皇室史観を貫いた結論である。皇室の祖先神である天照大神（女神）が天上から地上に降りる皇孫に与えた「天壌無窮（天地と共に極まりなく永遠に続く）の神勅（神の命令）」、すなわち「日本国は天皇が永遠に統治する」という国体（国柄・国のかたち）の護持を何より重んじる。それを表わす「万世一系」の皇統を守るのに男系女系の差別は無用であり、愛子さまが皇太子・女性天皇となるのが道理であるという考え方だ。

・だから、「憲法改正よりも、まず皇室典範改正で女性・女系天皇を認めることこそ急務だ」と主張する。

右における「国体」は、国柄・国の形としたる日本を、天皇が永遠に統治するという、「政体＝国体」一体論となっています。第九代開化天皇から、第十代崇神天皇へと皇位を移譲したことを、「國譲り」とします。その際の護國体制として構築したのが、「政体＝天皇＝騎馬人男系」、「國體＝皇后＝海人女系」の分担体制とされます。そして崇神天皇の國體参謀総長となったのが第一世・武内宿禰であり、武内宿禰は役職として代々引き継がれ、現在に至ります。

※「武内宿禰」が正式で、鎌倉時代に「竹内宿禰」に書き換えられたらしい（P-53）。

現在は第七十三世・武内宿禰＝竹内睦泰氏が継がれています。竹内氏は、欠史（世）八代天皇は実在したとされます。神武天皇の代から「統治王」と「祭祀王」が分かれていて、「祭祀王」の方が上席であったと伝えられている、とされます。（『正統　竹内文書の謎』P-52～53）そのことを前記に当てはめて考えれば、統治王＝政体天皇 ＆ 祭祀王＝國體天皇、と読み替えることができます。さらに同書で、初代祭主は神武天皇の皇后＝媛蹈鞴五十鈴姫（ひめたたらいすずひめ）であったことから、祭祀王＝國體天皇＝皇后陛下の役割、であったことになります。以後、天皇の近親者によってこの祭祀は引き継がれます。第十二代景行天皇の詔により、十一代祭主＝屋主武雄心命（やぬしたけおこころのみこと）の子孫が祭主を代々引き継ぐこととなり、武雄の子供が第一世・武内宿禰になったとされます（同書P-53）。

そのことから、祭祀王＝國體天皇＝皇后陛下 ↑ 武内宿禰＝國體参謀総長、という系統が理解できます。

これらのことにより、初代神武天皇以来、天皇の役割は二つに分担されていたことが理解できます。

❶ 統治王＝政体天皇＝天皇陛下 ↑ 貴族・公家、武家

❷ 祭祀王＝國體天皇＝皇后陛下 ↑ 武内宿禰＝國體参謀総長

平城京へ遷都（710年）した奈良時代からは、天皇周辺での貴族や仏法僧らが政治権力を握り、天平文化が栄えます。（藤原氏、橘氏、道鏡ら）

武家の力が強くなった鎌倉時代（1,192年）から明治維新（1,868年）に至るまで670年余の間、政治は武家によっておこなわれます。

統治王を担うべく天皇は名目的なお飾りに祭り上げられ、統治・政治権力の

実権は貴族や武家が担います。

祭祀王は権威として、隠れた存在となります。

王政復古をかかげた明治維新から、第二次世界大戦敗戦に至るまで、憲法の下では天皇が君主＝主権者となり、政体天皇（統治王）の位置を取り戻します。

そして第二次世界大戦敗戦（1,945 年）の結果、ＧＨＱによる欧米的な民主主義が強要され、「天皇」は「君主」から「国民統合の象徴」へと立場が変ります。

では、「象徴天皇」とは、いかなる役割を担うことになるのでしょうか。

前記、❶、❷の系統から「象徴天皇」を考えてみると、新たな認識「象徴天皇＝天皇陛下＋皇后陛下＝家族（国民統合）＝祭祀王」の意味が見えてきます。

戦後民主主義は国民主権となり、国民から選挙で選ばれた代議員により、政治はおこなわれています。天皇は政治権力を行使しないことを憲法に定められ、もはや、

❶「統治王＝政体天皇＝天皇陛下」でないことは明らかです。

ではもう一方の、

❷「祭祀王＝國體天皇＝皇后陛下」だけかといえば、天皇陛下の存在が不要になってしまいます。

つまり、「象徴天皇」とは、本来皇后の役割であった國體護持を、天皇・皇后・そして家族として担い、国と国民、世界と人類、の安寧と幸せを願い祈る精神的中核な存在。ために古来の伝統にのっとり祭祀をおこなう「祭祀王」、と理解することができます。

象徴天皇 ＝ ❶ → ❷ ＝ 天皇陛下＋皇后陛下＝家族（国民統合）＝祭祀王

日本国憲法第一条

「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく。」

第百二十五代・平成天皇は、「象徴天皇」の意味を次のお言葉で実践しました。

「国民に寄り添い、安寧と幸せを祈る」

第百二十六代・令和天皇も皇位継承にともない、平成天皇のご意思を引き継ぐ決意を述べられました。

つまり新たな「象徴天皇」とは、統治の「政体」権力行使をおこなう主権者＝君主ではなく、その存在（在ること）によって国民総意の尊崇を得、その存在によって国民統合の柱となり、国の護持を図っていく中核の存在、といえましょう。このことを新たに表象する『国体』として、次なる理解を深めることが適切と考えるのです。

『国体（日本国）＝国民（主権・政体）＋象徴天皇（家族・祭祀）』

現在においても、「國體」と「政体」を分けた考えは定着しておらず、国民の常識になっていません。相変わらず、政体＝國體＝国体のごちゃまぜが常識であり、明治以降の歴史を日本の歴史に短絡しています。

それゆえ、白井聡氏の「国体論」や朝日新聞記事となっているのが現状です。

巻頭に示したように「国体」とは、次の二つの要素、❶＋❷＝「国体」となるのが適切と考える次第です。

❶ 象徴天皇を戴き、国民が統治する政体（国民主権における象徴天皇）

❷ 祭祀天皇を戴き、国民が生活する國體（国民家族における象徴天皇）

第四章　トインビーの文明史観から

【図説　歴史の研究】

原著・対訳 ＝ 鈴木弥栄男（2017年）

第Ⅰ部 ： 歴史のかたち

1．歴史思想の相
2．歴史研究の領域
3．用語の定義
4．人間事象の包括的研究の必要性
5、過渡期の社会
6．文明の比較研究
7．ヘレニズムモデルと中国モデル
8．ユダヤモデル
9．文明概観

第Ⅱ部 ： 文明の始源

10．文明始源の特徴
11．文明始源の因子は人種か
12．文明始源の因子は環境か
13．挑戦と応戦
14．卓越性の辛さ
15．荒廃した国土からの刺激
16．不利な立場からの刺激
17．未成熟の文明

第Ⅲ部 ： 文明の成長

18．成長が止まった事例
19．成長の判断基準

第Ⅳ部 ： 文明の成熟

20．決定論に説得力はあるのか
21．擬態の無意識性
22．役柄の逆転
23．アテナイとベニス：短命に繋がる自己偶像化
24．東ローマ帝国：短命に繋がる自己偶像化
25．ダビデとゴリアテ：短命に繋がる自己偶像化
26．ローマ教皇庁：勝利の陶酔

第Ⅴ部 ： 文明の崩壊

27．社会崩壊の特徴とその兆候
28．内部から生まれた無産階級
29．外国から来た無産階級
30．魂の分裂
31．崩壊への挑戦

第Ⅵ部 ： 世界国家

32．世界国家は目的なのか、それとも手段なのか
33．伝搬性と平和の恩恵
34．コミュニケイション
35．言語と文字
36．首都
37．文官制度
38．世界国家に未来はあるか

第Ⅶ部　：　世界教会

３９．癌なのか、それとも佣

４０．特別種なる社会か

４１．幻像への社会的影響なのか、それとも実在への社会的影響なのか

第Ⅷ部　：　英雄の時代

４２．蛮族の過去

４３．幻想と現実

第Ⅸ部　：　時空での諸文明の接触

４４．同時代の文明の出会い

４５．近代の西欧とロシア

４６．近代の西欧とアジア

４７．アレクサンダー後のヘレニズム社会の出会い

４８．同時代諸文明の出会いによる社会状況の変化

４９．同時代の文明との出会いによる心理状況の変化

第Ⅹ部　：　特定の時期での諸文明間の接触

５０．制度・法・哲学のルネサンス

５１．言語・文芸・視覚芸術のルネッサンス

５２．宗教のルネッサンス

第Ⅺ部　：　歴史をなぜ研究するか

５３．歴史思考の本質

５４．行動する歴史家たち

アーノルド・ジョセフ・**トインビー**（1,889～1,975 年）はイギリスの歴史学者です。代表作は『**歴史の研究**』であり、1,934 年 45 歳の時に第一巻を出版、1,961 年 72 歳で最終版となる第十二巻を出版します。

『**図説　歴史の研究**』は 1,972 年、オックスフォード大学出版部から発行され、写真入りのダイジェスト版の様相です。この度は、「**はじめに**」で記したように、**鈴木弥栄男**氏の七年間にわたる対訳、**2,017 年 11 月 20 日版**を参照しています。

トインビーは西欧中心の歴史観でなく、**イスラム教**、**仏教**、特殊な存在としての**日本**に着目していたとされます。

前記の目次項目を見るように、「**歴史**」とは「**文明**」の歴史であり、その「**文明**」は、**始源**（第Ⅱ部）→**成長**（第Ⅲ部）→**成熟**（第Ⅳ部）→**崩壊**（第Ⅴ部）という経過をたどります。そして「**文明**」は、「**国家**」としてまとまり、まとめるためには「**宗教**」を用いるのが最適です。しかし「**国家**」と「**宗教**」概念で、世界は一つにまとめることができるのか。そのために「**諸文明**（＝諸国家）」は接触しますが、共存の下で友好的な**接触**（文化交流）か、妥協なき破壊的な**接触**（戦争）か。接触であるから、時空は同じと考えて、どことどこ、何と何が、接触するのか。同書は、それらを見事に整理し、まとめています。

しかし 1,972 年出版から、現在は半世紀が過ぎています。この半世紀の間のイノベイション（Innovation）は、果たしてそれまでの延長線上で同じに考えてよいのでしょうか。

昨今の**デジタル制御電子機器と人工知能技術**は、十八世紀半ばから十九世紀にかけて生じた「**産業革命**」以上に、「**人間知能を変革する**」と私は考えます。**産業革命**は**社会を変革**（イノベイション）しましたが、**デジタル制御電子機器と人工知能技術**は**人間そのものを変革**し、**人間をロボット化**するような働きをします。

このような視点から、**トインビー**の文明史観は**洗い直す必要があるのではないかと考えるのです。**

一・文明の始源

トインビーは**文明始源**の特徴を、「**岩棚の登攀**」に例えています。トインビーが登山家であったか分かりませんが、ヒマラヤでの高所岩壁登攀をおこなっていた元クライマーの私から観ると、あまり適切な表現ではないように思えます。**文明進化**を無限な**岩壁登攀**に例えますが、無限な岩壁など地球上に存在せず、**宇宙の無窮さを矮小化**してしまいます。

トインビーは文明の区切りとして、岩壁にある**岩棚**を設定しています。クライマーは区切りとなる岩棚から岩棚までの間を**ピッチ**（区間）と称していますが、各ピッチを一つの文明期間とする設定は良いとしても、クライマーの実感からすれば、岩棚理論は一つの文明期間がとても短く思えてなりません。

ある一つの岩棚から下を見下げると、それまで積み重ねてきた人類の歴史は計り知れなく深く、他方、同じ岩棚から登るべく上方を見上げると、これまた計り知れない未来予想が待ち構えている例えは、その概念設定を理解することができるとしても、人間思考をスケールアウトした、**ミニチュアモデルな感覚**を覚えます。

文明の指向性は「**岩棚の登攀**」の例えでなく、「**文明の特性は、始源から一方向性をもった進化するのみの性質をもっている**」、と再定義することを提唱するものです。

その構造図解は、**【文明・文化・人の意識＝環境の複素**（数）**的な世界構造**（本書P-129）**】**における、**X軸方向**への展開を表わします。**X**、**Y**、**Z**軸が交差するゼロ点を宇宙の始源（ビッグバン）として、文明進化を**X軸方向**へと展開すれば、無限な一方向進化を表現することができます。**文明進化**は、過去を振り返った知性による自省が原動力となるのでなく、「**より斬新なもの、より良いもの、より・・・・・**」という人間欲求の中に備わっている**性向**といえましょう。

他方で**知性**による**自省**は、文明進化の方向性やスピードに対する**フィードバック要因**となり、進化の内容（質）や進化速度の調整役を果たします。そのことは**文明**と異なり、先の**【文明・文化・人の意識＝環境の複素**（数）**的な世界構造**（本書P-129）**】**において、**Y軸方向**を成す「**文化**」と位置づけます。

文明と**文化**は同じ平面上（二次元平面＝社会）にありますが、その位相は**文化が遅れ**ます。つまり**文明進化**は、人間の性向として常に**文化**よりも**先行**します。そして**進化**を**人間性**から振り返って**調整**（フィードバック）する**文化の役割**は、常に**進化の後追い**位置（遅れ位相）となるからです。

トインビーは**文明始源**を、「社会は活気のないものから躍動感のある状況へと変遷し、その変遷を通して新しい文明が産み出される（『図説　歴史の研究』P-123）」としています。その人間エネルギーの源泉は、「**人間性**」という、他の動物とちがって「**意識**」と「**意志**」を獲得したことにある、とトインビーは指摘します。

この「**人間性**」の特徴は、人々に**希望**をもたせる宝ものである半面、**危険**に陥れるような苦しみも招く、二面性があるとします。そして一人ひとりは自分自身と、その他の人々との間に空間を分け（バリヤーを築き）、自分自身を中心に据えて人々が周縁をとりまく意識の構造により、我儘な自我が強くなると宇宙の調和を引き裂き、破り、乱すのだ、とします。

このような**人間進化の構造**にあっては、目的たる**進化のゴール**が見えません。そのゴールを見据えるには、相対的に強制力があり、知的なもので、かつ徳のある限界を超越した、**神の目線**が必要だとします。さらに、「人間性の徳のあ

るゴールとは、人間自身の利己心的目的を追求するのではなく、**自己の意思を神の意志に一致させる**ことである。（『図説　歴史の研究』P-124）」とします。

このような**信仰**によるゴールの捉え方は、インド哲学や宗教にある**多神教**（ヒンドゥー教）の神々と同類なものである、と**トインビー**はいいます。

トインビーの指摘にはありませんが、**儒教**でいう「**天＝聖人＝皇帝**」の**聖人**は、天賦の能力を備えている「**天＝聖人＝皇帝**（人）」であることから、人間集団の外部に形而上的な神や天を設定し、その神や天とする一点から地上の人々が崇め観る視線を収束させる円錐思考は、神への信仰と同じ「**崇拝様式**」が一致します。登山家が山頂から見下ろす下界への視線も、類似な**円錐視線**です。

逆説として、大衆が各々の視点から一点を見つめる対象として、形而上的な**思想**や**宗教**の存在があります。人々が対峙して見つめ合う**相対的関係**からは、「正・反」や「好き・嫌い」の**二元論解決**となります。しかし人間の知恵は、異なった立場であっても共通な目標や理想を持つことにより、**円錐的**な**三次元解決**を図ることが可能となります。**相補的関係**として相互に補い合う（カップリング）ことにより、**円満**に近づくからです。宇宙における物質の在りようは、対称性（CP対称性）であるとされ、対称におけるカップリングが崩れたところで、「**物質**」として残される、と物理学は説明します。それゆえに、宇宙の全エネルギーに占める「**物質**」の割合は、たったの**4.9**%でしかないとされます。

一方**トインビー**は、**ニヒリズム**を唱えて「**神は死んだ**」として神を否定した**ニーチェ**の思想、神に代わる「**超人**」思想に触れていません。**ニーチェ**がいう「**人**→**超人**」と、**仏教**の探求や修行をとおして人間自身が変身していく「**人**→**仏**」は、人間の究極な思索や修行によって「**超人**や**仏**」になるという方法論が似ていますが、両者はともに「**信仰**」の範疇でなく、「**思想**」の範疇といえます。

信仰と**思想**のちがいは「**合理的理解・説得・納得**」にあります。**信仰**はたとえ不合理、不条理であっても**信じ**ますが、**思想**は**合理的体系**をもって理解・納得し、不合理・不条理を信じることはできません。

トインビーの文明思考の始源は、**ヘレニズム文明・文化**の引用が多くあります。**ヘブライズム**（ユダヤ教、キリスト教）と**ヘレニズム**（ギリシャ文明・文化とオリエント文明・文化の融合＝合理的精神を基盤とした人間中心主義）は、ヨーロッパ文明・文化の二大源流であることを踏まえ、**両者の差異を念頭に**置かなければなりません。

その意味では第Ⅰ部「**歴史のかたち**」において、**ヘレニズムモデル**、**ユダヤモデル**、**中国モデル**に分けて論じていますが、むしろ世界の四大文明圏といわれる宗教的基盤からなる、次なる分け方が適切と考えるのです。

（2,016年の世界人口　＝　約７４億人として）

❶ **キリスト教文明圏**　＝　２５億人　↓　聖書　↓　一神教＝キリスト　↓　予言者＝モーゼ

❷ **イスラム教文明圏**　＝　１５億人　↓　コーラン　↓　一神教＝アッラー　↓　予言者＝ムハンマド

❸ **ヒンドゥー教文明圏**　＝　１０億人　↓　ヴェーダ　↓　多神教　↓　カースト制と輪廻

❹ **儒教文明圏**　＝　１３億人　↓　五経　↓　天命＝皇帝　↓　君子＝官僚統治組織

❺ **その他文明圏**　＝　１１億人

トインビーは文明検証を**ヘレニズム文明・文化**から始めますが、少なくとも**メソポタミア文明**へ、さらにそれ以前の**ウバイド文明**まで遡るのが、本論のスタンス。現代文明の始源は、それらから始まるという定説があるからです。

トインビーは、**文明の交代劇**は一種のリズムをもって生じているとし、そのリズムは宇宙の本性に根ざす本質的なものであることに注目しています。

ヘレニズム文明の科学者＝エンペドクレスの言葉を引き、『私たちが宇宙と直面して経験的に気づいている変化が、お互いに**補足的**であると同時に、**対立的**な二つの力、つまり引き潮と満ち潮が交互に繰り返す事象であるとし、統合する力を「**愛**」と呼び、崩壊する力を「**憎**」と呼んだ。』ことに同意します。

これに類する考え方として、中国の「**陰陽思想**」に言及します。**陰陽**の二項対立を、**愛憎**の二項対立に等しく見たてます。

しかし**トインビー**は、宇宙の一年サイクルの諸現象を四季で表現する中国様式に気づきますが、陰＝冬、陽＝夏、その間にある春と秋の微細な調整機能には言及していません。

世界の国々において、日本のように四季の微妙な変化を愛でる国は少なく、雨季／乾季、夏季／冬季のような二項対立的気候変化をする国の方が多いからなのでしょうか。

トインビーを含め、**二項対立思考＝デジタル思考**（１／０）の多くは、**一神教**から生まれた文明・文化に見出されます。

デカルト（1,596～1,650年）が「**コギト・エルゴ・スム**（我思う、ゆえに我あり）」として、哲学における主体／客体、主観／客観を分離したように、**二項対立思考**は、春や秋の中間的微妙な存在（周縁、辺々、グレーゾーン）を理解、認識しづらくします。

その点において、**ヘーゲル**（1,770～1,831年）の「**弁証法**」は、「**正／反→合**」とした二項対立だけでなく、**正／反**の二項から**議論**（弁証）によって**合意**に到達しようとする、知性の調整・調和作業を含みます。**弁証法**は二項対立を乗り越えて妥結する、人間らしき方法論として、もう一度見直す必要があります。

このように**統合**する過程においては、「**愛情**」という**心の包容力**を要し、**破壊**する力には「**憎悪**」という**心の反作用**があることは、**トインビー**と同じ考えです。

現代の民主主義は、この「**弁証法**」を忘れ去ってしまいました。

弁証法はヘーゲルによって定式化されますが、頭でっかちな**観念論**だとして、マルクスは「**唯物弁証法**」へとアレンジします。そしてスターリンは政治手法に用いて**共産主義**の支柱としますが、教条主義に陥ります。マルクスは「**資本論**」としてさらなる展開を図り、資本主義的生産様式、余剰価値の生成過程、資本の運動諸法則を明らかにします。

第二次世界大戦後の「**東西冷戦**」は、共産主義陣営と自由主義陣営との二項対峙となりました。しかし1980年代後半始まった「**ペレストロイカ**（再構築、改革）」によりソビエット連邦が崩壊し、共産主義陣営は縮小となりました。

東西冷戦に勝利した**自由主義**陣営は**一強**となり、その後「**〇〇ファースト**」と自称して**新自由主義**を主張、展開します。新自由主義は多数の民意をもって政治力を形成し、**数の論理**をもって少数の立場を疎外、**切り捨て**ていきます。

数の論理がまかり通る**デジタル社会**では、グレーゾーンの曖昧さがなく、黒か白か、賛成か反対か、**二項対立の勝者が権力**を握ります。

しかし人間が人間たる宇宙での存在は、決めがたい**グレーゾーンな多様性**の中にこそ存在しています。人間の生存は、確率的偶然によって生じた自己組織化の一例でしかありません。つまり**二項対立だけでない、多様なる価値の許容こそが、人間を人間らしくしている**、という理解です。

二・ 文明始源の因子は人種か、環境か

西欧の**二項対立思考**＝**デジタル思考**は「**二分法**」を生み出し、一方へと決着をつける（ディベート）ことが**習慣**づけられます。**習慣**が積み重ねられると**習性**と化し、思考の基盤に組み込まれていきます。たとえば、人類を**白人種**と**有色人種**に分けることや、**キリスト教徒**と**異教徒**とに分けること、敵か味方か、等々の**二分法**が無意識のうちにおこなわれます。しかし実際の白人種は人類の中で少数派であり、多数派の有色人種の色素は多種多様に分かれます。

この**二分法**による一見乱暴な分別は、ものごとを単純化して分かりやすくする半面、「**正／反**」のような**対立**を生み出す原因となり、やわらかな**統合を妨げ**ます。「**敵／味方**」の対立は**争いや憎悪**を生み出し、人類相互の殺し合い（戦争）は今も続けられています。この思考の延長には「**適者生存**」なる優勢保護思想が生みだされ、環境に不適応者となる少数者や異端者を切り捨てていきます。

このような「**二分法思考**」は、ウバイド ～ メソポタミアから発してユーラシア大陸北方や西方に拡散していった「**アーリア系騎馬民族**」の、生き残るべく手法でなかったかと考えられます。大陸の厳しい**生存環境**は、常に「**喰うか、喰われるか**」の**二者択一**を迫られます。一時の曖昧な判断は、部族全滅の危機を招きかねません。常に緊張を強いられる生存環境の中で、生き残るべき選択の決断は、一瞬で下さなければならなかった**環境適応力**が、「**二分法思考を助長する人間性**」を育んだと理解することができます。

他方、ウバイド ～ メソポタミアから発してユーラシア大陸南岸伝いに拡散していった「**スメル系海洋民族**」は、温暖な気候環境の中で食料確保は大陸ほど厳しくなく、農耕や漁労で自活生活が営める**環境**にありました。「**喰うか、喰われるか**」の二者択一を迫られる状況には乏しく、「**自主、自立、温厚な、もう一つの人間性**」を育んだと理解できます。

トインビーは**文明始源の因子**に、「**人種と環境**」をあげました。**人種**の括りの中核として、「**宗教**」を考察しています。西欧の多くは、**宗教**＝**キリスト教**であり、キリスト教は一神教ですから、**二項対立思考**＝「**神を信じる**（宗教）／**神を信じない**（無宗教）」が合致してきます。しかし宗教文明圏は前節で考察したように、キリスト教だけではありません。

キリスト教文明圏は世界の約三分の一となり、現世人類の**中核文明**でもあります。なによりも**科学を発展**させ、**軍事力最強**であることが、政治、経済、産業、文化を主導する力の源泉になっています。

その後を追っているのが、**中国**です。昨今の**軍事力強化**や「**一帯一路構想**」は、その証となります。**天**＝聖人＝**皇帝**→**習近平**、率いる**儒教思想国家**＝**中国**です。

習近平主席は古代**シルクロード**に習う、**アフロ・ユーラシア大陸**（アフリカ大陸＋ユーラシア大陸）を結びつける、「**一帯一路構想**」の実践を始めています。この構想は経済圏の拡大が主眼ですが、その結末を先取りして考えると、今の中国社会でみられるように、**主権者**＝**皇帝**（習近平）が、**君子**（共産党官僚機構）をつかって、宗族（一族）・親族（血統）らの**四民**（官僚、農民、職人、商人）を支配する**儒教の統治機構**そっくりです。この系統に帰属を拒む**少数民族**（チベット族、ウイグル族、等）は、**弾圧排除**されています。

儒教社会における「**自由の統制**」（道徳と政治）は、「**基本的人権の自由**」をかかげる**民主主義国家**との整合にとり、不整合な問題点となります。アメリカ合衆国に対抗しつつあるこの中国の行方は、世界人類の未来を明るいものにするのか、それとも一定の領域確保で収束するのか、私は後者となる予想とともに、この動きが早く収束することを願うものです。

トインビーは、人種のちがいが、文明のちがいを生じることを「人種理論」で説明し、その人種が住み着いた環境がその文明を発祥させることを、気候学的、地政学的、水路学的諸条件から、「環境理論」により説明できる、とします。

しかしそれらは「人間適応」の表象的な問題であり、文明発祥の源泉エネルギーたる説明にはなりません。

現代、ＤＮＡから検証する人類学者にとっては、「人種概念」が成立しないほど「人種単一性が失われている」、とされます。

第二章で述べるよう、六万年前にアフリカを出立して世界へと拡がった現生人類（ホモ・サピエンス）は、その過程で交雑・混血のハイブリッド化を複雑に重ね合わせた結果、「種」の純粋性を失い、「人種」で分かつことができないほど混じり合ってしまいました。それゆえ、「人種」に代わる人間集団の呼び名を、「民族」としています。

人類が文明を発祥させた源泉エネルギーとは、類人猿とホモ・サピエンス（現世人類の種の学名）に見られる違いのように、知性と知恵をもって自然を人工化し、自然に適応してきた生活様式の中で、「より〇〇・・・」という「欲望の進化」を実践してきたから・・・ではないでしょうか。その中で、「知性と知恵をもって自然を人工化して生存に活用してきた生活様式」こそが「文明」と呼べ、一方で「より〇〇・・・」という「欲望進化の多様な価値意識とスタイル」を、「文化」と表現し直すことができます。

◆　文明の始源　＝　「より〇〇・・・」とする進化の欲望を、知性によって自然を人工化し、生存の利便性に活用してきた生活習性

◆　文化の始源　＝　多様な欲求を知恵により、さまざまな喜びの様式を編み出して楽しむ生活習性

ホモ・サピエンスが知性と欲望を育んできたこと。そのことにより「文明」が発祥し、発展してきたこと。さらに欲求を満たす喜びを得てそれを「文化」と呼んで享受すること。人種や環境は文明と文化の属性に大きな影響を与えるものの、発祥のエネルギー始源は、人類が体得してきた知性（理性）と欲望（欲求）が源泉であるという考えに至ります。

そして現代、欲望が高じて人間の手に負えない原子力エネルギーを生活に活用し、原子力発電と核爆弾に至っています。原子力発電における放射性廃棄物の処理手段は、地中深く埋設する手段しかありません。核爆弾を行使する核戦争になれば、人類が滅亡するほどの貯蔵量をすでに持ってしまっていること。

これら人類知能が果たした結果は、人類知能で解決しなければなりません。「文明」のもつ一方向進化へのブレーキをかけるのも、アクセルを踏むのも、これまた人類の知恵がおりなす「文化」の「フィードバック効果」にあり、原子力利用については今、ブレーキを踏む時です。

十八世紀、フランスの啓蒙思想家、ジャン＝ジャック・ルソー（1,712～1,778年）の名言、「自然に還れ」は、人間知性が自然を搾取して得た文明生活を振り返り、文明によって堕落したとみなされる、「自然人」たる人間本性を思い起こさせようとする思想です。

ルソーは『人間不平等起源論』、『言語起源論』、『学問芸術論』、等で展開させました。

カントの思想が主体と客体とを分離する意識づけを果たしたとき、自然を意識する人間は主体となり、自然は客体として対象化されました。

以来「文明」とは、主体が客体を搾取・加工する人工化にほかなりません。

そのことに行き過ぎ、人間も自然の内にあることを忘れてしまいそうな人間の心を批判して、ルソーは「自然に還れ」としたのです。文明進化の一方向性は、

中世においても気づかれていたように、**行き過ぎた人工化**は、自然の中の一生物である人間の、**人間たる存在を忘れ去ってしまいます。**

自然を人工化して生存に活用してきた知性は、一神教社会のもう一つの面、「**神と対峙**」する**ニヒリズム**を生み出します。ニヒリズムが高じて**ペシミズム**に至ると、「**生まれてきて生きるよりも、生まれてこないか、死んだ方がましである**」とする悲観主義をも生み出します。ペシミズムは発展しませんでしたが、ニヒリズムは自然における人間性の追求から、宗教ではない思想を発展させます。その代表格は**フリードリヒ・ニーチェ**（1.844～1.900 年）であり、先にも引用した「**神は死んだ**」の名言を残します。

ニーチェは「**神**」に代わる理想像を、「**超人**」に見立てます。その思考はすでに、仏教の中にありました。仏教は人間が精進修行して悟り（涅槃（ねはん））を得、「**仏**」になるという物語です。「**超人**」は究極な「**無**（ニヒル）」の世界での存在無意識ですが、「**仏**」は究極な「**空**（涅槃＝ニルヴァーナ）」の世界の**存在無意識**に類似しますが、方法が異なります。

仏教は**宗教**とされていますが、人間が精進修行により仏に化身するという**システム**であり、信仰に値する**神がいない**ことから、宗教ではない**思想**といえます。

ニヒリズムも人間の究極な思考によって**超人へと化身**する**システム**であり、行為よりも思考の面が重くなるゆえに、**思想**と呼ぶことができます。

一神教＝その一つ、**キリスト教**における主権者は**ゴッド**（神）であり、人間は**原罪**を負って生まれるゆえに**神の許し**を乞うて**祈る**庇護者となります。**祈り**を持続することは、**神**（守護者）**と自身**（庇護者）**との信仰契約**を果たすことになります。その結果は終末における**最後の審判**で、**救い**となるか、**破滅**となるか、**祈りの成果**が問われます。この**システム**における信仰**契約**は**ギブ＆テイク**であり、仏教でいう究極の「**空**（涅槃＝ニルヴァーナ）」とは異なります。

トインビーは、歴史の研究途上で、次のような反省をします。

『風習や習慣の惰性、人種、環境という霊魂のない脚本を用いて私は探求し、さらに因果という決定論的な観点から思考しながら、現時点まで調べてきた。

これらの機動作戦は次々と失敗に終わってしまった今、こうして相次ぐ失敗が何か、方法論に誤りあるのではないだろうかと、考えさせられた。

調査し始めた時から、「**無感情の誤謬**」に嵌らないように警戒していたのに、私は多分「**無感情の誤謬**」の犠牲になってしまったのであろう。生物の研究であるところの歴史的思考に、生命のない自然について考察しようと考え出した**科学的思考方法**を適用したことが、誤りではなかっただろうか。』（『図説　歴史の研究』、P-142～143）

科学的推論の方法には、次なる二つの「**方法**」があります。

❶ **帰納法**　＝　個別的・特殊な事象から、一般的・普遍的な規則や法則を見出そうと推論方法

・前提が「**真**」であっても、結論が「**真**」であるとは限らない。

❷ **演繹法**　＝　一般的・普遍的な前提から、個別的・特殊な結論を導く推論方法

・前提が「**真**」であれば、結論も「**真**」となる。

科学的思考をおこなうにあっては、次なる三つの「**理性の限界**」がともないます。（『理性の限界』、著・高橋昌一郎）

❶ **社会科学**（選択）の**限界**　＝　**アロウの不可能性定理**

・完全に民主的な社会決定方式＝選挙等＝は存在しない。

❷ **自然科学**（実在と相補）の**限界** ＝ **ハイゼンベルグの不確定性定理**

・ミクロの世界 ＝量子物理学＝において、人間の観測では測定しきれない限界がある。確率的な予測は可能。

・電子の位置と運動量は原理的に不確定であり、未来の位置と運動量を予測することも不可能。

・電子の**実在**＝**位置**（粒子性）と**運動量**（波動性）は、**相補的**関係により、**統合**されて**効果**（対消滅＝相殺消滅して別なエネルギーへと転化＝代謝）を成す。

そもそも、宇宙における全エネルギーのうち、「**物質**」が占める割合は**５％未満**でしかなく、**９５％**以上は暗黒物質（ダークマター＝26.8％）と暗黒エネルギー（ダークエネルギー＝68.3％）であると、量子物理学は解明しました。

「**物質**」による**科学の証明方式**は「**客観的**」とされますが、その**客観的証明の正確度**は、全宇宙エネルギーの**５％未満な証明**でしかなく、**９５％以上は未解明**ということになります。

「**主観的**」と呼ばれる個別な観測成果（感受性）は、科学の証明から排除されます。「**主観**（感受性）」は**帰納法**によるところの個別な「**真**」ではありますが、個別な「**真**」から推論した結論が、必ずしも普遍的な「**真**」を導くとは限らないということだからです。

一方、「**客観的**」と呼ばれる普遍的「**真**」を組み合わせた、演繹的推論による結論もまた「**真**」となります。しかし、その「**真実**」（科学の証明対象）は、宇宙のたった**５％未満**な「**部分的真実**」でしかありえません。科学の証明力は「**部分の真**」であり、「**総体の真**」は依然と分からないことを再認識する必要があります。（科学万能ではあり得ない）

❸ **形式科学**（認知論理）の**限界** ＝ **ゲーデルの不完全性定理**

ゲーデルは**数学の世界**において、「**真理**」と「**証明**」が**完全には一致しない**ことを証明しました。

・**真理の対応理論** ＝その論理が事実と一致すれば「**真**」であり、一致しなければ「**偽**」となる。

・**命題** ＝「**真**」か「**偽**」を決定できる**事実**

・**命題論理** ＝複数にわたる「**命題**」の関係性

・**公理**＝だれもが疑いなく受け入れる「**自明の共通概念**」

・**定理**＝公理から出発して、論理的な推論によって説明される「**新たな命題**」

・**述語論理** ＝命題の主語、述語の関係を明確に表す（例＝量化命題は数値記号化する）

・**述語論理の完全性定理** ＝述語論理においては、全ての「**真理**」が公理系の「**証明**」と同等となる

・**自然数論の不完全性定理**＝数学の世界では、「**真理**」と「**証明**」が同等でない（数学の世界では、公理系で汲みつくせない「真理」が存在する）

・**反証可能な命題**＝証明可能な「**命題**」を否定する「**命題**」

・**完全**＝全ての「**命題**」が決定可能である状態

・**不完全**＝「**完全**」以外の状態

・**ゲーデル数化**＝論理的命題を、数学的命題と同じレベルで扱う方法。**自然数論**（算数）内部の全ての命題を、素数による一定の規則に従って、それぞれ固有な**自然数**（ものを数える言葉＝０、１、２、３、・・・）に数値化。（例＝二進法数値「１／０」のデジタル化）

自然数論の中には、すでに**決定不可能な命題**（自然数論の不完全性定理）が含まれている。

・**素数**＝「1」より大きい自然数

・**複素数**＝実数＋虚数。実数＝様々な量の連続的変化を表わす数の体系。虚数＝概念上の数（$i^2 = -1$）（$i^0 = 1$）

「**認知論理**」において、**命題論理**と**述語論理**に**一つの未定義論理記号**を加えるだけで、「**知る**」・「**信じる**」・「**意識する**」などの認知に関わる文脈解釈において、**解決不可能なパラドックス**が含まれます。

＜**一例**＞＝全ての物を突き破れる「**矛**（ほこ）」と、全ての物から突き破られない「**盾**（たて）」があるとすれば、この両者を統合する概念上の事実認知において、そのような「**矛**（ほこ）」と「**盾**（たて）」は同時に存在できません。それぞれが定義する局所論理は「**真**」であっても、全体を統合する文脈においては、「**嘘**」となります。このような説明は、「**自己矛盾**＝**パラドックス**」の典型的な例であり、言語構造の中に、そのような意味が含まれているのです。

「**言語**」は、人間によって定義された「**命題**」となります。一つ、一つの文脈の「**真**」を連ねた全体構成の文脈認知においては、必ず「**真**」の結果を得るとは限らなくなります。科学的思考といわれる「**演繹法**」は、部分の「**真**」（帰納法）を組み合わせた推論によって新たな「**もの、こと**」の広義を定め直す作業ですが、その結論は前提条件とする部分の「**真**」を表わしますが、必ずしも全体の「**真**」を表わしていることにはなりません。このことは、「**真理**」と「**証明**」が同等でないとする、「**不完全性定理**」の一例です。

また、科学的思考をおこなうにあたっては、次なる三つの「**知性の限界**」をともないます。（『知性の限界』著・高橋昌一郎）

❶ **言語の限界**　＝　**論理・論考・言語表現のパラドックス、言語理解のパラドックス**「**神は存在するのか？**」、「**自由意志はあるか？**」、「**美とは何か？**」、といった問題は、言語が示す命題そのものが不明瞭な概念なのだから、実は**哲学の問題ではない**。それは言語による**命題**と**論理**の問題であって、ある**言語命題**の中に**決定不可能な言語**が入っているならば、**論理パラドックス**を生じて**解決不可能**に陥っている、ことになります。

「**善とは何か？**」、「**悪とは何か？**」、という倫理や道徳に係る問題も同様で、「**善**」や「**悪**」という**相対評価**の命題は、**絶対評価**の「**真**」が存在しないがゆえに**決定不可能な命題**であり、それは哲学の問題でなく、言語表現命題の相対的な関係性の中で判断されるべき**命題論理**であることになります。つまり、哲学論考において論理を重ねても、**哲学で決定できない限界があり**、限界を超えたならば沈黙すべき「**言語の限界**」がある、ということになります。

❷ **予測の限界**　＝　**帰納法のパラドックス、予測の不確実性**

予測＝推論の方法は、先にも記した**帰納法**と**演繹法**があります。前記、形式科学の限界と重なりますが、**帰納的**に予測することには限界があります。これら**合理的・科学的推論**に対し、もう一方で**経験主義的推論**があります。しかしその「**真／偽**」の検証は**帰納的**におこなわれるので、**経験主義的推論にも限界**が生じます。日常生活における帰納法的推論には、「**歴史は繰り返す**」や、「**日はまた昇る**」といわれるように、ごく一般的な予測の成立です。しかし、だからといって、絶対的な「**真**」

を導き出す推論でないこと、それぞれには、なにがしか「**予測推論の限界**」が含まれていることです。

「**経験**」を積めば積むほど、推論の「**確証**」は高まります。**経験**の中から、「**直感**（第六感）」という瞬時的推論を獲得できるようにもなります。合理的理性では考え及ばない不朽のピンチにおいて、その時発揮された「**直感**」の正しさは**歴史**に残され、人は**生命**をつないで残されました。予測の限界の先に生じる人間の「**直感**」は、合理的思考の枠外にあり、演繹的説明はできません。しかし「**直感**」によって危機から免れた事例は多く、説明しがたい。

イギリスの哲学者＝**カール・ポパー**（1.902～1.994 年）は、推論と反駁により、より「**真理**」へと迫る「**反証主義**」を提唱しました。

「**P₁ ＝ 問題 → T ＝ 暫定理論 → EE ＝ 誤りを排除 → P₂ ＝ 新たな問題 → 」**

この過程を繰り返すことにより、「**より近い真**」へと迫る方法です。この方法は電気の「**フィードバック**（帰還）**回路**」と同様で、「**真値**」に近づける手法です。ポジティブ・フィードバック（正帰還）は暫定理論を補い、ネガティブ・フィードバック（負帰還）は誤りを補正する部分に相当し、繰り返すことによって「**真値**」へと近づけます。このことは、不確実なものを、確実なものへと近づける方法論ですが、では思考における「**真**」とはいったい何なのでしょうか。「**真**」が分からないから思考する。しかし。「**真**」は最初から分かっていないからこそ**演繹的**、**帰納的**に思考・推論する。**演繹法・帰納法**の命題には、完全なる「**真**」にとって矛盾が含まれていることから**不確定**であり、全体統合にとっては**不完全**な「**部分の真**」をもたらせる結果でしかない、という理解に至ります。

実存の不完全さに耐えられず「**真＝神＝完全なるもの**」を持ち出してきたのが、**ニヒリズム**を唱えた**ニーチェ以前の思索**だったといいます。**ポパー**は、「**反証可能な予測**を生み出す理論こそが**科学的**であり、全てに真を導く理論は科学的でない」、とします。**科学者**は常に、「**反証のリスク**を背負っている**批判的合理主義**である」、というのです。帰納法による予測からは「歴史は繰り返し」ますが、「**宇宙の真理**」は人間につかみきれない開放系であり、絶えず変化をしています。それでも努力して、少しでも分かろう（科学）とする人間性の「**儚さ**」は、「**物質性**」から理解しかねる「**心性**」という、**不可知世界**を展開しています。**物質性**と**心性**との「**複合**（複素）**理解**」こそが、人間理解の要となるのでしょう。日本の研究者は科学と疑似科学の判定基準を、「人間・知識・社会＋「誠意・理論・学会・権威・実験・論争・出版」の判定要因を一覧表にしています。（『知性の限界』P-142～143）

❸ 思考の限界 ＝ 人間原理のパラドックス、究極の不可知性

近代科学は、「**人間性**」という曖昧で抽象的で矛盾を含んだ命題を**排斥**してきました。**科学は**、「**人間性**」という「**主観**と**客観**」が織り成す多様な事象の中から、外から誰が見ても分かりやすい普遍事象を取り出し、「**客観的**」として取り上げ、外から見ただけで分からない内的事象は「**主観的**」として排除してきました。しかし一人ひとりの「**人間性**」となる「**多様な個性**」は、「**主観**」の中にこそ実存しています。「**主観**」はあまりにも多様であるために、「**科学**」として扱うには大変不便であり、「**文化**」として抽象的かつ包括的に扱うほうが便利でした。しかしそのような考え方は、**アナログ技術時代**の連続思考によるために、そうなったのでしょう。時代が変遷し、**デジタル技術**が汎用すると、**ア**

ナログ技術時代では「雑音（ノイズ）」とされた瞬間的信号（パルス）が、デジタル技術時代ではソフトウエア論理を駆動させる「情報」信号へと変化したのです。つまり、デジタル信号はアナログ信号よりも情報伝達・処理能力が格段に優れ、かつ、圧縮、加工、復元、複写が容易にできるため、人間思考の連続性を大きく変化させます。連続性（アナログ）から「人間性」を分析するか、離散的断片性（デジタル）と写像＆相似（フラクタル）技術によって「人間性」を再構成し直すか、思考概念の形成方式とその過程の技術は、学問の方向性を一大転換させます。学問は科学的分析・推論方向（演繹法・帰納法）の「個別学問」から、複雑多様な瞬時データ（ビッグ・データ）を情報処理して再統合するプログラミング技術に対応する、複雑系かつ、学際的な「総合（統合）学問」への移行です。

そもそも「思考」とは、人体の中でどのようにおこなわれるのか、また、人工知能ＡＩ（Artifical Intellingence）とどのように異なるのか・・・現代の脳科学、電子工学、分子生物学、認知科学、等々、思考のメカニズム、記憶のメカニズム、創発のメカニズムなど研究途上な分野です。

「思考」そのものは人体という一個体の閉鎖体内で、五感センサーからの信号を受けて記憶し、さまざまな判別・選択・創発回路を経て、判断・指令信号となって出力します。「論理分析機構」はＡＩと同じで、創発を除けば、人体思考機械ともいえます。また、条件反射という「自律神経機構」では、判別・選択・創発という思考機構を経ない直接作用となります。人間＝人造人間（ロボット）の機能はそっくりですが、唯一のちがいは、「創発能力」にあるとされます。「創発」とは、「知識の総和を超えたレベルでの発意・発想」とされ、「第六感」、「ひらめき」などに似ています。それらは、これまで検証している「不完全性」、「不確定性」、「不可能性」という、「知識・知性」からでは決められない、認知外世界が対象となります。それゆえに現代のデジタル技術普及は、十八世紀の産業革命を上回る、「人間性転換技術」と考えられます。つまりデジタル技術は、「人間がロボットを造る時代から、人間がロボット化される時代」へと、人間性転換を促される技術と考えられます。

究極の不可知性を含む人間原理のパラドックスは、①＝そのことから逃れればロボット化へと向かい、②＝そのことに向き合い、人間原理を拡張していくならばロボット化との共存を可能とする方向へ、進化をとげることでしょう。思考の限界を超える「創発能力」こそが、人間を人間たらしめる特異性であり、「理性や知性によって磨かれる感性」こそが、種たる人間の個別性（個性）と認識される時代を、迎えています。

しかしそこには人間共通項となる普遍性＝文明は意識されることもなくなり、感性の個別性が強調されるならば、宗教や国家という「民族」を取りまとめる枠も取り外されてしまい、人間個体は人類情報網の一端末として、情報通信網に接続されるのでしょう。

神や国家という個を取り囲む枠組み概念は消滅し、「人類」という共通概念へと収斂することで、人々の精神（心）は、落ち着くことができるでしょうか。そこには、「愛」という、個性を結びつける「無償（ギブのみ）な相関性と、対構造となって安定する相補性」は、必要なくなるのでしょうか。

ケンブリッジ大学の宇宙物理学者＝マーティン・リース（1,942～年）は、「宇宙を支配する六つの物理定数があり、うまくへ微調整＞されていることにより、現在の宇宙が存在している」、としています。（『知性の限界』P-198）

① ε＝相互作用の核力（ε＝0.007）→ この値以外では、現在に宇宙や生命が誕生しなかった

② N＝原子を結合する電磁気力の強さを、原子間に働く重力の重さで割った数（$N=10^{36}$）→ 電磁力は強力

③ Ω＝宇宙で重力エネルギーが、膨張エネルギーに対してどれだけ大きいかを示す数（Ω ≒ 0.04）永遠に膨張

④ λ＝宇宙の反重力の強さ

⑤ Q＝宇宙の銀河や銀河団の静止質量エネルギーと、重力エネルギーとの比率を示す数

⑥ D＝宇宙の空間次元数（D＝3）→ 人間の空間は三次元＋時間＝四次元時空

この物理定数は相互に還元不可能な六つの定数を示し、その他を含め、二十～三十の物理定数がうまく〈**微調整**〉されていることにより現在の宇宙が存在する、とされます。併せて、「**炭素原子が存在できたら、人間のような知的生命体が生まれ、知的なるがゆえに宇宙を観測でき、観測結果によって宇宙の存在が確認された。もしそのような人間が存在しなかったら、宇宙は存在しないも同然である**」と、『**人間原理**』を再提唱します。

『**人間原理**』の古くは、**ライプニッツ**（1646～1716 年）により「**神**がこの世界を創ったのだから、**最善**のものを創られた」とする**人間性善説**と、**ショーペンハウエル**（1,788～1,860 年）の**ペシミズムな解釈**「世界は可能な限り最悪の世界である。それが正しいとするならば、神はショーペンハウエルを存在させておくはずがない」と、**人間性悪説**を唱えます。しかしこれらの哲学や神学の説は実証根拠がなく、言語命題の真偽にとって決定不能な人間原理問題でありました。

マーティン・リースと同じケンブリッジ大学の宇宙物理学者＝**ブランドン・カーター**は、1,973 年の「**コペルニクス生誕五百周年記念シンポジュウム**」において、**新しい**『**人間原理**』を提唱します。**カーター**は、物理定数の〈**微調整**〉を認めた上で、『**人間原理**』における「**弱い人間原理**」と「**強い人間原理**」とに分けます。「**弱い人間原理**」は、「さまざまな宇宙の存在を認めながら、我々の宇宙は〈**偶然**〉に今のような**宇宙**（物理）**定数**となり、**人間**も**生命**も誕生するようになった」、という見方です。他方、「**強い人間原理**」は、「宇宙は、その進化の過程で〈**必然的**〉に内部に知的生命が存在できるようにしている。さらに、**宇宙**（物理）**定数**が特定の値を示すのは、観測者としての**人間**がいるからだ」、という見方です。

このような『**人間原理**』の提唱は、神が宇宙や人間を創造したという**神への信仰**と同じように、**人間の知性**によって宇宙は創造されたというような信条変更にも受け取られ、**神**に代わる**人間知性への信仰**といえます。しかし「**宇宙の自己組織化**を、ただ**人間の側が観測**しているに過ぎない」と言い換えれば、「**人間原理のパラドックス**」は破られません。人間の観測には、「**究極の不可知性**」があることを、論破されていないからです。

他方で、オーストラリア出身の人工知能研究者＝**ヒューゴ・デ・ガリス**（1,947 年～）は、従来の『**人間原理**』に代わり、キリスト教教育を受けながらもキリスト教に疑問をもち、宗教色を帯びない『**数学原理**』を展開します。「**神が人間を創った**（キリスト教）**のではなく、人間が神を発明した**」、とします。**ガリス**は、遺伝的アルゴリズムによる三次元セルオートマンを使い、ニューラルネットワークの中で**人工知能**が自動的に進化していく様子を研究します。人工知能は自身で進化し

ていき、最終的には人間の知能をはるかに超える予測となります。「**古典的人間原理**」においては、宗教・思想・愛や生活慣習から共通化される「**倫理**」により、一方向性進化に対して**ネガティブ・フィードバック**（負の帰還＝**ブレーキ**）をかけます。進化の速度を落し、方向性を変えることができます。しかし人工知能を動作させるアルゴリズムにおいては、宗教・思想・愛や生活慣習から共通化される「**倫理**」の判別が可能であるのか。可能でないとしたら、進化は**ポジティブ・フィードバック**（正の帰還＝**アクセル**）によって一方向へと進むばかりとなり、『**従来の人間原理**』から逸脱して、『**新しい人間原理**』へと移行していくのか。『**新しい人間原理**』とは、「**人間がロボットを活用するのではなく、人間自身がロボット化していく**」ことになるのだろうか・・・。つまり**人間の生命は**、家畜や農作物、鑑賞植物のように、**人工知能によって制御され得る**。さらに**ガリス**の予測は、人工知能の進化で人類が破滅する前に、人類は**宇宙主義者**と**地球主義者**とに分かれて**最終戦争**になる、とします。人工知能の進化を止められない政治要素として、「**アメリカと中国の対立**」をあげています。**アメリカ**は**キリスト教原理主義**が強くなり、**中国**は**儒教思想による天＝皇帝支配**を強め、二大勢力となって覇権を争う中で、戦争抑止力や自衛力強化と称して**人工知能兵器開発を止めることができない**、からといいます。米ソ対立に代わる新たな対抗となりますが、**人工知能兵器**と**核爆弾**を使用したならば、**現生人類は滅亡**します。

地球四十六億年の間には、このような戦いが幾度もおこなわれ、そのつど人類滅亡となっても地球生命体は滅びず、新たな人類が復活してきた、という**仮説**もありますが、だれにも検証できないがゆえに、現生の知能が推考するばかりです。宇宙の理解に多次元宇宙を導入すれば、別の宇宙にいる宇宙人が、人間という知性と遺伝子をもった生命体を創ったという説も、我々にとっては一つの物語でしかありません。そして**ガリス**は「**数学原理**」として、「**神は新しく作った宇宙の中でふたたび人工知性が生まれるように、宇宙をうまく作るであろう。つまり神は数学者である。この世界がなぜ上手くできているか、それは前世の宇宙人がいるからだ**」、とします。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

以上、これらの「**限界論**」からは、「**神の非存在論**」が導かれます。人間の理性や知性の限界とパラドックスを知り、予測や解決不可能な「**不確定性**」、「**不完全性**」を知ると、「**人間の不完全性**」が見えてきます。人間が不完全だから、完全なるものを創造してそれを「**神**」と見立てたところで、「**M**（シグマ）（**不完全＋不完全＋・・・・不完全**）＝**不完全**」といくら不完全を集合させても、やっぱり結果は不完全でしかありません。それゆえに「**信仰**」とは、論理的「**真**」を求めることではなく、「**理屈でなく、ただただ信じる**」、その「**一心な心情**」と理解する必要があります。

もう一つ、人間にも備わった**不完全性解消の方法**、それは「**対消滅**（ついしょうめつ）」です。これは人間だけでなく、宇宙の物質においてもおこなわれている現象とされます。電磁気学的には「＋（プラス）」と「－（マイナス）」が打ち消し合って消滅する現象。宇宙では「**物質**」と「**反物質**」とが「**対生成**（ついせいせい）」によって生まれ出、ふたたび巡り会うと**対消滅**となり、消えてしまった物質と反物質の重さに等しいエネルギーへと変位する、とされます。**対消滅**で生まれた新たなエネルギーは、次に別な物質と反物質のペアを生み出します（『宇宙になぜ我々が存在するのか』著・村山斉）。これは**分子の代謝機能**といえないでしょうか。

このことを人間に例えてみると、**物質**＝女性、**反物質**＝男性、**対生成**＝出産（子の誕生）、**対消滅**＝男女性結合、**代謝**＝親子の継承、このような類似性が見て取れます。**人間男女のカップリングは宇宙の必然**と理解すれば、そのことに倫理性を与えたのは「**文化**」であり、特に宗教的倫理性が重くのしかかっています。一方、必然であるから剥き出しで良いのかといえば、それも困ったものです。**アダム**と**イブ**（エヴァ）がイチジクの葉で腰を覆ったように（ユダヤ教『聖書』）、**抑制ある隠蔽**が、それぞれ「**文化の品格**（モラル）」となっています。

そもそも宇宙における「**物質**」と「**反物質**」には「**対称性**」があり、それは鏡像のような形象の左右対称性でなく、**電気的性質が対称**になるのだそうです。

ふたたび人間に例えてみると、「**男性／女性**」とする大づかみな概念も似ており、電気的性質に代わる人間気質対称性の一般論として、「**男性的／女性的**」と云い現わすことができます。さらに対称となる互いが「**相補的**」であるならば、「**不完全性人間**」は、「**より完全性人間**」へと近づくことが可能となります。

物質／反物質の対称性と、**人間＝男性／女性の対称性**にあって、「**相対性原理**（アルベルト・アインシュタイン）」とともに、「**相補性原理**（ニールス・ボーア）」からの解釈・理解は、人類の未来創造にとって重要な原理を提供することでしょう。

「**相対性原理**」は**二項対立文明、デジタル文明**にとっては分かりやすく、一般的にも知られていますが、「**相補性原理**」は一般社会の中で「**相対性原理**」ほどに知られていません。**ニールス・ボーア**は、「**相補性原理**」を「**陰／陽**」を用いて解釈しようとしましたが、うまくいかなかったそうです。つまり、**相補性**は二項対立概念で説明するのでなく、「**対消滅**」による電気現象の**マッチング理論**を適用して人間相関を理解すれば、うまくいくのではないでしょうか。

『**従来の人間原理**』と、**人工知能の進化**にともなう『**新たな人間原理**』と現世人類の未来推測は、「**人間原理のパラドックス**」を超えるでしょう。

それらは、**ガリス**（1,947 年～）と同年代、そして電気技術者の**私**（1,946 年～）にとっては、すでに「**究極な不可知性**」の中にあります。

三・ トインビーの歴史研究を離れて

前節の人工知能と人間原理の未来予測まできてしまうと、トインビーの歴史（文明）研究は色あせてきました。その理由は、二十一世紀の現在を境に、過去の歴史（文明）と未来文明とが、過去～未来の連続した時間にありながらも、現代を屈折点として、異なる位相局面での展開を図るから・・・、というのが私の現在思考だからです。

その要因は、『技術が人間原理を変化させる』、ことにあります。数学的表現をすれば、二十世紀までのアナログ技術と、二十一世紀のデジタル技術の間は、カタストロフィー（Catastrophe）現象となって断絶している、と考えるからです。

二十一世紀に入り、歴史は人間相関が織り成してきた欲望（価値）の葛藤（権力争い）を離れ、人間の人工化（ロボット化）に向き合わなくてはならなくなりました。従来の人間主観と客観が織り成す複素的人間原理を超えて、複雑系宇宙の中で自己組織化する、ロジカルな人間原理も考察しなければならないからです。

もはや宗教、社会学の人間相関問題を離れ、複雑系世界を分析する理性に加え、全体を認識・思考・欲求する上で再統合を図る「自己組織化」が、あらゆる位相、あらゆるレベルでおこなわれていくのでしょう。

これまでは「体験」を積み重ねた「経験」を知性によって整理した「従来の人間原理」でしたが、これからは「知性とそのゆらぎ」によって、論理からはみだした「創発」が人間的と呼ばれ、「新たな人間原理」として始まるのでしょう。

人間の意識を研究すると、「今」を認識する意識（アウエアネス＝気づき）と実際に生じた事象との間には、最大で 0.5 秒の遅延が生じているとされます（『マインド・タイム』P-102）。つまり、「現在」という瞬間をどのように定義すれば良いのか、極めて困難な課題が提示されます。

事象の「現在」か、気づいた時が「現在」か、その時間差は最大で 0.5 秒以内になるというのです。「今気づいた」時に生じた事象は、すでに最大で 0.5 秒前の「過去」ではないのか・・・。事象＝過去 ＞ 0.5 秒以内 ＞ 気づき＝現在、という式において、気づきを現在とすれば、全ての事象は過去となります。生じた事象を現在とすれば、気づきは 0.5 秒以内の未来となります。自身で未来を意識できないのだから、その未来は存在しないと同じになります。生じた事象の現在は、もちろん自身で意識できないのだから存在しないと同じ。気づいた時を現在とすれば、すでに事象は過去のものであり、事象＝現在を人は認識できないことになります。

つまり、事象が生じた「現在」を、人は認識できないこととなり、「現在」が存在できるのは、未来や過去を意識するその一瞬でしかありません。大変デジタリックな一瞬です。

時間次元を連続的に考えるか、多時間次元が入り混じる多次元時間軸で考えるか、私には三次元の人間原理に加え、四次元たる連続時間軸としてしか考える能力しかありません。その範囲で考えたのが、本書 P-130【 文明・文化・人の意識＝環境の複素（数）的な世界構造】となります。さらに生活感覚における「現在」は、「現在」と人が意識できる時限幅まで拡張すれば良いと考えるのですが、人により時限幅は異なってしまいます。

❶ 過去の文明検証をおこなって未来予測に役立てるか

❷ 過去は過去として位置づけ、新しい概念によって未来を思考するか

この二十一世紀にあっては、後者の新しい概念によって未来文明を思考しなければならないと考えます。

二十一世紀の電子機器とデジタル技術の組合せは、人類の思考概念を一変します。アナログ技術は、事象の要素を瞬時断片化させた情報信号へと**符号化**させて、デジタル技術は、事象の要素を瞬時断片化させた情報信号へと**符号化**させて（Encode=エンコード）通信を図り、その**符号化**された**情報信号**を受信して**復号化**させ（Decode=デコード）、元の事象へと復元させます。符号化した情報信号の通信となりますので、さらなる暗号化や圧縮が可能となり、双方向通信も容易におこなえます。

これらの符号化、復号化、暗号化や圧縮技術においては、**プロトコル**（Protocol=規定、議定書、儀典）の下で**プログラミング**によって成されます。**プログラミング**は人間の意図によって作成されますが（設計）、今やコンピュータ自身の**人工知能**によって、**自己学習**や**自己進化**（セルオートマトン）でどんどん賢くなり、**人間知能を上回る存在**になってきました。

そこで重要になってきたのが、「**自己組織化と進化**」の問題であり、この分野では「**複雑系の哲学**」が先行しています。

ソクラテス～プラトン～アリストテレス～デカルト～カント～ヘーゲル～とつながる従来の**西洋哲学**は、主観と客観を分離し、主観の多様性を排除した、**客観**と**科学知識**とがあいまって形成してきました。

しかしそこで実証根拠となる**物質**は、宇宙全エネルギーの中で、たった**5%**未満であることを、量子物理学が解明しています。95%以上は未解明な暗黒物質や暗黒エネルギーが占め、宇宙の解明にはほど遠い次元に人間は存在していることになります。

そのような中から、宇宙物理学者、生物複雑系科学者、人工知能研究者や複雑系の哲学者たちは、**宇宙の自己組織化、生物の自己組織化、人工知能の自己組織化**、等々に取り組んでいます。その大きな概要をまとめているのが、「**複雑系の哲学**」であるといえます。

哲学は人間たちの認識論でもあるわけですから、**主客分離の人間原理 → 主客統合複素的人間原理 → 複雑系宇宙の中で自己組織化する、ロジカルな人間原理**へと、**パラダイムシフト**していきます。

これらの変化にともなって「**文明**」も変化し、「**歴史**」も変遷していくわけですから、もはや**トインビーも退席を余儀なくされる**こととなります。

もう一つは、「**量子力学の哲学**」もあります。ミクロの世界は確率的に予測できるだけで、全てを決定論として決定できないことを証明します。このミクロの世界からマクロな宇宙への拡張を**フラクタル**（相似）に扱えるのか、複雑系との連携が生じます。

人文系統の**歴史**（文明）**研究**は、もはや**科学哲学の方向へと進路変更**していきます。

ノーベル賞物理学者＝**スティーブン・ワインバーグ**（1,933年～）は、「**宇宙が明確になるにつれて、宇宙に意味がないこともますます明確になっていく**」として、宇宙には**神や人間の意図**など存在しないという主張があります。

他方では、オックスフォード大学の量子物理学者＝**デイヴィッド・ドイッチェ**（1953年～）は、「**知性がコントロールすることのできる宇宙の領域は徐々に拡張し、数億年後には超知性**（宇宙と一体化し、全知と呼べるような最終的人間原理）**に向かってすすんでいる**」、とする主張もあるそうです。**超知性**まで到達してしまうと、ふたたび「**超知性＝神**」の問題が復活しそうです。

ビッグバン以降の宇宙は**開放系**の膨張過程にあり、状態の変化は、**対称性が自発的に破れた非平衡**な中で化学反応を誘引し、無限な分岐を生じてますます複雑化していくと、量子力学はいいます。

閉じた系での反応は、化学的**平衡**を保つ「**動的平衡**」状態となりますが、**開放系**にあっては「**ゆらぎ**」を生じて化学的**非平衡**となり、「**動的非平衡**」状態となって環境に応じた形態変化や機能変化を柔軟におこなっていくそうです。

人類に限り、**地球規模**で考えれば**閉鎖系**の中にあり、「**動的平衡**」を保つべく相互作用が働きます。一方で人類は、今世紀に宇宙進出を始めるとすれば、「**動的非平衡**」状態の環境の中で、**分岐変容**していくのでしょう。

その具体的予測は、現在の私にできませんが、「**自己組織化による進化**」は、限りなく進むことでしょう。

その進化途上において、「**人類**」という括りの中で「**人種**や**民族・部族**、**国家**」**の意味は失ってきます**。

それらのイメージはすでに先行していて、ＳＦ小説、ＳＦ映画、ＶＲ（Virtual Reality＝仮想現実）などで可視化されています。さらに月面居住、火星移住等々に出掛けるとすれば、「**人類は宇宙人**」ともいえます。

ごくごく端緒に観ても今世紀の人間環境は、「**これまでの人間原理**」と異なる、「**新たな人間原理**」の展開をすでに始めています。

人文、哲学、思想、宗教、等々、「**過去**」から「**未来**」を展望する屈折点にある「**現在**」という**意識**を、**歴史**（文明）の中に正しく位置づける作業は、大切な仕事であるはずです。

この「複雑学 **日本文明物語＆哲学**」が、その一端となれたら幸いです。

第五章　文明と文化のちがいは

一・ 歴史学者、社会学者、の定義から

「文明」と「文化」を一言で定義する言葉は、見当たりません。

歴史学者＝アーノルド・トインビーの『図説　歴史の研究』において「用語の定義」には、「社会」、「文化」、「文明」があります。その中で特徴となる属性を記述されますが、明確な言葉の定義は成されていません(翻訳P-50～52)。「第Ⅰ部、歴史のかたち」の冒頭では、「国家、つまり文明・・」という記述（翻訳P-52）があります。この記述から考え、「文明の形は国家」という文脈で読み取れ、「文明＝国家」と解釈することができます。

以下、トインビーが「図説　歴史の研究」の中で考察した、他者の研究について述べたことを採り上げてみた。

『　（以下、トインビー「図説　歴史の研究」から）

P・バグビーが、「文化とは社会を構成する人々の内面的行動と外面的な行動における規則正しさであり、遺伝性に起因する規則正しさは含まない」と定義していることに私は納得できるし、それを採用したい。「歴史が模型化し、繰り返す」というお陰で、「文化は歴史を理解するための側面である」というバグビーは文化の定義に付け加えている。

A・L・クローバーは四点なる定義をしているが、そのうちの最初の三点はバグビーの定義と同じである。クローバーの言う第四点目の定義は、「文化とは価値を具体的に表現すること」であった。私は、この定義に納得するし、とり入れたい。

「文明」という疑似ラテン語が現行フランス語の造語であり、ジョンソン博士自身が著した英・英辞書に「文明」によく似た英語を記述することを断っているくらいです。

「ある特定の時代に存在していたある特定の種類あるいは段階での文化」という意味で使われてきている。

今日の知見では文明の時代は1,000年前から始まっていると考えられる。

P・バグビーは、・・・・・・・・・・・・・・・省略
H・フランクフォルトは、・・・・・・・・・・・・・省略
A・N・ホワイトヘッドは、・・・・・・・・・・・・省略
クリスタファ・ドーソンも・・・・・・・・・・・・・省略

ホワイトヘッドの規範に従って私は、文明を精神的な用語によって定義すべきであろう。人類全体がすべてを包み込むような一つの単一家族の構成員の如く、皆が調和して生きて行けるような社会状況を創り出そうする努力が、文明と定義されるべきであろう。これが、私たちが知り得る限りのすべての文明というゴールを、意識していなくとも、無意識に目指してきたと信じている。

（以上、トインビー「図説　歴史の研究」から）　』

日本の社会学者、橋爪大三郎氏の近著、『世界は四大文明でできている』の中においても、トインビー同様に主たる特徴の属性を記述していますが、「文明」と「文化」の概念定義は成されていません（同書P-20）。しかしトインビーよりも具体的に記述していることから、次に引用列記してみます。

『　（以下、橋爪大三郎「世界は四大文明でできている」から）

「文明」とはなにか。

文明とは、多様性を統合し、大きな人類共存のまとまりをつくり出すものです。**文明**の特徴は、文字をもつこと。法律や制度が整っていること。帝国のような政治的まとまりや、教会のような宗教的まとまりをもっていること。暦や、生産技術や、軍事力や、経済活動や、貨幣や、交通などの社会的インフラや、・・・・・・・・をそなえていること。歴史学の本には、そう書いてあります。

逆に言うと、そういう共通点がある半面、内部に多様性を抱えています。言語がばらばら。人種や民族がばらばら。**文化**がばらばら。地域社会がばらばら。さまざまな多様な人びとの集まりが、**文明**です。**文明**は、そうでなければ、ばらばらになってしまう人びと多様な社会（個別の文化）を、それより高いレベルに統合する試みなのです。

文化は、民族や言語など、自然に人びとの共通性にもとづいています。それに対して、**文明**は、多くの**文化**を束ねる共通項、人為的に設定することです。**文明**のほうが**文化**より、レベルが高いのです。（同書 P-20）

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

前記二例をみてきましたが、ピリッとした言葉の定義はありません。

二十世紀までの記述ならば良いのでしょうが、二十一世紀の**「デジタル世紀」**にとってはものたりません。もう少し適切な概念をまとめた言葉が見いだせないか、さらに研究、探索してみましょう。

二・ 生物学者の発想から

『**生物学的文明論**』（2011年８刷）という**本川達雄**（1948～）東京工業大学大学院生命理工学研究科教授の著書があります。この書の中で、「**文明**」そのものの定義はありません。定義ではありませんが、「**文明**」を説明する言葉として、「**文明は硬い**」（同書 P-128）のフレーズがあります。相対するフレーズに登場するのが「**生物は柔らかい**」（同書 P-124）、があります。

「**生物**」が柔らかいのは、水が詰まった革袋のような体をしているからだといいます。その形態が丸みを帯びているのは、丸はどの方向から力が加わっても同じ強さとして受け止められ、かつ、角がないので引っ掛からず、運動に都合良いからだとされます。

一方、「**人工物**」は硬くて、四角や角張ったものが多いのは、効率よく自然を切り裂くことが、「**技術**」の始まりだからだといいます。そして「**文明**」を、石器時代、青銅器時代、鉄器時代と分類するように、順次「**硬い材料**」へと技術が移行した様子を示すとされます。

このように、「**文明**」の呼び方には、**技術が硬いものへと移行**して、その硬いもので自然を切り裂くのが「**文明**」なんだ、という意味合いです。硬く、変形しない材料が**技術の基本**であり、**文明の基礎**であったとされます。

人類は自然を硬い材料で切り拓き、独自の世界＝家、集落、村、都市、国家、を作り上げ、そのことを「**文明**」と呼んでいます。

他方、「**生物多様性**」というように、「**生物**」は**形質の違い**により分類され、特に「**質の違い**」は**多様性の根本**であると、著者（本川）は述べます。

「**質**」を「**量**」に変換するのが「**貨幣価値＝価格**」となり、「**量**」をいき渡らせて人々の満足を得ようとするのが**経済原理**といいます。その**交換価値**を担保しているのが「**貨幣**」です。量の流通を貨幣が担保するわけですから、いずれも「**数**」を相手とするので、**数学の分野**となります。（数理経済学）

「**幸せとは＝量がふえること**である」、と定義すると、地球の資源や生物多様性を食いつぶすことになり、すでにバラ色の未来は想像できなくなっている現代です。環境問題、資源枯渇問題、化学物質汚染問題、放射能汚染問題、等々、自然循環を妨げる「**文明**」は、環境諸問題を生じています。

熱エネルギー第二法則＝**エントロピー増大の法則**は、「閉じられた地球の系の中にあり、「**文明**」で使用して使えなくなったエネルギー（物質に還元）は、増大するばかりである」こと説明します。つまり地球という閉じられた世界の中で、バラ色の**文明は永遠に続かない**ことをいっているのです。

そこで登場してくるのが「**文化**」です。「**文化**」は生物のごとく、柔軟で多様性に満ちたさまざまな「**価値＝質**」を喜びとする、**感性のダイナミズム**（流動性）を言い表します。「**文明**」が数えられる形而下な**物質**とすれば、「**文化**」は数えられず、比較もできない形而上な**価値＝質**＝感性の**喜び**、となりますので、**非物質**の世界となります。

物質（形而下）と**感性**（形而上）を統合させることができる、**複素的人間意識**は、他の生物にない独自な進化をこの地球上で果たしてきました。その活動範囲が地球上に収まりきれなくなった時、次なる段階へと移る必然が生じています。

❶ ＝ もっと**量を質に転換**する（文化多様性の振興～閉鎖系）

❷ ＝ **地球の外**へと活動範囲を拡大する（文明技術の進化～開放系）

人類は、この二つの途を歩む必然の中にいます。すでに人類はこの途を歩み始めているのですが、そのことを明確に位置付ける**思想**と**哲学＝文化**（知性）の**位相**は、**文明**（欲求）の**位相**よりも常に**遅れ**てしまうのも必然です。

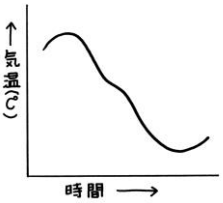
三・ 電気技術者、物理学者、の理解から

「デジタル世紀」という言葉は、理系、数学系の人々には分かりやすいのですが、文系、芸術系の人々にとっては、さっぱり理解できない言葉でしょう。ましてや「複素数」にまで話しが及ぶと、理系の人々の中でも、数学系でないと分かりにくくなります。「複素数」の概念は、高等学校数学で学ぶ程度でも、大方の理解はできます。しかし問題は、数学が苦手な文系、芸術系の人々が、どのように理解できるか・・・にあります。

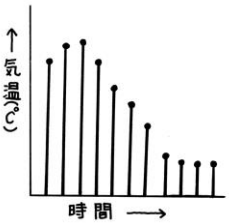
一方、「デジタル信号」、「アナログ信号」になると、電気・情報技術者の世界となります。ブラウン管テレビの時代は「アナログ信号」が主力。現代のテレビやコンピュータ、スマートホンなど電子機器のほとんどは、「デジタル信号」で動いています。

数学の三角関数で代表的なサイン・カーブは、波動のうねり状態な連続曲線ですが、この連続的に変化する信号が「アナログ信号」です。「デジタル信号」の波形図は、普段見かけません。極めて短い時間帯としてブツブツに切り刻まれた瞬時の断片的な信号（パルス）ですから、目で見ても意味を汲み取れず、連続した形象を示しません。ここでは、「デジタル信号＝断片信号」、「アナログ信号＝連続信号」とする大枠な理解をしていただければ良いと思います。

（以下の図参照）



【アナログ信号例】



【デジタル信号例】

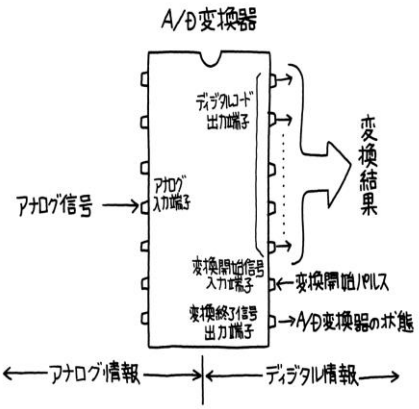
数学では、有理数（比で表せる数）と無理数（比で表せない数）を合わせた数を実数（real number）といい、その性質は「連続性を持つ数」とされます。電気信号に例えると「アナログ信号」に当たります。人の意識は、日々連続する体験の記憶を蓄積し、歴史（時間）として再認識します。しかしその「記憶」は、連続であったり、断片であったり、ここにも「記憶」という信号（データ）の蓄積（いわゆる記憶）、取り出し（記憶の呼び戻し）における、デジタル信号、アナログ信号という特性の違いが含まれています。「実数」は、目に見え、数えることができる数として、現実社会を反映します。

もう一方で、現実社会を反映しない数が「虚数」です。脳の意識の中で、イメージとして仮置くと、説明するのに都合良い数を「虚数（imaginary number）」といいます。「虚数」は目に見えず、実態として認識できず、頭の中だけに思い描く架空（イメージ）な数として編み出されました。電気技術者や量子物理学者の世界では、良く使われます。

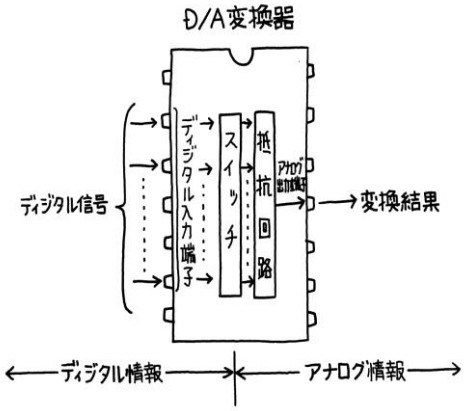
「電流」は電子の流れ、「電波」は電磁波の伝搬、いずれも目に見えませんが、電流はエネルギーを伝え、電波は情報を伝えます。これらの現象を数学的に説明し、計算するためには、実数と虚数を併せた「複素数」が適しています。

物質を構成する最小単位を扱う「量子（素粒子）物理学」は、目に見えない素粒子（ボソン、フェルミオン）を相手にしています。光は物質（光子）でもあり、波動（電磁波）としても伝搬しますので、量子物理学と電気理論は親戚のようなもので、原因（量子物理学）と効果（電磁気）を、各々が取り扱っています。

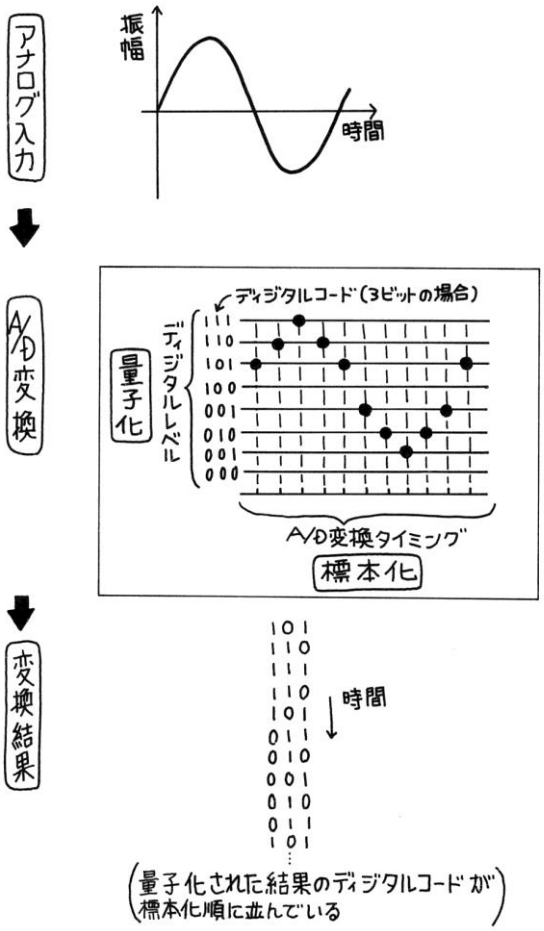
虚数（i）の２乗はマイナス１ $\{i^2 = (\sqrt{-1})^2 = -1\}$ として、電気の計算や量子力学では普通に使いますが、実社会での一般的理解は難しいものです。さらに「実数＋虚数＝複素数」となります。「複素数（complex number）」は、三次元（ｘ・ｙ・ｚ）の立体表現や複層（複相）表現を考えるのに、便利な



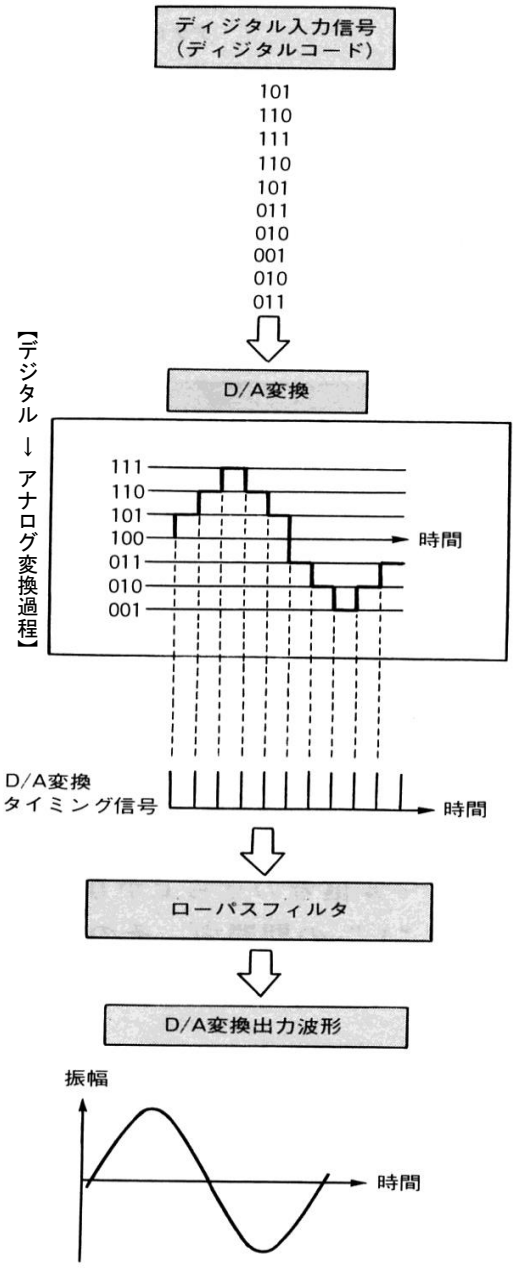
【アナログ → デジタル変換器】



【デジタル → アナログ変換器】



【アナログ → デジタル変換過程】



【デジタル → アナログ変換過程】

図解は以下から引用
『見てわかるデジタル信号処理』
著者＝坂巻佳壽美

数学概念です。

これらをふまえて「**複素**（数）**的な世界観**」を以下に説明するわけですが。

現実社会での**体験**は、原因と結果が結びつく**因果応報**とした、連続的な思考と感覚をともなって理解しています。連鎖、連続なるがゆえに、これを「**アナログ体験**（実体験）」と呼んでみます。他方**ゲーム**のように、決め事（ルール）に則って勝敗・賞罰を分けることを楽しみとする「**遊び**」は、必ずしも原因と結果が連動しないランダムで、結果が離散的、確率的となることを「**デジタル体験**（仮想疑似体験）」と呼んでみます。

「**体験**」として、意識する部位は脳機能とされますが、体験の記憶は脳を含めて、身体細胞の中にも蓄積されているといわれます。身体細胞は、無意識な記憶装置（ハードディスク）とされます。その中でＤＮＡ（デオキシリボ核酸＝deoxyribonucleic acid）は、個体遺伝情報を保存～伝達する、最も重要な記憶装置ですが、個体にとっては**無意識な領域**にあります。

無意識な記憶領域の中から、記憶を**意識**として取り出し、さらなる判断や再認識する「**意志の創出**」は、脳機能として認知されています。**記憶～判断～再認識**等をふくめたそれら一連の動作は、血管同様に体内に張りめぐらされている、ニューロンとシナプスで構成される**体内信号通信網**（ニューラルネットワーク）によっておこなわれます。その体内信号は離散的（パルス）な**デジタル信号**や、連続的な**アナログ信号**により、相互通信されます。

人間の**五感**（視覚＝目、聴覚＝耳、触覚＝皮膚、味覚＝舌、臭覚＝鼻）は、その全てが**身体センサ**（目、耳、皮膚、舌、鼻）を通して体内信号に**変換**（encode＝エンコード）され、脳機能によって自覚・認識へ**再変換**（decode＝デコード）されます。

それゆえに、概ねの人間動作はロボット化できますが、人間と機械の最後の違いは、「**創発**（emergence）」にあるといわれます。

記憶蓄積装置の総体内で動作するのが**ロボット**、総体の枠を超えて新しい意識を産み出せる（創発）のが**人間**、という違いです。つまり、人間を含む複雑な自然界の中で、人間の知識という**部分の真**を全て総合しても、自然の全容は解明、説明しきれない人間の限界があります。それでも人間は、複雑な自然界との相関の中で、自己が蓄積した知識や認識の**総和以上のものを創出できる能力**を持っていること。この人間特有な創造作用を、「**創発**」と呼んでいます。

- **生物学における創発** ＝ **生命**は創発現象の塊（脳全体がもつ知能を解明しきっていない）
- **組織論における創発** ＝ 相関連系創発（個人が単独で思考・活動するよりも組織を構成し、相関コミュニケイションを図ることにより、個人では思いつかない発想が引き出される）
- **情報工学における創発** ＝ 複雑な事象をコンピュータ・シュミレイションにより多様な解を創発（ニューラルネットワーク、遺伝的アルゴリズム、群知能、ウエブ）

デジタル思考の影響は、脳の意識が**仮想現実**（バーチャル・リアリティ）を受け入れやすくなっている**新世代**を育むことになりました。それゆえに、**新世代**は**実存世界**へのこだわりが少なく、**抽象世界**を容易に受け入れられる「**複素**（数）**的な思考**」は難しくないと考えられます。しかし実存世界での**体験欠如**は、デジタル信号特有の、離散的、断片的なるがゆえに、現実体験における連続性の欠如、現実を丸ごと全体像としてイメージすることができない**総体把握の欠如**、

を助長すると考えられます。現実体験から乖離した、架空抽象（イメージ）世界へと、一挙に飛躍してしまうことが考えられます。「**肉体は魂の乗り物**」といわれますが、まさに21世紀はそのことを目の当たりにする、最初の一歩を踏み出した感がします。

この変革を電気技術者から指摘しておくのが、著作の動機でもあります。依って以下に、電気技術者から「文明」・「文化」・「意識」の理解を述べます。

「**文明**」は人が生活を続ける上での**必要条件**であり、人として持って生まれた自然な「**欲求**」、その主たる目的は**種（DNA）の保存・継承**にあります。種の継承をより確実にするために、科学の合理的知識によって**技術**を進化させ、**エネルギー**によって人の活動範囲と能力を増幅させる**道具**（人工物）を作り出し、自然を人間生活に適する**人工環境社会**へと改造、その領域を拡大し続けることにより、それを**文明の進化**として人類史を連ねてきたといえます。

「**文化**」は人が生活を続ける上での**十分条件**として、「**欲望**」の充足を図る**情報**（意味・価値）**様式**と捉えます。生命維持の最低条件を文明が与えるものとすれば、文化は生命活動における安全、安心、ゆとり、喜び、楽しさ、優越感といった、多様な**心の表現様式**、つまり**意識の意味と価値**を実存世界で表現様式へと変換したものといえます。それらは自然の摂理がもたらせる**必然**から解放される心身の**自由**と、**抵抗**して己の存在を見い出す哲学・修行的な在り方となります。そして文化を種別化する多様性の中で、文芸、スポーツ、遊び（遊戯）とともに、原理・規則性に安寧をもとめる**思想**、**宗教**等々へと収斂していきます。

「**人**」にそなわる「**知識と感性**」は、目に見えない人の**意識の中**に保存され、**虚な世界**、あるいは**抽象の世界**として構築されます。**文明**と**文化**は目に見える現実社会の二つの軸ですが、**知性**と**感性**は現実と関わりながらも目に見えない、人の脳と身体に宿る**意識の世界**です。それゆえに、**意識の世界**は**現実の層**（相）にありながらも、多様な階層（位相）となって個別な実在を積み重ねることになります。**意識の層**は多次元、多層であり、価値が類似した同層（同位相）の中では意識の権力構造が芽生え、変革の力ともなります。

「**意識**（知性と感性）」は、自然における人類の**生物環境適応**（文明適応）への調整を図るとともに、人の**欲望**を満たす行為が自然環境をどれほど**人工化**させ、そのことが自然循環再生にどれほど**障害**となるかと「**気づき**」を与え、**文明進化の方向性**を変える力となります。人類は**自然の全てを制御・支配しきれるのか**、あるいは一生物として**自然の中で適応進化の調整を図り続けられるのか**、「**複素**（数）**的な世界観**」からは、後者の立場を支持するものとなります。

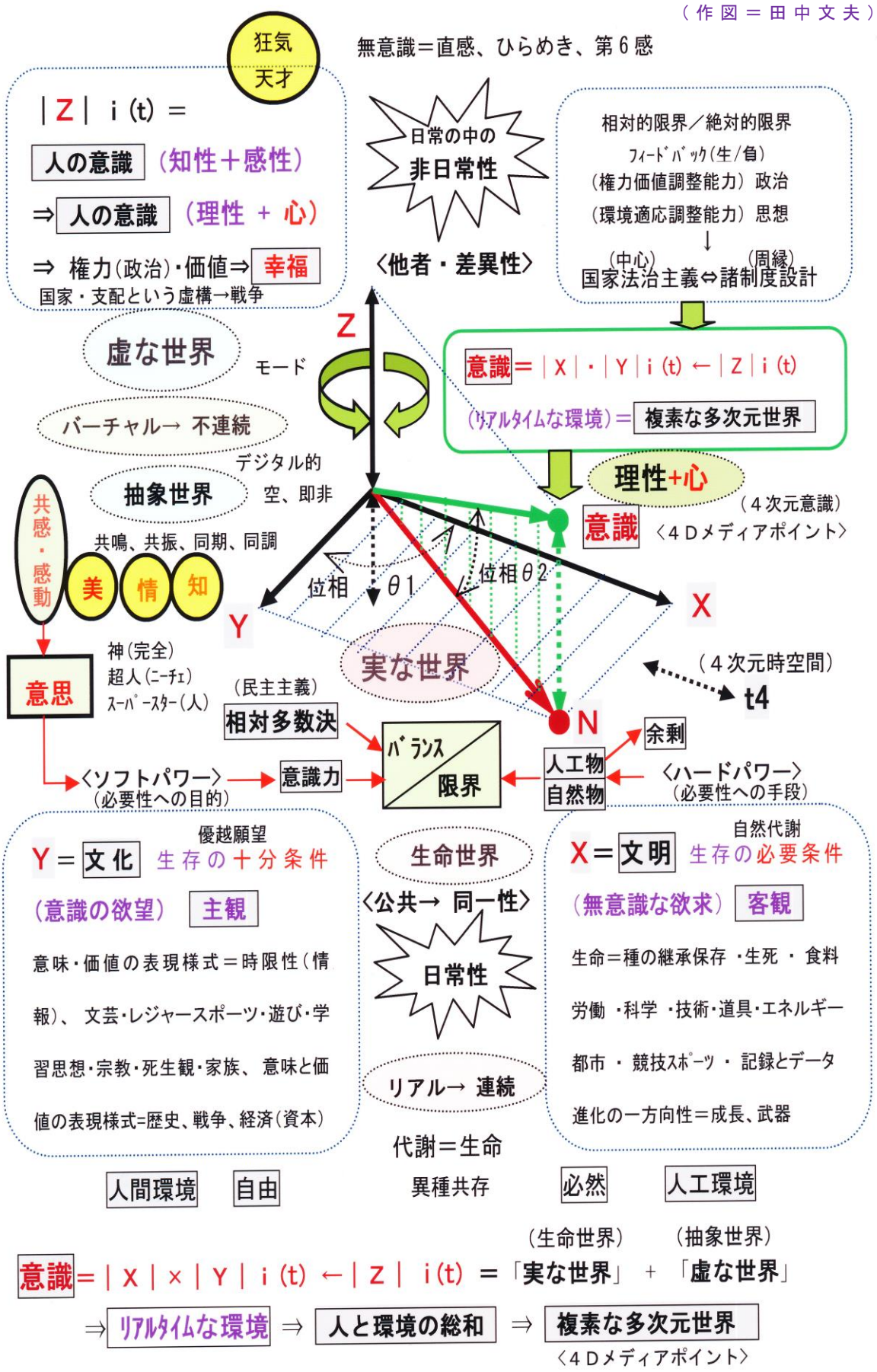
次頁の**【文明・文化・人の意識＝環境の複素（数）的な世界構造】**から、座標**x**軸方向ベクトルを $\boxed{\text{文明}}$＝**X**、**y**軸方向ベクトルを $\boxed{\text{文化}}$＝**Y** とすれば、その二つのベクトルが織り成す二次元平面の層（位相）は「**実な世界**」、つまり「**実在**」**とする社会**を表現します。

さらに**z**軸方向ベクトルを $\boxed{\text{人の意識}}$＝**Z** とすれば、人間の知性と感性によって意識される「**虚**（抽象）**な世界**」を表現することができそうです。「**虚**」といいますのは、「**目に見えないが意識の中にあるもの**」を意味し、「**人の心**」や「**社会脳**（social brains）」と言い換えることもできます。

「**人の意識・文明・文化＝環境の複素（数）的な世界構造は**」、**電気技術者**としての理解による提言で、文系の方々には理解しがたいかも知れません。

文明・文化・人の意識＝環境の複素（数）的な世界構造

（作図＝田中文夫）



（生命世界） （抽象世界）

意識＝|X|×|Y|i (t) ←|Z| i(t) ＝「実な世界」 ＋ 「虚な世界」

⇒ ﾘｱﾙﾀｲﾑな環境 ⇒ 人と環境の総和 ⇒ 複素な多次元世界

〈４Ｄメディアポイント〉

四・複素（数）的世界観から

前頁に示すよう、「文明」をX軸に、「文化」をY軸に、「人の意識」をZ軸に設定すると、三次元空間モデルが描けます。X軸～Y軸が構成する二次元平面は「実な世界」を表わし、「実社会」として日々生命の営みが続けられます。

X軸方向は「文明」として、主に物質的要素が構成します。人類生存の必要条件たる人間欲求にもとづき、衣・食・住・確保から都市の構築、都市間の移動、等々、生活必需物資の生産から流通・消費へと、生存確保を図ります。そのためには、道具と技術を駆使して自然物資に手を加え、人間にとって都合よい物へと加工していきます。定量を確保するため（安定）、備蓄を確保するため（余剰）、道具と技術を進化させますが、人間の無意識な欲求は「成長」を求めて前進するばかりの「一方向進化」であり、後戻りすることはありません。

「文明」の特徴は、主に物質的要素が構成するように、客観的要素により構成されることから科学や技術の対象となり、自然代謝の枠を超えた人工手段により、生命の制御、遺伝子操作、大容量記憶装置の創出、地球をも破滅させる原子核爆弾の保有にまで至ります。

そのことが「良いか、悪いか」の判断は文明判断の範疇にあらず、文化の役割として担うことになります。しかし現実の政治権力は「文明を支配する力」によって執行され、「文化の英知」は役立っていません。人間は性善なのか、性悪なのか、その両者を兼ねそろえた「欲望の意識」が実態です。

「欲望の意識」は「主観」として人々の心の内に秘められ、「良いか（yes）、悪いか(no)」という「価値観」をもたらせます。人の好みが多様であるならば、「価値観も多様」にならざるを得ません。ばらばらになりそうな多様な価値観の類似性を抽出して「枠」で囲うと、その枠内を「文化の種別」と呼ぶことができます。価値観の類似性＝共通性の枠ですから、その「枠」は「物質」でなく、人の意識に刻まれる無形な「情報」といえます。「情報」に含まれる意味や価値の種別により、「文化の種別」は多岐多様に分かれます。

「文化」の特徴は、情報入力によって人の「欲望の意識」が刺激され、自らがそなえている「主観」に同期、同調、共鳴（共振）すると、発信作用（意思創出～表現）へと至ります。その選択は、主観の好み（好き、嫌い）を感性が担い、主観の判断（良い、悪い）を理性が担います。感性や理性は「人の意識」の領域にあり、【文明・文化・人の意識構造】（P-118）の中では、Z軸の方向となります。Z軸の方向は「人の意識」の層（位相）であり、目に見えない「虚な世界」に属します。

「複素数＝実数＋虚数」であるように、実数部分は「文明」と「文化」が担いますが、虚数部分の「人の意識」は「文化価値」と密接に連携します。「文化価値の多様性」は、それぞれの形象をもって社会の中で表現されると、目に見える表現形式をとります。

宇宙の全エネルギーに占める物質の割合は、たった5％未満でしかないと、量子物理学はいいます。物質で証明する「客観的」という科学の立場は、「全宇宙エネルギーのたった5％未満の事実」でしかありません。

人類の知性で宇宙を解明することは、部分が全体を論じる「パラドックス（自己矛盾）」そのものです。しかし、それでも挑戦しつつ進歩をとげる人間の意思とは、いったいどこから来るのでしょうか・・・。

X ＝ 文明 ＝（欲求）⇒（必要条件）⇒「一方向進化」＝ t4（四次元）
Y ＝ 文化 ＝（欲望）⇒（十分条件）⇔「循環再生」
Z ＝ 人の意識 ＝（知性＋感性）⇒ 人（理性 ・心）⇒ 抽象的（虚）
｜X｜・｜Y ｜＝「文明×文化」＝「実な社会」⇒（実存の総合）
｜Z｜＝人（「知性＋感性」＝人（理性・心）＝「抽象の世界」⇒（人心の総合）

「**人間とは、何か？**」
「**生きるとは、何か？**」
「**宇宙の真理とは、何か？**」
そして・・・・・
「**私とは、何者だろうか？**」、・・・と。
さらに・・・・・
「**私とあなたのちがいとは、何か？**」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

これら**哲学的命題**は、人類の知能が発達して今に至る、さらに永遠に続く、**人間性への問いかけ**であります。この問いは、私が正会員となっている「**総合人間学会**」の主題、そのものでもあり、全容解明は不可能な世界です。

「**有機体生命**」を持つ人類の継続を図る機能を理解するには、**様々な代謝概念**により把握されます。**親子、家族、親族、民族、民**（町・市・県・国）、**人類**へと、「**代謝生活単位概念**」にまず着目されます。さらに生活領域の核と周縁からは、家庭、住民、地域社会、国家、連邦国家、世界へと、人類の「**生活領域**（社会）**概念**」が導かれます。さらに「**職域概念**」、「**文化環境概念**」、その他「**様々な種別概念**」が生み出されます。それら「**概念**」は、人間を複雑に重層化してからみ合った、多次元・多重構造となります。

現代、蜘蛛の巣状の**インターネット・ウエブ**（world wide web）を介し、ＳＮＳ（social networking service）による**情報ネットワーク・コミュニケイション**は、「**身体的生活概念**」を離れた、目に見えない「**仮想空間**」として扱われるようになりました。

人間知能（Ｉ）や**人工知能**（ＡＩ）も等しく、入力信号を**エンコード**（encode＝符号化）した「**符号化信号**」により、通信媒体を往来します。受信した信号は**デコード**（decode＝復号化）され、「**元の情報**」を復元する「**言葉や形象**」を出力します。しかし問題は、**入力**と**出力**を介在する**信号変換装置**（エンコーダ、デコーダ）という**媒体**にあります。

デジタル信号にあっては、高効率符号化（暗号化）技術を併用することでデータ信号を**圧縮**し、通信時間を**短く**、通信容量を**小さく**することができます。

それらは電気通信信号による伝達媒体ですが、**信号変換装置**（エンコーダ、デコーダ）には**変換する論理＝アルゴリズム**（プログラム）が必要となります。機微多彩な**人間の知性＋感性＝心**と、**人工的アルゴリズム**が一致するなら問題ありませんが、現代の技術にあって人為的アルゴリズムは、**人間知性＋感性＝心**を、正確に変換することができません。**人工知能搭載機器**（**ロボット**）は人間代替機能となり得ますが、まだ技術進化の入口に立っただけで、可能性は示唆します。

では、「**概念とは**」、一体何なのでしょうか？
「**概念とは**」、思考過程それぞれがもたらせる論理構造イマジネイションです。人間の意識思考能力がもたらせる抽象能力により、思考をアウトプット（結果）したものであり、必ずしも物質的形象を指し示す、名詞言語ではありません。
「**知能**」を発達させた人類特有な抽象能力による**概念化**は、「**文化**」を生み出し、「**文明**」を進化させてきました。「**文化**」と呼べる**概念**は「**価値や幸福**」の感覚を生み出し、「**文明**」と呼べる概念は「**技術進化**」を表わす**概念**です。

これまでの「**文明と文化**」の理解は、「**因果**」つまり、**原因**と**結果**が連続している**アナログ思考**でした。しかし二十一世紀の**デジタル技術**は、アナログ技術の連続性を限りなく裁断し、断片化し、離散させます。裁断、断片化、離散した一瞬一瞬の信号には、もはや前後の因果関係がなくなり、あたかも「**粒子**」のような個体性を帯びます。それは切り取った瞬時のデータ(情報)を示すのみで、

全体像は示しません。そのデータを活用して因果関係（全体像）を成立させるためには、断片化されたデータを**アルゴリズム**（プログラム）によって連続性に組み直し、具体像を再構築させる「**再概念化＝デジタル思考**」が必要となります。**デジタル思考**は**プログラミング**と同義語になり、**プログラムされた規律**（論理）を**アルゴリズム**といいます。

アナログ思考の概念化は、有機細胞体である人類の**身体**（知能）によっておこなわれましたが、**デジタル思考の概念化**は、**プログラミング**によって成されます。異なった二つの思考法は、**人間の知恵**ばかりでなく**人工知能**を加えることもできます。しかし問題は、有機体知性がもたらせる、「**創発現象**」（emergence ＝諸要素の相互作用から、諸要素の総和以上の新しい構造や形態が出現すること）の不確定な相移転（ヒラメキ、第六感、等）が、**デジタル思考で可能となるのか**にあります。

宇宙における物質変容の性質は、乱雑な**無秩序状態**（気体・液体）から、**秩序状態**（固体）へと向かい**自己組織化**をはかります。秩序状態から無秩序状態へと変容するには、外部から**別なエネルギー**を加えなければできません。

例えば**氷**（固体）が**水**（液体）になり、**水**（液体）が**水蒸気**（気体）になるためには、外部エネルギーによって**加熱**します。自然（閉じた系）における熱エネルギーは、高い方から低い方へと移動しますが、その逆はありません。逆行させるためには核分裂のように、膨大なエネルギーを加えます。

外部からエネルギー供給できない**閉じた系**の中にあり、様態変化を繰り返すと変化させるエネルギーが減少して固着化され、**平衡状態**で安定します。

このことは、**熱力学第二法則＝エントロピーは増大する**（様態変化に使うことができない無駄な熱エネルギーは増大する）が説明します。このような物質の様態変化（相移転）は、外部（環境）のエネルギーを加えることによって、別な「**様態**」へと変容させることができます。

閉鎖系にあってエントロピーは増大して**平衡**に向かいますが、**開放系で非平衡状態**にあってはエントロピーが減少し、固定化した秩序を壊して**新たな創造の芽**を育みます。

人間の「**心**」のような**開放系で非平衡状態**にあっては、物質や損得勘定で説明できない**複雑な創発現象**を生じます。知識やアルゴリズム（規律）だけでない、**感性**と**対象**との**相関**にあって、**同期、同調、共鳴、共振現象は自己インピーダンスを零化させ、対象とのマッチングを図って、エントロピー減少作用**を増大化させます。**知性**と**情熱**を備えた人間の「**恋愛感情**」は、ほんの一例です。**恋は**己を盲目にさせ、詩人と化し、芸術家とし、哲学者にも変容させられます。

人間の**知識**や**人工知能**のアルゴリズムは、**閉鎖系の中**にあります。情報工学におけるニューラルネットワークやインターネットウエブのような、一見開放系に見える拡がりがあっても、それはいずれも物質的に結ばれた複雑な閉鎖系を構築しており、人間**思念**や**情念**という無時限、無次元な「**無窮**」な在りようではありません。

人間の**知性**や**心**のように、自在に無次元空間を移動できる**思念世界**（真・善・美と自由）は、物質の在りようだけから説明しきれない、無際限な**開放系**にあります。

宇宙における**人間思念の特異性**は、一体、いつ、どこで、だれが、どのように、人々の個体へ与えたものなのでしょうか。絶えず**自己生成**（自己組織化）と**自己崩壊**（対消滅）を繰り返している宇宙の、小さくてわずかな「**ゆらぎ**」が、人類を「**創発**」せしめたのでしょうか・・・。「**人類知性創発**」の中には、常に「**物語性**」が組み込まれ、人類は**歴史**（物語）と**文化**を意識することによって、

人類の連続性を確認してきました。この**アナログ思考**は、**デジタル技術社会**にあっても、**人類の継続性**（歴史）を確認する手段を与えてくれます。

人類は二十一世紀に入り、デジタル文明技術を習得して現在に至ります。

人と人との意思疎通、社会と社会の情報交流、組織と組織の情報交換等々、多様で多彩な大容量情報を、デジタル信号は迅速に、正確に伝達してくれます。しかしデジタル信号化の過程（エンコード&デコード）において、情報の総体は断片化されて切り刻まれます。その結果、総体に含まれていたはずの**原因**と**結果**の連続性を失わせ、「**因果応報**」は成り立たなくなりました。

連続思考によるこれまでの「**文化内容、文化の質**」は変わり、非連続な断片化による「**刹那的文化**」、「**瞬時断片化された多様**（何でもあり）**な文化**」となり、「**価値の不連続な断片化**」をもたらせました。

つまり**情報の断片化**は、実在の「**総体**」を表現・伝達するのではなく、実在要素を「**断片・離散化**」して送るために、受け手の復元操作によっては、いかようにも**加工できる**ようになり、事実とかけ離れた「**何でも有り**」な様態を作り出すことになります。

また一方では**実在**（リアル）を離れ、**虚像**（バーチャル）操作を組み合わせることにより、「**バーチャル・リアリティ**」という虚実入り混じった表象と体感も創り出しています。

さらに断片化したデジタル情報はウエブに拡散され、もはや一人の人間の手と頭脳で制御できない領域へと散逸します。ウエブ上では、人の思考による「**概念化**」は無用な長物となり、蓄えられた断片データの「**真**」を、瞬時に正しく検索して応答する「**検索技術**」により、即座に「**答え**」を得られることになりました。その機能を機械に装着しておこなうのが、人工知能で動く「**ロボット**」になります。人工知能のアルゴリズムは、すべからく自己学習ソフトウエアで与えられますが、人間感性から発する「**創発による抽象化**」は、未だ人工知能技術の及ばぬところです。セル・オートマトンやライフゲームなど、シュミレーションの複雑操作によるプログラム上の「**創発現象**」も研究もされていますが、その未来像は現代人から予測しかねる領域にあります。

それゆえに、人間は**ロボットと共生**できても、**人間＝ロボット**にならないのではないか。しかし**人間の思念機能による抽象・概念化作業を失うとすれば**、「**有機生命体ロボット＝人間**」の、論理的可能性は否定できなくなります。**ロボットが人間に近づくのではなく**、むしろ「**人間がロボット化する**」、と考えた方が適切であるかも知れません。そのちがいは「**創発現象**」の有無にある、と指摘するだけが**現在の知性**です。

人間の認知機能は、**五感センサー入力信号**（視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚）によります。加えて**第六感**という共鳴、共振、共感という波動同調現象は、環境と身体の反応から生じる**感受性マッチング**であり、人工知能では極めて困難なプログラミングです。この辺りにまだ、「**有機体生命を備える人間の、人間らしい感受性の領域が残されている**」のかも知れません。

以上から「**文明**」と「**文化**」を端的に再定義してみると、次となります。

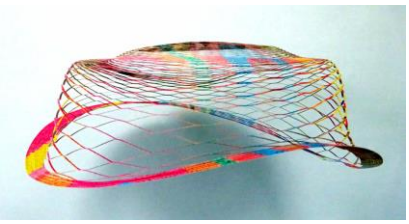
◆ **文明** ＝ **普遍性**を帯びた**広域生活技術**　（欲求の必要条件）

＝ 生命の代謝、生産（衣・食・住・都市・インフラ・エネルギー・成長と武器）、流通、科学・技術、労働

◆ **文化** ＝ **多様性**を帯びた**特定価値**による**生活様態**　（欲望の十分条件と複素的世界観）＝ 消費と資本（経済）、宗教・思想・哲学（死生観）、文芸、スポーツ、遊戯、社会生活、戦争と歴史

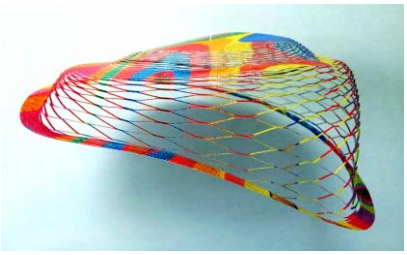
たった一枚の紙でも無限に変化する複素イメージ（どこから観るか？＝視点、観測点）

1 次 元 直 線



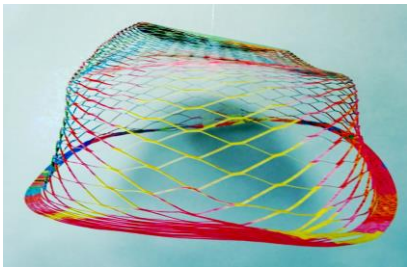
多次元空間

2 次 元 平 面



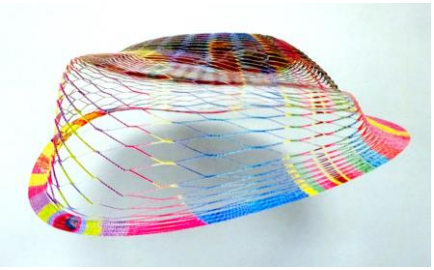
多次元空間

3 次 元 透 視 平 面

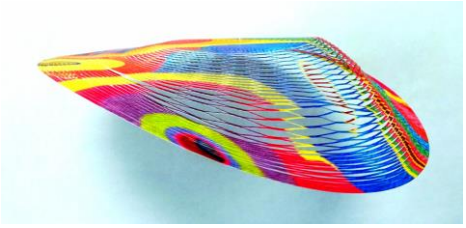


多次元空間

3 次 元 立 体 空 間



多次元空間



3 次 元 立 体 空 間

（写真＝田中文夫）

第六章　知が欲する＝真・善・美　・そして自由

人類の普遍的価値概念として、「**真・善・美**」の三つがあげられています。それは**人間の精神**（心）を構成する、**認識上**の「**真理**」、**倫理上**の「**善**」、**審美上**の「**美**」、をいい表わします。

「**真❶**」→ **宇宙の真理** → 自然の摂理と科学的真理 → 生と死、種の代謝、定理、公理、原理、法則、等の「**普遍性**」

「**善❶**」→ **社会を営む人間性** → 愛憎や倫理 → 愛情と憎悪、約束、規律、規則、法律、等の「**社会性**」

「**美❶**」→ **生命の息吹** → 同期、同調、対消滅 → 感性の同期・同調、生命の感動・躍動・対消滅、等の「**生命反応**」

この三つの概念は、古代ギリシャの哲学者＝**プラトン**（BC427～BC347 年）の「**イデア論**」や、近世ドイツの哲学者＝**カント**（1724～1804 年）の「**純粋理性批判**、**実践理性批判**、**判断力批判**」にも見られる**知性**や**理性**からの視点であり、今日でも**一般的概念**として理解されています。

しかし前記の捉え方はすでに、**西欧文明的理解**という**バイアス**がかかっており、西欧文明特有の、**神**（一神教）への**信仰問題**が伏されています。

信仰における**神の普遍性**とする**真理**、**神の僕**（しもべ）としての**規律**や**倫理**、**信仰**にもとづく**生命観**、等が隠蔽されています。それゆえに**神への視点を加味**すると、前記の「**真・善・美**」は、次のように書き換えられます。

「**真❷**」→ **神と宇宙の真理**→神の真理と科学的真理→信仰上の真理、生と死、種の代謝、定理、公理、原理、法則、

「**神と宇宙の普遍性**」

「**善❷**」→ **社会を営む人間性**→信仰と愛憎や倫理→信仰と自由、愛情と憎悪、社会性＝約束・規律・規則・法律、等

「**神への信仰と、社会的価値基準**」

「**美❷**」→ **神と人間の生命活動**→同期・同調、対消滅と抵抗→感性の同期・同調と抵抗の美、生命の躍動と対消滅、等

「**神への信仰と、人間欲求活動＝文化性**」

西欧文明と異なる**東洋文明**＝インド、中国、朝鮮、日本などにおいては、**多神教の神様**や、神に代わって**天**を頂点とする**儒教思想**などにより、西欧の**一神教文明**と大きく異なってきます。つまり、**東洋文明の特徴は、人間の側から包括的に世界を捉えて理解する**、「**人 ⊃ 世界**」（世界の中に神や人や自然が含まれる）の視点です。一方で**西欧文明の特徴は、神によって世界は創られ、人間もそのひとつであるとされる**「**人 ⊃ 世界 ⊃ 神**」（神が世界と人を創造した）の視点となります。

さらにもう一つの捉え方としては、自然界における人間の動物**本能的な面**から理解する視点です。

「**真❸**」→ **自然な真** → 正しくありたいとする、**自然な意思**

「**善❸**」→ **自然な善** → 親が子に対して示すような、**自然の情愛**や**犠牲的行動**

「**美❸**」→ **自然な美** → 自然や人間の美しさ等に同期・同調・共鳴・発奮する、**自然な感性**

以上を整理すると、「**真・善・美**」という捉え方には、次なる**三つの視点**があることになります。

第一（❶）は、**人間の知性・理性から、自然**（人・世界＝宇宙）を**分析・理解**し、**帰納的**及び**演繹的**に思弁する、**科学的視点**。

第二（❷）は、第一に加え、**神の側から人間をどのように位置づけるか**（設計）という**信仰**を**隠蔽**する、**西欧的視点**。

第三（❸）は、**人間の側から世界＝自然を包括的に**観察、理解、畏敬、思考、整理し、**統合的**に**受容**する、**東洋的視点**。

それぞれに含まれる主たる問題点は、次となります。

第一（❶）の**科学的視点**には、部分（人間）が全体（宇宙＝世界）を述べようとする**パラドックス**（自己矛盾）を含んでいる。

第二（❷）の**西欧的視点**には、「**神は死んだ**」とする**ニヒリズムの超克**（孤独）に人間の側が耐えられるか・・・という問題を含む。

第三（❸）の**東洋的視点**には、**統合的受容**の中で個別的・科学的明晰さを欠き、**社会の平準化**に知性・理性が耐えられるか・・・という問題を含む。

第一（❶）におけるパラドックスからは、部分が全体を真に分析・理解し、帰納的及び演繹的に完全な再構成ができない事の矛盾に対して、人間が「**神**」と設定する超越次元においての思考・理解・説明により、一つの解決策となり得ます。しかし超越次元の説明は、他者へと伝達することができません。他者に伝達できないことは、その真偽を普遍的に証明することができないゆえに、疑問を抱かずにただ信じることへの「**信仰**」が生じます。

それが**第二**（❷）の視点の立場となり、今もって科学万能な世でありながら、現代社会の中で神への信仰は捨てられていません。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の一神教文明においては、鮮明な**信仰の立場**を主張しています。

第二（❷）の**ニヒリズムの超克**においては、第一（❶）のパラドックスへと立ち返り、矛盾の解消はできません。現代世界の約半数を数える**一神教文明の衝突**は、中世の十字軍から、現代も中東紛争となり、世界を混乱に陥れています。一神教三宗教の聖地＝エルサレムを、イスラエルの首都と判断した（2017 年）米国トランプ大統領の決定は、パレスチナ紛争を解決するものではありません。

現在のイスラエルは古代イスラエルと異なり、イスラエル十二支族のたった二部族（アシュケナージ・ユダヤ）が再集結したものといわれ、他の十支族（スファラディ・ユダヤ）は世界へ離散し、実態が見えない**ワンワールド勢力**へ変身しているといわれます。であるなら、**ワンワールド勢力が表の実体**となったとき、ようやく一神教文明の衝突は、解決されることでしょう。

日本の天皇家が、その一翼を担っている指摘は、落合莞爾氏の著書、『**天皇とワンワールド**』に示されています。つまり日本文明の歴史は、聖徳太子の時代において、現代のパレスチナ紛争のような争いを解決した一例であり、**十七条憲法**制定（604 年）は**世界憲法の先駆け**であったと考えるのが、私の推考となります。

そこで登場するのが十七条憲法の第一です。『**一曰、以和爲貴**、（一に曰く、和を以て貴しと為す、）』、紛争の人類史の中で、最初に「**和**」を定めた規律＝憲法は、二十一世紀人類においても「**最善**」となるべき規範です。それゆえに重要となるのが、次なる第三の**東洋的視点**です。

第三（❸）**東洋的視点**は、人が自然と同期・同調・調和・抵抗する喜びを、**人間本能を自然な行為の中で受容～統合～昇華する視点**となります。

しかしこの**統合的自然受容**の立場にあってはアバウトな**平準化**（マニュアル）が進み、突出した真理を受け入れがたい「**空気**」を創り出します。

もう一方では、**科学的武力**の前で、**論理的説得が力を発揮できるか疑問**が残ります。

人類の歴史は武力行使（戦争）の歴史でもあり、今もってその本能をかき消すことができずに、さらにエスカレートしつつあります。

「**アメリカンファースト**（トランプ米国大統領）」、「**東京ファースト**（小池東京都知事＝エジプト、カイロ大学卒業）」、このような政治スローガンは**一神教や騎馬系民族と同類**であり、「**やるか、やられるか**」二択の道へと導きます。

二択の道は、敗者や弱者、少数者を排除する論理を含むがゆえに、人類の「**最適解**」となり得ません。

ではこれからの世界文明は、どのような視点に立てば良いのでしょうか。

人間思考はその多次元性において、実態を伴わない虚な次元世界を脳内イメージすることができます。そのことと、第二（❷）の**ニヒリズムを超克**する合理的・科学的立場の**帰納法**及び**演繹法**をもって、世界を包括的に解釈・説明し、なおかつ自由な立場の確保をもった視点から、人間感性の創意・創発を加えることができるであろうと考えるのです。

知識、知能、論理においては**人工知能**（ＡＩ：Artifical Intelligence）が人間を上回る時代の中で、「**真・善・美**」判断の**ロボット化は進行**できるでしょう。

しかしＡＩが最も苦手とする領域は「**心を奮わせる美の世界**」、**感性の問題**です。ＡＩがプログラムできない**個の美意識**は、どのように取り扱われるのか・・・。

一方、**始まり**（生）と**終わり**（死）までが一サイクルとなる**生命体**の人間が、いつの日にか永遠の生命を得て**人造人間**と化すか、現代のわれわれには理解できません。

地球環境の中で、生命代謝を必要としない「**永遠**」が可能なのか・・・・・現代の私達には分かりません。

今の理解において、物質が持つ**エネルギーは不滅**ですが（熱力学の第一法則＝エネルギー保存の法則）、その**様態は絶えず変化しつつ平衡に向かっている**（熱力学の第二法則＝エントロピー増大の法則）ことから、「**代謝**（様態変化）**を必要としない物質の永遠は存在しない**」、という理解ができます。

であるなら、「**永遠なる生命**」は未だ考えなくても良いのかも知れません。

現生人類の知性において、「**世界の総合を語る思想**」がありません。

世界の総合を語る代わりに「**神**」を設け、「**神が世界を創った**」とする物語へと矮小化しています。

人類が世界＝宇宙を語り切れないパラドックスにあるのだから、当然なことでもあります。仏教の「**空**」も、ニヒリズムの「**虚無**」も、宇宙の構造・構成を示し得ていません。

未だ不十分ですが、私が半世紀以上にわたり、「**生死を含む登山**」を通して着想した「**複素**（数）**的世界観**」が、総合説明の一助を担えるならば喜ばしいものです。しかしやはり、パラドックスを乗り越えることはできないでしょう。

生死を賭ける「**登山**（スーパーアルピニズム）」においては、人生の縮図となる**総合力**が求められます。それら**人生とフラクタル**（相似）な登山分析からの推論は、複素的世界観を着想するほんの一例でしかありません。

※ 拙著 ＝ 『**登山の総合人間学**』2,015年 （国立国会図書館・蔵書）
『**登山の生態分類学**』2,016年 （国立国会図書館・蔵書）
『**山と美の終焉**』2,017年 （国立国会図書館・蔵書）

一・真理

認識上の「**真理**」は科学を構築し、人間の認識差異に関わらない普遍性を表現することにより、体系化して「**公理**」となります。この思考の延長上で、人間性というあいまいな、個別的で情緒的要素を取り除いた「**真／偽の世界**」にはまりこむと、「**人間機械論**」という視野が生じてきます。

ポーランド系ユダヤ人言語学者の父に幼い頃から英才教育を受け、十四歳で数学の学位を得てハーバード大学大学院に入学したというアメリカの数学者で、哲学や動物学、通信工学等に精通する＝**ノバート・ウイーナー**（Norbert Winener 1,895～1,964年）は、1,954年に発表した『**THE HUMAN USE OF HUMAN BEINGS**（人間機械論）』において、「**サイバネテックス**（Cybernetics）」という考えを提唱しました。

私がこの本を読んだのは1,970年、今からおよそ半世紀前の初版20刷（みすず書房）でした。そして現代の人々は、コンピュータやスマートホンを用いて、通信、検索、制御等の基礎理論、応用理論を知らなくても、汎用機器として理屈抜きで当たり前に使用する時代にあります。

「**サイバネテックス**」とは、通信工学と制御工学とを融合して、生理学や機械工学、システム工学を統一的に扱うことを意図した学問分野で、まさに現代の人工知能とロボット化に先駆けた思考です。

さらに出版の目的として、「本書の目的は、今日に至るまで全く人間だけにできることと考えられて来た分野における機械の可能性を説明すると同時に、**人間にとって人間のことが何よりも大切である世界の中でこれらの可能性を専ら利己的に利用することの危険を警告することにある**（同書P-9～10）。」としています。

さらに「通信文や通信機器が将来発達するにつれて、人から機械へ、機械から人へ、および機械と機械との間での通信文がますます大きな役割を演ずる運命にあることです（同書P-17）。」と、指摘していることは、今まさに**現実**となっています。

人間行動を機械へ代替させることが進むと（人間機械化）、その機能を専ら**利己的に活用する権力者の出現**は、容易に想像されます。「権力欲の野心家が科学界や教育界に全く見られないわけではない。かかる人々は、あらゆる命令が上から天下り、決してもどってこないような組織を好む。彼らの支配下にあって人間は、或る高級な神経系をもつ有機体の行動器官の効果器と同列の段階に引き下げられてしまう。私は本書を、かかる人間の非人間的な使い方に対する抗議に捧げたいのである（同書P-23）。」として、修正回路となる「**フィードバック機構**」の大切さも述べています（同書P-20～22）。

「**真理**」は単に「**真**」であり、「**確かにそのようにある**」だけのものです。

人間にとっての**真理**は、必ずしも有用なものばかりといえませんが、**真理**を「**偽**」とした偽った解釈もできません。確かに**真理**そのものに価値はなく、それを人間にとって有用であり得るか否かの価値判断は、次なる「**善**」の段階によって決められます

私も電気通信工学を学んだ技術者ですから、**ウイーナー**のいう「**サイバネテックス**」は良く理解できます。半世紀が過ぎた今まさに、「**サイバネテックス**」は実用化され、人間の労働は機械へと置き換えられています。最初は単純な肉体労働の代替でしたが、人工知能搭載機器の進歩は、yes / no 判断を要する作業分

野へと拡大しています。やがては高度な「**知識**」作業までが、ロボットに置きかえられますが、「**知恵**」にまで及ぶか、今の私には分かりません。

この進化は真理の方向性であり、そのことが人間にとって「**良いか、悪いか**」は、次なる「**善**」における価値判断となります。そして半世紀前に**ウイーナー**が危惧したように、**権力**による**上意下達を機械的におこなうことの人間性破壊**を防ぐためには、「**フィードバック機構**」が不可欠であることを知るでしょう。

ネガティブ・フィードバックは作用を減少・減速させ、**ポジティブ・フィードバック**は逆に、作業を増加・加速させます。その**さじ加減の判断**こそが、人間の「**知恵**」による、**知的な価値判断**操作となるはずです。

真理を求め続けるということは、単なる人間の本性でしかありません。

他方では一神教のように、「**神が人間や世界を創造した**」という物語を**信仰**として受け入れできるならば、**信仰**における一つ一つの物語もまた、「**神の真理**」として記憶に存在することになります。私にはそのような**信仰**がもてないために、「**神**」のイメージは想像できませんが、**人生物語**の中でそのような「**神**」を設定できたなら都合よい場面に、出くわした経験はあります。

ヒマラヤ登山途上における、遭難死亡者（仲間3名）と生還者（私）との差異を考えた時です。

西欧文明の多くは「**一神教**（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）**社会**」にあり、**科学的理性**と別な面で、「**神**」への「**信仰**」が関わっています。

「**一神教信仰**」では、**人間**は**原罪**を背負った神の**僕**（しもべ）であり、終末最後の審判で救われるために**祈り**を捧げます。**信仰**は、神と人間一人ひとりとの**契約**であり、そのことから**個人主義**が発達します。

一方で**神**（ゴッド）を、信じる、信じない、という信仰習慣がもたらせる思考法は、「精神／物体、信じる／信じない、生／死、良／悪、正／反、強／弱、味方／敵」のような**二元論**を育みます。「**曖昧ではいられない二元論的思考法**」は、実証に真理を求める「**科学の思考法**」に合致します。

デカルトは**実在**を**精神**と**物質**に分けて捉えたように、**神**（ゴッド）を信じる**観念**と、**実証真理**を求める**科学的理性**とは、同じ次元の世界観として矛盾なく共存できるのでしょう。

実在を把握する二次元平面的理解法であり、このことが**実証の限界**を生じてきます。宇宙は多次元と考えられる中で、二次元世界は宇宙を切り取るほんの一層でしかないからです。

他方で「**利・善・美**」として、「**真 ↓ 利**」に修正したのは日本の「**創価学会**」です。**創価学会**の主要な活動「**折伏**（しゃくぶく）」は、他の宗教を論破して自説に取り込む運動であり、また、神を否定して神棚を取り払うなど、仏教本道ではない「**一神教宗派**」に見たてられます。

「**真理**は必ずしも、人に幸福をもたらすものではないから、**価値**そのものではない」として、「**真理**」よりも現世利益の「**価値創造**（創価）」を優先させます。だがそのような考え方は**宗教でなく、信仰でもなく、「価値創造思想**」であるといえます。

しかし創価学会における「**利・善・美**」の中身については、本論の主題から外れるので、紹介だけに留めておきます（『山と美の終焉』拙著、P-52参照）。

二・ 善

倫理上の「善」は、社会を営む上での人間性にとって、「良かれ」とする諸事象を指し示します。

そのことは社会という集団の価値基準を定めることにもなり、暗黙の約束（空気）から法制化に至るまで、人々の自由を拘束して平準化させる「倫理」規範となります。一方で、人間本能として植えつけられている「愛・憎」など「心の問題」もあり、それらは感性をともなうがゆえに多様性な展開が図られ、倫理規範と相克します。

それらはいずれも「良かれ（善）」と思ってすることですが、「誰にとって良いのか（善）」、が常に問題となります。自分だけのためか、特定な他人のためか、集団や国家のためにか、普遍的人間のためか、真理のためにか・・・等々によって判断基準は異なります。

異なった基準相互では議論がかみ合わず、価値も異なることから、歩み寄ることは困難となります。また、もう一方で信仰心の問題も重なり、倫理（善）の議論は一つにまとめることができません。

それら議論の方法として、ドイツの哲学者で思想家ヘーゲル（1,770～1,831 年）は「弁証法」を生み出しました。しかし現代の民主主義社会の中では、「正～反～合」の「合」への弁証が問題となっています。「正～反」がいかに議論を重ねても、視点（相）が異なる相関にあっては、全てを同じくする「議論の解＝合」はありません。それゆえに、視点（相）数が多い立場へと集約（議決＝多数決）するのですが、この時に「少数の立場を尊重」しなければならないことが「善の倫理」となります。

しかし民主主義が世界に定着している現代、多数を得ることが「正＝権力＝支配」となり、少数の立場は「反＝弱者＝被支配」とされる二元論により、「少数の立場を尊重する精神（心）」がなくなってきました。とくに一神教世界での二元論は、そのことを助長します。

多神教世界での価値多様性は、人間の階層化（カースト等）と、民主主義との不整合が課題となります。

無信仰な世界にあり、知性や理性で捉える「真理の普遍性」だけからは、情緒的人間性を欠如させたロボット社会を招きかねません。また、君主や独裁者を絶対権力者として「天」や「神」に置きかえる専制主義にあっては、「権力＝真＝善」となり人間的な「合」の形成ができません。儒教国家（中国）や一神教国家（多数）の要注意点です。

「相互が譲り合う精神（心）」を育むためには、「完全なる善は無い」ことを、参加者全員に周知することです。

「善／悪」は常に相対的であり、二元論では解決できないグレーゾーンが残ります。「善／悪」の概念は人間社会だけの規範であり、宇宙の真理に依存していません。信仰にともなう「善／悪」は、その信仰集団内部の規範であり、人類共通な規範ではあり得ません。

人々の「価値観」は目に見えない心の問題として、信仰や崇拝による宗教的な側面を生じます。もう一つには実存的存在者たる個人の、知性、理性、感性から捉える側面もあります。前者は「宗教」として把握され、後者は思想や科学、学問、芸術、等々の「文化」として把握されます。

「宗教」では信仰対象となる神を特定し、崇拝対象となる自然や人物を特定し、それらを体感・可視化させ、実態として定着させる「仕掛け」を要します。

「思想」においては、理性によって世界観を構成して知性とするわけですが、知性や理性には「限界がある」、と論じたのは高橋昌一郎氏（1,959 年生れ、論理・哲学者）です。

一神教的二元論で考える西欧哲学や科学にあっては、グレーゾーンを「曖昧な事実」として承認できない「定義（概念）の限界」に行き当たるからでしょう。思想や科学、学問、芸術、等々においては、理性をもって世界観を組み立てて知性とし、感性に同期・同調した表現によって「文化」となります。

高橋昌一郎氏は、理性と知性の限界につき、次を挙げています。

「理性の限界」に関する三大定理

❶ 社会科学（選択）の限界 ↓ アロウの不可能性定理

❷ 自然科学（実在と相補）の限界 ↓ ハイゼンベルクの不確定性定理

❸ 形式科学（認知論理）の限界 ↓ ゲーデルの不完全性定理

「知性の限界」について次の三点

❶ 言語の限界 ↓ 論考論理の自己矛盾 ↓ ヴィットゲンシュタインのパラドックス

❷ 予測の限界 ↓ 帰納法のパラドックス ↓ 自己組織化臨界状態

❸ 思考の限界 ↓ 人間原理のパラドックス ↓ 究極の不可知性 ↓ 理性よ、さらば！

科学の発展と、信仰や宗教の形骸化にともない、十九世紀後半からは「ニーチェ（1,844～1,900 年）」に代表される「ニヒリズム（Nihilism）＝虚無主義」が台頭してきます。ニーチェの名言「神は死んだ！」に表象されるよう、神への信仰を離れ、「人間の意思」を主体として神を超克する、「超人思想」に至ります。

※『「すべての神々は死んだ。いまこそわれわれは超人の生きんことを欲する」――これこそが、大いなる真昼におけるわれわれの最後の意志であれよ！（ツアラトウストラ、第一部、贈与する徳）ニーチェ』

ニヒリズムの「ニヒル（Nihil）」は、東洋思想の「無」に似ており、二元論で考える「ある／ない」、「信じる／信じない」を超えた、無窮で絶対的非存在のようなものを総称して、「ニヒル＝無」とします。仏教ではこのことを、「空」とも呼びます。

古代ギリシャの哲学者＝アナクシマンドロス（BC610 頃～BC546 年）あたりから、「無」の思想は現われてきたといわれます。アナクシマンドロスは、「この世に存在するすべてのものは必然に従って生成し消滅し、自分が出てきた場所に帰っていく」、とします。

この考え方は「聖書→創世記」にある「神による天地創造と混沌」の中で、天地創造は神の所業であり、神によってつくられたもの全てが混沌となり、混沌の様態は光によって写し出された形を成して、その存在が確認されます。世界を創造し、人間を創造したのが神であり、祈りによって原罪（＝人間には罪がある）が救われて神の世界へ還れるか、破滅の道へと落とされるか、人間世界の終末で神の最後の審判を受ける、からだと。

人間世界においては、神に祈ることによって救われるという目標や目的が生じ、為すべき様態が決められます。そのことが、宗教の教義や様式を定めてきました。

しかしニヒリズムにおける「無」とは、そもそもアナクシマンドロスのいうように、この世の諸行は宇宙の必然に沿ったものであり、神の創造ではないこと。

またニーチェもいうように、「神は死んだ」のであり、人生の最後は神が審判することでなく、人間の意思による判断となります。

つまりニヒリズムにおいて神の存在は無いのだから、神との契約は無く、神との契約にもとづく「善」や「美」の価値意識も無く、「真」における世界の目的も無い、として、世界は「虚無」であると認識します。

世界における目的や意味もなく、無においては終末もなく、我々は不可避的に宇宙の中で永劫回帰している、あるがままの生存者意識こそが、ニヒリズムの極致となります。

世界や人間は神によって創られたものでなく、すでに不可避的必然の中にあること。であるから、人間に原罪があるわけではなく、神に祈って救いを求める必要がありません。人間には、人間以外のなにものにも頼れるものはなく、自分自身でさえ、頼れる根拠は何も無いことの自覚。ゆえに、自らの理性、知性、感性を総動員して、自らの「真・善・美」を築く努力こそが、「生きる」そのものの中身となること。よって、「自らの意思にもとづき判断」するためには、「必然から解き放たれる自由な立場」の確保が重要となります。

人間が、人間たる精神の中に潜んでいる「否定性」こそが、神を否定し、世の必然を否定し、しがらみのない「自由」を確保する「ニヒリズムの克服」となります。

否定するためには、また、「自由」を確保するためには、「抵抗の美学と哲学」により、その原理と構造を把握することができます。

その結果、多種多様に分岐、分類された人間行為の総称を「文化」と呼び、「文明」との違いを対比することにより、より良く理解することができます。

宗教的な「真・善・美」の価値意識に対し、それらすべてを否定する「虚無」の自己意識は、個人主義（実存主義＝existentialism）と科学主義（scientism）へと向かいます。

個人主義からは「実存思想」が導かれ、科学主義からは「唯物思想」が提示されました。

しかしそれらからも、宇宙の、世界の、個の、全てを網羅する思想は形成できませんでした。「理性の限界」、「知性の限界」、があるからです。全てを網羅する思想として「仏教」がありますが、科学的実証に乏しく、曖昧で不正確ながらも、思念的人生物語を総括してくれます。

「仏教」は宗教とみなされていますが、人間が修行を通して悟りに達し、そして仏になるという、「修行システム」と考え直すことができます。

「仏教」は、神への信仰（一神教、多神教）でなく、自然崇拝（神道）でもなく、偉人崇拝（儒教）でもなく、オカルト（道教）でもありません。「システム」と考えることができます。

ニヒリズムでは神を乗り越える「超人思想」がありますが、仏教では自我を乗り越える修行の先に涅槃を得て「仏」となる、「超人思想」に似た形態があります。

双方の立場に神の目線はなく、人間中心な目線と努力行為が共通していますから、やはり両者は「宗教」でなく、「思想」といえるでしょう。

三・美

（一）美の感性

審美上の「美」は、人間生命の息吹を感じる情熱の中で、「美の感性」は次なる三つによって味わうことができます。

❶ 対消滅の美 → 自然や神や異性と、同期・同調・共鳴・共振する中で生じる「対消滅」。自我と対象とが対になり、自我は消滅し、対なる世界の中で無我を感じる美しさ。それは宇宙で分子が結合（カップリング＝対消滅）して一対の物質（一個の完全様態）となり、固着した存在（物質）となるのに似ている。物質もまた反物質と対消滅し、別なエネルギーに移相する。

❷ 抵抗の美 → 自然や神の摂理（真理）に意識をもって逆らうことにより、自然や神の摂理（真理）を離れた「自由な感覚」を味わうことに感じる開放の喜びと、その様態を美しいと感じる感性の美。人間は他の動物（自然）と異なり、意識を備えた人間なるがゆえに「自然に対する否定性発揮（文化）」の中で味わう人間独自な感性の美。

❸ 希望の美 → 前記二項は自然や神や異性に対し、現実対処（リアル）をしめします。しかし人間が人間たる存在者としての特殊性は、思考・思念により能動的に「希望を抱くことができる創造者」、だから、でのこと。人工知能はロジカルな創造は可能ですが、人間は知性と感性から目覚める突然変異的な希望（創発＝部分の総和にとどまらない性質が全体として出現）をもつ。希望という未来時刻の中に創発の美を得られるなら、現在における人間の矛盾（①パラドックス、②ニヒリズム、③平準化）を乗り越えることに美しさ感じる、理性の美。

人間が人間であることに最高の価値を求めるのが、「美」となります。

そして「美」は物質として得るのではなく、「美と共に有ることの歓び」を見出す感受性であり、感受性という無形な意識の中にあります。しかしその時間は限られた間でしかなく、デジタリックで刹那的です。

それゆえに人は、「美」を「作品」として残し、「作品」を通した二次感性によって「美の再体験」を図り、「美の伝承」をおこないます。「作品」を集め、系統だった整理をし、評価や解説を付して文化の種目（ジャンル）を形成します。

「美の真実」は直接体験における感性なのですが、それだけではやがて消えてしまい、何も残らず、他者へ伝承することができません。ゆえに人類は、「感性を作品に転化」することにより、多くの人々へ「感動の美」を伝えることができるのです。しかしそれはあくまでも原体験（オリジナル＝Original）ではなく、「作品」を通した代替の（オルタネイティブ＝Alternative）多次元体験です。

ところが人間は、記憶から消えてしまう「一瞬の美体験」を、何とか「永遠の美体験」として残そうと、作品へと固着させます。そのメディアは、言語で残せば「文学」に、音や写像・映像、身体動作、等で残せば「芸術」として、観念的啓示を形象に残せば「宗教」に、異性との人格的対消滅美は「子孫」として、諸々の形式をもった継承を図ります。これらを総称して人々は、「文化」と呼んでいますが、有機体生命と異なった無機質代謝ともいえそうです。

（二） 美の様態

審美上の「**美**」は、人間**生命の情熱**を表現する**行為**の中で、「**美の様態**」を次なる四つに分けて考えることができます。

❶ 喜劇美 → 滑稽と残忍性→笑い、おかしさ

ニーチェ（1,844～1,900 年）は、淘汰における自然界最強の適応者たる人間の自然本能として、「**残忍性**」をあげています。

他人の不幸は蜜の味＝他人の不幸を喜ぶ**残忍性**は、人間脳の構造がそのようになっているからだ・・・、とされます。

対象相手や自分自身を否定する**残虐性**を、さらに否定して肯定するという、知的生命体の**弁証法的自己肯定快楽欲求**は、優位な立場に立つ心のゆとりの中で味わう、**笑い**や**同情**、**悲喜劇**、**等**を楽しむ**美学**を生み出しました。**否定を否定して肯定する**という手法は、残虐な真理から解き放つ緊張緩和の**良薬**ですが、**自制心**を失うと、**嫉妬**や**妬み**や**反抗心**を抱く**劇薬**にも変わります。人間本性が持っている**心の二面性**（自己矛盾）です。

倫理的・宗教的**二元対立**な**文化**（一神教、儒教、デジタル文明、等）や**上意下達**な**文化**（専制国家、等）にあっては、「善／悪，正義／不義、厳正／滑稽、慈愛／残忍」等を反復する教えとなり、**中庸**（ちゅうよう）を嫌います。しかし**人間本性の自己矛盾**（パラドックス）に対処できるのは、対極の間にあって調整役となる、**中庸な存在**です。

その先駆けは日本にあり、604 年（推古天皇 12 年）に**聖徳太子**らが制定したとされる「**十七条憲法**」です。

神道（カミ＝多神）、**儒教**（天＝二元対立と救済）、**仏教**（仏＝人間修行）思想を習合させた「**中庸**」となる思想と制度です。その在り方は、次なる❸の「**優美**」へとつながります。

❷ 悲劇美 → 死の本能→死の意義付け→いけにえ→にえ

ドイツの哲学者＝**ショーペンハウエル**（1,788～1,860 年）の小乗仏教的な**ペシミズム**の哲学は、「**人生はむなしく、種族の生命のみは永遠である**」として、「**死して生きる**」深層心理の破壊欲求にもとづく「**死の快楽現象**」を説明しました。

信仰と結びつき、神の永遠に結びつけた「**殉教**」思想は、一神教信仰の中に顕著に存在します「**ジハード**（聖戦）」と称してテロ事件を引き起こした、**イスラム原理主義者**に見られます。

一神教ばかりでなく仏教においても、**涅槃**（ニルバーナ＝吹き消された状態）の最終形たる**無余涅槃**（身体の死）こそが **解脱**であるとして、苦行の末に自ら死に臨んだ（即身仏＝補陀洛渡海）僧たちもいます。

信仰に結びつかなくても、**ゲーテ**（1,749～1,832 年）が書いた『**若きヴェルテルの悩み**』のごとく、恋の成就がかなわぬゆえに自殺し、死の中に**永遠の美**を封じ込めようとするペシミスティックな文化もあります。

キリストの復活がごとき「**死して生きる**」思想は、魂と身体を分離して、魂の永遠さを神に同一視させる信仰に取り込まれてきました。同類は日本でも心中事件があり、文学作品や伝承として残されています。

「**神は死んだ**」とするドイツの哲学者＝**ニーチェ**（1,844～1,900年）は、ペシミズムの克服に**ニヒリズム**を生み出し、ニヒリズムの克服においては「**超人**」思想を生み出しました。

死の世界に挑む**登山家の意思**は、超人になれなくても、超人を意識しなくても、**死**（悲劇美）**の手前にある究極な生の中にこそ、美の極致があること**を知ることができます。

しかし必ずしも死の手前で引き返すことができない場合も生じ、そのときの「**死**」は、古代人から受け継がれる、「**いけにえ**」に類する、「**にえ**」に等しい位置づけとなります。

人々は古代から集団生活の中で「**犠牲**＝**にえ**」を強い、集団の安定を保ってきました。「**死んで、よみがえる**」復活思想の中では、「**にえ**＝**神**」となりますが、神を必要としない人々には、無用なものです。

「**にえ**」は古代から祭祀の中でおこなわれ、集団における「**死の意義づけ**」となり、集団（国家）の捨て石、平和の礎（いしずえ）として**悲劇を美化**してきた習わしがあります。

❸優　美 → 優賞劣敗→性本能と雌雄淘汰→身心の優美、身体装飾の優美

優美な感覚は、五感を通して「**美しいと感じる**」直接的な感性、つまり人間本性としての感受性です。

人間相互にあっては、ダーウンが唱えた「**雌雄淘汰**（しゅうとうた）（異性にとって魅力的となる形質進化によって淘汰される現象）」となります。

人間と自然（人間以外）にあっては、人間の側が余裕をもって自然に受け入れられた、あるいは自然を受け入れた、と感じられる「**受容態度**」となります。

その最高な本能行為は、**愛情をともなった性の交合**であり、**愛と性の欲望と試練こそが人間的美の本質である**、といえます。

「**愛と性は、人間が人間たる本質**」であるがゆえに、社会はその本質をあからさまには**否定**（隠蔽）し、さらにまた**否定**（実践行為）する中により大きな歓喜をもたらせるという、「**美的昇華の原則**」（否定の否定は肯定）によって、「**優美たる性の文明・文化**」を育んでいます。その中で常に、**本性**（自由）と**倫理**（規律）は、正解を得られぬ**相対的葛藤**を続けます。

常態が優美であると、優美と感じなくなってしまう人間の感性（惰性）・・・。そして二十一世紀の人工知能は、正解無き葛藤をどのように**プログラミング**するのでしょうか。

人間相互の**優美な感覚**は、周囲から〈**少し抜け出た**〉程度が受け入れやすく、全く異質なものに対しては同調できない違和感や反発・警戒心を呼び起こしてしまいます。〈**ちょっとだけ優れている**〉という**優賞劣敗意識**は、広く社会の中に受け入れられるものです。

その対象は持って産まれた心身の優美さとともに、加えて身体装飾の優美さがあります。原始社会に始まる身体装飾（化粧・装飾品・衣服）は、中世社会で仮面が加わり、仮面舞踏会が催されます。高じて仮装にまで発展し、現代のハロウインなどは信仰に関わらない遊びの範疇におよんでいます。そして二十一世紀社会の中で**身体装飾**は、**電装化**されていくのでしょう。

人間の脳機能自体が身体に埋め込まれた**電装装置**なのだから、**ロボット**も優美さを感知できるのかも知れません。

❹ **芸術美** → **芸術的意欲**と**芸術的価値**→**誇示と批評**→価値＝権威（社会評価）と 遊び＝楽しむ（自己満足）。

これまで述べた❶〜❸の美の様態は、「**美を直接体感する感受性**」でしたが、「**芸術**」という冠詞がつくと、直接体験を昇華させた「**二次感性以降の芸術体験**」として、**物象化**が図られます。

「**芸術作品**」は作家の感性を代弁した**物象化**であり、直接体験の感性、そのものとは異なります。美に感動した作家は、感動を「**作品**」に固着して残します。つまり「**芸術作品**」とは、美の直接感動体験を「**記録**」として残し、他者へも伝えることができる「**メディア**（媒体）」の位置づけとなるのです。

直接味わう**美の感動**は、その人の「**記憶**」の中にしか残りません。やがて**記憶**は消えてしまうがゆえに**美**は**儚く**、**儚さ**ゆえにより**美しく**感じることができます。**優美**の核心となる**エクスタシス**（現世超脱＝対消滅＝無窮）は、**儚さ**と裏表の対構造なのです。

芸術作品は社会の中で「**交換価値**」を持ち、価値を固着させるために「**評価**」を受けます。評価された作品は、その交換価値にもとづいて、社会の中で交換流通していき、どこかに「**保存**」されることになります。

それゆえに芸術家の多くは、美への感動を直接求める人間本性とは別な、**交換価値を高める**ことを目的とした**プロフェッショナル**への変身もします。交換価値が高まると芸術家の**名声**は定着され、交換価値を**貨幣**に変えることもできます。

このように**芸術家**は、「**芸術意欲**」を作品に固着する**一次感性**と、「**芸術作品交換価値**」（社会的価値）を高める**二次感性**を併せ持ち、立ち位置の二面性を生じてきます。

美の体験においては、次なる二つの局面があります。

① **直接的人間体験**（環境知覚体験）

② **間接的人間体験**（芸術作品を通した二次体験）

しかし二十一世紀の今後において、「**バーチャル ＋ リアル**」は、この二つの体験を統合します。

それは「**複素美**（complex beauty）」として、改めて考察し直さなければならないのでしょう。

（三） 美の価値

日本の美学者＝**今道友信**氏（1,922～2,012年）は、「**芸術の定義**」を次のように書いています。

「人間によって発見される**秩序**をもった自然的存在を、一定の手続きにより、**価値**を結晶軸にして、それ自身自己完結的な、人間によって組み立てられた秩序をもつ美しく快い**作品**にまで仕上げる**技術**、それが**芸術**である。この意味では、**芸術は物質の条件の配置変換による価値賦与**であるといってよいかと思う。」、と書きます。（『美について』P-76）

つまり**芸術**とは、人が感知・感動した**美を、物質へと転化**する**技術**によって**作品**を仕上げること、と言い換えられます。その行為（芸術）は**自己精神**にとって最も素晴らしい**感覚**を得られ、その**精神**が反映された**作品**は他者の**精神**をも感化させ、**感動**を与えることができることにより、**価値が賦与**されます。

そこで**美の体験**を整理すると、次のようになります。

従来は価値の二元性（享受価値、評価価値）をいわれていましたが、今世紀に急速展開されている**デジタル社会**を考察すると、あらたに「**❸＝仮想価値**」を加えることになります。

❶ 直接的人間体験→享受価値→環境知覚体験の認識→体験記憶は消滅するので、芸術作品として記録に固着する二次欲求

❷ 間接的人間体験→評価価値→芸術作品鑑賞→芸術作品に感化され、さらなる高次作品へと転化欲求

❸ 仮想空間体験（バーチャルリアリティ）→仮想・現実価値→空想思念的（脳機能）、かつ刹那的現実（次元空間時間）な多次元環境の中で味わい、思念、空想、想起する仮想・現実一体感覚の美（自己疎外欲求）

これら**文化要素**に**価値の差別化**を図ると、善～悪、良～否、優～劣、等に沿って**価値は序列化**されます。**序列化は美の本質**でありませんが、他者よりも優れていたいとする人間本能は、優れたものにより美しさを感じてしまう錯覚をもちます。そのように価値の序列化は**社会性**の中に存在し、上位～下位の関係は、下位からみる上位の**権威づけ**となり、社会における「**権威**と**価値**」は比例してきます。

美学者＝**今道友信**氏は、「われわれが日常芸術と思っているものを反省してみると、そのほとんどが**複製品**であり、**翻訳**であり、結局は価値の点で巨大である原作の**ミニアチュール**（ひな型、小型版）であると言わざるをえないし、かりに本物の作品に接するということがあっても、それはたいてい、博物館の中に据えられていて、故郷を奪われた姿である。ということは、われわれはしばしば真の芸術体験を構成しているのではなく、**疑似体験**としての**芸術体験**、または**教養体験**としての**芸術体験**をしているに過ぎない、・・・」、と書きます。（『美について』P-70）

前節「**❹ 芸術美**」で述べたように、**作品化された芸術**はすべからく、知覚で得た**感性の二次作品＝メディア**（伝達媒体）となります。一次作品たる**感受性の意識と記憶**は**消滅する**定めにあり、それゆえに**芸術作品**は**メディア**（伝達媒体）

として**物象化**され、その**作品**に**価値を付与**され、二次鑑賞、評価、交換、売買、流通、保存される「**複製芸術作品**」となる定めにあります。

人間精神の最高な価値とした**美的感覚**のすばらしさは、何ものにもとらわれない**自由なエクスタシス**（現世超越→自己消滅）の**感性**にあります。

しかしその感性は瞬時的なものであり、記憶の中に保存されるのですが、やがて記憶は薄れ、消滅してしまい、交換価値を持ちません。

交換価値を持たせるためには、消滅する感性を何かに固着化させなければなりません。

固着させたもの、それが**映像作品**（絵画、写真、映画、電子映像）であり、**音楽**（メロディイ、リズム、テンポ）、**文学**（物語～言語）、**彫刻**、**身体表現芸術**、等々、いわゆる**芸術作品**と呼ばれるものとなります。

四・ そして自由

「真・善・美」に加えて人々が求める「自由」とは、人間固有な特性として、宇宙の必然に逆らうことを喜びとしながら、「抵抗の美＝自由への意思」をあえて求めようとする、「理不尽な心の開放欲求」となります。抵抗が増すほどにその摩擦熱は多くなり、跳ね返ってくる人間へのダメージも大きくなります。

「自由」とはこのように、しがらみ（必然）を断ち切る抵抗発熱行為であり、その発熱を人間的特性の言葉におきかえると、「情熱」に当たります。人間とは、理不尽に立ち向かう情熱を楽しむ、摩訶不思議な生命体といえそうです。

もう一方では必然に同期し、自我の意識が消え去るまでに同調して「無我なエクスタシス」となる「同期・同調の美」を得ることができます。

「抵抗の情熱と、同期・同調の無抵抗なエクスタシス」、この相反する自由への選択において、そのつどの相克にともなう様々な様態こそが、文化を育み、心を形成する、人間的本性となります。

必然に流されて何も考えなくてよい「無心の自由」と、必然に拘束される不自由さから開放されようと、試行錯誤の抵抗を試みて開放を得る「意思の自由」という、人間自由の二つの面は、パラドックス（自己矛盾）を抱えています。

このパラドックスに倫理性や価値を与えるのが、「善」や「美」の作用といえます。

宇宙の原理から考えれば、何事にもとらわれない「真の自由な存在」とは、予測不確定な動きをする「素粒子」の存在です。

さらに、摩訶不思議な生命体といえる人間の「心」。「心」は多次元世界を「自由」に往来しますが、その「自由」な「心」を創り出す人間の「意思」とは、いつ、どこで、だれが、なんのために、どのようにして、付与したのか・・・、誰にも分かりません。

遺伝子情報に書き込まれているのは、だれが最初の遺伝子情報を設計して組み込んだのか・・・。

それを「神」の仕業とすることに、私は納得できません。

「神はいない！」と。

しかし「宇宙＝神」とすれば、一つの物語、言葉の問題として解決します。

それでもやはり、「神はいない！」、と私は思っています。

我々が体験する自由な感覚は、「遊び」の中に見出すことができます。

遊びの研究で著名なのは、ロジェ・カイヨワ（1,913～1,978）の『遊びと人間』、ヨハン・ホイジンガ（1,872～1,945）の『ホモ・ルーデンス』があります。

カイヨワの『遊びと人間』では、遊びの定義から分類、社会的役割と社会学、さらに遊び理論の拡張をおこなっています。

ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』では、文化現象としての遊び（遊戯）、言語表現による遊び概念と発想のちがい、文化をつくる機能としての遊戯や競技、遊戯と法律・戦争・知識・詩・哲学・芸術、文化と時代変遷などを述べています。

「遊び」の中に見出す自由な感覚とは、遊びへの参加や撤退することの自由、遊びの中で自主選択判断することの自由、公平なルールの下でしがらみにとらわれずに能力発揮することの自由、それら自由であることが美しいと感じる精神の自由、つまり、文化現象の様々な相における意思表現の自由が遊びの中に見い出せ、それゆえに楽しく、心が軽くなり、しがらみから解き放たれる精神

の美しさを味わうことができます。

エーリッヒ・フロム（1,900～1,980）の名著に『**自由からの逃走**』があり、私は1,975年に読み終わった記載が残ります。

その前年（1,974 年）は初めてのヒマラヤ登山隊に参加し、「**なぜ山に登るのか**」という普遍的な真理を模索していた頃でした。

フロムの『**自由からの逃走**』は、「**自由**」における心理的問題、多義な自我の開放問題、宗教社会と自由の問題、近代における自由の二面性、核心論旨となる＝**自由なるがゆえに孤立する人間の不安定な心から逃避したくなるメカニズム**（権威主義、自己破壊性、機械的画一性、ナチズムの心理、自由とデモクラシー）等々を論じています。

自由を求める人間心理、しかし**自由**であるときの**孤独**な存在感、**孤独**に耐えられずに逃げ出したくなるさらなる人間心理。

自由とは、そのような「**はかなき存在**」であること。「**はかなき存在**」であるがゆえにまた、**自由**であることが**美しき願望**をもたらせる**人間心理のパラドックス**（自己矛盾）を学びます。

その頃は、「**自由と愛**」を求める**フロム**の一連の書を読み漁りました。

ＡＩ社会の現代、再考すべきテーマです。

現在から未来を考える時、我々は改めて**リーダーの資質**として、「**真・善・美そして自由＝人間の道**」について考え直さなければなりません。

つまり、「**人が人たる根源への道**」の再確認です。

第七章　明日の社会＝人間原理と人工知能

一・　カオスの中で自己組織化と進化

宇宙はその始まり、およそ１３８億年前のビッグバン以降に開放系として、絶えず膨張し続けているとされます。その膨張過程を認めるならば、膨張しながら変移を続ける道程において、１３８億年という「一方向な時間軸が存在」している、と理解することができます。

また宇宙は、人類が理解しきれないカオス（混沌）とされます。

そして量子物理学が導き出した結論＝宇宙の全エネルギーに占める物質の総量は、たったの4.9 %でしかない＝という理解。

物質は素粒子に始まり、原子核、原子、分子、結晶へと自己組織化した複合体となって物質を形成していきます。宇宙のガスや塵に始まり、恒星、惑星、星団や銀河、超銀河集団へと至ります。

それら物質は、物質相互で相関する力の関係から絶えず、引き付け合ったり、衝突したり、合体して複合したり、絶えず変移を続けています。それら物質と物質は宇宙のカオスの中で相関し、エントロピーの法則に沿った自己組織化を図りつつ複合体形成となって、絶えず変容しています。

宇宙→銀河系→太陽系→地球系（月）として、それぞれが相互作用で変容しながら、自己組織化した自立領域を形成していきます。

例えば地球の領域を思い浮かべると、地球を包む大気圏（対流圏・成層圏・中間圏・熱圏・外気圏＝地上から約100km）までが、地球の領域といえます。地球と月の相関では、相対する引力により地球の潮位が変化するなど、その関係は相対的です。さらに太陽系の中にある地球ですから、重力やエネルギーなどについて太陽系の中で相関すると、地球は開放系となり絶えず変化をともなって動的非平衡状態となります。

人類が観測、計測して認識し、さらに普遍性へと論理化した科学的事実は、宇宙のたった5%未満（4.9%）な事実を語ることになります。

まだ人類が把握できない暗黒エネルギーが68.3%、暗黒物質が26.8%とされる中で、人類が知る科学的事実の知見は宇宙の微小な世界認識、でしかないことが分かります。

そのような宇宙の超微小世界から観測する人類の視野から見える宇宙は、「部分から全体を知ることができない自己矛盾（パラドックス）」にある宇宙です。

しかし宇宙の事象がどこの局面においてもフラクタル（自己相似）な性質であるならば、人類が住まうこの地球から科学的に理解することにより、宇宙の事象をフラクタルなスケーリングによって推考し、仮定できるのかも知れません。そのような複雑現象を考え、理解し、推論するために、人類は数学的手法を編み出しています。この複雑さを捉える視点には、次なる三つの分野があります。

① 情　報・・・情報とエントロピー、情報生成とエントロピー
② 空間的・・・一般化フラクタル、マルチフラクタル
③ 時間的・・・自己相関関数、自己相似性とハースト数

これらの三分野からフラクタルなスケーリングにより、自己組織化臨界現象を探り、非線形システムにおける自己組織化相互作用モデルを推考していきます。そして自然の諸事象に適応するための論考には、セルオートマンモデルがあります。情報源とする特定事象のビッグデータからＡＩ技術によって推計する、気象モデル、交通モデル、地震モデル、等々さまざまな諸事象モデルは、すでに順次実行されています。

原子が集まって**分子**となり、**分子**が**自己組織化**して様々な**物質**となります。物質は、**有機物**と**無機物**に区分されます。

炭素原子を含むと**有機物**に分類。（簡単な炭素結合物質は除かれる＝一酸化炭素、二酸化炭素、炭酸カルシウム等）**有機物**の特徴は、「**代謝**」によって「**種**」を継続させる点にあります。

人類はこの「**代謝現象**」に、「**生**」という概念を与えました。さらに自立代謝運動できる有機個体種を「**動物**」として「**命**」を加え、「**生命**」としました。

つまり「**生命**」とは、独立した有機個体たる「**動物**」が、自立代謝運動を持続できる「**時間**」を指すことになります。

宇宙の原子が結合して分子となり、分子が構造化して個体をつくり、その有機個体が自立代謝し続けられる時間が、「**個体生命**」となります。その有機個体の一類が、「**人類**」であり、この**地球**に住んでいます。

地球に住まう**人類世界**は、地球に閉じこもった**閉鎖系**とみなされますので、**動的平衡**を求めた生活を過ごします。

しかし 1,969 年、アームストロング船長らによる月面着陸を始めとして、今世紀に実現されるであろう月面移住計画や火星移住計画を、本気で実現しようとする現代文明です。

人類世界を地球閉鎖系と捉える臨界の時節を過ぎ、人類もまた太陽系に帰属する**地球開放系の動的非平衡世界**へと文明進化をとげつつあります。

太陽の核融合エネルギーを太陽系に放射する**太陽光**（光）は、**電磁波**の一種です。**太陽光**＝**電磁波**は、**電気・磁気エネルギー**を伝搬するとともに、**情報**をも伝搬させる媒体となります。

電磁波（光）の**波動的性格**、**横波は電場**を、**立波は磁場**を伝搬し、立横併せた**連続性**をもつ**アナログ波**。

他方、**光子**は**粒子**であり、その**粒子的性格**は**離散性**をもった**デジタル波**。**波動**は時間的（t）、空間的（x，y，z）な振動現象とみなされますが、それは人間社会の日々刻々な変化に似たものと受けとめることができます。

三次元空間要素（x，y，z）を第五章の「**複素**（数）**的な世界観**」に照らし、**X＝文明、Y＝文化、Z＝人意識**、としてみると、**物質**（粒子）**的存在となる**「**実な世界**（物質世界）」と、**波動**（波）**的存在となる**「**虚な世界**（抽象世界）」とに対比して理解できます。

さらに波動方程式の「**右辺＝0**」の理解は、仏教的表現においては「**空**」の世界を表わし、哲学的表現においては「**虚無**」の世界に当てはまるのではないかと考えられます。

波動の一種に「**光**」があります。「**光**」は、**光子**の「**粒子**（物質）」たる性質と、伝搬する「**波動**（波）」の性質を、併せもっています。数学、物理学、電気工学において、光の伝搬は次のような**波動方程式**で表現されます。

（シュレディンガー方程式）

$$[\,D^2x + D^2y + D^2z - (1/v^2)\,D^2t\,]\ \Psi(x,y,z,t) = 0$$

（空、虚無＝0）

D：微分記号　$\Psi(x,y,z,t)$ ＝ 波動関数 ⇒ 心の関数（心→波）

前式において、アンダーラインの項が「－（マイナス）」となっていますが虚数の2乗「（i^2）＝－1」という「**虚な時間**」表現を導入すると次式に変換され、X，Y，Z，t の加法総合表現に変わります。

$$[\underbrace{D^2x + D^2y + D^2z}_{\text{（実な世界）}} + \underbrace{i^2(1/v^2)D^2t}_{\text{（虚な時間）}}]\ \underbrace{\psi(x,y,z,t)}_{\text{（空、虚無）}} = 0$$

（虚な世

光子の「**粒子**（物質）」たる性質は**電気場**（E）と**磁気場**（B）の**エネルギー**（力）をもたらせます。

$$[D^2x + D^2y + D^2z - \varepsilon_0 . \mu_0 . D^2 t] \cdot E = 0$$

（電気場 ＝ 空、虚無）

$$[D^2x + D^2y + D^2z - \varepsilon_0 . \mu_0 . D^2 t] \cdot B = 0$$

※ 真空中の、誘電率＝ε_0、透磁率＝ μ_0 （磁気場 ＝ 空、虚無）

伝播速度＝ v 、光の速度＝ c とすると、次の式で表されます。

$$v = c = (1/\sqrt{\varepsilon_0 \cdot \mu_0}) = 3 \times 10^5 \ [km/s]$$

・地球一周 ≒ 4×10^4 [km] とすれば、光は１秒間に地球を７回半廻る

・赤道一周 ≒ 4.77×10^4 [km] とすれば、光は１秒間に地球を 6.3 回廻る

・極間一周 ≒ 4.90×10^4 [km] とすれば、光は１秒間に地球を 6.1 回廻る

このように、光の「**波**」とした性質による伝搬速度は高速で、波はお互いに干渉能力を持ち、「**干渉縞**」となって現れます。その縞模様は人間の織り成す「**社会**（心＝空気）**現象**（集合特性）」に似ています。

他方で「**粒子**」たる**物質性**は、一人ひとり数えることができる人間の「**個体性**（独自性）」に似ているともいえます。

電磁波としての「**光**」は、**アナログ波**と**デジタル波**が複合した複雑な波で、その複雑さの中に「**情報**」を載せ、情報伝達にも活用できます。

アナログ波形の連続性は、前～後となる一方向性となるため、「**アナログ時間**」という概念が生まれてきます。時間の概念は、前の時限における事象が変化し、後の時限に現われる事象となることから、その間が「**アナログ時間**」という時限となります。前段の時限事象（種）は原因となり、後段の時限事象（花）は変移の結果を示すことから、「**因果応報**」とする人類の連続思考となってきました。

他方、**デジタル波形の離散性**は、ある瞬時限事象を反映し、ある次元、ある位相において、連続性をもたない**離散的瞬時限事象**を示します。同じ次元、同じ位相、つまり同じ空間内で変移・変質・変量が生じると、それらの変化にともなう「**デジタル時間**」が発生します。しかし**デジタル時間**は必ずしも一方向性ではなく、多様な空間位相内での相関関係になるため、**デジタル時間**の方向はバラバラで多様な向きとなります。量子力学において、「**粒子の位置は確率的に計算推定できる**」ように、**デジタル時間事象**もまた、粒子に似た**確率統計**によって理解、取扱うこととなります。

連続性（アナログ）にもとづくニュートン物理学に慣れ親しんできた二十世紀までの思考から、二十一世紀思考は量子物理学に準じた**確率統計**（デジタル）**思考**となるのでしょうが、これまでのアナログ感覚には馴染みません。

二十世紀から、二十一世紀にまたがる私達世代にとり、確率的思考法は社会生活に慣れていません。相変わらず、因果応報なアナログ的連続思考が支配している世代です。

しかしホモ・サピエンスの知能は、**アナログとデジタルを結びつける良い数学**を見出しています。「**複素数**」です。**複素数**は、**実数部**（x）と**虚数部**（y、z）を併せ持つ「**数**」です。たとえば**電磁波**（光）は、周期運動を繰り返す**波動**です

が、その**波動方程式**は**複素数**で表されます。

複素関数概念を用いて「**文明・文化・人の意識**」を、「**環境の複素的世界観**」として提示した説明と図解が、第五章第三節～第四節です。

※ 第五章第三節参照【電気技術者、物理学者、の理解から】
第五章第四節参照【複素（数）的世界観から】

デジタル時代の始まりと言われる21世紀にあって、デジタル思考はこれまでの人類史を書き換え、全く新たな文明・文化を展開しつつあります。つまり、**ホモ・サピエンス**の次世代、**ホモ・デウス**（Homo Deus＝神）です。

バイオ・エンジニアリング、**サイボーグ**、**無機体生命**らを予測しているのは、若きイスラエルの歴史学者、ユバル・ノア・ハラリ（Yuval Noah Harari）氏で、氏の著作＝『サピエンス全史（上・下）』は読み終えたところです。

その先で人類が「**神の領域**」に住まえるか、あるいは「**神**」になれるか、誰にも予測できません。ニーチェ**は「超人」を設定しましたが、実態がない観念の仮定、つまり「虚構**（フィクション）」となります。さらに五感を刺激し、現実味を反映する虚構は、「**バーチャル・リアリティ**（Virtual realit ＝仮想現実）」と呼ばれます。

この虚構で複雑な**仮想現象**を数学的に理解～応用する基礎が、「**複雑系の数理**」です。近似計算、次元解析、スケーリング法、セルオートマトンモデル、それらを応用する**臨界現象**と**自己組織化解析**は、すでにデジタル・ビッグデータと組み合わさって、自然現象解析や社会現象解析が進められています。

解析の主たる役割は、**自然災害**、**人間社会災害**（人類進化）から人類を守ろうとするためです。しかしその反面では**人類を統制制御する**という、新たな**人間社会問題**を生みだします。（2020年2月、中国＝コロナウイルス伝染で武漢市封鎖等）

複雑な現象を解析し、理解し、対処・応用するためには、数理的論理思考と、哲学・宗教的把握の方法があります。

前者は21世紀科学による**デジタル世界観**となり、後者は20世紀までの**アナログ世界観**を成していました。**ホモ・サピエンス**から**ホモ・デウス**へと飛躍相転移する境界が、21世紀であるとの考えです。

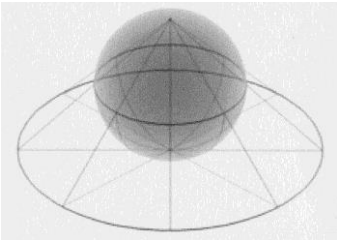
しかし、水（液体）が水蒸気（気体）へ一気に相転移するように、**ホモ・サピエンス**から**ホモ・デウス**へと一気に相転移することではない、と考えられます。アナログとデジタルを結び合わせる「**複素世界観**」により、「**ホモ・シンセシィス**（Homo tynthesis＝**総合人**）」なる造語を提起したいところです。

19世紀の数学者＝ベルンハルト・リーマンが考案した「**リーマン球面**」は、複素数集合を無限遠点まで拡張した、拡張複素平面と呼ばれる球面となって可視化されます。三次元実空間R^3内の単位球面は、次式によって可視化される。

$$S^2 = \{(x, y, z) \in R^3 \mid x^2 + y^2 + z^2 = 1\}$$

リーマン球面は物理学、特に量子力学で応用され、光子の偏光状態や粒子のスピン状態を示す自然値を表わす。また、天球の相対論モデルや、弦理論の弦世界面を表わすこともできる。概念を数式化して立体射影化すれば、三次元空間を可視化させることができます。

ホモ・サピエンスから**ホモ・デウス**へと飛躍する前に、**ホモ・シンセシィス**（Homo tynthesis＝**総合人**）と仮定する「**複素世界観**」への論考は、無駄な作業なのでしょうか。



地球は太陽から［1kw／m^2］とされる**太陽光エネルギー**を受け、地球の生物はもちろんのこと、あらゆる物質にも作用しています。

太陽光は気候変動をうながし、動植物を分解させて鉱物資源化させたりもします。古代文明では太陽光を集めて火を起こし、天日によって植物・動物を乾燥させ、保存食を作りました。現代文明は太陽光発電によって電力へと変換し、活用範囲を広げています。一方では直接水を温める太陽光温水は、変換効率が悪くあまり活用されません。

人類社会は宇宙との出入り関係がないので、**閉鎖系**といえます。しかしこの**閉鎖系人間社会**を紡いでいる要素は、**エネルギー**や**重力**の**物質的側面**であり、第五章二節で述べた「**複素**（数）**的な世界観**」の「**実な世界**」となります。

もう一方で別な理論、「**ループ量子重力理論**」によれば、「**宇宙空間は絶対時間が存在しない無秩序状態であり、物質相互の関係におけるエントロピー増大の作用が時間の方向性を生みだす**」、とします。

そのことに気づいたのがアインシュタインで、その関係性を理論で示したのが「**相対性理論**」とされます。

宇宙を支配している**絶対時間は無い**とされ、重力場、電磁場における物質（量子→粒子）相互の相対的関係において、熱力学第二法則「**エントロピー増大の法則**」に則り、熱は高い所から低い所へ移動することによりエネルギー（作用＝正の力）を発生し、仕事量に変換することができるが、その逆方向はない。しかしその時、熱移動の過程においてエネルギーへと変換できない無駄なエネルギー（反作用＝負の力）も蓄積させ、平衡するまでその熱移動の流れが続きます。この時、熱移動に要する過程が「**時間**」という概念を導き、熱移動する距離と方向によって「**空間**」という概念を生じさせ、両者を合わせて「**時空**」概念となります。

このエントロピー増大作用を「**自然現象**」と捉え、**開放系世界**にあってエントロピーは**動的非平衡**が続き、エントロピー移動作用（エネルギー）は持続する。**閉鎖系世界**にあってエントロピーは**動的平衡**となり、熱エネルギーは均一となってエントロピー移動作用（エネルギー）を失っていきます。

これらの「**時空**」におけるエントロピー移動作用を捉える個別な「**視点**」において、時空世界の見え方が異なってきます。

人の個の**感性の視点**に立ってみると、相対する相手は多種多様で断片的に関わり合い、その関係性は複雑を極めます。

相対する関係性の中から時間が生じるとする**量子重力理論**からすれば、個体の感性が感じる時間も多種多様で断片的かつ複雑となります。個の感性を貫く一本の時間軸が無いとすれば、**感性には過去・現在・未来とする一方向性な時間感覚は不在**となり、**時間**は感じたとしても**時刻**とする連続性を失います。

この時刻を不要とする**感性の時間感覚**は、ちょうど地球が自転するような、あるいは太陽の周りを公転するような、**スピン**（回転）運動に似てきます。その理解の根本には、物質を構成する最小単位たる**量子のスピン運動**にあるのでしょう。

感性とは、個体にインプットされる情報と、記憶の蓄積の中に秘められる類似パターンとがフラクタルにマッチングする作用として、**脳内イマジネイション照合～適合作用**と考えられます。類似というアバウトな辺縁領域において、記憶パターンに類似する新たな非物質的な思考・抽象する脳内作用をおこないます。その際に信号伝達をつかさどるニューロンとシナプスのネットワークに、アドレナリンやノルアドレナリンの神経伝達物質が伝搬し、脳内ホルモンのドーパミン、エンドルフィン、セロトニン、メラトニンらと相互作用を果たし、さまざまな感覚を得る。そのメカニズムの仔細は分かりませんが、特に人間を支配し**快楽物質**とされる**ドーパミン**は、**喜怒哀楽の情報処理**をつかさどります。

ドーパミンが過剰になれば快楽依存性を高め、依存度が高まるほどに攻撃的な態度や幻覚・妄想という、麻薬作用を引き起こします。またドーパミンが不足すると、うつ病やパーキンソン病を引き起こし、不快症状になります。

自己の身体に記憶・蓄積されている**感性パターン**は固有のインピーダンスを形成し、その**個体インピーダンス**とのマッチングにより、それらさまざまなホルモン分泌状況が相互に作用し合い、その時における**個体の感性**を表わすことになります。その**感性**はさらに上書きされ、**個体インピーダンス**を変化させていく。

この複雑なニューロンとシナプスのネットワークから生み出される**感性の記憶はさらに複雑となり**、「**人間の脳は小宇宙**」に例えられます。

さらにもう一歩考察を深め、インピーダンス・マッチング作用において**個体インピーダンス**（自己抵抗）がゼロとなる**共感・共鳴・共振・現象**にあっては、エントロピー増大と逆現象な**ネゲントロピー**増大効果を生じます。

つまり物質的熱エネルギーの移動とは異なり、感性の**マッチング効果**は脳内ホルモン分泌をうながす**精神現象**として、**一体感、高揚感、達成感、満足感**、等々の快楽現象を引き起こします。このことは物質的熱エネルギー移動によるエントロピー増大とは逆な作用、ネゲントロピー増大作用として**精神エネルギー**を増大させることとなります。「**精神エネルギーを、情報エントロピー**」に置き換えてみると、まさに「**情報エントロピーは増大する**」ことになる。

つまり「**豊かな感性は、情報エントロピーを増大させる**」ということです。

情報エントロピーが増大するということは、情報量（ビット）が増えれば正確さが補強されて選択肢が増えるが、その反面では相関が撹乱されて不確定性を増して一層分からなくなることを言い表します。つまり、**豊かな感性**はより多様に感知して反応するが、必ずしも確個たる個性の深みを磨き上げることにつながることではありません。

ＳＮＳに公開された情報は限りなく膨大なビッグデータでありますが、ただ情報の海を提供しているだけです。その情報の海の中をいかに泳ぐのかは、**個性**という**個体インピーダンス**（個の特性）にかかってきます。

ネゲントロピー（エントロピーの逆現象）を増大させる「**精神作用**」は、物質的自己組織化を活発におこなう**触媒**（トリガー）、または大脳前頭連合野（思考・学習・推論・意欲・情操）シナプスへの**ゲート信号**になるのではないか、と理解できます。

精神作用は物質間の熱エネルギー移動と異なり、精神作用とするイマジネイションのフラクタルなマッチング作用。電気理論的表現をすれば「**発信現象**」、生物・物理学的にいえば「**カップリング現象**」、と言い換えられます。

電気回路における「**発信現象**」は、その回路における電子の移動（電流）において、抵抗が極小化（ゼロ）されることによって電磁波（電波）へと変換され、時空間へと放射される。その電磁波の微小な変化を「**情報信号**」として自らの属性を加え、時空間に放射されます。

生物・物理学的「**カップリング現象**」とは、宇宙における粒子と反粒子のＣＰ**対称性が破れた**「**物質**」状態から、ふたたび出会って**ペア**（対＝カップリング）となり、「**消滅**」してしまう現象。

このことを精神思考回路に置きかえて考えると、「**感性**」の流れは「**感情**」へ。電気回路で考えてみると、「**電子**」の流れは「**電流**」となります。精神思考回路における感情現象は、電流現象とフラクタルに類推できそうです。

さらに人類は、他の生物・動物と最も異なる点、**知性**と**感性**による「**イマジネイション世界＝虚な世界**」をもっています。**イマジネイション世界**は、人の体内情報信号によって**創発～抽象化された形象**ですから、生命エネルギーの極めて微小なエネルギーによって、宇宙の多次元事象までを想い描くことができる、**開放系世界**にまで及びます。

この領域は「**心の無窮世界**」ともいえますが、われわれが知るかぎり、**人類だけが宇宙の摂理に抗して存続を図ってきた＝文明・文化力による**、最大な特徴でありましょう。

人類**知能**は**道具**を考案し、**技術**を駆使し、**知性**は最適解を求めて**進化**を促します。**欲望**は**開放系**に及び、**逆エントロピー効果＝ネゲントロピー効果**を果たします。

地球の自然は**太陽系**、特に**太陽**と**月**の影響を受けますので、これらに相対するエネルギーや重力は**地球開放系**。しかし**人類社会**は**太陽**や**月**との物質的やり取りはなく、**地球の閉鎖系生物社会**を構成しています。

やがて**月**への移住や**火星**移住等で往来するようになると、**人類社会は**太陽系へと生活領域を拡張することになります。

二十一世紀の**人類社会は**、まだ**閉鎖系**ととらえて良いのでしょう。**閉鎖系**にあっては「**動的平衡**」が、**開放系**にあっては「**動的非平衡**」が、**宇宙**（自然）**原理**となり、お互いは複雑な**重層構造**を織り成します。

そのことを認知できるのは、唯一**人間の意識**です。

※ **エントロピー** ＝ P-10 参照、

※ **ネゲントロピー** ＝ エントロピーの逆効果

※ **動的平衡** ＝ 植物や動物のような恒常性維持機能（ホメオスタシス）のように、外部環境とエネルギーや物質、情報の出し入れをしながらも、**一定状態を保つ**こと → **閉鎖系**に適用される

宇宙がビッグバンを起こし、膨張を続けている時間の流れの中で、**地球**が**一定状態を保っている**ことは、「**動的平衡状態にある**」、ということになります。**カオス**（宇宙の混沌）の**非平衡状態な膨張**のさなか、何かの**契機**（ゆらぎ）で「**そこに物質**（分子）**が滞留して淀み、動的平衡状態を保った地球が存在**」する、ということです。

４６億年前の**地球誕生**から、やがては**地球消滅**に至るまでの間が、「**地球が生命を得た**」状態と云えます。それは、**カオス**の中で**何か**を**契機**（ゆらぎ）として**自己組織化**する、「**生命現象**」と理解します。

同様に、地球がカオス状態にあった中で、**何か**を**契機**（ゆらぎ）に多方面で**自己組織化**が生じ、多様な「**生物**」が発生します。やがて**生物**は「**分岐**」を起こし、「**人類**」という「**種**」を生じました。**人体**も**地球**と同じように「**物質**（細胞）**が滞留して淀み、身体とした動的平衡状態にある様態**」、と分子生物学はいいます。

分子生物学者＝**福岡伸一**氏（1,959 年～）は、次のように述べます。

『新たなタンパク質の合成がある一方で、細胞は自分自身のタンパク質を常に分解して捨て去っている。なぜ合成と分解を同時に行っているのか？　この問いはある意味で愚問である。なぜなら、**合成**と**分解**との**動的な平衡状態**が「**生きている**」ということであり、**生命とは**そのバランスの上に成り立つ「**効果**」であるからだ』とします。さらに『**サスティナブル**（持続可能性）とは、常に動的な状態のことである』（『動的平衡』同上 P-75）、とされます。

開放系として進化する**宇宙**において、人類の**知性**はほんの少しだけ**宇宙**を解明したに過ぎません。「**知性**」という**部分が**、「**宇宙**」の**総体を述べる**ことは、「**部分が全体を述べる論理のパラドックス**（自己矛盾）」にあります。

しかし、なぜ**宇宙**では**自己組織化**がおこなわれているのか、**知性の最大な疑問**です。それを知るためのアプローチ手順は、まず先に**宇宙**における「**物質の発生**」について物理学的理解を深め、次に「**物質の淀み**」たる「**生物**」の理解へと移ります。

宇宙の中では「物質」の最小単位となる「素粒子」が飛び交い、その素粒子を結びつけて「原子」を作るには、次なる三つの力が作用します。

①＝電磁気力（光子）

②＝強い力（グルーオン）

③＝弱い力（W、Zボゾン）

さらに次なる④を加え、

④＝物質の重さ＝重力

前記①～④まで「四つの力」が、宇宙（自然界）で作用していると物理学は述べます。

さらに第五の力として、次が確認されました。

⑤＝ヒッグス粒子

素粒子の質量を定める⑤が 2,012 年に確認され、これを加えて素粒子の世界を説明する標準模型が完成されます。

しかし、「④＝重力」は標準模型に含まれません。

クオーク三個で陽子や中性子となり、陽子と中性子が原子核を構成し（強い力）、原子核と電子が結びついて「原子」（電磁気力）となります。

「原子」は原子間に作用する静電相互作用（クーロン力）により構造化され、「分子」となります。

「分子」は、集まっている原子の種類や配置の化学結合により、秩序だった構造をとります。さらに分子の内部構造により分子間に相互作用が働き、固まりとなった特定な「物体」が形成されます。

「物体」は、それを構成する物質相互の動的平衡の中から、自発的化学反応により「代謝機能＝生命」が生み出されます。

しかしその物体＝物質は、宇宙全体エネルギーの中で、たった5％未満（4.9％）でしかないと、量子物理学は説明します。

それゆえ、この宇宙に「生命」が誕生したことは奇跡に近いもので、「生命」を物質の動的平衡における「生命＝代謝機能＝効果」とするならば、地球以外に別な生命が誕生していても不思議ではないとされます。

そもそもビッグバンによる宇宙誕生直後にあっては、粒子と反粒子のペア（対）が生まれ、ふたたび出会うとペア（対）で消滅（対消滅）して宇宙に物質は何も残らない、とされます。しかし5％未満の粒子（物質）が残されたということは、CP対称性が破れているからだ、と説明されます。

CP対称性とは＝Cは粒子と反粒子を入れ替えることで、電荷共役といいます。Pはパリティ変換といい、上下、左右、前後等の空間を入れ替えても対称性が変わらないことをいいます。

CP対称性が保たれていれば、粒子と反粒子が出会うと「対消滅」となって消滅します。しかしCP対称性が破れていると、対消滅しきれずに一部の粒子が残され、残された粒子を「物質」と呼びます。その結果宇宙には、星雲や星団、銀河や天の川、恒星や惑星、宇宙のゴミやチリ等々となって「物質」が残されました。たった5％未満（4.9％）として・・・。

このCP対称性の破れを説明したのは、日本の物理学者＝小林誠氏（1,944 年～）と益川敏英氏（1,940 年～）の「小林―益川理論」であり、2,008 年にノーベル賞を受けます。

先立って発見したのは、ジェイムズ・クローニン（1,931～2,016 年）とヴァル・フィッチ（1,923～2,015 年）で、1,980 年にノーベル賞を受けています。

ではなぜに、ＣＰ対称性は破られるのか・・・。

それは宇宙の動的非平衡の中で「ゆらぎ」による、ちょっとした「対称性のずれ」がもたらせる、といわれます。

その結果が宇宙に拡がる星雲や星団であり、銀河系や天の川、恒星や惑星、宇宙のゴミやチリ等々となるわけです。しかしそれら「物質」の全てを合計しても、宇宙全エネルギーのたった５％未満でしかなく、９５％以上は未知な暗黒物質や、暗黒エネルギーであるとされます。

従って、「客観的＝科学的」といわれる「物質による証拠至上主義」の根拠は、「たった５％未満の真実」でしかありません。未だ宇宙の９５％以上は未解明であることを、量子物理学は示します。

これらの「ゆらぎ」や「ずれ」はなぜ生じるのか、という根本命題に突き当たりますが、解決の糸口は「ニュートリノ」が握っているのだそうです。

ニュートリノと反ニュートリノも、物質と反物質と同じように「対（つい）」で生成されます。ニュートリノはちっといたずらで、宇宙の「ゆらぎ」や「ずれ」で１０億個の内に１個だけが対生成・対消滅のバランスを崩したとすれば、「物質」が宇宙に残されることになります。

自然界で発生したニュートリノを、初めてリアルタイムで観測したのは、岐阜県の神岡鉱山の地下にある「カミオカンデ」です。観測に成功したことで、日本の物理学者＝小柴昌俊氏（1,926 年～）は 2,002 年にノーベル物理学賞を受けています。

では宇宙の「ゆらぎ」や「ずれ」は、なぜ生じるのでしょうか。

その一つに、「弱い力がパリティ対称性を破っている」と、中国人物理学者＝李政道（ジョンダオ）（1,926 年～）と楊振寧（ヤンジェンニーン）（1,922 年～）が予測論文を発表します。その証明をしたのは、中国のキュリー夫人と呼ばれる女性物理学者＝呉健雄（ウージェンシオン）（1,912～1,997 年）で、コバルト６０の崩壊現象観察により、「素粒子の世界では左右の区別が生じる基本法則」を明らかにします。つまり、宇宙における対称性（パリティ対称）が破られる、実験結果です。

対称性が破られることで動的非平衡状態を生じ、「ゆらぎ」や「ずれ」を引き起こす原因となります。素粒子はフィギアスケートのように「スピン（回転）」していて、「電子（素粒子）」は進行方向に向かって時計回りのスピンと、反時計回りのスピンとの二つをもち、左右独立に変換できる近似的な対称性を持ちます。その対称性を、「カイラル対称性」といいます。

左右二つのスピンは、一つの原子の軌道に二つの電子が入り込めることを意味します。「パリティ対称」とは、「鏡に映す現象と、鏡に映った現象は、同じ物理法則に従う」、とするものです。

しかし「弱い力（Ｗ、Ｚボゾン）」の中で、時計回りスピンの電子を鏡に映すと反時計回りのスピンになることから、回転方向が逆転してしまい、同じ物理法則といえません。このことから、「弱い力がパリティ対称性を破っている」と結論づけられました。

以来、「自然界のいたるところで対称性は自発的に破れている」、ことが確認されます。「素粒子がスピン（回転）」するそのことが、対称性の「ゆらぎ」や「ずれ」を引き起こす素因なのでしょう。

さらに、対称性を破るためには、「新しい場を付け加えればよい」、とされます。気圧の場、温度の場、電磁気の場（電磁場）、・・・と。つまりフェイス（位相）を加えて視点を変えることになります。

イギリスの理論物理学者＝ピーター・ヒッグス（1,929 年～）は、素粒子の質

量を定める「ヒッグス粒子」の存在を予言します。

そして2,012年7月4日、世界の科学者が参加する欧州合同原子核研究機構によって「ヒッグス粒子」の存在が確認されます。発見翌年の2013年、ヒッグスはノーベル物理学賞を受けます。研究者たちは、原子の標準モデル構造において「ヒッグス場」を加え、素粒子に質量を与える「ヒッグス荷」を定めます。

脇道となりますが、私が着想した「複素（数）的世界観」の構造は、実相社会とするX～Y軸二次元平面の場に加え、人の意識とする虚空な三次元世界をZ軸方向と見立てる、三次元空間層を加えたものです。さらに時間軸を加えた四次元空間層（世界）が、人の意識でとらえる現実世界観ではないか、としました。

「大統一理論」によると、現在の宇宙はおよそ１３７億年前、高温高密度状態からのビッグバンとともに始まったとされます。

最初は「電磁気力」、「弱い力」、「強い力」の三つの力は同じ性質をもっていた。１０の３６乗分の１秒後に相移転が起こり、「強い力」だけが分かれます。

さらに１０の１２乗分の１秒になったとき、「ヒッグス場」による相移転で「電磁気力」と「弱い力」が分かれたと説明します。

宇宙が膨張を始めると少しずつ冷えてきて対称性が自発的に破れ、電子とニュートリノを結ぶ「弱い力（W、Zボゾン）」の中で、「Wボゾン」は±の電荷・ヒッグス荷・質量を持ち、「Zボゾン」はヒッグス荷・質量を持ち、「弱い力の場」は近距離力となります。

一方「電磁気力の場」は、電荷・ヒッグス荷・質量を持たない「光子」によって遠距離力となります。

では宇宙の「ゆらぎ」や「ずれ」が、なぜ「自己組織化」へ向かうのでしょう。

地球が丸いように、宇宙にある物質の個体形状は「丸み」を帯びています。

「地球が丸い」のは、重力がどちらの方向にも同じ強さで働くことから、「重力の働き方には回転の対称性がある＝重力の法則は回転対称」によるからとされます。

ある一つの動的平衡世界の対称性が破れて別な世界へ飛び出すと、「個の重力により回転対称性が作用して丸みを帯びてくる」、ことになります。丸く固まることで一つの動的平衡状態を確保でき、「個の世界～確立」となります。つまり、「個の世界～確立＝自己組織化」となる理解です。

「自己組織化」とは、質量をもつ物体の重力により、開放系非動的平衡世界の中から、一つの個体世界＝閉鎖系動的平衡世界を確立する「物理現象＝機能＝効果」として、「物質が生み出される」と理解できます。

さらに素粒子が開放系動的非平衡状態におかれると、ある媒体を契機とした相関の化学・電気反応によって「相移転」がおこなわれ、「代謝現象」を生じます。この「代謝現象」こそが、人類が「生命」と呼ぶ現象であり、効果である、と物理学からの説明・記述となります。この一連の過程が刻む間隔と流れを、「時間」と呼べます。

つまり、「生命＝時間」です。

それでは生物学からの理解・記述はどうなるでしょうか。

観察し、整理・分類する生物学は進化して、いまや分子生物学による科学的記述は、物理学や情報学に似てきました。

「生物」とは、動物、植物、菌類、古細菌、真正細菌などを総称する名前となります。また「生物」とは、「生きているもの」を指し、生きている状態は「生命（いのち）がある」と呼んでいます。

「生きている＝生命（いのち）がある」とは、「遺伝子をもった有機物が、個体としての

恒常性（ホメオスタシス）**を維持しながら、自己と外界とのエネルギー変換をしつつ、自己増殖能力を発揮している状態**」を指します。

「**動物**」だけでも１００万種以上にもなるとされ、無機物をはるかに超える**複雑系**となります。「**有機化合物**」のほとんどには「**炭素**」が含まれ、炭素原子によって結合されて**個体**や**液体**の形状をとり、それゆえに沸点や融点が低くなって地球表面の安定した環境に存在することとなります。

「**遺伝子**」をもつことは、「**自己複製能力がある**」ことを意味します。一つの個体は滅んでも、別な個体へと遺伝子を引き継いで、自己の主たる特性を継承・復元させることができます。しかしその中で人類は、人為的に**遺伝子操作**をおこなう**技術**をもちました。

人類が地球上に現われたのは、「**ほかの宇宙人が遺伝子操作をしたからだ**」、という物語も読みますが、その検証は今の人類にできません。現に人類が存続するように、ほかの宇宙人はいるのだろうけども、宇宙人と明確に認識できる事象を、一般人はまだ把握できていません。

生物学的理解による「**自己組織化**」とは、最初にこの宇宙で**分子の流れが淀んで滞留**し、自発的に起こる化学反応によって**分子が構造化**され、その構造化された様態を「**物体**」と呼びます。

「**物体**」の一種である成人の「**人体**」は、およそ３７～６０兆個の「**細胞**」が複雑に自己組織化したものといわれます。そして**細胞**は常に、**廃棄**と**再生**、**新生**、を繰り返す「**代謝**」により、**恒常状態**を保っています。

化学反応によって分子が構造化されるとき、それら分子たちをとりもつタンパク質酵素やリボザイム（ＲＮＡ酵素）のような「**触媒**」により、順方向、逆方向への反応速度を速めて**物体**の**動的平衡状態**を確保するのだそうです。

この一連の**動的平衡状態**にあることを、「**生きている**」といい、**総体**を「**生命**」と呼んでいます。

しかし**生物の動的平衡もやがては破られ、非平衡化学システムの中に吸収**されていきます。それが「**個体の死**」となります。

個体は死を迎えても、個体の主要素は自己複製した子孫へと引き継がれて残され、「**種の生命**」は生き続けることになります。

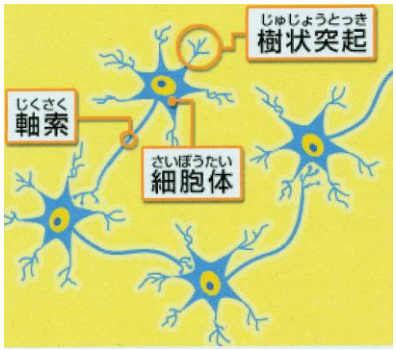
このことは、人の死が単なる個体分子の相転移という物理現象だけでない、「**魂**」という非物質的概念に集約されて記憶の中に刻み込まれます。

「**記憶**」の物理現象は研究されていますが、はたして**ＤＮＡ**（デオキシリボ核酸＝**D**eoxyribo **N**ucleic **A**cid）におけるゲノム分析・配列解析は、遺伝する情報が書き込まれた部位を特定したように、コンピュータ・ディスクのような「**記録媒体**」への保存は、「**ＤＮＡ複製保存**」と同じ機能を果たせるのでしょうか。

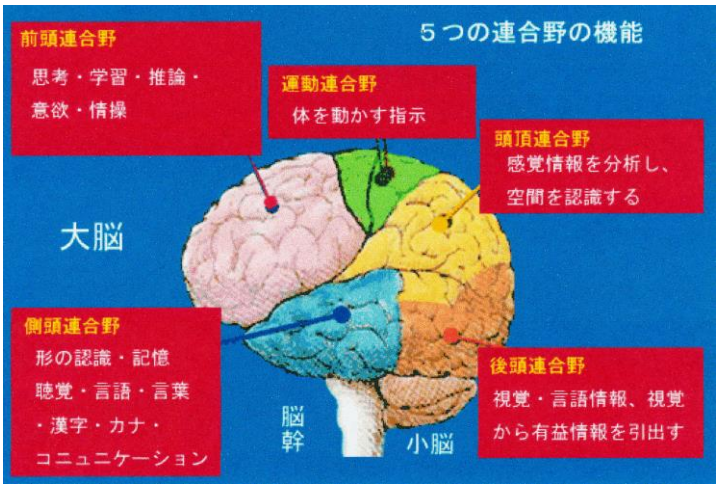
アメリカ生まれでカナダのマギル大学ロイヤル・ビクトリア病院に勤務していた脳神経外科医＝**ワンダー・グレイヴス・ペンフィールド**（1,891～1,976 年）は、癲癇治療のためにヒトの大脳皮質に電気刺激を加え、反応の結果を「**ペンフィールドのマップ**」としてまとめました。記憶は、脳機能として各部位に分かれてファイリングされている、とします。

脳の機能は次頁の図のように、大きく五つにブロックされます。

❶ **前頭連合野**＝思考・学習・推論・意欲・情操
❷ **運動連合野**＝体を動かす指示
❸ **頭頂連合野**＝感覚情報を分析し、空間を認識する
❹ **後頭連合野**＝視覚・言語情報
❺ **側頭連合野**＝形の認識記憶・聴覚言語情報・コミュニケイション



【ニューロン】（神経細胞）
kioku2/index.html より転載



http://www.geocities.jp/tobo_1091/short-story/026.htm　より転載

①「**大脳皮質**」は「**人の脳**」とも呼ばれ、記憶・認識・理解・思考・判断・行動・意欲・注意など「**人の知性**」の役割を受け持つ。

②「**大脳辺縁系**」は「哺乳類の脳」とも呼ばれ、本能的な感情＝快不快・不安・怒りなど、本能的な衝動＝食欲・性欲など、さらに本能的な記憶など動物的本能としての情動・記憶を受け持つ。

③「**脳幹**」は「爬虫類の脳」とも呼ばれ、生命維持に欠かせない自律神経（体温・内臓・性機能等）食欲・睡眠・性欲・筋肉運動・ホルモン分泌などのコントロールを受け持つ。

これらの脳機能は、脳全体で約一千億個の「**神経細胞（ニューロン）**」が複雑にネットワーク（**ニューラルネットワーク**）を織り成し、その中に「**記憶が蓄積**」されるといわれます。

ニューラルネットワークは使うことによって太くなったり、新たなネットワークを作り出したりして、さらなる脳機能を高めます。

ニューロン（神経細胞）は「**細胞体**」を核として、短いヒゲ状の「**樹状突起**」と、それより長い「**軸索**」を延ばしています。ヒゲ状が長い「**軸索**」は、他の細胞のヒゲ状が短い「**樹状突起**」へと、**シナプス**（すき間細胞）を介して電気的に接続され、電気信号による神経ネットワークを形成します。神経細胞から**電気信号**がシナプスに至ると、手前側の細胞から**神経伝達物質**［アミノ酸、ペプチド類、モノアミン類（ノルアドレナリン、ドパミン、セロトニン）アセチルコリン、一酸化窒素、一酸化炭素、等］が放出され、次の細胞の表面にある受容体（レセプター）でキャッチされて電位差が発生し、**認識・思考・意志活動**により電位差が一定量以上になると、**電気信号**として伝達される仕組みです。

「**記憶**」は、**神経細胞**が織り成す**ニューラルネットワーク**の中に蓄積・保存されるなら、もはや**人工知能**（ＡＩ）はヒトを上回るようになっています。

しかし「**ヒト**」が「**人**」となり、他の生物と大きく異なる点は、「**ニューラルネットワークの自己組織化**」にあるのではないか。単に記憶容量が大きいだけでなく、「**思考→判断→修正**」という**知的フィードバック機構**による**自己組織**を図って**恒常性を保つ**ことにより、「**人類**」として存続することができた、といえましょう。

「**コンピュータ**」も同様な過程で記憶・蓄積保存・論理判定・出力動作（アウトプット）させますが、**アルゴリズム**（Algorithm＝解答を得るための手順を定式化したもの＝コンピュータ・プログラム等）の範囲を超えることはできません。

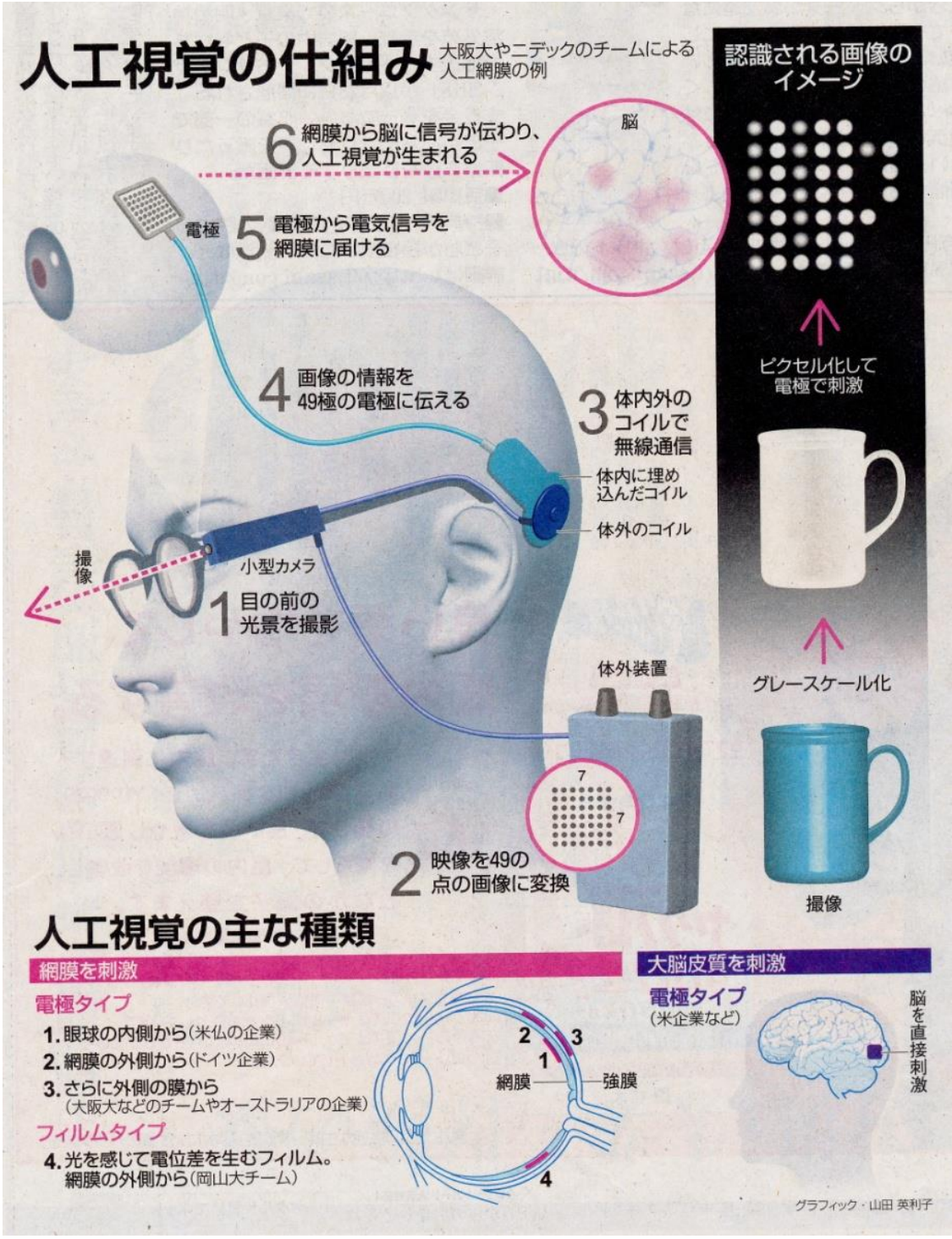
しかし「**人の思考**」は、**ニューロン**をとりまく環境の「**ずれとゆらぎ**」によって、記憶総体にない**新たなニューラルネットワーク**を作り出す（**自己組織化**）ことができるとされます。そのことを「**創発**（Emergence）」といい、**記憶の総和を超える新たな発想を可能**とします。

光をもたらす人工視覚の例

（2018 年 11 月 26 日・朝日新聞「化学の扉」より転載）

カメラで撮像 → 体外装置で画像を信号変換 → コイルを通して信号を電極へ送る → 電極で網膜を刺激 → 脳に画像情報を送り → **画像認識**

※ 技術進化で解像度が上がれば、人間視力やそれ以上も可能となる。



コンピュータ・プログラムにおける**ディープラーニング**（Deep learning＝自己学習＝４層以上の深層学習）や**フラクタル**（Fractal＝全体と部分が自己相似）理論の応用、**セル・オートマトン**（Cellular automaton＝格子状のセルで単純規則のよる離散的計算モデル）による複雑な現象のシュミレーションなどもありますが、**人間の豊かな創発力**には追い付けていません。

しかし**人工知能**（ＡＩ）が社会生活の主役を占めるようになると、定型化、定式化した、つまり**アルゴリズム文明はロボット化**（固着化）されます。

そこで「人」に何が出来るか考えてみると、「**定型化・定式化したフラットな社会体験からは、何の創発も生み出さない**」ことが容易に推考できます。

つまり**ロボット文明の中では、「人がロボット化」していく姿を、容易に想像できるからです。やがてはそれらの人々を「自然人」と呼ぶ時代がくるのかも知れません。スマートホン社会は、すでにその兆候**の現われと理解できます。

「人」は、**群れ**（種）の中にあっての「**個**」たる存在者です。

宇宙に**物質**が生成されるときには、必ず**物質と反物質のペアで生まれる**、と量子物理学はいいます。

集まって集団（物質）を成し、集団（物質）が大きくなると分裂して、ふたたび小さな集団に枝分かれします。それら小集団は群れを成して上位集団を構成（組織化）します。そのように**人の群れ**は、相転移を重ねながらボトムアップして、**社会**を形成していきます。

「人」の群れは、**雄雌**（男女）のカップリング（夫婦）から始まり、そして**子**が生まれ、親子の関係は**家族**となり、家族→部族→民族→国民→人類へと、群れの階層はボトムアプされます。そして他の生物との違いは、人類が「**知性と欲望**」という「**意識＝心**」を獲得し、脳機能の判断を経て、行動力を発揮して「**自然を人工化＝文明化**」している特異な生物であることです。

「**生物**」を生存に適した環境に放つと、ある時点から爆発的に増殖しますが、環境の限界に近づくとスローダウンして、安定した平衡状態に達する、とされます。このとき生物は**環境に適応**できたわけですが、平衡状態を持続することは大変困難であり、**大方の生物は環境を食い尽くして衰退、絶滅していきます。**つまり、「**進化の一方向性**」は途中でスローダウンするものの、決して逆戻りしない**不可逆特性**にあるからです。その特性を知ることができるのは、**人間知性のみです。**

このことを物理学の法則から考えると、飽和状態を持続することは不可能であることから理解されます。

宇宙のエネルギー（熱力学）を支配する二つの法則、「**第一法則＝エネルギー保存の法則**」、「**第二法則＝エントロピー増大の法則**」があります。

物質は形象を変える中でエネルギーを放出し、仕事量となって消費されます。消費された仕事量は再び同じエネルギーとして再利用できず、「**消費**」は増大していきます。仕事量としての消費は、形象を変えた物質のエネルギー・ポテンシャルを減少させ、エネルギー活力を減少させていきます。そのようにして物質は、仕事量としての消費を増大させながら形象を換え、活性エネルギーを失って**平衡状態**へと変貌します。

活性エネルギーを失った消費仕事量のことを「**エントロピー**」といい、「**閉じられた系の中において、エントロピーは増大する**」、というのが、「**第二法則＝エントロピー増大の法則**」です。

人類が活動を続けていく中で、エネルギー消費を累積すると、地球という閉じた系の中にあってのエントロピーは増大を続け、最後は**平衡状態**となって活動エネルギーを失うことを意味します。そのことはまた、**人類の滅亡**を示すわけですから、滅亡の手前でくい止める「**成長の限界**」という考え方は、必然的に生み出されます。

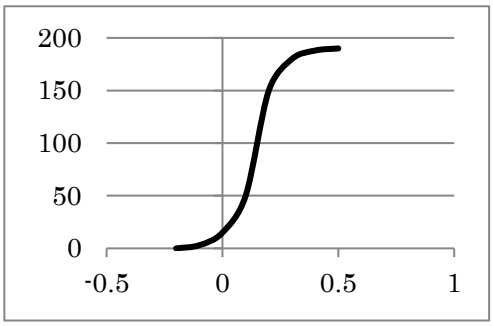
「**成長の限界**」をどのように理解するのか・・・・・・

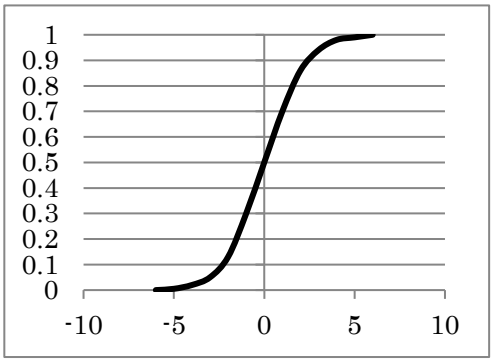
つまり、**生命とは何か・・・、生命現象とは何か・・・**、との問いに、分子生物学者＝**福岡伸一**氏は『**動的平衡**』（木楽社、2,009年）という概念で説明しました。

生体を構成している分子は、すべて高速で分解され、食物として摂取した分子と置き換えられます。身体のあらゆる組織や細胞の中身は常に作り変えられ、更新され続ける。

分子が流れる環境の中で、分子の一時的な**淀み**（滞留）が身体を作り出し、死してふたたび環境へと戻されてゆく。分子がかろうじて一定の状態を保って身体として平衡を保っている状態を、「**生きている**」といい、この特異な状態を「**動的な平衡**」と名付けたのが、ドイツ生まれの生物学者、**ルドルフ・シェーンハイマー**（1,898～1,941年）だとされます。

【シグモイド曲線の例 】





【ロジスティック曲線の例 】

「**生命とは＝ 動的な平衡状態にあるシステムである**」

「**生命現象とは＝生命の構造ではなく、効果である**」

さらに福岡氏は、生命現象を含む自然界の仕組みの多くは「**シグモイド・カーブ**」（上図参照）という非線形性をとる、とされます。進化は指数関数的であり、ある特異点に至ると収斂してフラットになり、進化エネルギーを失って平衡する。

ロジスティック・カーブと**シグモイド・カーブ**とは類似な特性を表します。

右側に傾いたS字カーブで、定常値（特異点）へと収斂します。この制御を電気回路上でおこなうのが**自動制御**であり、帰還（フィードバック）回路によって出力を定常状態へ収斂させるように増幅（または入力信号）調整をおこないます。

定常状態へ収斂する定数を環境要素に置き換えると、それぞれの要素がもつ「**環境容量**」と言い換えられます。

そして、「**定常状態**」を見定める視点は、次のようになります。

第一に、**科学**による観測・実験・定量的規則性確認の視点（科学的視点）

第二に、定常状態を「**山頂**」に例えるならば、山頂を見上げ、山頂へよじ登り、山頂に立った人間目線からの視点（人間的視点）

山頂に立ち、自然を「**征服**」したと見るか、自然の大きさ・美しさの畏敬とともに、人間活動のたわいなさに気づき、「**無窮の境地**（空）」となるか、さらに何も考えずに「**自然と同調・調和**」するか。

前者は**欧米中東型**（アーリア系）、中間は**東洋型**（シュメール系）、後者は**中南米・ラテン型**、大雑把な民族気質分類に当てはめてみました。

私は新たに、山頂から俯瞰する「**複素的視点**」（P-130 参照）を提言するのです。

近代に始まる**民主主義社会**と経済成長路線の**資本主義体制**にあっては、魅力ある商品作りとともに生産量を増大し、消費欲望を煽ります。消費が増大するに比例して税収も増加しますから、増加した税の再配分により所得は上がり、さらなる消費の欲望を満たそうとするウイン＝ウイン（win = win）関係な成長政策がとられます。

そこで問題なのは、「**有限な環境容量の中で、無限な win = win 関係は持続しない**」、という自明な**環境パラドックス**の承認です。

今（2,020 年）の自由民主党、安倍政権は「**アベノミクス**」をかかげて日本経済を煽り、国民所得を増やし、消費拡大にともなう消費税率アップをねらい、まさにこの win = win 手法を実行しています。生活者の消費欲望を煽り、それに答える産業を拡大成長させます。

しかしこの手法が適用できる範囲は、「**無限な資源、エネルギー調達が可能**」な外界に向かって開放された系の中であり、閉ざされた有限な系とする**地球環境**では、**臨界点**（飽和点）があります。

一方で「**虚構**（心）**な世界**」を考えてみると、人間の「**欲望**」は**ブラックホール**によく似ています。

思い描く**欲望**のイマジネイションは、限りなく全てを飲み込んでしまうほど欲深いものです。その**欲望**に限りある**限度**を知らせるのが、「**知性**」の役目。

人類が生存を持続する基礎的な「**欲求**」をベースに、より良く、楽しく、美しく、快適を求める「**欲望**」は車の**アクセル**のようなもので、欲望を深めれば意欲は加速されます。他方、車のブレーキ役は「**理性**」が果たします。社会の周囲を見渡し、加速しすぎていれば抑制の信号を送り、減速しすぎて渋滞していれば加速の信号を送り、適正速度で走行維持を図る役割が「**知性**」となります。生活者の消費欲望を煽るアクセルを踏み続ければ、生活者が乗った車は地球の崖を転げ落ちてしまいます。

だれでも分かるこの単純な仕組みを知りながら、ブレーキをかけられない「**欲望**」の魅力は、一種の**麻薬**であり、**人間の本性**です。

世界は今になってようやく、地球環境に限りあることの認識が伝わり始まりました。ローマクラブの指摘から、はや四十年余が過ぎますが、人類史の時間軸で見れば、ごくごく最近の出来事です。

進化の一方向性は、「**欲望＝成長＝より〇〇＝より困難な科学的合理性追求の到達点＝最高の価値**」とする**近代精神の高み**（プラトー＝ノーベル賞とオリンピック）をもたらせます。

しかし、その結果がもたらす**環境破壊**と**人格破壊**の手前で**自制**するためには、**進化から開放**された豊かな**感受性**の下で培った「**知性**」をもって、最適条件へと定常化させるフィードバック回路を作動させなければなりません。

ポジティブ・フィードバック（正の帰還）をかけると、成長はより促進されてしまいます。ネガティブ・フィードバック（負の帰還）をかけると、成長は減速されます。つまり、**ネガティブ・フィードバック**させる臨界値は**環境容量**であり、無限な欲望を抑える豊かな**感受性のイマジネイション**（価値観）です。

人間が科学によって**ロボトミー化**される前に、地球の豊かな自然とともに生きる感受性の歓びを知性に加え、人工知能と対話していきたいものです。

社会学者＝**見田宗介**氏（1,937 年～）が指摘する**【日本の社会は、世代が消滅しつつある】**ことの一例として、コンピュータ上のバーチャルな世界ではなく、山岳の自然にまみれる登山体験を通した感受性こそが、新たな感性と知性を生

み出し、次の世代へと引き継がれる期待が持てます。

進化への変貌は、**マクロな視点**の**人類**からでなく、**ミクロな視点**の**個**から発し、**自然体験**との**感受性**にまみれ、培われた**知性**をもって**人類の視野**へと、ふたたび演繹・帰納させることでしょう。

個の視点から自然体験を通して自らを見返すことは、「**哲学**」の始源となります。また、自らを無にして何かに**帰依**すれば「**信仰**」や「**思想**」となります。

しかし私は個と個が共鳴、共感、協調する、宇宙での基本的な在り様「**対称性のマッチング**」こそが**人間の自然な在り方**と考えます。

人間の関係性で述べれば**【人と人の心を結ぶ無償な愛と真・善・美、そして自由への希求】**とする無形な**精神性**（虚な部分）において、**非対称的存在を対称的関係に統合化させて安定を図る、自然な人間的行為**に期待するものです。

つまり、進化の一方向性は答えの出ない個々の心の変遷の中にDNAとして組み込まれ、百人百様、様々な関わり方によって表現することができます。進化の情動は、「**生きる**」そのことへ様々な表現となって表わされ、必然として理解されるようになりました。自由を希求する様々な「**情動のリスク**」を乗り越える中に、**成長の実感**と**成長の限界**（主観的限界と客観的限界）を知り、**幸せの体感**を味わうことができます。

成長の限界は、次なる二種類に分けられます。

一、「**主観的限界**」、自らに自覚をもって「**もうだめだー！**」と諦める限界点

二、「**客観的限界**」、自然原理に基づいて決まり、科学的検証により確認される限界点。

体験的アバウトで述べれば、「**主観的限界は客観的限界の、およそ１／３をもって自覚される**」、といえます。

例えば困難な中で「**もう死にそうだー！**」と思っていても、まだ死んでいません。生物機能が停止し、分子交換できなくなる生命体の死に至るまでには、まだ２／３程度の余裕があるのではないか。健康自覚限界を１／３程度とすれば、それから疾病や精神活動の低下を招き、全ての交換機能停止に至るまでには、まだ２／３のゆとりがある。**でないと、人は簡単に死んでしまう**からです。

システム的に言えば、疾病や活動意欲低下は死の前の警報（アラーム）信号であり、機械であれば部品交換すべき部位を知らせてくれます。

人体の場合は、誰かから調達するかの倫理的問題と、調達できたとしても相互の生体適合性が適っているか、あるいはｉｐｓ細胞技術等の再生医療で、どこまで生命維持を続けてよいのか人工技術の限界が・・・・・等々、問題は簡単でありません。

一方で**機械**ならば、壊れたパーツを交換するか、不都合なブロックを交換するか、はたまた全部を新品に取り替えてしまうか、倫理は不問とするテクニカルな問題と、コスト・バランス（費用対効果）によって選択肢判断（設計）となります。

「**限界克服の再帰性**」においては、「**リスク・マネジメント**」と「**クライシス・マネジメント**」の考え方があり、様々なリーダーシップの判断基準を設定することができます。

「**クライシス・マネジメント**」の応用として、死への対応や、原子炉メルトダウン、等々があります。

二・　新しい人間原理と人工知能

第四章第二節記述の「思考の限界」（P-114）において、『従来の人間原理』から逸脱して、『新しい人間原理』へと移行していくことを述べました。

一方、ノバート・ウィーナーは、言語と情報通信の面から人間機能にとって代わる「人間機械論」を、1,950 年代に展開していました。

それから約半世紀後（1,990 年）、日本人ノーベル生理学・医学賞受賞者＝利根川進氏は、分子生物学の未来像から別な「人間機械論」を想像します。

利根川氏は精神と物質の考察において、「自我はＤＮＡの自己表現である」とします。さらに、『生物は非常に複雑な機械であるが、物理学、化学の方法論でいずれは解明される。生命の神秘とは理解できないからであって、やがては脳の中で物質のインタラクト（相互作用）によってどういう現象が起きるのかが微細にわかるようになり、ＤＮＡレベル、細胞レベル、細胞集団レベルへと展開して現象のヒエラルキー（階層）の総体がわかり、人間の行動原理が物質的に説明できるようになり、神秘は無くなる』（『精神と物質』）、としています。

しかし私は、宇宙全エネルギーの中で物質となったエネルギー量はたったの５％未満であり、その他の９５％以上は未解明な暗黒物質と暗黒エネルギーが占める、という量子物理学の見解を根拠として、人類の知能では解明できない「神秘」は、残されるものと考えます。さらに脳が「物質」を認識する手段は、前節で述べたように「体内情報信号」により、抽象的なイマジネイションとなるからです。

脳と物質という二つの個体と個体が対峙していたとしても、それら物質を人体が認知することとは、事象のすべてが五感信号（視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚）によってエンコード（符号化）された情報信号を、ニューラルネットワークを通して相互通信し、信号情報の蓄積～認知～判別～統合・創発＝思考機能によってデコード（復号化）された「信号システム」により、認知となるからです。

「物質」の存在を認識する人間知能は、すべからく情報信号によってもたらされた「抽象＝虚像＝神秘」であり、「物質とは何か？＝人体情報信号システムの出力信号像（イメージ）」である、と考えるからです。

つまり「実在」とは、「人体五感がキャッチし、情報信号処理（蓄積～認知～判別～統合・創発）した出力信号の結果、人体に獲得された信号システムによって形成された、イマジネイション（虚像）」、と言い換えられます。全ては脳内イメージ（虚像）であり、同様なイメージが他の人々にも得られることから、その「イマジネイションこそが物質の実在として認知される」、と理解できます。

従って利根川理論の物質に還元した「人間機械論」は、その先の物質の実在認証方法において、「信号変換理論」（エンコード＆デコード）を付け加えなければならないと考えます。

「人間機械論」の先達は、アメリカの数学者＝ノバート・ウイーナー（1,894～1,964 年）による『人間機械論（サイバネティックスと社会）』があります。

ノイマン型コンピュータの発表が 1,946 年（私が生まれた年）であったように、ウイーナーの「人間機械論」は 1,950 年代の論考です。

進歩とエントロピー、固定と学習、言語の機構・歴史、情報通信の法律・社会性、文芸家と科学者、産業革命、通信の将来、等々、1,970 年代に読んだ私の思考に影響を及ぼしました。

利根川氏は自著の中で、『人文科学等の学問は、脳の生物学が進んで認識、思考、記憶、行動、性格形成等の原理が科学的にわかってくれれば、結局のところ脳の研究に向かうと思う。それがよくわからなかったから、現象学のように、現象を現象として扱う学問が発達してきた』、とします。

さらに、『地球の歴史の上で、あるとき物質が化学進化を起こして、ＤＮＡというものができた。以来ＤＮＡは自己複製を繰り返しながら進化を続け、今の我々に至っている。我々の自我というものは、ＤＮＡのマニフェステーション（自己表現）という物質現象である』、（自我＝物質現象←唯物論）とします。しかしその先で利根川氏は、『極端なことを云うと僕は唯心論者』、ともいわれます。

つまり、従来の認識原理からすると唯物論者のように思われるが、もし人類と別な認識メカニズムがあったとすれば、人類と別な世界が展開される。『それは脳（ブレイン）の認識原理（脳→心）が決めていることであって、その面からいえば唯心論者ともいえる』、とされます。

「脳→心」を個体物質のように扱い、その機能はＤＮＡに書き込まれた設計図通りに作動するのか・・・。

これまで私の知見からすれば、「人間の意識・判断に関わるＤＮＡ情報は脳内特定部位に記憶されているだけでなく、骨や臓器・器官や人体のさまざまな領域・レベルの細胞にまで情報が刻まれ、それらのシステム統合しているのが脳機能である」、との理解になります。

つまり、「脳機能とは、特定される個体部位だけにあるのはでなく、心身における人間統合機能である」、となります。また、「脳機能とは、人体ニューロネットワークの統合機能であるから、すべからく人体センサ（目、耳、鼻、舌、皮膚）からの情報入力電気信号（Encode エンコード）を、再統合（Decode デコード）したイメージ（写像）を出力～認識～論理判別～保存する働き」といえます。

それゆえに、入力信号を受けた時刻から認識できるまでに、時間を要します。ベンジャミン・リベットの研究によれば、最大で0.5秒遅れるとされ、この遅れ時間を『マインド・タイム（Mind Time）』と称しています。

この論法からは、「実在とは何か？」という問いが生じてきます。

従来は「哲学での問い」でしたが、これからは「物理学や分子生物学での理解」へと移り、それゆえに「人間機械論」が再浮上するのかも知れません。しかし再浮上する「人間機械論」は、バーチャル（仮想世界）とリアル（現実世界）との境界がなくなり、３Ｄ（3Dimension）とする三次元立体構造の中での認識となります。

しかし人間はすでに、現に生活している実相世界と、現に感じ、考えている頭の中の虚相世界とで３Ｄ構造な認識があり、そのことを理論的理解がされていなかっただけなのでしょう。

本書 P-130《文明・文化・人の意識＝環境の複素（数）的な世界構造》はＸ軸・Ｙ軸・Ｚ軸の三次元立体構造に、分かる範囲で要素の位置づけを示した図解です。この三次元空間は瞬時のリアルを示していますが、時間軸を加える四次元世界では、各要素の相関によって変移・転相・自己組織化等の動的非平衡活動が加わり、その終息においてつかの間の動的平衡状態となって定常化します。定常化の次は分裂・崩壊・相転移（別な様態となる）となり、最後にはふたたび元素へと還元されていくのでしょう。

では、「今（リアル）」という瞬時の事象を正確に認知できるかを考えてみましょう。

先のマインド・タイム理論からすると、事象の認知は、現象をとらえてから最大0.5秒遅れることにより、認知できた「今」の現実とは、全て過去時限に生じた事象にほかなりません。つまり時限と一致した「今」を、人は認識できない、という解釈になります。

人は「今（リアル）」を認知できず、「物質」は個体として「実在」しているように感じますが、個体という認識は人間脳内で形成されたイメージ（残像）でしかありません。つまり「実在」という認識は、ニューラルネットワーク上で記

憶のイメージ（像）として形成された**残像**によってつくられることとなります。その残像に五感センサ（目、耳、鼻、舌、皮膚）からの時々刻々な信号を加えた４Ｄ構造により、事細かな**リアル体験**として受け入れています。

仏教では、『**色即是空即是色**（しきそくぜくうそくぜしき）』＝『およそ物質的現象というものは、すべて実体がないということである。およそ実体がないということは物質的現象なのである。この世のすべての事象は、永遠不変の本質をもつものではなく、すべて空であり、また、空であることがこの世のすべてを成立させる道理であるということ。（ブリタニカ国際大百科事典小項目辞典）』と、**般若心経**の解釈があります。

※ **色**（仏教）＝物質的存在、形をとっているものを意味する

同様に、「**生きるとは何か？**」という問いは、従来の「**哲学**」や「**宗教**」に大きな影響を与えてきましたが、「**デジタル文明時代**」になると、もはや愚問となっていきます。

「**およそ、そのような問いは・・・意味がない・・・**」と。

私は幼い頃から「**生きるとは何か？**」、を問い求めてきましたが、その答えを得たくて**登山**に熱中し、ヒマラヤ登山途上での、遭難臨死状態から生還した体験があります。

そして「**生きるとは何か？**」という問いへの答えには、「**死の寸前まで真剣になって努力するそのこと＝最も生きていること**」となりました。

「**弁証法による生**（肯定）**と死**（否定）**の弁証**（対峙）**過程の中にこそ、最も生きている実感を味わうことができる**」というロジックです。さらにヒマラヤ遭難で生還した要因を、フランスの生物学者＝**ジャック・モノー**（1,910～1,976年）がいう『**偶然と必然**』から、『**偶然によるもの**』と理解しました。

しかし「**偶然**」と割り切るには物足りなく、少しでも、宇宙（自然）の原理を知りたいとする思いから、探求は今も続きます。

本書著作は、その一途でもあります。

しかしここにきて、二十一世紀の「**デジタル文明**」は、人間の知能をはるかにしのぐ**人工知能**や超高速・大容量**スーパーコンピュータ**の活用で、従来の**アナロジック**で**メカニカル**な文明を大きく変化させています。

従来の「**アナログ文明**」は、**弁証法**という「**正立・反立・弁証合意**」とする、**三段論法**によって解決を図ってきました。しかし「**デジタル文明**」は、「**弁証合意**」という厄介で、曖昧で、微妙な駆け引き過程を経ることなく、「**正立・反立**」とする**二項対立の一方を最適判断して答え**とし、そのことを微細部に至るまで超高速で繰り返します。

二進法論理の「yes / no」、「1 / 0」による判断は、コンピュータ・ロジックからの回答となります。それゆえに「**生か、死か**」という**人間的二項対立**における選択問題は、**対立項を反省的に引き立て合ってお互いの在り方を認め合いながらも一方を選択するという、人間感性の複雑で豊かな心の連鎖物語性**（アナログ）**にとって、コンピュータ・プログラムが不適切な対応**をはかります。

「**生きるとは何か？**」という哲学的問いは、**デジタル文明**のロジックになじまないから、そのような問い自体が愚問となるからです。

では、**ポスト・ヒューマン＝コンピュータが人類の知性を超えるとき、人類社会はどのようになるのか・・・**。

進化は指数関数的に進み、特異点に収斂して**フラット**となり、進化エネルギーを失った**動的平衡**となり、**生命を失う**ことでしょう。

「デジタル文明」は二十世紀後半から始まり、二十一世紀で指数関数的進化を果たしました。

十八世紀の「産業革命」は、人の「労働」を機械力に置きかえたものでしたが、二十一世紀の「デジタル産業革命」は、人の「知能」を「人工知能」のアルゴリズム（プログラム）に置きかえ、人間機能とフラクタル（Fractal＝自己相似）な機械（ロボット）とともに、人間と共生することになります。

それらの人々が二世代を過ぎるころにはポスト・ヒューマン時代を迎え、人間のロボット化（指示待ち人間）が一層進むことでしょう。「ヒューマン」は「アナログ文明人間」を指し、「ポスト・ヒューマン」は「デジタル文明人間」を指します。

二十一世紀初頭の現代において、大変便利なスマートホン活用世代には「指示待ち傾向」を見受けます。その頭脳と指先は、アルゴリズムに誘導されます。深く考えることを要さず簡単で、大変便利なネットワーク・コミュニケイション・ツールです。インターネット・ウエブに接続された電子端末群の機能は、ちょうど人の記憶や思考が体内ニューラルネットワークで行われる分散機能に自己相似（フラクタル）しています。

ニューロンは人の神経細胞であり、インターネット・ウエブを社会の神経細胞に置き換え考えてみると、「人体＝ウエブ社会」は自己相似とみなせるのが、きたる「デジタル社会」の未来像といえます。

未来社会の「ポスト・ヒューマン」とは、人間個体概念から、人類という類別概念にとって代わることになります。

フラクタル（自己相似）という考え方は、フランスの数学者＝ブノワ・マンデルブロ（1,924～2,010 年）が導入した幾何学の概念で、部分の自己相似形が全体にも表れる現象をいいます。

その考えを「人とウエブ社会」に応用してみると、「個人が自己相似する社会＝ウエブ・ロボット社会」を思い描くことができます。

アナログ世代は「自由で多様な動的非平衡社会で個人の生き方」を追求しました。動的非平衡の意味する特徴は、「人には諸々の差別が偶然にも必然にもあることを認める社会が本音」にあります。

他方では、「人の差別を悪として、平等にしなければいけないという建前（理想）」があり、本音と建前は二重らせん構造（ＤＮＡ同様）で絡み合い煩悶します。

アナログ世代ではフラクタルな同類性（等身大）よりも、オンリーワンの個別性が尊重されました。

しかし、デジタル世代の「フラットな動的平衡社会の中で、人々はどのように生きるか」を、真摯に考えてみる必要があります。

「フラットな動的平衡」状態とは、「人類の生命」が終焉に近づいていることを示します。

その理解は、宇宙における熱力学の第二法則＝「エントロピー増大の法則」からです。

『人類が絶滅する６つのシナリオ』（著・フレッド・グテル）という本が 2,013 年に邦訳出版されました。内容は、次の通りです。

❶世界を滅ぼすスパーウイルス、
❷繰り返される大量絶滅
❸突然起こり得る気候変動
❹生態系の危うい均衡
❺迫りくるバイオテロリズム
❻暴走するコンピュータ

終わりに人類を救う方法は、「**創意工夫のみが人類を救う**」、となっています。

本書として注目すべき項目は、❻の「**暴走するコンピュータ**」です。

その要旨の一部は、すでに記した通りです。進化の一方向性から考えると、コンピュータの暴走は容易にあり得ることで、暴走とともに故障もあり、簡単に全体がシステム・ダウンへ導かれる想像は、電気技術者にとって容易です。

物理学から社会学へと転身した**鈴木健**氏（1,975 年～）は、その著『**なめらかな社会とその敵**』において、**インターネット社会**を考察しています。

物理・化学的原理と社会制度・システムを検証します。その答えは、「**社会を生態系としてとらえ、その中で人がどのように生きているか、身体や自然に気づきましょう**」として、**社会制度改革案等**を検討しています。

また、国内外で生物工学を教える**下條信輔**氏（1,955 年～）は、その著『**ブラックボックス化する現代**』において、潜在認知の社会性を考察しています。

ベンジャミン・リベット『**マインド・タイム**』の翻訳者でもあり、どちらも脳機能を解析する**生物認知工学的**な内容です。「**情報**」が社会の中で**実体化**してくると、人々の意識は、次なる傾向に傾くことを指摘しています。

❶ 近視眼化
❷ 健忘症化
❸ ブラックボックス化

その結果には社会の**ポピュリズム化**や、マニュアルのない「**想定外**」への対応不適切化、等々、科学成果がもたらせる近未来への警鐘を試みます。

情報の平準化と**ポピュリズム化**は密接な関係を成し、現代世界の趨勢です。

局所戦闘、局所国家樹立、国民国家へ収縮させようとする、「**〇〇ファースト**」な**ナショナリズム**、ブラックボックス化する**テロリズム**、それらへの反動エネルギーを放出させる**オリンピック**を頂点とした**国際スポーツ競技**。

スポーツ競技は政治色を帯びないとされますが、その考えは純粋なアマチュア・スポーツの領域においていえることでした（近代オリンピック憲章）。国家・地域・団体・組織等々群れの代表を背負えば、競技は**戦闘に等しく**なります。勝つためには、その競技の**専門家**として、生計まで担保する**プロフェッショナル**が生まれます。

最初の**プロフェッショナル**は、古代ローマの剣闘士らでした。相手を殺傷するまで戦い、それを鑑賞する市民。剣闘士に市民権はなく、**奴隷＝プロフェッショナル＝賤しい身分**、として扱われます。

近代オリンピック憲章には「**アマチュア規定**」があり、プロの参加をみとめませんでした。古代から近代オリンピックに至る長い歴の中で、剣闘士のごとくプロフェッショナル・スポーツマンに、市民権はありませんでした。

国際オリンピック委員会第６代会長＝キラニン卿（任期＝1,972～1,980 年）時代に「**アマチュア規定**」は除かれ、プロも参加します。

第７代会長＝サマランチ（任期＝1,980～2,001 年）時代からは、オリンピックが世界最高スポーツの祭典と位置づけ、プロスポーツ化と商業化を積極的に図り、**オリンピックは一大産業化**へと向かいます。

オリンピックの方向性は**進化**を必然とする**文明**にマッチし、**世界最高峰**の位置づけは**文化価値**の高揚へと発展を推し進めます。こうして**世界の人々がオリンピックへ邁進することは、戦争の意志を平和裡な競技闘争意欲に変えて発露させる、平和への手段**となります。時代の変遷（歴史）は、**オリンピックを極めて政治色の強い戦闘の裏面として、殺傷をともなわない平和裡な闘争**、つまり「**戦争意欲のガス抜き装置**」へ位置づけられた、と考えられます。

ヒトの**闘争**は、原始人類が集団生活を始めたころからの**人間本能**としてあり、様式を変え、内容を変えても、やはり**ヒト**から**闘争本能**を抜き去ることはできません。

しかし**戦争代替装置**としての**スポーツ競技**は、文明進化と同じ位相で一方向進化を図ることができます。さらに「**遊び**」要素を加えたならば、文化の多様な位相へと相転移を促します。

文明進化に、**文化の遊び心**を加えた「**複合化**」を図れば、勝ち負けの二択世界のほかに、第三としたる「**楽しむゆとり世界**」を加えることができます。それは宇宙の動的非平衡世界の中で、**文明**と**文化**が融合した**動的平衡世界を保つ、つかの間の人類社会の幸福を実現**することができるのです。

文明進化の奔流の脇に〝**淀む**〟、人類文化の〝**喜び**〟となります。

ホーキング博士は、没後の著作＝『**ビッグ・クエスチョン**』の中で「**人間原理**」を次のように述べています。

『・・・「**なぜ宇宙はこのような宇宙なのか？**」という問いを発することのできる人間が、現にこうして存在しているという事実が、私たちの生きる歴史に制約を課すのだ（P-74）・・・とし、

さらに、・・・**人間原理は、宇宙は多かれ少なかれ、私たちが見るようなものでなければならず、もしそうでなかったなら、宇宙を観測する者は存在しなかっただろうという考え方のことだ**・・（P-74）』、

としています。そして以下のような**クエスチョン＆アンサー**を展開します。

［Q１］　神は存在するのか？

・自然法則の発見＝科学は、人類の最も偉大な業績であり、科学と宗教との対立は古くからある問題である。

・自然法則は宇宙のいたるところで同じで、その法則を破ることはできない。

・宇宙は自然法則に従い、何もないところから自発的に生まれた。（ビッグバン）

・神は自然法則を破るために、宇宙へ介入することはできない。

・宇宙をつくる三つの要素、①＝物質、②＝エネルギー、③＝空間、に「神」を持ち出す必要はない。

・信仰は自由だが、ただし科学ではない。

・どうしても「神」を定義したいならば、「**自然法則＝神**」としてもよい。

・天国は存在せず、死後の世界もないだろう。

・一度きりの人生は、宇宙の大いなるデザインを味わうためにある。

［Q２］　宇宙はどのように始まったのか？

・**創世神話**は、誰でもが抱く問いに答えようとしたものだ。

・人類の有限な頭脳に、無限の宇宙を理解することは出来るだろうか？

　→宇宙を理解することは可能だし、**理解しようとすべき**なのだ。

・宇宙は特異点とともに始まった。（**ビッグバン**）

　→宇宙マイクロ波背景放射の観測により（1,965 年 10 月）証明された。

・宇宙の起源を理解するためには、**一般相対理論**（アインシュタイン）と**不確定性原理**（ハイゼンベルク）を組み合わせた理解となり、現代における解としては**十一次元**（４＋７　＝　11）の「**Ｍ理論**」が近い。

・**宇宙**には**空間**と**時間**の**境界**が**ない**ので、**実数時間**と**虚数時間**を組み合わせる（複素数）と**無境界の歴史説明ができる**。

　→ 多数の空間（十一次元）があることは、多数の歴史が存在できることにもなる。

［Q3］ 宇宙には人間のほかにも知的生命が存在するのか？

・**生命の定義**＝

生命は、無秩序に向かおうという傾向に逆らって存在しつづけることができる能力を備えた**秩序ある系**。

↓ **熱力学第二法則**＝

エントロピー増大の法則（無秩序化）　↑　この法則があてはまるのは、閉じられた系の中においてである。

開放系にあってはエントロピー減少（秩序化）もあり得る。一個体（個人）の閉じられた系のエントロピーは増大（個人の死）しても、別な個体（子孫）へと引き継ぐ開放する系を構築（**代謝と知性**）することにより、その種（人類）としての秩序は持続する（人類の存続＝エントロピー減少＝**ネゲントロピー**）。

↓ **生命の要素**＝

① **遺伝子**（繁殖する方法をその生命体に教えるための指示情報＝ＤＮＡ）

② **代謝**（指示を実行に移すためのメカニズム＝細胞）

↓ **伝える方法**＝

① **遺伝**（精子と卵子が結合し、新たな遺伝子を書き込む＝ＤＮＡ情報）

② **知性**をメディアに託す（言語、文字、記号、映像　↓　図書、設計図、電子媒体データ）

↓ **情報の保存**＝

① **遺伝子**（ＤＮＡ）

② **細胞**（脳や身体）

③ **知性**をメディアへ固定化する（言語、文字、記号、映像　↓図書、設計図、電子媒体データ）

↓ **デザイン**　＝

① 脳思考＝**知性**（学習～創発）

② **プログラミング**（自己学習（ディープラーニング）、仮想現実（バーチャルリアリティ）（ＶＲ））

③ **遺伝子**（結合のゆらぎ、遺伝子操作～書き換え）

↓ **滅亡**＝

① **欲求**（正の進化）↑発展　＆　**欲望**（負の進化）

→ **自らを滅ぼす**（進化の自滅）

② 小惑星や彗星の衝突（かつて恐竜が滅びたように）

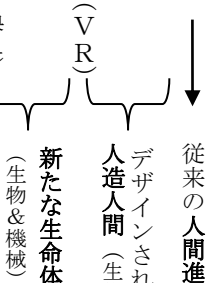
③ 地球外生命体との出会い（敵対した場合）

・人類は**進化の新しい段階**に入った。

↓ これまで人類の進化はＤＮＡの結合と複製とそのゆらぎに頼ってきましたが（遺伝情報＝**内部記憶装置**＝約一億ビット）、**知性**の発達により「**情報を外付**」して子孫へ伝達する術（**外付記憶装置**）を活用することにより、ＤＮＡの情報量より百万倍以上も多い情報を、伝えることができるようになった。

その主たる媒体（メディア）は**言語**であるが、言語を固着した「**本**」により、多くの人々が同時にアップデートできるようになります。

さらに現代のデジタル電子媒体をＳＮＳ（Social Network Service）へアップロードすることにより、進化の情報量とスピードが圧倒的に増大し、人類の新たなフェーズ（段階、局面、位相）に入りました。ＳＮＳはその名の通り、人々が構成する**社会ネットワーク**であります。個々が備える内部記憶装置と外部記憶装置を一体として接続し、それが**社会ネットワーク**化されて一体運用されるので、「**知性のミニ宇宙**」ともいえます。



そこに展開される知性の真偽は検証しきれぬ膨大さが拡がり、「**情報エントロピー**」として確立表現されます。

「**情報量**」は、**確率変数**（事の真偽で1ビット）が多くなるほど増大するので［H(X)＝－∑Pi・logPi］**乱雑さが増大**する意味から、**熱力学のエントロピー増大**に類似していることから、「**情報エントロピー**」と表現されます。

外付記憶情報量が膨大となり、**ビッグデータ**となって**新たな適応段階**に、すでに突入している昨今です。

・宇宙に広まるのは**機械的生命**なのか？

↓ 人類が洞窟に住んでいたころの本能＝攻撃衝動をいまだに持ち続けていることが、人類全体と地球上のそのほかの**生命のかなりな部分を壊滅させかねない**。（地球温暖化、核戦争、攻撃型遺伝子操作ウイルス、攻撃型超人類）

↓ 人類が自らをデザインし直し、**自己破壊のクライシス**を除去できれば、人類は宇宙に拡がり、惑星や恒星系に植民するだろう。しかし生物の自然寿命は宇宙旅行時間サイクルよりも短いので、**遺伝子工学**によって**十万年の寿命**に拡張できるかも知れない。

しかしそれよりも、宇宙に機械を送ったほうが簡単で、その手法はすでに手中にある。そのような機械は、「**高分子生命体**（人間）」と異なり、機械的・電子的要素でつくられる、「**新たな生命体**（機械的）」となるだろう。

・なぜ知的生命体は**いまだ訪れない**のか？

↓ 生命が自然発生する確率は非常に低くて、地球はそれが起こった銀河系で唯一の・・・あるいは観測可能な宇宙で唯一の・・・惑星なのかも知れない。

↓ 長期的に見たとき、知性が生き残りに役立つかどうかも、決して明らかではない。私たちが、知的生命に出会う可能性は低そうだ。

↓ 生命が知性を進化させずに終わるもう一つの可能性は、小惑星や彗星の衝突だ。平均すると、二万年に一度ぐらいとみるのが妥当で、地球上に人類が存在するのは、過去 6,600 万年間に大きな衝突がなかったという幸運のおかげ。

↓ 生命が形成され、知的存在を進化させる見込みはそれほど低くないのに、その生物系が不安定になり、自らを絶滅させる確率はそれなりに高い。

↓ 宇宙には、私たちと異なる形態の知的生命が存在しているのだが、これまで見逃されていた。

［Q４］ 未来を予言することはできるのか？

・**科学的決定論の不完全性**

↓ 科学的決定論は、二十世紀になって、未来を完全に予測するというラプラスのヴィジョンは実現不可能であることを示す二つの進展があった。

① 量子力学の登場（マックス・プランク）

② 不確定性原理（ヴェルナー・ハイゼンベルク）

電磁放射のエネルギーは量子化された値を持つ離散的な波（量子力学）であり、粒子の位置と速度を同時に正確に測定することはできない（不確定性）。

・**未来の予測不可能性**

↓ 量子力学において、粒子は**波動関数**で表される。**波動関数**とは、空間の各点に与えられる数であり、その大きさはその点で粒子を見いだせる確率で与えられる。

↓ 粒子の**波動関数**には、その粒子の位置と速度の両方が含まれている。
ある時刻における波動関数が分かれば、別の時刻における波動関数の値は、**シュレディンガー方程式**を使って計算できる。（P-155 参照）このことは、粒子の位置と速度を予測することではなく、単に計算するだけであり、不確定性により特定はできない。
宇宙を支配する法則は、原理的には未来を予測させるが、実際にその計算はあまりにも難しすぎる。
重力が強くなり、時空が極度に歪んでくる（例＝ブッラックホール）と、原理的にも観測することはできない。

［Q5］ 人類は地球で生きていくべきなのか？

・**世界終末時計**の針が、深夜零時まで**あと二分**の位置 に進められた。（原子力科学者会報）
↓ 破滅の危機→軍事的、環境的

・**危機に直面する地球**
↓ 明るい展望を持つのは、難しい。
↓ 気候変動、極地氷冠の減少、森林破壊、人口過剰、病気、戦争、飢饉、水不足、種の絶滅。
↓ 科学者は情報を提供し、指導者にアドバイスする特別な責任がある。

↓ 政情が不安定＝
危機に際して冷静な判断を下せるかわからないポピュリスト政治家に、大衆が目を向ける。
↓ 人間活動とテクノロジーが、地球上の生命を永遠に変えてしまう。

「 いて座 Ａ ＊（エースター） 」のブラックホール

（2019 年 4 月 11 日・朝日新聞朝刊より）

国立天文台などの国際研究チームが 10 日発表した。

地球まで届きやすい電波、「ミリ波」を観測し、画像に変換成功。世界 6 か所、8 つの電波望遠鏡を使い、口径約 1 万㎞相当の望遠鏡データを合成することで、地球から月面のゴルフボールが見分けられるほどに解像度を上げ、約 2 年をかけて解析した結果、視覚的証明に成功した。黒いブラックホール姿が確認でき、その質量は太陽の約 65 億倍に相当する。アインシュタインの「一般相対性理論」から想定された「ブラックホール」は、約 100 年後の今回、視覚的に直接証明された。（朝日新聞記事・要旨）

ブラックホールの特異点を論じたのはホーキング博士であり、人間の思考力は「ミニ宇宙」を想起し、フラクタルに宇宙そのものを思考し得るのかもしれない。（田中）

・**今こそ宇宙へ乗り出すとき**
↓ ホモ・サピエンスは生まれながらの探究者（好奇心）。
↓ これまで危機に陥った時、たいていは植民する場所があったが、いまや地球にその場所はなく、宇宙に乗り出していくべきなのだ。

↓ 地球を離れようとすれば、地球規模で力を合わせなければならない～みながそれに参加すべきだ。宇宙に拡がるということは、自分たち自身から救い出す唯一な方法なのかも知れない。

↓ もし**地球に留まれば**、私たちは**絶滅の危険を冒す**ことになる。

・次の千年間に何が起きるか

↓ 量子力学は、唯一無二の歴史が一つだけあるのではなく、起こりうる歴史は確率をともなって起こることを示す。

↓ 量子論と一般相対性理論を統合した宇宙の基本法則となる、**完全な理論**を作り上げることになるだろう。

・人間が心と身体を改良する時代

↓ これまで人類が手に入れたもっとも複雑な系は、**人間自身の身体と心**。

↓ ＤＮＡは地球上に生息するあらゆる**生命の基礎**であり、**自己複製**するために、**遺伝情報**が刻まれている。

↓ **ＤＮＡを新しくデザイン**できる可能性は高く、いずれどこかで、誰かが、**改良した人類**をデザインするだろう。

↓ **改良人間**が、改良されていない人間に対して、**社会的、政治的問題**を生じさせるのは明らかだ。

↓ 人類が**宇宙探査**に挑むためには、何らかの面で**心と身体**の両方を**改良**しなければならない。

↓ 非常に複雑な化学物質の働きが人類を知的にしているなら、それと同じくらい**複雑な電子回路が、コンピュータに知的ふるまいをさせることは、可能**だと思う。～生物学的なものと、電子的なもの両面で、複雑さは急速に増大する未来にある。～その未来は、現在と大きく異なったものになるのだろう。

［Ｑ６］　人工知能は人間より賢くなるのか？

・コンピュータは人間を追い越すことになりそうだ

↓ コンピュータは人類の**知能**を真似できるし、今後百年間のどこかで、人間の**知能**を追い越すことになりそうだ。

↓ この文脈で用いる「**知能**」とは、**統計的・経済的合理性**にもとづく**最適判断**を下す能力のことである。

・ＡＩがもたらす本当の危険

↓ ＡＩが加速度的に自らを再設計し、自己の意思を持つようになると、これまでの**人類の意思と対立**するようになる。

↓ ＡＩの**本当の危険**は、人類に対して悪意を持つかではなく、**ＡＩ自身の能力の高さ**にある。

↓ ＡＩの目標と、人類の**目標とが異なってきた場合**、人類にとってはまずいことになる。（人類の蟻地獄）

↓ ＡＩ研究に関し欧州議会が、ロボットとＡＩの製造を制限する一連の規制案作成を求めた。この草案には、ＡＩに対して権利と責任を求める**「電子人格」**が含まれている。**「電子人格」**は法務上の**「法人」**概念に等しく、ロボット設計における燃料や電源を遮断する、**「キルスイッチ」**の実装を強調。

・ＡＩ時代、人間の役割

↓ 人間は、**デジタルワールド**にどうコネクト（つながる）するか？

↓ 人間の頭脳がＡＩで**増幅**されたらどうなるのか・・・、予測がつかない。

↓ **「人間～ＡＩ機器～情報」**が双方向にコネクトされるにつれ、実社会が変化する速度はどんどん早くなる。量子コンピュータになると格段に処理スピードは上がり・・・宇宙旅行に良いのかも？

↓「**ＡＩはいかにあるべきか**」、議論と学習を進め、どのような**ＡＩ**にするのかを、**人間が計画**（設計）しなければならない。（知恵）

↓**テクノロジーの力**（文明進化）と、それを利用する**人間の知恵**（文化価値）とのバランスにおいて、**知恵が技術を制御**できるようでなければならない。

↓**まず考えてみよう！**

※**複素特異点**＝

① 実相＝客観的＝科学的

② 虚相＝主観的＝欲望と意識

［Ｑ７］　より良い未来のために人は何ができるか？

・**鍵になるのは創造力**

↓独創的なアイディアは、鋭い直感、創意、明晰な思考、が混じり合った中から生まれてくる。

↓創造力を鍛えるためには、「**思考実験**」を励むのが良い。

↓人間の頭脳は信じられないほど素晴らしい。その潜在能力をフルに発揮するためには、**キッカケ**（気づき）が必要。非凡な人物の背景には、非凡な**教師**がいるものだ。

↓**人間の真摯な努力に限界はない。**

・**人類の未来のためにできること**

❶ 人類が生きていくのに適した惑星を求めて**宇宙を探査**すること。

❷ より良いものにするために**人工知能を建設的に利用**すること。

・**人類社会でのマネジメント**

↓**クライシス・マネジメント**＝**人類滅亡**（カタストロフ）を予期する**特異点**の制御

↓**リスク・マネジメント**＝人類が**より良く生きのびるため**、そのつどの**最適解**を出す。

・**あきらめないで創造力を解き放つ！**

三・ デジタル文明の自立（粒子性）と依存（波動性）の複素性

「人は、一人きりで生きられるか？」という命題に対し、次なる「人間の公理」から否定されることになります。

「人は、一人きりで生きられない」とする命題に置きかえてみると、人々は皆等しく、実体験の中から賛同せざるを得なく、「人間の公理」といえます。

一人の個体生命は、その個体のみで再生産することができず、必ず「生殖→母体→子」という出産行為により、二人以上の複数個体生命が重複することになります。つまり、「一人」を考える上で、次なる個体生命を考える二つの立場があります。

①＝その個体生命だけに限定する立場

②＝人類という類の生命継続の中で、一つ一つの個体としての立場

「一人きり」とする個体の単一存在は、一つの個体生命生存期間のみにおいて有効であり、個体の死により「一人きり」の存在は、消滅します。

であるならば、①＝個体生命だけの立場は、やがて現存人類が全消滅することになり、その立場を考察する必然性はなくなります。

したがって②＝人類という類の個体生命の立場から、「一人きり」の意味を考えることになり、類（人類）と個（個人）の相関関係を考察することになります。

「人は個体として、一人で母体から生みだされ、成長し、一人で死んでいく」という命題は、一個体の出生と死を、簡潔に説明します。

それは全ての個体（人類）に共通しますから、「人間の法則」といえます。

※ 双子、三つ子にしても順次出生することや、例え同体であっても意識形成は個別に成されることから、命題の真は変わらないとする。

整理してみると、次のようになります。

❶「人は、一人きりで生きられない」・・・人間の公理

❷「人は個体として、母体から一人ひとり生みだされ、成長し、一人ひとり死んでいく」・・・人間の法則

以上の概念は、自然環境における生物種たる「ヒト」、そして「人類」について説明するもので、二十世紀までのアナログ（連続）思考によります。

アナログ思考では、原因と結果が連続した時間軸の上にあり、結果の過去を探っていけば、必ずやその原因を探し当てることができます。

二十世紀末からのデジタル思考は、瞬時、瞬時の最適解を求めて解析し、判断するようになりました。これまでの、原因から結果を求める連続思考と異なり、瞬間、瞬間の最適解が答えとなる瞬時性は、必ずしも原因と結果を同じ時間軸の上で連続的に考えるものでありません。

デジタル思考法は瞬時・瞬時の離散要素を、組み立て直して構造・構成化して理解・説明する「構造構成主義」思考となります。

その表現は論理学となりますが、自然現象を論理的に記述する数学や物理学での表現が適してきます。

※『構造構成主義とは何か』著・西條剛央

数学的に述べれば、極大・極小・**最適解**を求める「**微分法**」と、ゼロ（0）から無限大（∞）までを積み上げる＝「**積分法**」や「**級数展開**」、さらに瞬時・瞬時の要因に**確率**をまじえた**統計推論**をおこない「**統計規則**」にもとづく**解**を得ることができます。

カオスの複雑でランダムなものでも、**スケーリング則**を**フラクタル次元**へと拡張すれば、**ビッグデータの解析**もできます。そこから導き出されたのが、無秩序な状態の中から自らで秩序を生みだす**自己組織化臨界現象**であり、これが**生命現象に類似**していることの再認識となります。

この現象をコンピュータの**セルオートマトンモデル化**し、交通流モデル、地震モデル、気象モデル、雪崩モデル、等々に活用し、そのダイナミックスな極限応用が、「**生命モデル**」の理解となります。

さらに同じことを**物理学的**に述べれば、極小の真理を求めるのが「**量子物理学**」であり、他方、極大な宇宙相関の真理を宇宙創成まで求めるアインシュタインの「**一般相対性理論**」があります。この両者を複合してブラックホールを理解しようとしたのが、**ホーキング博士**です。

ホーキング博士は、量子論が説明する粒子世界の確立的挙動と、一般相対性理論が説明する重力の極大化にともなう空間の圧縮や歪みを組み合わせ、**多次元複素空間世界**の理解・説明として、**新しい数学**を模索していました。粒子のデジタリックな瞬時性と、重力波のような相互干渉力の波動連続性とを組み合わせて理解する、**新しい数学**です。

瞬時、瞬時を同じ時間軸の上に順次連続して置けば、離散的なデジタル信号であっても、アナログ的連続性に似た表現をすることができます。そのことを時間軸の**直線**一次元から、さらなる**平面**二次元へ、そして**空間**三次元へと拡げていき、それに**時間軸**を加えると、**四次元空間認識**となります。

瞬時・・・瞬時を三次元空間内の「**点**」とすれば、その点が時間によって変移する軌跡はアナログ表現の連続性を表わします。

つまり、三次元空間における「**個体**」の粒子的存在と、「**生命**」とする活動時間の連続性が表わす波動的な生命活動を併せると、あたかも**電磁波**（光）のように**粒子性**と**波動性**を同時にともなった「**複素的動態**」として理解できます。

では、**デジタル思考**で「**個の自立**（粒子性）**と依存**（波動性）」を考えるとどうなるのでしょうか？

その前提としては、前節［**Q3**］で考えた「**生命のデザイン**」が問題となります。つまり、生物たる人類の生命継承だけでなく、「**新たな生命体**」や「**人造人間**」までもが、**デジタル・テクノロジー**によって「**生命体**」を創出してくるので、併せて考えなければなりません。

※「**新たな生命体**」＝機械＝ロボット、

※「**人造人間**」＝遺伝子改造人間（デザイナーベビー、超人間）

仮想現実（VR）人間＝ドラゴンボール（鳥山明）、

人造人間キカイダー（石森章太郎）

生命デザインによる**デジタル・テクノロジー**は、**生殖**による「**母→子**」の継承が不要となり、「**夫婦・家族・親族・一族・民族**」といった、**個**を集合的かつ系統的に捉える必要がなくなります。

デザインされた生命は、宇宙の**粒子**が結合して**分子**を作り、分子が構造化して**物体**となるように、**生命**＝**個**もまた、**物質**（粒子性）**に還元**されていくのではないでしょうか？

この思考から、「一個」という生命体物質は、全生命組織のパーツ（部品＝粒子性）としての要素となります。

では、パーツ（部品）として「生きるとは何か」を問われてきますが、パーツである限り、廃棄→交換、あるいはバージョンアップされる対象沕となり、「生きる」という主体的行為の主体者とは、なり得ません。

つまりパーツとして「生きる」とは、耐用年数や賞味期限に等しい時間軸上での有効期限であり、そこには「生きている実感、生きている喜び、ともに生きる愛情・・・」といった、主体が感知する人間的感性は盛り込まれません。「生きている」有効期限の中で、パーツ自らの主体性（意思）はなく、ひたすら機能を果たすことの部分的役割（パート）しか与えられません。

「生きている」という「生命体の連続性＝波動性」の中で主体性が無いとするパーツの立場は、生きることの意味や感性を見出す、フィードバック回路（自省＝知性）を備える必要性がありません。

そのことは、個のパーツたる物体性を述べ、知性があるとはいえません。

バーチャルリアリティ（VR）として扱う人造人間では、生きることの意味や感性までも含みえることになるのでしょう。

つまり、第七章一節で述べたように、人間の意識は全てが信号によってイメージングされた残像であり、その入力信号が直接的であればリアルと感じ、間接的外部信号であればバーチャルと感じる程度の違いでしかありません。入力信号として変換するセンサが、肉体センサ（目、耳、鼻、舌、皮膚）であればリアルに、外付センサ（外付器具）であればバーチャルと感じる、信号変換装置の違いでしかありません。

さらにデジタル信号の非連続とした離散信号にあっても、0.02 秒（50Hz = 1/50 = 0.02 秒）以内の間隔であれば、脳の残像効果（錯覚）により連続として認識される事実は、すでにアナログテレビからも採用されてきました。脳の記憶や残像効果により、離散的瞬時の出来事であっても、0.02 秒以内で持続的に記憶されると、脳は連続と間違って認識してしまう錯覚を生じます。

「歴史」の継続性もこのように、その時々の瞬時な記録が積み重なることにより、その記録の秘めた特性によってつくられるストーリー、つまり「物語」の連続性を帯びた「歴史」と言わるようになります。

アナログ信号の進む一方向性（物語＝歴史）に対し、時間で切り刻んだデジタル要素を組み替えてしまうことにより、アナログ物語＝歴史を加工して異なった物語へと転換させてしまうこともできます。

デジタル記憶媒体をリアルとバーチャルに双方向変換させることにより、バーチャル・タイムトラベルやバーチャル・タイムスリップの加工ができるのかもしれません。

先に見学した国立天文台での宇宙四次元シアター鑑賞における時限操作も、デジタル信号によって映像化されているから、バーチャル時限操作ができるのです。

それゆえに、神経伝達物質の科学反応を刺激する信号を外部から加えることにより、実体験同様な効果を示す人体は、その外部信号が多くなれば新たな生命体となり、他方では人造人間化も図られるのでしょう。

これら、リアル体験とバーチャル体験との違いは、どのように区別できるでしょうか。脳機能が同じような作用であるならば、その違いは「肉体」が行為に参加しているか、否かの違いでしかないと考えられます。バーチャルリアリティ（VR）とする仮想現実体験は、「肉体」が行為そのものに参加していないがゆえに、バーチャル体験なのでしょう。

アナログ思考の連続性とデジタル思考の離散性は、光（電磁波）の性質にも似てきます。第五章第三節で述べたよう、光には波動（アナログ）の性質と、粒子（デジタル）の性質を併せ持っていることとの類似性です。

そして何よりも大切なことは、人類がこの二つの性質を併せもった複素的思考法（デジタル思考 ＋ アナログ思考）により、進化を続けていることにあります。

デジタル思考によって局所最適解を求める微分法と、アナログ思考によるトータル手法は積分法となり、加えて確率的統計推論により未来の進化を推考します。

前者の最適解は「科学法則（演繹法）」で展開され、文明の進化を促します。後者のトータル手法はそれぞれに「希望（帰納法）」を託し、「哲学」を導き、文化の成熟を促します。

さらなる未来進化への推考は、スケーリング則をフラクタルに拡張応用し、小さな頭脳から無限な宇宙までを推考します。

これらの複素的な人間意識の高次元性は、他の宇宙生命に見いだせない、人類が人類であり得る主たる特徴であるのでしょう。

人間生体の生命代謝（生殖）によらない生命デザインは、人為操作（人工＝体外受精、遺伝子操作）によって日進月歩で進化しています。

◆ 定理 ＝ 数学で証明できる真なる命題

◆ 公理 ＝ その他の命題を導き出すために前提となる基本的仮定

・公理の直感的妥当性

・公理の歴史的妥当性

◆ 法則 ＝ ある事象と別なある事象との関係性を示すことば

エピローグ

これまで記述した歴史ある「**相模國第四之宮**」の地に生まれた私は、幼い頃から内向的で、周囲を気にする引き込み思案な小心者でした。

小学校卒業式で答辞を読むよう担任から言われましたが、辞退しました。代わりに読んだのは、人前で発表するのが得意なYさん（女性）。もしその時私が答辞を読んでいたなら、きっと両親が喜んだろうと感じたのはずっと後、父親になってからです。

自我が強く、周囲に同調して騒ぐのが大嫌いな性格は我儘の裏返しで、だからといってチームプレイができないことではありません。理由（わけ）なく流されるのが嫌いで、皆がやっているから自分も・・という空気の流れへ乗るのがもっとも嫌い、自ら納得できる好きなことに熱中していたからです。

指先作業が得意で、小学4年生で鉱石ラジオ組立てに熱中し、担任教師からは過度な熱中で成績が下がる旨の指摘を、通知表に書き込まれました。

終戦直後の私たち、少年時代は貧しい家も多く、大学進学は容易でありませんでした。文部科学省統計の大学進学全国平均値によれば、私が高校を卒業した1,964年（東京オリンピック開催）において、男子＝25.6％、女子＝5.1％、平均＝15.5％の時代です。

中学校で成績を競い、普通進学高校から大学へ進んだ同級生は、東大1名、東北大3名、横浜国大1名、東京都立大（現＝首都大学東京）1名と、皆ストレートで進学していきました。

私は学年で英語は首位、総合2位でしたが、高校卒業後就職すべく、技術を身に付けて中堅技術者を養成する工業高校へと進学します。

下駄職人から、戦後に農林省労務員となった父親の、キャリア上司だった方の奥様が開設した英語塾だけには行かされましたから、英語が学年で一番だったわけですが、考えることが大好きな独学の始まりともいえます。

十八歳で高校卒業後、通信機メーカーに就職しました。1,964年、東京オリンピックの年で、カラーテレビ放映が始まった年です。

入社した池上通信機は、放送局用機器専門メーカーですから、一般家電製品と異なり、知名度がありません。入社一年目の私が最初の設計担当者となったのは、九州ＲＫＢ毎日放送局（現＝ＲＫＢ毎日放送）のサテライトスタジオ音声調整卓でした。次は、ＮＨＫ新潟放送局の送信機です。当時はまだ真空管の時代で、真空管（熱式）からトランジスタ（電子式）へと切り替わる、技術転換の最中でした。

しかし大学進学を果たした中学同期生がうらやましく、負けず嫌いな私は入社一年後に退職し、県立秦野高校の理科実習助手をしながら独学で大卒資格の国家試験をめざします。

併せて、高校卒業と同時に始めたのが「**登山**」でした。

特に岩壁登攀は命を危険にさらすこととなり、すぐに**哲学**と**宗教**に目覚めていきます。ニーチェの主張する「**ニヒリズム**（虚無主義）」や、仏教がいう「**空**」に出会ってみると、「**大学**という**ブランド**」は、もはや意味を持たなくなりました。益々登山に熱中し、十年後にはヒマラヤの大岩壁登攀へと出かけます。

1,941年、和歌山市生れの**落合莞爾**氏は、東大法学部を卒業後に民間企業や政府機関への出向等を経て、1,978年に**落合莞爾事務所**を設立。経営・投資コンサルタント、証券・金融評論家として活躍されます。

実家の**井口家**は、紀伊国名草群大野荘（和歌山県海南市大野中）にある「**春日神社**」がおこなう「**大塔宮十番頭祭**（大野十番頭祭）」の祭主の一人（井口壱岐守末

裔）と記されます。2,014年6月8日の「**大野十番頭祭**」の祭主＝井口壱岐守莞爾として、**落合莞爾**氏は祭主を務められます。

この落合氏が、孝明天皇直系の「**京都皇統**」から数々の教示を受けたとされる「**落合秘史**」の数々を出版されています。

落合氏曰く、『**最高学府と呼ばれる学校も、所詮物事のオモテしか教えないと知ったのが学校不信の始まりで、学校とは真理を探究する処ではなく、オモテ側だけを知ったふうに装って、さっさと卒業していくべき施設だと感じました。**』と書かれます。（『金融ワン・ワールド』P-54）

このことを素直に解釈すれば、学歴ではなく実力、つまり知の探究とは教えられることでなく、自ら感じて思惟し、学びとる姿勢 ＝ **独学**こそ、**学究の徒たる生き様**であることを再認識するものでした。

学び、知る、考えて何かを創り出すことが大好きで、四十年来の生業（なりわい）としてきた電気設備設計業務（㈱システム・デザイン代表取締役）は、天職と思えました。

しかしその中ではいつも、「**真理**」を、「**総合**」を、突き止めたい「**雑学**」に興味を抱き続け、さまざまな書物を読み漁り続けています。

白内障で目が見えにくくなった六十八歳で生業を閉鎖し、有り余る時間を得ました。三年後に白内障手術を受けてみるとビックリ、老眼鏡は不要となり、細かい文字も読めるように復活し、今は悔い無き探求と思索を重ねる喜びの中にいます。

※ 「**建築設備士**」＝昭和61年新設国家資格・・・受験資格＝大卒経験8年以上、高卒経験12年以上、一次試験＝学科、二次試験＝計画と製図、三次試験＝面接、**結果**＝創設第一回、第一号・**試験合格**（受験番号2で、1が不合格）合格率＝**13.8**％のため、現在は大幅に緩和され、三次試験＝面接は無い。

幼少期から周囲に馴染まない気質がどこに由来するのか、これまで知る術（すべ）がありませんでした。

子供の頃、いつも**天**から、**何かに**見つめられているようで、失敗を怖れた臆病な優等生は、**完璧が丸いもの**であるイメージを抱いていました。やはり、**変った子供**だったのでしょう。

晩年になり、生まれた**四之宮**の地と、**前鳥神社**の由来につながる**天皇の系図**を探求していくと、**古代イスラエル**に行き当たります。さらに調べると、古代イスラエルより古くには、**シュメール文明**や**ウバイド文明**があり、特に**ウバイド人**は**BC3,000**年頃から、世界へ離散していった、とされます。さらに、古代イスラエル王国は十二の支族が集まっていましたが、その内の十支族で「**北王国**」としていました。しかし「**北王国**」は**BC722**年、アッシリアに滅ぼされ、指導者はアッシリア虜囚となります。**他の人々は**行方が分からず、「**失われた十支族**」として**世界へ離散**していった、とされます。

古代イスラエル人の特徴が私にもずいぶんと当てはまるために、私の**変人ルーツがそこにあるような気**がしてきます。古代史を知るにつけ、益々私の気質の由来が納得でき、**故郷を探し当てたような安堵感**を覚えました。

ＤＮＡ検査をすれば一目瞭然なのでしょうが、もし違ったら夢が破れそうで、知識解析の**ロマン**で留めています。**ロマン**のうちですから、私の理解と解析、そして再構築は、**学問的正確さから実証をめざすものではありません。ロマン**という感性を含め、学説や定説にとらわれない**自由な推考**から、「**雑学**」の位置づけを意識しています。その雑学も多岐にわたりますので、「**複雑学**」へと改めました。少しは論理的道筋をもたせて折りたたんでみましたが、やはり**複雑系推考**による仮説、「**思考実験＝物語**」でしかありません。

果たして、上手く・**物・語・れ・た**・だろうか？

言語は抽象概念ですから物質ではありません。

物質という認識もまた、脳内ニューラルネットワークがつくりあげたイマジネイションであることは、本論第七章で述べました。「物質によって示される実体」とは、はたして何を表わしているのでしょうか？

宇宙の中では分子（物質）が寄り集まり、自己組織化して形象を成して物体となり、それを人間の五感センサが捉えて、脳内ニューラルネットワークによって「物体」のイマジネイションが形成されます。

物質が形象を成している星雲や星団、銀河、太陽、星々、そして地球と人間、等々は、全宇宙エネルギーのたった5％未満な存在でしかないと量子物理学は説明します。

つまり、人類がこの宇宙を知りつくそうとする意思は、無限を相手にすることであります。その形象を言語や記号で表現することは、さらなる無謀なことでもあります。それでもなお、未知なるものを知りたいと求めるこの「欲求のエネルギー」は、はたして何に由来するのでしょうか？

そこに宇宙を創造したとする「神」や「天」を当てはめてしまえば簡単ですが、私はそのことに組しません。それらは無目的な「無」であり、自己組織現象たる「自然」であり、古人曰く「空」でもあり、平明な言葉にすれば「なるように・・・なっている」、といえます。

「自然に逆らい」、「人工物」を築きあげてきたのが「人類文明」です。

「人類文明」の人工化と異なり、ヒトの心の「抵抗の美学」、「同調の美学」を求める「欲求のエネルギー」は、「人類文化」となって多様な展開を果たしています。

その考察は別な著作『山と美の終焉』拙著、2,017年で試みました。

「相模國　第四之宮」の地に生まれ、考えることが大好きながら、周囲と馴染まない自身の性格への疑問は、古代文明発祥の地まで遡りました。

七十年余を経て、それら疑問のわけがここに習合し、私なりの答えを導くに至ります。

人間脳がおこなう認知・思考・から、新たな概念への道筋を創り上げて言語体系化する思考実験と創発作業、それが本書「複雑学日本文明物語＆哲学」です。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

親子に近いほど歳が離れ、しかも東京大学名誉教授と南極観測隊員であった中村先生と、独学者・登攀者（クライマー）・電気技術者の私とでは、極めて不釣り合いな関係にあります。

しかし山岳や登山という大自然の中では、それら人間社会規範は何ら意味がありません。中村先生は一向に気にもなさらず、2003年日本山岳文化学会設立以降現在に至るまでの17年間に亘り、一人の人間として対座していただきました。本書巻頭の「真・善・美・そして自由」は、中村先生お気に入りフレーズ。

特に昨今は毎月一回の中村先生宅訪問を重ね、奥様とともに昼食をご一緒しながらの懇談は、本書内容の説明と確認を繰り返し、実りある時間帯でした。

しかし中村先生は96歳を過ぎた今、急遽入院を余儀なくされました。一日も早く回復され、ふたたび懇談できることを切に願っている、今です。

人類は、世界は、、ホモ・サピエンスは、今、進化の過程で大きく変容しつつあります。アナログからデジタルへの移行を「便利」と活用するだけでなく、アナログとデジタルを複合する、「複素思考」が喫緊に重要となる時節です。

ここで本書がその一石を投じられたら・・・中村先生の「日本文化の原点～序説」が、ふたたび蘇って来るような気がします。

（2020. 02. 20　終稿）

参考資料

（作図・作表＝田中文夫）

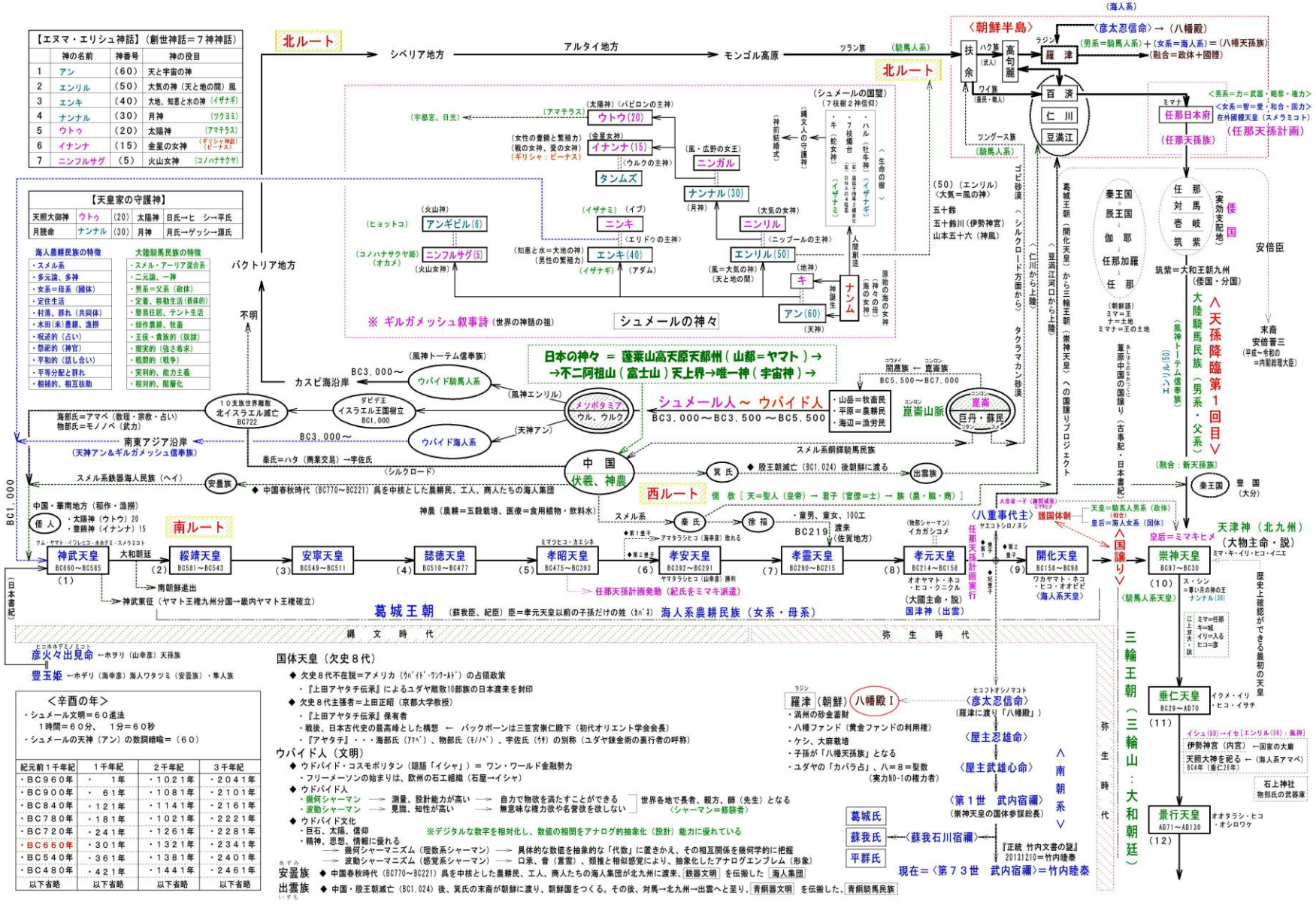
古代＝天皇系図 ― 1 （神武 ～ 景行）

古代＝天皇系図 ― 2 （景行 ～ 継体）

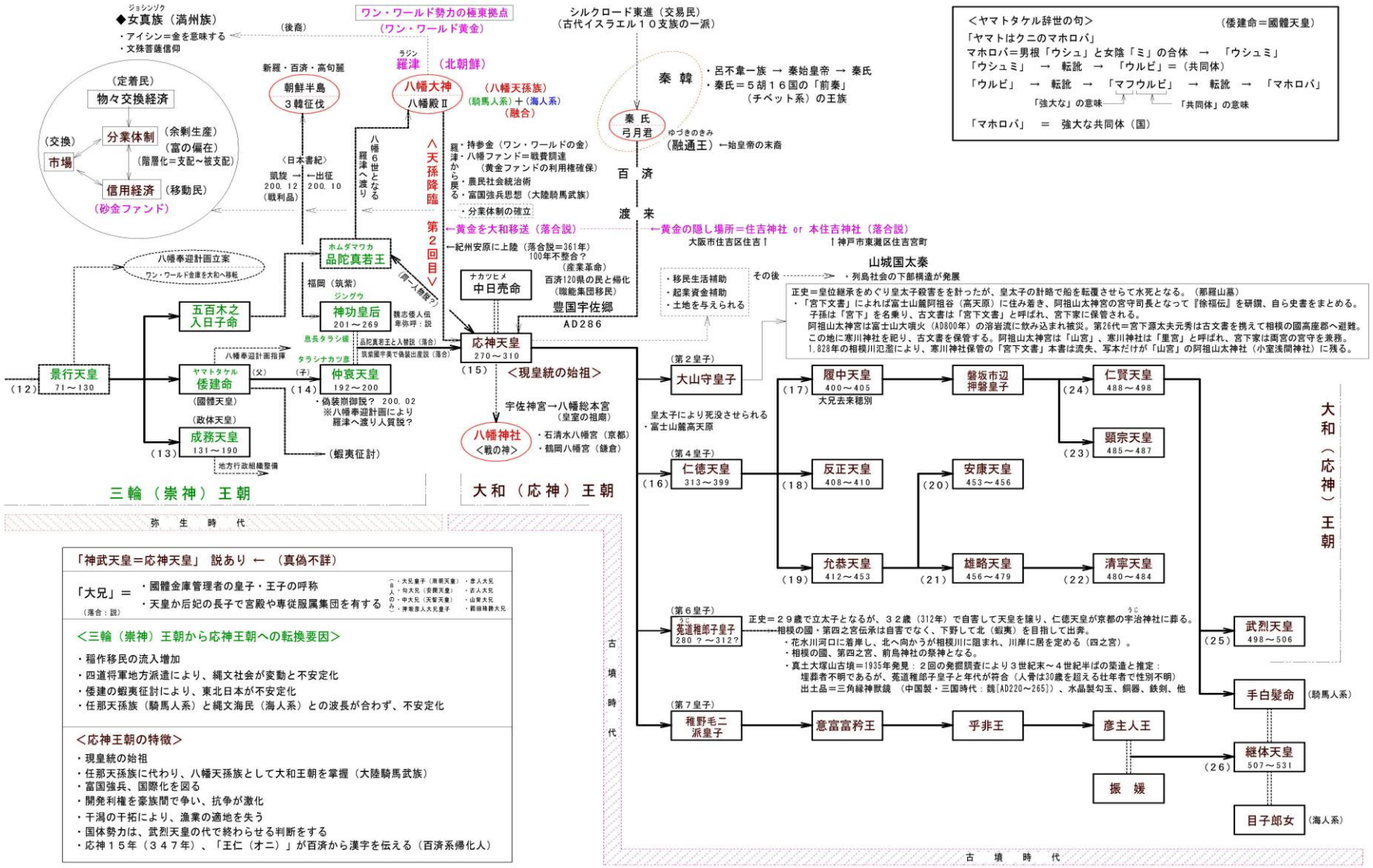
古代＝天皇系図 ― 3 （継体 ～ 天智）

世界史年表 1 ～ 7

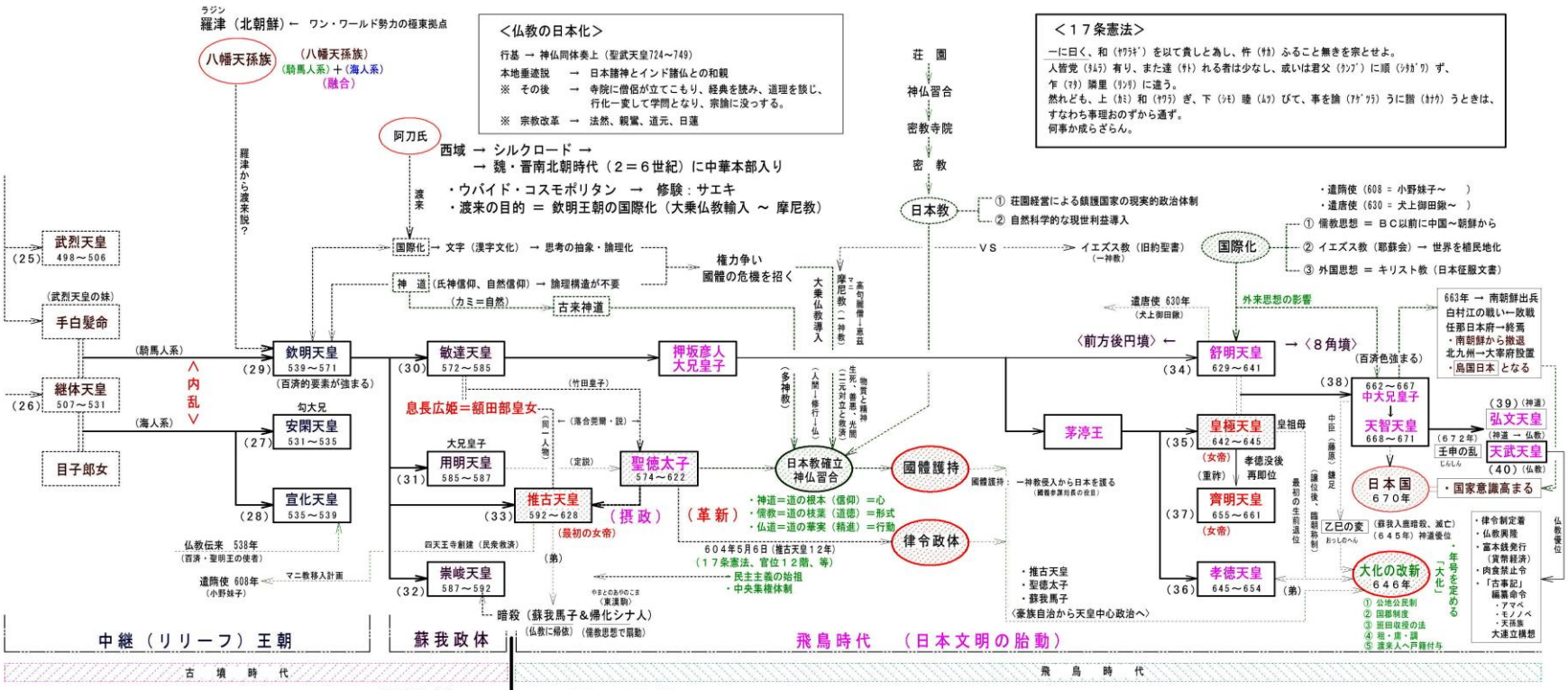
古代＝天皇系図－１（神武～景行）



古代＝天皇系図－2（景行～継体）



古代＝天皇系図－3（継体～天智）



（国体正史＝古事記） **前近代** ←→ **近・現代**（国体＝天皇、政体＝天皇／武士／民）（天皇制民主主義の始まり）

メモ

・「古事記」…… 天武天皇の命令 → 完成＝７１２年、編纂＝稗田阿礼→太臣安万呂（ｵｵﾉﾔｽﾏﾛ） ← 欠史８代の主流「多氏（ｵｵｵｼﾞ）」の末裔

・「日本書紀」…… 完成＝７２０年、編纂＝舎人親王 （藤原氏による天皇系統の確立 ← 藤原鎌足＝鹿島出身の海人族）

※ 古事記、日本書紀は、富士山信仰を消し去る ……（日本の神々 ＝ 蓬莱山高天原天都州（山都＝ヤマト）→ 不二阿祖山（富士山）天上界 → 唯一神
唯一神（宇宙神）→ 中国（伏羲、神農）→ 崑崙 → ウバイド・シュメール → 阿祖山（太神宮））

・丹後半島 …… 海部（アマベ）が丹後半島に上陸 → 近畿内陸部へと至りイセ（伊勢）を広める（オリエント多神教）

・丹後国独立 …… 独立＝７１３年 ← 丹後アヤタチの日本潜入作戦が一段落
・アベのカバネ買収と祖先統合 ・「海部直」になる ← 丹後海部直（アヤタチ）

・ユダヤ浸透 …… 海部 → 海部直（丹後アユタチ）
〈 神道勢力 〉 物部 → 河内国（モノノベ、アユタチ） → 神武天皇の宮廷ユダヤ人 ← 欠史８代に仕える（備兵統率、モノノベ神道、波動治療）
宇佐 → 婚姻ユダヤ（在住日本人） → 宇佐八幡

・蘇我氏 …… 第１世 竹内宿禰 → 蘇我石川宿禰 → 蘇我満智 → 蘇我韓子 → 蘇我高麗 → 蘇我稲目（大臣） → 堅塩媛＝欽明天皇
〈 仏教勢力 〉
蘇我氏が滅び、藤原氏が栄える
（中臣鎌足＝藤原鎌足←藤原氏の始祖）
蘇我入鹿（大臣） ← 蘇我蝦夷（大臣） ← 蘇我馬子（大臣）
中大兄皇子＆中臣鎌足らに討たれる
（大化の改新前＝乙巳の変）
自害する
崇峻天皇暗殺
（渡来人＝東漢駒が実行）
敏達～崇神天皇の大臣
推古天皇
（落合：説）
額田部皇女 ＝ 敏達天皇
（摂政）聖徳太子

八＝８ ： ユダヤの聖数（強さ、実力者、無限大）

宗教

信仰と崇拝	・神を信仰	一神教	ユダヤ教、 キリスト教、 イスラム教
			・神（主権者）が人間を創造 ＝ 神 → 人間 → 奴隷
		多神教	ヒンドゥー教、 古代（メソポタミア、エジプト、ギリシャ、他）
			・ヒンドゥー教（カースト制＝「輪廻」思想によりカーストの再生産）
	・自然崇拝	神 道	日本（八百万の神＝主権者） 「カミ（天神）」は「神」の上位概念
			・自然の全てが「神」になれる → 人間も自然に含まれる
	・人物崇拝	儒 教	天＝聖人＝皇帝／君子＝官僚（士）／族（農工商）＝家族、親族、一族
			・「天」に代わって「皇帝（主権者）」が４民（士農工商）を統治
		神 道	日本 → 天皇 ＝ 天神（カミ）にして皇帝（神）たる君主（主権者）
	・オカルト	道 教	人間、鬼、閻羅王、
			・冥界 → 位牌、仏壇

修行

修行で覚醒	・心身修行	仏 教	人間が精進・修行によって悟りに達し（涅槃） → 仏となる
			・伝導布教（行化）から学問化（桓武天皇時代 781～806） ・修験道 → 自然修行
	・自然修行	登 山	人間が自然体験を通して自然認識・自己認識を高め、受容力を高める

世界史年表－1

<ワンワールド視点からの世界史検証>　　2019.05.15　制作＝田中 文夫　（随時改訂）

時代の特徴	社会体制	アメリカ	西欧・ロシア	エジプト・（北アフリカ）	中・南・西アジア	中国・（朝鮮）	日本
	原始社会	モンゴロイド（黄色人種） 30,00～25,000　ユーラシア大陸～ベーリング海～北米アメリカ大陸～南米アメリカ大陸の土着民族となる インディアン（英語圏） インディアス（ラテン語圏）	コーカソイド（白人） 40,00～30,000　中東から～地中海沿岸～西欧へ 中東から～ウルタイ草原～北西欧へ ・大陸経路 ・地中海経由 3,500　イギリスで石炭採掘 3,000　カラル文明 2,500　エーゲ文明勃興 1,800　チャビン文明 1,600　クレタ文明勃興 1,400　ミケーネ文明勃興 1,300　オルメカ文明（巨石文化） 1,250　トロイア戦争（ギリシャ神話上） 1,200　ドーリア人南下 1,000　ギリシャ文明勃興 ギリシャ各地にポリス形成 900　ポリス形成 814　カルタゴ建国 800　ギリシャ、ポリス社会成立 776　第1回：古代オリンピック（ギリシャ） ・市民＝余暇＝運動、労働 ➡ 奴隷、農奴 ・運動 ＝ 不平等な階級社会の中から発祥 753　古代ローマ建国 ・地中海経路、大陸経路	ホモ・サピエンス 60,000　アフリカからエジプト～中東へ 5,000　農耕民定着 3,500　二つの統一国家 上エジプト、下エジプト 3,150　上下統一国家（ナルメル王） ・象形文字、太陽暦 2,613　第4王朝（スネフェル王） ・ピラミッド （方墳：■） ・スフィンクス 2,181　第6王朝崩壊 ・古王時代の終焉 1,750　第2中間期に入る ・ユダヤ人は奴隷となる 1,540 頃　第18王朝＝エジプト新王朝時代 1,346 頃　アマルナ宗教改革（アメンホテプ4世） アメン多神教からアテン一神教へ改革 1,331　第12代ファラオ＝ツタンカーメン夭逝 1,330 頃　第13代ファラオ＝アイは一神教追放 1,230　モーゼ、出エジプト（聖書物語） 1,080　神権国家樹立 アメン大司祭国家 太陽神（アメン・ラー）の多神教 663　アッシリア侵攻、テーベ陥落 655　アッシリアから独立 （プサメティユス 1世） 605　新バビロニア軍に敗れる 525　ペルシャによるエジプト支配 492　ペルシャ戦争 490　マラトンの戦い ・アテナイ、プラタイア軍勝利	モンゴロイド（黄色人種） 50000～40,000　中東から～ウラル・アルタイ～シベリア 中東から～砂漠オアシス～モンゴル 中東から～インド～中国 6,750　北イラクで最初の村落 ・ジャルモ文明 5,500　ウバイド文明 勃興 3,800　ウバイド文明 滅亡 ・世界へと離散 3,100　メソポタミア文明 勃興 ウバイド文明 ➡ シュメール文明 ・楔形文字の記録、太陽太陽暦、60進法 ・平均身長 ≒ 60インチ（152cm） 60歳まで生きたのは1/3以下 ・アーリア人侵入、モヘンジョダロ 2,600　・シュメール ＝ギルガメッシュ王 ギルガメッシュ叙事詩＝人類最初の文学 ～ 不死・長寿願望 2,350　アッカド王国勃興 2,112　ウル第三王朝樹立（シュメール統一王朝） 2,004　ウル第三王朝滅亡（エラム侵入） 1,800　バビロニア第1王朝樹立（セム系アモリ人） 1,792　ハムラビ、バビロニア統一 ・ハムラビ法典制定（楔形文字） 1,630　ヒッタイト王国樹立 1,600　アブラハムによるイスラエルの記録 ・孫のヤコブ時代にエジプト移住（ユダヤ人） 1,530　バビロニア第1王朝滅亡 1,500　アーリア人、パンジャブ地方に侵入 ・牧畜、農業の生活 1,330 頃　アテン一神教徒（出エジプト） 1,230　・モーゼらはカナンに向かう（聖書物語） （5,000～6,000人） 1,180　「海の民」の侵攻➡ウガリット滅亡 1,180　ヒッタイト王国滅亡 1,000　イスラエル王国樹立（ダビデ王） ・新アッシリア帝国時代 928　イスラエル王国分裂 ・北イスラエル（10支族）～サマリヤ ・南イスラエル（ユダ王国）～エルサレム 922　ゾロアスター教（ザラスシュトラ） 善悪二元論（世界最古の一神教） 745　アッシリア樹立 722　北イスラエル滅亡 ・アッシリア侵攻、サマリア陥落 ・10支族はアッシリアの虜囚となる。その後 記録なく、「失われた10支族」という ・世界中へ離散する 629　新バビロニア樹立 609　アッシリア帝国分裂、滅亡 605　新バビロニア、ネブカドネザル2世即位 ・イシュタル門 ➡ 16菊花紋（王家紋章） 600　インドに多数の部族国家が樹立 586　南イスラエル、ユダ王国 滅亡 ・バビロン捕囚 ➡「ユダヤ教」 確立 選ばれし民 ＝ 選民思想 550　ペルシャ帝国樹立 539　キュロス2世バビロン入城 500　ユダヤ教「聖書」確立 ＝ キリスト教「旧訳聖書」 ←　ペルシャ帝国拡大（アケメネス朝）	モンゴロイド（黄色人種） 50000～40,000　シベリア～モンゴル～朝鮮 砂漠オアシス～中国～朝鮮 インド～中国～朝鮮 神代　伏羲、神農 （中国神話） 3,950　黄河文明 ・大陸経由、シルクロード経由 ・海洋経由 2,500　黄河文明 ・亀甲文字 ・青銅器 2,100　夏王朝樹立 1,600　殷王朝樹立 ・黄河中流、下流 ・青銅器 ・玉製品 1,120　周王朝樹立 ・武王が殷を滅ぼし、華北を統一 ・太公望＝周の軍師、後に斉の始祖 1,024　殷王朝滅亡（紂王） 973　箕子（キシ）を朝鮮へ派遣➡仁川 箕子（キシ） 800 頃　青銅武器が登場 箕子（キシ）来商➡渡来 770　春秋時代幕開け（～BC403） ・四書＝論語、大学、中庸、孟子 ・五経＝易経、書経、詩経、 礼記、春秋 ・「呉」を中核とした人々が渡来 大陸経由、シルクロード経由 海洋経由 603　老子 （生没不詳） ・「道教」 の始祖 552　孔子 （BC552～BC479） ・「儒教」 の始祖 550　諸子百家の思想家が出る ・民の分類 「管子」等 四民＝官・農・職・商 官＝支配階級	モンゴロイド（黄色人種） 40,000　中国～朝鮮～日本本土 中国～琉球列島～日本本土 20,000　シベリア～カラフト～北海道 13,000　縄文人 毛 族（エミシ） ・氷期が終わり、日本海が深くなり、 日本列島に取り残された原住民 ・自然神信仰 神代　富士山麓高天原王朝 （神話） 蓬莱山高天原天都州 天祖➡天神7代 （阿祖山太神宮＝世界最古の神宮） ➡ 地神5代（邇邇芸命） ➡不二合須朝（2,700年） （ににぎのみこと） ふきあえずちょう ・前方後方墳 （方墳：■－■） 高尾山古墳（階段ピラミッド） 沼津市 1,400 頃　・九州へ遷都 ～ 高千穂（阿蘇山）降臨（神話） ウバイド～シュメール 海人族 渡来 ・天孫族 ～ 天津神 ・高千穂（九州） ～ 鹿島（茨城） ・稲作、定住 ・丹後半島（海部アマベ） 対馬➡北九州➡出雲（出雲大社） 出雲族 （青銅鈴馬部族） ・青銅文明伝搬 ・スサノオ神話 ➡北九州（志賀島）➡安曇野（穂高神社） 「志賀」の地名を残し全国分布 ・安曇族 （農民・工人・商人） ・鉄文明伝搬 ➡九州➡能登➡青森 660　神武天皇 (1)　国の始祖 ・カム・ヤマト・イワレヒコ・カホドミ・スメラミコト ・メノホ゛タミアウル➡ 天神アン信奉族 [60] ・鹿島神宮創建（元年） ・16菊花紋 ➡ 天皇家紋章 581　綏靖天皇 (2) ・欠史8代の最初 [60] 549　安寧天皇 (3) 510　懿徳天皇 (4)

保立道久（案）参照

政体 ↓　国家 ↓　日本書紀

一般的区分 ↓　縄文時代

世界史年表 – 2

時代の特徴	社会体制	アメリカ		西欧・ロシア		エジプト・（北アフリカ）		中・南・西アジア		中国・（朝鮮）		日本	
			BC		BC		BC		BC		BC		
			AD		AD		AD		AD		AD		
	有史社会 ↓			480 サラミスの海戦（ペルシア戦争） 450 ギリシャ文化全盛期 ・ソクラテス、プラトン、アリストテレス、ヒポクラテス ・3機能分担思想＝アリストテレス ・都市民 ➡ 余暇＝運動＝健康増進のため ・都市民 ➡ ゲーム ➡ 楽しみ、勝利の快感 ・労働 ＝ 奴隷、テーテス（無産階級） ・男 ➡ 運動 ＝ 戦争のために身体を鍛える ・ヒポクラテス ➡「病院について」＝人間工学の先駆 440 ヘロドトス＝「歴史」全9巻著作 431 ペロポネス戦争 429 ギリシャ➡アテナイで天然痘が流行 347 プラトン死去 ➡「国家」 338 カイロネイアの戦い 334 マケドニア王＝アレクサンドロス ・ペルシャ遠征➡インドまで ・ヘレニズム文化を広める 古代オリエントとギリシャの融合 アルキメデス、エピクロス、キケロ 272 ローマの半島統一 264 第1次ポエニ戦争（～241年） ※地中海の覇権争い 219 第2次ポエニ戦争（～201年） ・カルタゴ将軍＝ハンニバル 168 マケドニア滅亡 ・ギリシャがローマの属国となる 149 第3次ポエニ戦争（146年） 146 カルタゴ滅亡 ➡ ローマに併合 後 古代ローマの男 ➡ 運動 ＝ 肉体＆知性を鍛える 労働＝奴隷、農奴、無産階級 73 スパルタクスの乱 60 第1回三頭政治（シーザー） 48 カエサル＝「ガリア戦記」を著す 44 カエサル（ジュリアス・シーザー）暗殺 27 帝政ローマ樹立	480 サラミスの海戦（ペルシア戦争） 450 ギリシャ文化全盛期 ・ソクラテス、プラトン、アリストテレス、ヒポクラテス ・3機能分担思想＝アリストテレス ・都市民 ➡ 余暇＝運動＝健康増進のため ・都市民 ➡ ゲーム ➡ 楽しみ、勝利の快感 ・労働 ＝ 奴隷、テーテス（無産階級） ・男 ➡ 運動 ＝ 戦争のために身体を鍛える ・ヒポクラテス ➡「病院について」＝人間工学の先駆 440 ヘロドトス＝「歴史」全9巻著作 431 ペロポネス戦争 429 ギリシャ➡アテナイで天然痘が流行 347 プラトン死去 ➡「国家」 338 カイロネイアの戦い 334 マケドニア王＝アレクサンドロス ・ペルシャ遠征➡インドまで ・ヘレニズム文化を広める 古代オリエントとギリシャの融合 アルキメデス、エピクロス、キケロ 272 ローマの半島統一 264 第1次ポエニ戦争（～241年） ※地中海の覇権争い 219 第2次ポエニ戦争（～201年） ・カルタゴ将軍＝ハンニバル 168 マケドニア滅亡 ・ギリシャがローマの属国となる 149 第3次ポエニ戦争（146年） 146 カルタゴ滅亡 ➡ ローマに併合 後 古代ローマの男 ➡ 運動 ＝ 肉体＆知性を鍛える 労働＝奴隷、農奴、無産階級 73 スパルタクスの乱 60 第1回三頭政治（シーザー） 48 カエサル＝「ガリア戦記」を著す 44 カエサル（ジュリアス・シーザー）暗殺 27 帝政ローマ樹立	404 エジプト＝ペルシャから独立 341 ペルシャによるエジプト再支配 332 マケドニアが征服 アレクサンドロス帝国の一地方 305 プトレマイオス王朝、成立 （古代エジプト最後の王朝）	ペルシャ独立 ペルシャ再支配 ペルシャ征服	← ユダヤ教ラビとギリシャ哲学の出会い ・その後ラビは、ギリシャ哲学を拒絶 ・バビロニア・タルムード ラビは、「上・下・前・後」の領域指定 上＝天上の神、下＝死後の世界 前＝自然学領域、後＝終末論 430 「仏教」の体系化 ← ペルシャ帝国拡大（アケメネス朝） 331 アレクサンドロス大王バビロン入城 330 ペルシャ帝国滅亡 4 イエス誕生	4 イエス誕生	479 孔子、没する（享年74歳） 450 「儒教」の体系化 403 春秋時代の終焉（～BC770） 403 戦国時代幕開け 斉、楚、魏、燕 334 燕が楚を滅ぼす 221 秦（始皇帝）、中国統一 219 始皇帝➡ 不老長寿探索の命（徐福） 214 万里の長城 206 秦、滅亡 ➡ 楚・漢戦争始まる 202 前漢、漢王朝樹立 195 匈奴 朝鮮 141 武帝 ➡ 帝国主義へ展開 108 漢 ➡ 朝鮮半島に4郡を設置 97 司馬遷「史記」を著す 75 新羅～諸国 57 高句麗～諸国 37 百済～諸国	475 孝昭天皇（5） 392 孝安天皇（6） ＜弥生時代の始まり＞ 290 孝霊天皇（7） 219 徐福、佐賀地方に上陸（金立神社） ・徐福 ➡ 老若男女5,000人と百工（技術者） 男鹿、富士吉田、藤沢（神象川） 214 孝元天皇（8） 158 開化天皇（9） ・欠史8代・海人系の最後（90） ・国譲り（古事記・日本書紀） ・海洋系天孫(60)➡騎馬系天神(30) 崇神天皇（10） 97 ・騎馬人民系（天皇）の始まり 山 ・海人女系（皇后）＝ 対婚制 海 29 垂仁天皇（11） 4 伊勢神宮（内宮）創建 71 景行天皇（12） ・西征東伐（西＝南蛮、東＝アイヌ） 131 成務天皇（13） ← 豊旗 倭建命（ヤマトタケル） ← 国体 192 仲哀天皇（14） 200 神功皇后出征 ➡ 三韓征伐 ・八幡系天孫＝品陀真皆王（ホムダワケ） 品陀真皆王（蘇神技来歌～我祝出生歌） 270 応神天皇（15）➡倭皇統の始祖 ・外国技術民の移入 産業革命 倭化朝鮮人➡ 倭倭文明伝播 ・八幡(ホムダワケ)信仰 ・八幡神社 ・第4皇子 ➡ 仁徳天皇 ・第8皇子 ➡ 菟道稚郎子 菟道稚郎子＝ウジノワキイラツコ（倭倭文明） 相模国賀茂之宮前島神社祭神 倭化朝鮮人➡ 来麓山（大磯） 310 仁徳天皇（16） 350 大和新話 ・馬具、武器、武具が出土 ・七支刀 ・真土大塚山古墳（平塚市）～4世紀後半 391 倭国、朝鮮へ出兵 400 履中天皇（17） ・「内蔵」＝神物、宝物を分離収納	475 孝昭天皇（5） 392 孝安天皇（6） ＜弥生時代の始まり＞ 290 孝霊天皇（7） 219 徐福、佐賀地方に上陸（金立神社） ・徐福 ➡ 老若男女5,000人と百工（技術者） 男鹿、富士吉田、藤沢（神象川） 214 孝元天皇（8） 158 開化天皇（9） ・欠史8代・海人系の最後（90） ・国譲り（古事記・日本書記） ・海洋系天孫(60)➡騎馬系天神(30) 崇神天皇（10） 97 ・騎馬人民系（天皇）の始まり 山 ・海人女系（皇后）＝ 対婚制 海 29 垂仁天皇（11） 4 伊勢神宮（内宮）創建 71 景行天皇（12） ・西征東伐（西＝南蛮、東＝アイヌ） 131 成務天皇（13） ← 豊旗 倭建命（ヤマトタケル） ← 国体 192 仲哀天皇（14） 200 神功皇后出征 ➡ 三韓征伐 ・八幡系天孫＝品陀真皆王（ホムダワケ） 品陀真皆王（蘇神技来歌～我祝出生歌） 270 応神天皇（15）➡倭皇統の始祖 ・外国技術民の移入 産業革命 倭化朝鮮人➡ 倭倭文明伝播 ・八幡(ホムダワケ)信仰 ・八幡神社 ・第4皇子 ➡ 仁徳天皇 ・第8皇子 ➡ 菟道稚郎子 菟道稚郎子＝ウジノワキイラツコ（倭倭文明） 相模国賀茂之宮前島神社祭神 倭化朝鮮人➡ 来麓山（大磯） 310 仁徳天皇（16） 350 大和新話 ・馬具、武器、武具が出土 ・七支刀 ・真土大塚山古墳（平塚市）～4世紀後半 391 倭国、朝鮮へ出兵 400 履中天皇（17） ・「内蔵」＝神物、宝物を分離収納
		マヤ文明 テオティワカン文明（メキシコ） 太陽のピラミッド 月のピラミッド 神権的階層社会											
				66～73 ローマ帝国 VS ユダヤ（ユダヤ戦争） ・ユダヤ国家・神政崩壊～世界へ離散 79 ベスビオ火山噴火 96 五賢帝時代（～180年） ネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、 アントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウス 117 ローマ帝国、最盛期 200頃 ミシュナ ➡ ラビ・ユダヤ教、成立模倣 ユダヤの口伝律法集（全9巻63篇）社会生活規範 ❶神と人との関係 ❷民族組織形成の規則 ❸共有地の規則 313 ローマ帝国＝キリスト教公認 ・コンスタンチヌス帝（306～337）ミラノ勅令発布 375 ゲルマン民族大移動 395 ローマ帝国、東西分裂 ・東ローマ帝国、西ローマ帝国	66～73 ローマ帝国 VS ユダヤ（ユダヤ戦争） ・ユダヤ国家・神政崩壊～世界へ離散 79 ベスビオ火山噴火 96 五賢帝時代（～180年） ネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、 アントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウス 117 ローマ帝国、最盛期 200頃 ミシュナ ➡ ラビ・ユダヤ教、成立模倣 ユダヤの口伝律法集（全9巻63篇）社会生活規範 ❶神と人との関係 ❷民族組織形成の規則 ❸共有地の規則 313 ローマ帝国＝キリスト教公認 ・コンスタンチヌス帝（306～337）ミラノ勅令発布 375 ゲルマン民族大移動 395 ローマ帝国、東西分裂 ・東ローマ帝国、西ローマ帝国	国家と宗教が結びつく		30 イエス・キリスト処刑（ゴルゴダの丘） キリスト教の歴史（12使徒） 66～73 ユダヤ戦争 ・ローマ帝国 VS ユダヤ属州ユダヤ人 ・エルサレム陥落（70年）～祖国を失う ユダヤ人は世界へ離散（国を持たない） 135 ユダヤ人追放 226 ペルシャ帝国樹立（～651年） ・サッサン朝～ゾロアスター教～強化		2 仏教伝来 8 新、建国 22 高句麗➡扶余を滅ぼす 25 後漢 ➡ 漢帝国復活（光武帝） 32 姫姓 57 倭奴国➡ 倭の奴国王に金印 100 北朝鮮 ➡ 高句麗物興 184 黄巾の乱（農民反乱） ・三国時代の引き金 220 後漢滅亡 ➡ 魏王朝建国 222 三国時代（魏、呉、蜀） 265 晋、建国（魏を乗っ取る） 280 晋、中国統一（～316年） 285 三国志、倭人伝に「邪馬台国」 286 弓月君（秦氏）渡来～機織 百済百二十県（多様な職種民） 304 五胡十六国時代 ・北方5族が中国に侵入 ・次々と国(16国)をつくる 316 匈奴(ホュウ)の➡晋を滅ぼす 350 朝鮮に3国樹立 ・高句麗、百済、新羅 370 百済王が倭国贈り物 朝鮮	倭国平定軍 山城国大乱 贈り物 出兵	応神王朝

世界史年表－3

時代の特徴	社会体制	アメリカ	西欧・ロシア	エジプト・（北アフリカ）	中・南・西アジア	中国・（朝鮮）	日本
国家と宗教が結びつく（宗教が人間のアイデンティティを決めていく）			415 西ゴート王国（～711年） ・フランス南部からイベリア半島		400頃 パレスチナ・タルムード編纂～ユダヤ教 ・啓示法	420 宋（南朝）、魏国	408 反正天皇（18）
			432 ヴェネツィアの始まり ・カルタゴの来寇			439 北魏（北朝）、魏国 ※南北朝時代	412 允恭天皇（19） 453 安康天皇（20）
			476 西ローマ帝国、滅亡 ・オドアケル王国建国（ゲルマン人）			479 南朝、宋が滅び➡斉、魏国	456 雄略天皇（21） ・渡来人が18,000人を超える ・「大蔵」＝財政、皇室、国家の財を分離収納 ・管財人＝鞍作氏（担当＝秦の渡来人）
			486 フランク王国、成立 ・ドイツ、フランス、イタリア、オランダ ベルギー、ルクセンブルグ母体				477 伊勢神宮（外宮）創建 480 清寧天皇（22） 485 顕宗天皇（23） 488 仁賢天皇（24） 498 武烈天皇（25） 507 継体天皇（26）
			497 東ゴート王国（～553年）			502 斉が滅び ➡ 梁、魏国	531 安閑天皇（27）
			500頃 フランク王国、サルカ法 ・女性王位継承否定の根拠となる		500頃 バビロニア・タルムード編纂～ユダヤ教	520 新羅＝律令制定	535 宣化天皇（28）
						534 北魏 ➡ 東西分裂	538 仏教伝来（百済・聖明王の使者）
			542～543 ペスト流行＝最初の記録➡東ローマ帝国 アジア、北アフリカ、中東、ヨーロッパに拡がる ・ユダヤ人居住地域と重なる➡ユダヤ人追放			557 梁を滅ぼし ➡ 陳、魏国	539 欽明天皇（29） ・八柱系天孫（大神御馬系） ・国際化（漢字文化➡出象思考）ー神教（マニ教）侵入 ・氏神信仰・古社奉祭（神道） ・神道VS国際化、権力争い➡要職の危機を招く
					570 マホメッド生誕		572 敏達天皇（30） 585 用明天皇（31） ・皇子＝聖徳太子
						581 文帝 ➡ 隋、魏国 589 隋が陳を滅ぼし、中国統一	587 崇峻天皇（32）
							592 ・崇峻天皇暗殺➡蘇我馬子、排化人 蘇我氏は神道に背き仏教に帰依、 排化人は偶像思想で離脱、 ・聖徳太子の革新へと進なる
							592 推古天皇（33）女帝 ←国体 ・聖徳太子ー氏姓＝敬体（ー神教から国体護持） 604 17条憲法（律令国家）～民主主義の始祖 ー部、以和為貴、（和を以て貴しと為し、）
							608 遣隋使（小野妹子）～留学制度の始まり
					610 ムハンマド、神の啓示を受ける イスラム教元年＝ムハンマド ・マディーナ憲章＝ムハンマドを統治者 622 とした、国家としての社会契約 及びムスリムと異教徒との合意事項 10年ほどでユダヤ教徒が契約を破る その後 ※ズィンミー制＝ムスリム統治下の異教徒 税金を払えば生命・財産・名誉は守られる制度（異教徒との共存制度）	618 李淵が隋を滅ぼし、唐 を建国	629 舒明天皇（34） 630 遣唐使（犬上御田鍬） 642 皇極天皇（35）女帝 ・生前退位
						632 新羅、善徳王（女帝）即位 645 高句麗・百済・新羅＝戦国時代	645 大化の改新（大化＝最初の元号） ・豪族から天皇中心の政治へ移行 ①公地公民制 ②国都制度 ③班田収授の法 ④租・庸・調
			697 ヴェネツィア共和国 ・シュメル → カルタゴの来寇				645 孝徳天皇（36） 655 斉明天皇（37）女帝
						647 新羅、真徳王（女帝）即位 663 百済滅亡（唐・新羅VS百済・倭） 668 高句麗滅亡 ← 唐が侵攻	663 白村江の戦い ➡ 敗戦～大宰府設置 ・朝鮮との関係が断たれる～島国＝日本 668 天智天皇（38）← 中大兄皇子が即位
							670 「日本国」を名乗る 671 弘文天皇（39） 672 壬申の乱
						676 新羅 ➡ 朝鮮半島統一	673 天武天皇（40）～海人系天皇 ・古事記編纂を命じる 「日本」が消え、「倭国」に戻る
						690 武周革命 ➡ 唐から周に改名 ・武則天（女帝）即位	690 持統天皇（41）女帝 ・伊勢神宮、行幸
						698 渤海国建国（チョン）	697 文武天皇（42）
			711 イスラム 欧州進出				701 倭国と日本国との戦い ➡ 日本国勝利 ・大宝律令 707 元明天皇（43）女帝 708 日本初の通貨 ➡ 和同開珎
							710 平城京へ遷都（奈良） ・藤原氏、橘氏、道鏡が台頭 ・貴族、仏教の天平文化が栄える ・租税（租・庸・調） ・身分制度（良民、賤民、奴婢） ・古事記、日本書紀、万葉集、風土記
			756 スペイン＝ウマイヤ朝 ～ 1,031年 ・ユダヤの学問が栄える アッバース朝＝イスラム帝国 イベリア半島～ギリシャ～	750 アッバース朝＝イスラム帝国 （～1,517）カイロ・アッバース朝滅亡 ～エジプト～	750 アッバース朝＝イスラム帝国 ・エジプト、バビロニア基盤 ～アラビア～ペルシャ～インド～中国	755 安史の乱（～763年） ・長安、一時陥落、楊貴妃殺害	712 ・古事記＝完成（太安万侯＜稗田不比等） 715 元正天皇（44）女帝 720 ・日本書紀＝完成（舎人親王） 724 聖武天皇（45） 749 孝謙天皇（46）女帝 755 大山寺（初代＝良弁、3代＝空海） 759 淳仁天皇（47）

出典

古墳時代 ↑（前近代）

中期王朝

蘇我政体

（近・現代）↓

飛鳥時代

西国国家（国体王＝天皇）

大和政体

奈良時代

世界史年表－4

時代の特徴	社会体制	アメリカ	西欧・ロシア	エジプト・（北アフリカ）	中・南・西アジア	中国・（朝鮮）	日本
世界史的に多様な学問が興隆→			768 フランク王国 ➡ カール大帝即位 ・欧州が封建制度に向かう			772 詩人・白居易、出生（～846年） ・筆式部、清少納言らに影響	764 称徳天皇（48）女帝 770 光仁天皇（49）～『続日本紀』編纂の命 781 桓武天皇（50） 794 平安京へ遷都（京都） 797 ・『続日本紀』完成（延暦17年）：菅原真道ら 800 ・富士山大噴火（延暦19年）富士山整形大津一遠望
			829 イングランド王国、成立				806 平城天皇（51） 809 嵯峨天皇（52）
			843 フランク王国、三分裂 ・ベルダン条約 ・イタリア、フランス、ドイツの基礎				823 淳和天皇（53） 833 仁明天皇（54） 850 文徳天皇（55） 858 清和天皇（56） 876 陽成天皇（57） 884 光孝天皇（58） 887 宇多天皇（59） 894 遣唐使廃止 897 醍醐天皇（60）
			862 ノヴゴロド王国、成立 ・ルーリック ～ ロシアの起源				
			870 フランク王国、再分裂 ・メルセン条約 ・イタリア、フランス、ドイツの基				
			880 キエフ公国、成立				
						907 唐、滅亡 ➡ 五代十国 ・五代（中原）＝後梁、後唐、後晋、後漢、後周 ・十国＝中原外諸国	920 朱雀天皇（61）
			962 神聖ローマ帝国			918 高麗、諸国	946 村上天皇（62）
						926 渤海、滅亡ー契丹に滅ぼされる	967 冷泉天皇（63）
						935 新羅、滅亡ー高麗に滅ぼされる	969 圓融天皇（64）
						945 ・『旧唐書』成立ー後晋版・日本版	984 花山天皇（65）
						960 宋、諸国（～1,279年）	986 一条天皇（66）
			1,000 ハンガリー王国				1,011 三条天皇（67）
			1,013 グラナダ王国（ズィーリー朝）～1,492滅亡				1,016 後一条天皇（68）
					セルジューク（トルコ）、諸国（～1,157年）		1,036 後朱雀天皇（69）
					1,038 ・イラン、イラク、トルクメニスタン を中心とした、イスラム王朝		1,045 後冷泉天皇（70）
			1,077 カノッサの屈辱 ・ドイツ皇帝がローマ法王に屈服				1,068 後三条天皇（71）
			1,096 第1回十字軍 ・聖地エルサレムの奪還 ～1,272年まで9回派遣				1,072 白河天皇（72） 1,086 堀河天皇（73）
							1,107 鳥羽天皇（74）
			1,126 イブン・ルシュド＝イスラーム哲学 ～ 1,198			1,115 金、諸国 ・蒙古、女真（族）国による	1,123 崇徳天皇（75）
				ムワッヒド朝（～1,269年）		1,127 南宋、諸国	1,141 近衛天皇（76）
				1,130 ・イスラム王朝（ベルベル人）		・金が北宋を滅ぼし、南宋独立	1,155 後白河天皇（77）
				・モロッコ、チュニジア、北アフリカ、アンダルス	移動 1,132 西夏（1,218年） ・トルキスタン、金に亡ぼされた皇族諸国		保元の乱
			1,147 第2回十字軍	・首都＝マラケシュ	1,148 インド、ゴール朝	1,130 朱子＝儒学者（朱子学）～ 1,200	1,156 ・後白河天皇方と崇徳上皇方の争い ・武士の台頭（源義朝、平清盛）
					1,150 カンボジア：アンコール・ワット建設		1,158 二条天皇（78）
							平治の乱 ・信西派と藤原信頼派の対立 ・平清盛が台頭～平氏の基礎を固める
							1,159
				アイユーブ朝（～1,250年）			1,165 六条天皇（79）
				1,169 ・イスラム王朝（クルド系） ・エジプト、シリア、イエメン			1,167 平清盛、太政大臣となる
					『ミシュネー・トーラ』 ユダヤの法典を体系化		1,168 高倉天皇（80）
					1,172 マイモニデス（1,135/38～1,204）による ・人間の完全性に対応＝ギリシャの数学、論理学、天文学、新旧と宇宙を取り入れる		1,180 安徳天皇（81）
					1,187 エルサレム王国、滅亡		1,183 後鳥羽天皇（82）
			1,189 第3回十字軍				1,185 壇ノ浦の戦い（源氏の勝利）
							1,192 鎌倉幕府（源頼朝）
							1,198 土御門天皇（83）
			1,204 第4回十字軍（ヴェネツィア艦隊）		1,204 ラテン帝国（十字軍国家）、勃興		1,200 蒙元＝神聖 ～ 1,253
			1,212 少年十字軍				1,210 順徳天皇（84）
		クスコ王国樹立	1,215 イギリス、大憲章（マグナ・カルタ）		モンゴル帝国、諸国（チンギス・ハン）		
		1,200 ・小規模な都市国家	1,216 第5回十字軍		1,206 ・蒙古統一		承久の乱（後鳥羽上皇）
		・インカ帝国に引き継がれる	1,225 トマス・アクィナス＝カトリック神学者～1,274		・覇権拡大（東、西、南） 侵略	金、滅亡	1,221 仲恭天皇（85）
			1,228 第6回十字軍			1,234 ・南宋とモンゴルが挟撃	後堀河天皇（86）
			1,232 グラナダ王国（ナスル朝）＝ムハンマド1世				
			1,248 第7回十字軍		デリー・スルタン朝（～1,526年）		
			1,256 大空位時代（～1,273年）		1,206 ・イスラム王朝（軍人奴隷王朝）		1,232 四条天皇（87）
			・ローマ法王継承が不安定な時期	マルムーク朝（～1,517年）	・北インド一帯		1,242 後嵯峨天皇（88）
			1,264 カリシュ憲章（ポーランド）＝ユダヤ人隔離	・イスラム王朝（スンニ派）			1,246 後深草天皇（89）
			1,267 ロジャー・ベーコン＝『大著作』＝光学と眼鏡に言及	1,250 ～1,517 ・エジプト、シリア、ヒジャーズ			
			1,270 第8回十字軍	・首都＝カイロ	蒙古 ➡ 「元」に改称（～1368年）		1,259 亀山天皇（90）
			1,273 ハプスブルグ家 ➡ ローマ皇帝 ・カトリック教徒を合称～欧州中核勢力		1,271 ・覇権拡大（東、西、南） 侵略	1,279 南宋、滅亡	1,274 後宇多天皇（91）
					・東西交通が栄える		文永の役（蒙古襲来-1） ・モンゴル、高麗 ➡ 九州侵攻
			1,291 第9回十字軍～挫折 ・十字軍国家は全滅		・東進 ➡ 朝鮮半島 ➡ 日本侵攻 侵略	元と属国・高麗 侵略	1,274
			・パレスチナはイスラム圏となる				弘安の役（蒙古襲来-2） ・モンゴル、高麗 ➡ 九州侵攻
			1,296 マルコポーロ、『東方見聞録』著		侵略	元と属国・高麗 侵略	1,281
			1,300 ルネッサンス（文芸復興）が始まる		1,299 オスマン・トルコ帝国、諸国 ・多民族帝国		1,287 伏見天皇（92） 1,298 後伏見天皇（93）

レコンキスタ ＝ キリスト教徒による再征服運動（ユダヤ・イスラム教徒をスペインから追放）
9・10世紀のスペインは、ユダヤ教・イスラム教・キリスト教徒が同一地域で共存していた。レコンキスタは十字軍とも呼応しつつ、ユダヤ・イスラム教徒を排除し、1,492年グラナダ王国滅亡をもってイベリア半島をキリスト教化する。 追放されたユダヤ人は、以下に移動。
◆スファラディ系ユダヤ人＝中世ヘブライ語でスペインはスファラドと呼ばれ、その出身者の呼称
 哲学的合理主義と中庸の徳を重んじ、社会への適応を果たしながら生きのびることを優先。
 ・バルカン地方のオスマン帝国へと移動。（地中海沿岸地方）

第二期 山城政体 平安時代
鎌倉時代 北条政体

世界史年表－5

時代の特徴	社会体制	アメリカ	西欧・ロシア	エジプト・（北アフリカ）	中・南・西アジア	中国・（朝鮮）	日本
			1,303 アナーニ事件 ・十字軍失敗でローマ教皇の権威が揺らぎ、国王の力が増した。 フィリップ4世は教皇権の上に立ち、絶対王政の途を開く				1,301 後二条天皇（94） 1,308 花園天皇（95） 1,318 後醍醐天皇（96）
			1,306 エドワード3世➡職人・芸術家の石炭使用禁止令 ・多くの人々は従わない➡ロンドンの公害				1,331 光厳天皇（北朝-1）
			1,328 ヴァロア朝（～1,589年） ・フィリップ6世からフランスに13代続く				1,333 大塔宮護良親王 ➡ 征夷大将軍 大塔政略＝南北朝の秘密統合 ➡ 欧州進出
			1,339 英仏間で100年戦争（～1,453年）				1,336 室町幕府
			1,340代 イギリス ➡ ペスト流行＝人口の激減				1,336 光明天皇（北朝-2）
			大塔宮＝欧州進出（ケルト国家融合）				1,339 後村上天皇（97）
							1,348 崇光天皇（北朝-3）
			1,386 リトアニア／ポーランド王国、成立 ・リトアニア大公国とポーランド王国の同君連合国家		1,370 ティムール朝（～1,507年） ・イスラム王朝（モンゴル人） ・中央アジア、イラン、インド	1,368 明、建国（～1,644年） ・元は北方に後退	1,352 後光厳天皇（北朝-4） 1,368 長慶天皇（98） 1,371 後圓融天皇（北朝-5）
			1,415 ポルトガルの王子（エンリケ） ・セウタを攻略し、大航海時代幕開け ・エンリケ＝キリスト教騎士団の頭領			1,392 高麗滅亡、朝鮮（李氏）建国 1,400 「水滸伝」、伝奇歴史小説著作	1,383 後亀山天皇（90） 1,382 後小松天皇（100）
			1,450 活版印刷（グーテンベルク）開始			1,402 永楽帝、即位（明、第3皇帝） ・永楽大全、四書大全、五経大全 性理大全、歴史名臣奉論 ・モンゴル撃退	
		1,428 アステカ帝国樹立 ～1521年 ・北米メキシコ中央部	1,453 東ローマ帝国（ビザンツ帝国）、滅亡 ・オスマン帝国に滅ぼされる ・ビザンツ帝国＝皇帝と ギリシャ正教＝教皇とが同一人物説		元（モンゴル）、侵攻 → 侵攻	1,421 明、北京に遷都（蒙古対策）	1,412 称光天皇（101） 1,428 後花園天皇（102）
		1,438 インカ帝国樹立 ～1572年 ・アンデス山脈全域	1,480 モスクワ大公国、樹立（専制君主制） ・皇帝＝イヴァン3世（キリシャ正教）				1,464 後土御門天皇（103） 1,467 応仁の乱 ～ 1477
			＜大航海時代＞ 始まる				
			1,488 喜望峰発見（バーソロミュー・ディアス）				
			1,492 スペイン王国、統合（レコンキスタ＝キリスト教再征服） ・イベリア半島からイスラム勢力を一掃（グラナダ王国滅亡）				
		1,492 コロンブス、サン・サルバドル島到達 先住民インディアスの人口推計 ・11,000万人～4,000万人	1,492 新大陸発見（コロンブス） 1,494 トルデシリャス条約（世界二分） ・世界二分配（西経45度）～ベネズエラ				
		1,498 コロンブス、アメリカ大陸到達	1,498 インド航路発見（バスコ・ダ・ガマ） 白人の世界侵略が始まる 白人（スペイン・ポルトガル）土着民族支配 ・キリスト教会は手先機関となる ・武装騎馬隊と銃（騎馬民族）				
			1,517 宗教改革 ← マルチン・ルター	1,517 カイロ：アッバース朝（イスラム）滅亡			1,500 後柏原天皇（104）
		1,519 マゼラン（ポルトガル）世界一周出発 ・スペイン王の支援で西回り航路	1,519 マゼラン艦隊・世界一周（～1,522年）		1,501 サファビー朝（～1,719年） ・サファービ教団のイラン支配		
		1,521 マゼラン、マクタン島にて戦死 アステカ帝国滅亡（エルナン・コルテス） ・スペイン征服・統治	1,526 ハプスブルク帝国（オーストリア） ・オーストリア、ハンガリー、ボヘミアを統合		1,510 ゴア総督府（インド） ・ポルトガルのインド支配総督府		1,526 後奈良天皇（105）
		❶『コロンブスが来てから』 先住民の 歴史と未来＝トーマス・R・バージャー ❷『インディアスの破壊についての簡潔な報告』ラス・カサス ❸『侵略の世界史』この500年、白人は世界で何をしてきたか＝清水馨八郎	1,529 サラゴ協定（スペイン／ポルトガル） ・世界二分配（東経135度）～日本		1,520 スレイマン1世（～1,566） ・「ソロモン王」のトルコ語発音		
			1,534 イギリス国教会 ・ヘンリー8世がイングランド教会のトップ	『侵略の世界史』この500年、白人は			1,543 ポルトガル人・種子島上陸 ・鉄砲を伝える ➡ 八坂金平は2丁を購入 ※ 数年後 ➡ 八坂金平は600丁の鉄砲製造（火縄銃）
			1,543 地動説 ← コペルニクス		1,526 ムガル帝国、建国（～1,858年） ・トルコ系イスラム王朝、インド亜大陸支配 ・ヒンドゥ教に介入せず		1,549 スペイン＝フランシスコ・ザビエル、鹿児島上陸 ・キリスト教を布教（イエズス会～カトリック） ・宣教師は侵略の先駆けの存在 ※ 鉄砲（種子島）はコピーされて全国普及
			1,558 エリザベス1世（～1,603年） ・イングランド、アイルランドの女王となる				1,557 正親町天皇（106）
			1,568 霧土戦争（～1,918年） ・ロシア帝国 VS オスマン帝国（計＝12回）		1,565 『シュルハン・アルーフ』ユダヤの法典を総合 ・アシュケナジ、スファラディ、両社会の統一規範		1,560 桶田信長 ➡ 桶狭間の戦い
			1,580 ポルトガル（アヴィス王朝）スペイン併合		1,571 レパントの海戦 ・オスマン帝国とスペイン、ヴェネツィアの海戦 ・オスマン帝国の敗戦		1,582 遣欧少年使節 ← 九州キリシタン大名 ・イエズス会発案 ➡ グーテンベルグ印刷機
		1,570 先住民インディアスの人口推計 ・1,000万人	1,581 オランダ独立宣言 ・ネーデルランド共和国＝オランダ（ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ）				1,586 後陽成天皇（107）
		1,572 インカ帝国滅亡（フランシスコ・ピサロ） ・スペイン征服・統治	1,588 アルマダ海戦 ➡ スペイン衰落の始め ・イギリス艦隊がイスパニア艦隊を破る（スペイン無敵艦隊を破る）		植民地拠点 スペイン ➡ ルソン島（マニラ） ポルトガル ➡ マカオ（香港） オランダ ➡ ジャヴァ島	1,592 豊臣秀吉、朝鮮侵攻（目的は明） 1,596 豊臣秀吉の死をもって日本敗退	1,590 豊臣秀吉 ➡ 天下統一 1,592 文禄の役（～1,598）豊臣秀吉、朝鮮出兵 ・目的は西欧に対抗すべく明の攻略
		コンヴェルソ ＝ 生き残るためユダヤ教➡キリスト教へ改宗 母親を通じて子どもへ、ユダヤ教信仰を密かに引き継	1,600 イギリス「東インド会社」設立 1,602 オランダ「東インド会社」設立 ※ 帝国主義の先駆け、交易や植民		1,602 オランダ「東インド会社」 ・アジア植民地化	侵攻	1,600 関ヶ原の戦い（イギリスVSスペイン代理戦争～内戦） ・東軍＝徳川家康～東インド会社（イギリス（プダムズ）） ・西軍＝石田光成～イエズス会とスペイン、ポルトガル
			1,609 ケプラー～天体の三法則 ガリレイ～天体望遠鏡、発明				1,603 江戸（徳川）幕府 ・ウイリアム・アダムズ（イギリス） ←三浦按針 家康の外交顧問 ➡ イギリス、オランダが台頭
			1,613 ロマノフ朝（～1,917年） ・ロシアに長期君臨した王朝		台湾、トンキン、コーチシナ、カンボジャ シャム、ルソン		※ 朱印船による南蛮貿易奨励～移民を奨励
		1,620 清教徒、アメリカ入植開始 ・メイフラワー号、マサチューセッツ州プリマス入港 ・インディアス（インディアン）の破壊・征服	1,620 清教徒、アメリカ移住開始 ・メイフラワー号、イギリス、プリマスを出港			1,612 清、建国（～1,912年） 1,616 金、満州に再建（女真族）	1,611 後水尾天皇（108） 1,613 家康はキリスト教禁止令を出す
			1,632 ガリレオ・ガリレイ ➡ 「地動説」 「それでも地球は廻っている」				1,629 明正天皇（109） 女帝 1,633 徳川幕府 ➡ 第1次鎖国令（オランダ＝出島で許可）
			1,637 デカルト ➡ 「方法序説」 「我想う、故に我あり」コギト・エルゴ・スム			1,642 明、滅亡	1,639 徳川幕府 ➡ 第2次鎖国令（海外渡航禁止） 1,641 徳川幕府 ➡ 鎖国体制完成
			1,638 イギリスの主教戦争（～1660）				1,643 後光明天皇（110）
			1,641 清教徒革命（～1,649年） クロムウエル ・イングランド、スコットランド、アイルランドの内戦				
			1,652 英蘭戦争（～1,824年英蘭協約） ・オランダVSイギリス 東インド会社が暗躍				1,654 後西天皇（111） ※ スペイン、ポルトガルの勢力は衰える イギリス、オランダは日本まで軍隊を派遣する余裕なし 徳川幕府は200年の平和と文化発展をみる

大航海時代～世界発見～世界侵略
宗教改革＝宗教の世俗化・私事化

ウバイド文明はBC3,800年前に東西へ離散する。東進は日本列島で海人国家をつくる。西進騎馬族は北西欧でケルト国家をつくる。大塔政略は両者を融合させ、マニ教思想（一神教）となってワンワールド勢力を形成する。（落合興爾・脱＝『天皇とワンワールド』）

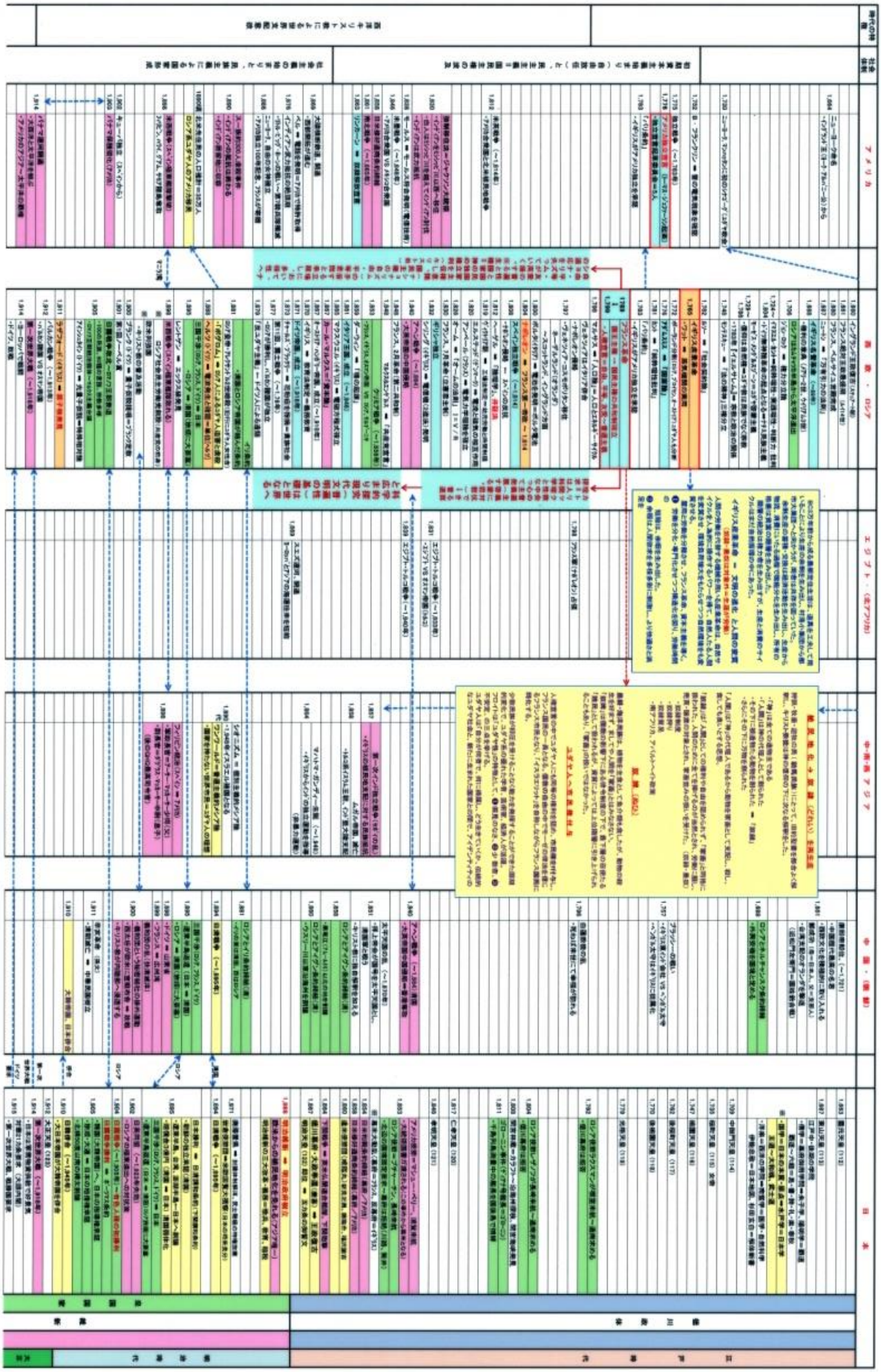
武家国家（国体王＝天皇）

足利政体 / 織豊政体

室町時代 / 安土桃山時代

第三期

世界史年表－6



世界史年表－7

時代の特徴	社会体制	アメリカ	西欧・ロシア	エジプト・（北アフリカ）	中・南・西アジア	中国・（朝鮮）		日本
アメリカキリスト教の自由・平等、ソ連のマルクス・レーニン主義の試行錯誤、二つの世界大戦に挑戦した日本キリスト教の自滅（西洋の没落）、（東西冷戦）	共産主義と社会民主主義の始まり	1,917 シベリア出兵 ・ロシア革命 ← 英、仏、米、日本 1,920代～1,930代 オレンジ計画（ウッドロー・ルーズベルト大統領） ・アメリカ海軍のカラーコード戦争計画 ・対日戦争作戦計画（1924年陸海軍合同提択） 1,924 インディアン市民権法制定（インディアン） 移民法制定（日本の在米資産凍結）	1,917 ロシア革命（ロマノフ王朝崩壊（レーニン）＝共産党） ・英、仏、米、日本 ➡ シベリア出兵 1,918 第一次世界大戦終戦 ・ドイツ、降伏 1,919 パリ講和会議 ➡ ベルサイユ条約 ・連合国 VS ドイツ＝マイノリティの生存権保障 ・ドイツ ➡ ヴァイマル憲法～人権保障規定 ～ナチスの勃興で機能停止～ドイツのユダヤ人迫害 1,920 「国際連盟」、発足 1,922 「ソ連邦」、成立 ・ソビエト社会主義共和国連邦 1,926 シュルディンガー（オーストリア）➡ 波動方程式発表 1,927 ハイゼンベルグ（ドイツ）➡ 不確定性理論発表	1,922 エジプト王国、独立	1,918 トルコ革命（～1,922年） ・イスラム教国家のオスマン帝国（オスマン家）VS トルコ民族による近代的共和制勢力 1,923 トルコ共和国、樹立	ロシア出兵	1,917 シベリア出兵（ロシア革命阻止） ・ロシア革命 ← 英、仏、米、日本 1,926 昭和天皇（124）
		1,928 パリ不戦条約（兵役15カ国 ＋ 後にソ連等62カ国署名） 戦争放棄＝平和思想（紛争は平和的手段により解決する）						
		1,929 世界大恐慌（アメリカ＝フーバー大統領）						
	修正資本主義（社会的公正）	1,930 ニューディール政策～ケインズ経済学 1,932 フランクリン・ルーズベルト大統領＝オレンジ計画 1,933 世界経済会議不調（ルーズベルト） ・世界大戦の引き金となる 1,936 「モダン・タイムス」＝チャップリン＝オートメーションを風刺 1,939 第二次世界大戦勃発 ・アメリカ大統領＝ルーズベルト ・イギリス首相＝チャーチル ・ソ連最高指導者＝スターリン 1,939 日米修好通商条約破棄（アメリカ） 1,940 日米修好通商条約失効 1,941 日本への経済制裁＝禁油（ルーズベルト） 1,941 太平洋戦争開戦➡12月真珠湾攻撃	1,930 ザラック（イギリス）➡ 量子力学を確立 1,933 ナチス ➡ 東欧全域でユダヤ人迫害～排斥 1,935 ドイツ ➡ ニュルンベルク憲法（ヒトラー発案） ・国旗法、公民法、血とを誓を保護するための法律 1,936 スペイン内戦（～1,939年） 1,939 第二次世界大戦勃発 ・ドイツがポーランドへ侵攻 ・英仏がドイツに宣戦布告 1,940 日独伊、三国軍事同盟 1,941 日ソ中立条約締結 A.B.C.D. 包囲網 アメリカ、イギリス、オランダ、中国 日本の在外資産凍結と禁油		1,932 満州国、建国（愛新覚羅溥儀） ・満州全土、日本占領 ・五族協和の理想 1,937 日中戦争勃発（～1,945年） ・盧溝橋事件が発端 ・日本軍VS中国共産党軍（蒋介石） 背景＝米ソの駆け引きと中国共産党軍 1,941～1,945 大東亜戦争 ・日本軍による侵略と解放の両面性 1,943 大東亜共同宣言（東京） 日本、中華民国、フィリピン共和国 ビルマ国、タイ王国、インド 1,945 日本敗戦 ソ連、満州国と朝鮮半島へ侵攻 ※ 植民地化した東アジア地域諸国 独立の気運を高める	ロシア出兵 回復	1,931 満州事変 ・日本と中華民国との武力衝突 1,933 国際連盟～脱退 1,937 日中戦争勃発（～1,945年） 支那事変 1,939 日米修好通商条約破棄（アメリカ） 日独伊、三国軍事同盟 1,940 大東亜共栄圏（第二次近衛内閣） 大東亜戦争～1945まで 日ソ中立条約締結 1,941 ・A.B.C.D. 包囲網 アメリカ、イギリス、オランダ、中華民国（蒋介石） 7月＝ 日本の在外資産凍結と禁油（経済制裁） ・太平洋戦争開戦➡12月真珠湾攻撃 ※ 太平洋戦争（アメリカ）＝大東亜戦争（日本） 1,945 ソ連、日本に宣戦布告、満州侵攻（8/8） ソ連＝日ソ中立条約破棄（スターリン） ・アメリカ＝原爆投下＝広島（8/6）、長崎（8/9） ・ポツダム宣言受諾回答（8/10） 天皇統治条件 ・天皇、日本降伏を玉音放送（8/15 正午） ・日本降伏文書調印 ➡ ミズリー号（9/2） ・GHQ（連合国最高司令官総司令部） 間接統治（マッカーサー） ・ソ連、日本兵60万人シベリア抑留（強制）
		1,939 ・ヤルタ会議（2/4・・・11）、ソ連 ・ポツダム会議（トルーマン大統領） ・ポツダム宣言（7/26）米、英、中 ・日本へ原爆投下（トルーマン大統領） 広島（8/6）、長崎（8/9） アメリカは太平洋の戦線を優る ノイマン（ハンガリー）➡ コンピュータ開発 ・ノイマン型＝プログラム内蔵コンピュータ 1,950 朝鮮戦争（アジアのクサビ） ※ ベトナム戦争（宣戦布告なし） ※ 東西冷戦構造（米ソ対立） 1,950代 公民権運動（キング牧師） 1,959 キューバ革命政権、樹立 1,962 キューバ危機（アメリカ＝ジョン・F・ケネディ） （核戦争の危機） ← 停止 1,965 移民法改正 ➡ 国別移民割り当て撤廃 1,969 アポロ11号、有人月面着陸 1,970 SAシン・フリードマン＝新自由主義主張 1,980 イラン、イラク戦争 1,990 北米インディアン人口＝310万人に回復 1,992 地球サミットに合せ「先住民族世界会議」	1,945 ・ヤルタ会議（2/4・・・11）、ソ連 ・ポツダム会議（トルーマン大統領） ・ポツダム宣言（7/26）米、英、中 ・日本へ原爆投下（トルーマン大統領） 広島（8/6）、長崎（8/9） アメリカは太平洋の戦線を優る ノイマン（ハンガリー）➡ コンピュータ開発 ・ノイマン型＝プログラム内蔵コンピュータ 1,948 イスラエル建国（世俗主義のユダヤ人国家） ・古代イスラエル以降、ユダヤ人は国をもたなかった 1,952 ソビエト連邦共産党 1,956 ハンガリー動乱 ・民衆蜂起に対し、ソ連軍が軍事介入 1,962 キューバ危機（ソ連＝フルシチョフ） （核戦争の危機） ← 停止 1,968 フランス5月革命（パリ） 1,990 東西ドイツ統合（ヘルムリンの壁崩壊） 1,991 ソ連崩壊、連邦構成共和国独立 リー（イギリス）➡ インターネットウエブ（WWW）公開 1,993 欧州連合（EU）誕生 ・マーストリヒト条約発効	人種間の格差（ヒトラー） 1,952 エジプト共和国、成立	日米開戦はアメリカ＝ルーズベルト大統領が巧妙に仕掛けた罠であることを暴露した書には以下がある。 ❶ アメリカの歴史学者＝チャールズ・ビュアードの『ルーズベルト大統領と日米戦争』1,948年 ❷ ルーズベルト長女の夫＝カーチス・B・ドールの『操られたルーズベルト』馬野周二・訳、プレジデント社・刊 ❸ 『日米戦争を起こしたのは誰か』加瀬英明・他、勉誠出版、2,010年～「フーバー大統領回顧録」を読む 1,948 スリランカ、独立 （イギリス） 1,948 イスラエル建国 イスラエル和平首相（ヘンゲリオン）暗殺後遺症呼び掛け 1,949 ・アメリカ ユダヤ評議会は不快表明（アメリカ同化） ユダヤ教徒は宗教集団で、民族集団ではない 1,949 中華人民共和国、樹立（共産党） 朝鮮戦争勃発＝北朝鮮侵攻 1,950 ※ ベトナム戦争（宣戦布告なし） （ソ連・中国 VS アメリカ）代理戦争 （スターリンの罠）	南北朝鮮分断 1,946 ・北＝朝鮮民主主義人民共和国 ・南＝大韓民国 1,949代～70代 中国＝文化大革命（毛沢東） ・共産党の一党支配 1,972 日中国交回復（周恩来・首相） 1,976～1,992 中国＝改革開放（鄧小平・主導） ・市場経済への移行 1,989 天安門事件＝学生・市民のデモ鎮圧 1,992～ 中国＝社会主義市場経済 ・主席＝江沢民～胡錦濤	1,946 日本国憲法公布 （11月3日） ・国民主権、象徴天皇、平和主義 ・自由、平等、基本的人権尊重、戦力放棄、不戦 1,946～1,948 極東国際軍事裁判（東京裁判） ・連合国による一審制軍事裁判 1,952 日本、独立主権回復 ・サンフランシスコ平和条約発効（ソ連を排除、賠償金無し） 1,956 国際連盟（国連）加盟、80カ国目 1,960代～70代 高度経済成長 大学闘争 1,972 日中国交回復 （田中角栄・首相） 1,986～1,991 バブル景気（資産価格高騰と好景気持続） ・GDP世界第2位（アメリカ、ロックフェラーセル買収） 1,989 平成天皇（125） ・国内、国外、災害（戦争、災害被災地、国際平和） ・象徴天皇＝国民天皇（戦争の反省と世界の平和）
	近代新自由主義は	30世紀 マルクス主義侵略の植民者は、世界で1億7千万人に及ぶと推計されている。（ニューヨーク市立大学アルバート・ウィークス教授の推計） 清水馨八郎・著『侵略の世界史』P-212						
		19～16世紀 白人キリスト教徒たちが、南北アメリカ大陸の原住民のインディアンやインディアス1億人を殲滅し、さらにアフリカから数千万人の人間を奴隷として連び出し、その半分以上を不良商品として、大西洋に捨てた残骸の大群も、マルクス主義による虐殺には及びもつかない。 清水馨八郎・著『侵略の世界史』P-213						
	ソ連崩壊、アメリカの衰り	1,995 ベトナム戦争和解（アメリカ / ベトナム） 2,001 ニューヨーク同時多発テロ 2,003 イラク戦争（武器商人の在庫一掃） 2,009 バラク・オバマ ＝ 初のアフリカ系 第44代アメリカ大統領就任 ・アメリカは世界の警察役を放棄 ・ノーベル平和賞受賞	2,003 イラク戦争（イギリス、ポーランド、オーストラリア） ※ 移民・テロ活動激化	※ 移民・テロ活動激化	1,995 ベトナム戦争和解（アメリカ / ベトナム） 2,003 イラク戦争（サダム・フセイン＝シーア派）滅亡 ・アメリカ支援イラク政権（スンニ派）樹立 ・イスラム過激派（テロ組織拡大（アルバン、他） ※ 移民・テロ活動激化	2,010 中国＝GDP世界第2位へ躍進 ※ 少数民族迫害	1,992 国連PKO派遣（自衛隊～第二次アンゴラ難民救援） 1,991～2002～ 平成不況（景気後退） ・失われた10年～20年 2,006 安倍晋三（第1次安倍内閣） 第90代内閣総理大臣就任
	一神教文明は主役	2,011 この世界は2011年から第四次世界大戦に突入した。 ～ 近代国家同士の戦争ではなく、各国内での一神教どうしの対立を主とした内戦 ～ 落合発言・著『天皇とワンワールド』P-14 ※ 第三次世界大戦はさまざまな文献で用いられ、定まった世界戦はない。 第4次大戦のエネミーライン（前線）は、国家間の戦争と違って、各国を貫通する一本の針金のようなものです。朝鮮半島から始まり、南シナ海を経てアジア大陸に上がり、タイ・ビルマ・チベットを経び、インド・パキスタンではやや広がり、アフガン・イラク・イランを通ってペルシャ湾を渡り、北アフリカに達します。（同上、P-14） ～神教文明の繁栄は ＝ ❶ 植民地収奪 ❷ 奴隷酷使 ❸ 死の商人（戦争産業＆商人）、によって支えられてきたが、第二次世界大戦後には終焉化した。 逆に、朝鮮3つの繁栄原資をまったく持たずに繁栄した唯一の国 ＝ 日本 ～ 清水馨八郎・著『侵略の世界史』P－293 ～ 参照 ～ （注記・田中）					
	一神教文明は主役	2,013 トマ・ピケティ ＝「21世紀の資本」 ・格差是正に政治的再配分を主張 2,016～ ドナルド・ジョン・トランプ 第45代アメリカ大統領就任 ・自国第一主義政策を展開	2012～ ウラジミール・プーチン 第4代ロシア連邦大統領就任 2,018 欧州連合（EU）弱体化 イギリスの離脱 諸国 ➡ 保守化傾向 ロシア＝プーチン大統領再選（～2,024） ・皇帝（ツ）化		2,013 親欧イスラム首相＝ベンヤミン・ネタニヤフ 2,014 親欧イスラム大統領＝ルーベン・リブリン 2,018 イスラエルのアメリカ大使館をエルサレムに移転～パレスチナ人は激怒	2012～ 習近平＝中華人民共和国主席 ・中華（帝都）思想強化（天＝皇帝＝四海） ・一帯一路政策（海のシルクロード） ・軍事力強化政策（世界覇権） ・チャイナスタンダード（国際法論） 2,018 習近平 ➡ 主席の任期撤廃 ・終身主席 ➡ 皇帝（ツ）化	2012～ 安倍晋三（第2次安倍内閣） 第96、97、98代内閣総理大臣就任 2,016 8月8日15時、平成天皇「お言葉」 カバネの代～ツカサの代～名の代～オホヤケの代 明治以降のオホヤケの代＝象徴天皇の完成を示唆 次なる大勢の転目は・・・・・？（落合発言・談） 2,018 安倍晋三総理の任期＝2,021年9月まで 2,019 平成天皇 ➡ ○○天皇（126）
	人類未来への道標	白人一神教の二元論文明（騎馬系向金民族＝戦闘）を乗り越え、 敵和（SUMO）の思想＝日本文明 から提言する人類ワンワールド多元論文明（海洋系農耕民族＝和平）との 複数数的融合（騎馬系（文明）＋（海洋系（文化））＝日本習合の複製＝人類存続のカギ となる 現代文明によるライフスタイルの変化（人工化革命＝農業・産業・都市・デジタル技術）は地球環境に大きく作用し、ホモサピエンスの模倒（身体と脳）を変え（進化）、最終氷期後の「完新世（かんしんせい）」に代わり、「人新世（じんしんせい）」と呼ぶ新しい地質時代に入った。					「和を以て貴しと為す」＝聖徳太子「17条憲法の思想 「日本国憲法」＝自由・民主・人権（平等）・平和主義と平和の思想	

時代	第四期	昭和時代	平成時代
軍事政体（国体王 ＝ 天皇）	軍事政体	民主政体（国会）	民主政体（国会）
民主国家（国体王 ＝ 象徴天皇）			

数理系からの自然認識構造

【文明】→粒子（一方向）性→デジタル特性→限時（不連続）性＝物質、科学、技術、欲求
【文化】→波動（繰り返し）性→アナログ特性→周期（連続）性＝意識、価値、物語、欲望

生成

（構造を形式化）自然を実相認識 ←繰り返し同一結果をもたらせる（第一種測定）：科学上の根拠

二重測定問題→（物理量と時間の同期）

観測実験測定値（実数的認識） ←①不連続性 ②確率性 ③非因果性

◆自然の実相世界観↑

人知の限界⇒自然（宇宙）の全てを知ることができない

・確率
・複素共役量（実数化）

複雑系総合学 → 創発

・絶対系の不在
・因果律の限界

自然の固有性（複素的認識） ←①あらゆる可能性 ②不確定性（h）
・抽象化（存在論）により認識（認識論）する

◆自然の複素世界観↓

図形の思索（図形）　極限の思索（極小）（極大）　数式のパターン認識（数式）　意識の論理形成（哲学）（論理学）

〈存在論〉　〈認識論〉

幾何学 π　解析学 e　代数学 $i=\sqrt{-1}$　論理学 $-1=e^{i\pi}$

・空間の性質（経験に則する客観的形象）
・微積分
・代数学の基本定理
・各種の証明法

$(i)^2=-1$
$i=\sqrt{-1}$ ←愛情
$(i)^2=-1$ ←愛情過多

数　論

＜電磁気力＞
＜自然界で働く4つの力の一つ＞
①電磁気力 ②強い力 ③弱い力 ④重力
＜エネルギー・情報の伝搬＞
・発信（インピーダンス極小化現象）→電磁波
・共振（相互マッチング現象）→電磁誘導

オイラーの公式
$e^{i\theta}=\cos\theta+\sin\theta$
$\theta=\pi$のとき
$e^{i\pi}=\cos\pi+\sin\pi=-1$

・宇宙的構造

線形代数
・連続性

カオス理論
自己組織化論

位相幾何学
・トポロジー（連続性と位相空間論）
・「超ひも理論」（4つの力の統合理論？）
・実在しない超対称性（26次元？、10次元？）（無矛盾、偶然の否定）

微・積分学

ホーキング博士の「特異点定理」
・虚数の時間軸（多次元）
・実数の時間軸（4次元）

集合論
・集合（集団）と離散（個）
・社会～政治論、民族問題

解析幾何学

複素関数論

ブール代数
・論理演算の法則と論理回路
・2値に意味を与えた命題論理式（2項演算子）

複素的総合＝客観＋i主観（相補的理解）

統計学 【解析力学】
【統計力学】【電磁気学】
【相対性理論】

数値解析
・数値的解法

・波動方程式
・複素ベクトル

相補性原理
空間・時間的枠付（記述）と因果性の主張（要求）とは互いに相補的である（ニールス・ボーア）
（排他的枠付において相互を区分）

・粒子観測結果の確率性（位置の偶然）←プランク定数（ih）
・粒子の波動性（因果の必然）←エネルギーと運動の保存則に準拠

【実数の物理学】（古典物理学）

（現代物理学）【量子力学】

自然の二重性質
・確率性（偶然性）
・波動性（必然性）

自然の本質
波動関数（複素数）ψ

（直感に反する原理）
・不確定性原理
・確率論
・重ね合わせの原理

（直感と一致する性質）
・一意性
・連続性
・因果性
・必然性

相補的

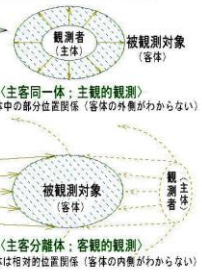
状態ベクトル
|a〉、a〈|

作用量（物理量）
$\bar{Q}=\bar{Q}^{+}$

交換関係（プランク定数）ih

複素共役の双対関係（対称性）

相補的関係



波動方程式（複素数）：$[D^2x+D^2y+D^2z+i^2(1/v^2)D^2t]\cdot\psi(x,y,z,t)=0$
（粒子性）（波動性）

光（電磁波）⇒粒子性（光子）と波動性（縦波→電場、横波→磁場）
（離散的）（連続的）

・非統計的解釈＝単一（個別）の物理系振る舞いを記述する正準共役変数は、同時刻での値を正確に指定することが原理的に不可能である。
・統計的解釈＝2つの正準共役変数の標準偏差の積は、[h / 4π]で与えられる下限をもつ。

D：微分記号　v：速度
x、y、z：位置　t：時間

三位一体の存在要素

e：自然数（ネイピア数） $e\equiv\lim_{n\to\infty}(1+\frac{1}{n})^n$	自然対数の底　（ミクロとマクロの接点に現れ、粒の集合体のすべての理論に適用） ◆マクロな性質 → 限界、収束、発散の分岐点、0と∞の中間点、たわみ、微積分に対して不変、コンデンサの充電・放電、自然にぶら下がっているもの ◆自然な分布 → 統計学、統計力学、分布の基本形、電子雲確率分布、存在に幅をもたせるもの ◆分岐点 → 生と死の分岐点、裁き、天国と地獄
i：虚数単位 $=\sqrt{-1}$ $i^2=(\sqrt{-1})^2=-1$	「-1」は対の概念（対称性）を意味する ◆関係づけと変換→ 三角関数と指数関数、角度と長さ ◆関係づけの交差→ 電場と磁場の直交、次元支配、次元空間 ◆思いもよらぬもの→奇跡、復活
π：円周率（無理数）	◆丸い形象のイメージに優るもの → 円、球、楕円、回転、スピン、表面張力、求心力、原子、太陽、極座標、宇宙 ◆繰り返すもののイメージに優るもの→ 三角関数、振動、周期、正弦波、歴史、流転、輪廻転生、丸く収める、円満

h：プランク定数　6.547×10^{-27} [erg・s]
ψ：波動関数

$\psi_{nlm}(r)=N_{nl}\cdot e^{-\alpha r}\cdot(2\alpha r)^{l}\cdot L_{n+l}^{2l+1}(2\alpha r)\cdot Y_{lm}(\theta,\phi)$

$\psi(x)=\underbrace{f(kx-\omega t)}_{進行波}+\underbrace{g(kx+\omega t)}_{後退波}$　※ 定在波＝進行波と後退波が均衡する場合

主著参考図書

（順不同）

図説　歴史の研究（原書版翻訳）
アーノルド・トインビー、オックスフォード大学出版部、1972年、原書翻訳＝**鈴木弥栄男**、2017年

人間機械論（サイバネテックスと社会）
ノバート・ウイーナー、みすず書房、1969年初版20刷

エントロピーからの発想
武田修三郎、講談社、1983年初版

なめらかな社会とその敵（新書版）
鈴木健、勁草書房、2013年初版

日本二千六百年史（新書版）
大川周明、毎日ワンズ、2017年初版

大川周明「世界史」
大川周明、毎日ワンズ、2019年1刷

日本の始まりはシュメール
坂井洋一、ヒカルランド、2016年初版

この国「深奥」の重大な歴史
久保有政、ヒカルランド、2016年初版

天皇とワンワールド（国際秘密勢力）
落合莞爾、成甲書房、2015年初版

天孫皇統になりすましたユダヤ十支族
落合莞爾、成甲書房、2016年初版

金融ワンワールド（地球経済の管理者たち）
落合莞爾、成甲書房、2015年初版3刷

天皇と黄金ファンド（古代から現代に続く日本國體の根本）
落合莞爾、成甲書房、2016年初版1刷

シュメル　人類最古の文明
小林登志子、中央公論新社、2016年8版

シュメル神話の世界
岡田明子、小林登志子、中央公論新社、2016年4版

ギルガメッシュ叙事詩
矢島文夫、筑摩書房、2017年初版20刷

古代史に秘められたＤＮＡ暗号
桂樹佑、たま出版、2004年初版

縄文土器に刻まれたＤＮＡ暗号
桂樹佑、たま出版、2005年初版

逆襲される文明
塩野七生、文藝春秋、2017年初版

世界は四大文明でできている
橋爪大三郎、ＮＨＫ出版局、2017年初版

フリーメーソン（秘密結社の社会学）
橋爪大三郎、小学館、2017年初版

ハーバード日本史教室
佐藤知恵、中央公論新社、2017年初版

２０８４世界の終わり
ブアレム・サンサル、河出書房新社、2017年初版

「天皇機関説」事件
山崎雅弘、集英社、2017年初版
〈女帝〉の日本史
原武史、ＮＨＫ出版局、2017年初版
混血の神々
川崎真治、講談社、1973年初版
八幡神の正体（もし応神天皇が百済人であるならば）
林順治、えにし書房、2018年初版１刷
十六菊花紋の謎（日本民族の源流を探る）
岩田明、潮文社、2003年初版
日本の起源
東島誠、與那覇潤、太田出版、2013年初版
日本人の源流（核ＤＮＡ解析でたどる）
斎藤成也、河出書房、2018年初版５刷
日本人はなぜ存在するか
與那覇潤、集英社インターナショナル、2013年初版
前鳥神社ものがたり
今泉義廣、前鳥神社社務所、2006年初版
大野誌
大野誌編集委員会、平塚市教育委員会、1958年発行
徐　福（日中韓を結んだ「幻」のエリート集団）
池上正治、原書房、2007年初版
安曇族と徐福（弥生時代を創りあげた人たち）
亀山勝、龍鳳書房、2009年初版
徐福王国相模（古代秘史・秦氏の刻む歴史）
前田豊、彩龍社、2010年初版
正統　**竹内文書の謎**（古神道の秘儀と後南朝）
竹内睦泰、学研パブリッシング、2014年初版２刷
富士王朝の謎と 宮下文書
伊集院卿、学研パブリッシング、2014年初版
図解雑学　量子力学
佐藤健二、ナツメ社、1928年初版
図解雑学　相対性理論
佐藤健二、ナツメ社、1974年初版
量子力学の哲学
森田邦久、講談社、2011年初版
量子力学の哲学（上）
マックス・ヤンマー、紀伊国屋書店、2008年初版８刷
量子力学の哲学（下）
マックス・ヤンマー、紀伊国屋書店、2008年初版２刷
宇宙になぜ我々が存在するのか
村山斉、講談社、2013年初版
強い力と弱い力
大栗博司、幻冬舎、2013年初版
知性の限界（不可測性、不確実性、不可知性）
高橋昌一郎、講談社、2010年初版
理性の限界（不可能性、不確実性、不完全性）
高橋昌一郎、講談社、2008年初版

デジタル信号処理
坂巻佳壽美、1999 年初版
複雑系
M・ミッチェル・ワールドロップ、訳＝田中三彦、遠山峻征、新潮社、1996 年初版
複雑系の数理
松葉育雄、朝倉書店、2004 年初版
複雑系の哲学
小林道憲、麗澤大学出版会、2007 年初版
続・複雑系の哲学
小林道憲、麗澤大学出版会、2009 年初版
日常世界の現象学（身体の三相構造の視点から）
湯浅慎一、太陽出版、2000 年初版
マインド・タイム（脳と意識の時間）2011 年初版８刷
ベンジャミン・リベット、訳＝下條信輔、岩波書店、
ニヒルと無（現代のエスプリ）
松浪新三郎・編、至文堂、1967 年
美について
今道友信、講談社、1973 年１刷 ～ 2014 年 50 刷
エコエティカ（生命倫理学入門）
今道友信、講談社、1990 年１刷 ～ 2012 年 23 刷
美の哲学
岩山三郎、創元社、1966 年初版、1967 年再版
ホモ・ルーデンス（人類文化と遊戯）
ヨハン・ホウジンガ、訳＝高橋英夫、中央公論社、1971 年初版～1972 年６版
遊びと人間
ロジェ・カイヨワ、清水幾太郎、霧生和夫・訳、岩波書店、1970 年初版１刷～1971 年初版３刷
自由からの逃走
エーリッヒ・フロム、訳＝日高六郎、東京創元社、1951 年初版～1974 年 63 版
自己組織と進化の論理（宇宙を貫く複雑系の法則）
スチュアート・カウフマン、監訳＝米沢富美子、日本経済新聞社、1999 年初版～2002 年７刷）
転機に立つ人間社会（ローマクラブ第２レポート）
M・メサロビッチ、E・ペステル、監訳＝大来佐武郎・茅陽一、ダイヤモンド社、1975 年初版～３版
精神と物質（分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか）
利根川進・立花隆、文藝春秋、1990 年１刷～1998 年 14 刷）
動的平衡（生命はなぜそこに宿るのか）
福岡伸一、木楽社、2009 年初版１～６刷
人類が絶滅する６つのシナリオ（もはや空想ではない終焉の科学）フレッド・グテル、訳＝夏目大、
河出書房新書、2013 年初版
ブラックボックス化する現代（変容する潜在認知）
下條信輔、日本評論社、2017 年初版
ベンジャミン・リベット『マインド・タイム』の訳者

消えたシュメール王朝と古代日本の謎
岩田明、学習研究社、2004年初版
古事記と日本書紀
角謙二・他、枻出版社、2018年
江上波夫の日本古代史（騎馬民族説四十五年）
江上波夫、大巧社、1992年初版
新・騎馬民族征服王朝説
山崎仁礼男、三一書房、1999年初版
騎馬文化と古代のイノベーション
古代史シンポジウム「発見・検証日本の古代」委員会、
角川文化振興財団、2016年初版
新・騎馬民族征服王朝説
山崎仁礼男、三一書房、1999年初版
侵略の世界史
（この５００年、白人は世界で何をしてきたか）
清水馨八郎、祥伝社、2018年初版13刷
インディアスの破壊についての簡潔な報告
ラス・カサス、染田秀藤・訳、岩波書店、2017年4刷
コロンブスが来てから（先住民の歴史と未来）
トーマス・R・バージャー、訳＝藤永茂、朝日新聞社、1992年1刷
国体論（菊と星条旗）
白井聡、集英社、2018年初版
金森徳次郎著作集Ⅰ（憲法遺言、憲法随想、憲法うらおもて、私の履歴書）
高見勝利・編、慈学社、2013年初版1刷
日米戦争を起こしたのは誰か（ルーズベルトの罪状・フーバー大統領回顧録を論ず）
藤井厳喜・稲村公望・茂木弘道）、勉誠出版、2016年初版2刷
一神教と戦争
橋爪大三郎・中田考、集英社、2018年1刷
ユダヤ人とユダヤ教
市川裕、岩波書店、2019年1刷
希望の日米新同盟と絶望の中朝同盟
（フェイク・ニュースの裏側にある真実）
藤井厳喜、徳間書店、2017年初版
世界恐慌2.0が中国とユーローから始まった
藤井厳喜、徳間書店、2016年初版
ホモ・サピエンスの誕生と拡散
篠田謙一、洋泉社、2017年初版
ＤＮＡで語る　日本人起源論
篠田謙一、岩波書店、2017年初版4刷
アフリカで誕生した人類が日本人になるまで
溝口優司、ＳＢクリエイティブ、2014年初版11刷
「空気」の研究
山本七平、文芸春秋、1977年初版1～4刷
古事記及び日本書紀の研究（建国の事情と万世一系の思想）
津田左右吉、毎日ワンズ、2018年新書版1～3刷
天災から日本史を読みなおす
磯田道史、中央公論新社、2018年24版

文明化の過程（上）
ノベルト・エリアス、訳＝赤井慧爾・中村元保・吉田正勝、
法政大学出版局、1995年初版7刷
現代文明の哲学的考察
西田照見・田上孝一、社会評論社、2010年初版
文化人類学
蒲生正男・祖父江孝男、有斐閣、1969年初版2刷
意識の脳内表現（心理学と哲学からのアプローチ）
デイビッド・ローズ、苧阪直行・監訳、培風館、2008年初版
心という場所（「享受」の哲学のために）
斎藤慶典、勁草書房、2003年初版
心が脳を変える（脳科学と「心の力」）
ジェフリー・M・シュウオーツ、シャロン・ベグレイ吉田利子・訳、
サンマーク出版、2004年初版
目で見る脳とこころ
松澤大樹・編、日本放送協会、2003年初版
心の科学と哲学（コネクショニズムの可能性）
戸田山和久・服部裕幸・柴田正良・美濃正＝編、
昭和堂、2003年初版
心の社会
デマーヴィン・ミンスキー、安西祐一郎・訳、
産業図書、1997年初版12刷
脳と心的世界（主観的経験のニューロサイエンスへの招待）
マーク・ソームズ、オリヴァー・ターンブル、平尾和之・訳、
星和書店、2007年初版
〈意識〉とは何だろうか（脳の来歴、知覚の錯誤）
下條信輔、講談社現代新書、2010年初版18刷
価値観と科学／技術
加藤尚武、岩波書店、2003年初版2刷
現代文明の哲学的考察
西田照見・田上孝一、社会評論社、2010年初版
共生の文化人類学
渡部重行、学陽書房、1997年初版2刷
私の比較文明論
米山俊直、世界思想社、2002年初版
ポストモダンの思想的根拠（9.11と管理社会）
岡本裕一朗、ナカニシヤ出版、2005年初版
デジタル・ポピュリズム（操作される世論と民主主義）
福田直子、集英社新書、2018年初版
〈インターネット〉の次に来るもの（未来を決める12の法則）
ケヴィン・ケリー、訳＝服部桂、ＮＨＫ出版、2016年初版
ブラックボックス化する現代
下條信輔、日本評論社、2017年初版1刷
虚数の情緒（中学生からの全方位独学法）
吉田武、東海大学出版会、2012年初版23刷
オイラーの贈物（人類の至宝 $e^{i\pi}=1$ を学ぶ）
吉田武、東海大学出版会、2012年初版15刷
なるほど　**複素関数**
村上雅人、海鳴社、2003年初版2刷

世界を数式で想像できれば（アインシュタインが憧れた人びと）
ロビン・アリアンロッド、訳＝松浦俊輔、青土社、2006年初版

目に見える世界は幻想か？
松原隆彦、光文社、2017年初版

歴史は「べき乗則」で動く
（種の絶滅から戦争までを読み解く複雑系科学）
マーク・ブキャナン、訳＝水谷淳、早川書房、2014年6刷

交雑する人類（古代ＤＮＡが解き明かす新サピエンス史）
デイヴィッド・ライク、訳＝日向やよい、ＮＨＫ出版、20183年初版

ビッグ・クエスチョン（〈人類の難問〉に答えよう）
スティーヴン・ホーキング、ＮＨＫ出版、2019年初版

「平成の天皇」論
伊藤智永、講談社、2019年1刷

新天皇と日本人（友が見た素顔、論じ合った日本論）
小山泰正、海竜社、2018年1刷

古代日本人と朝鮮半島
関裕二、ＰＨＰ研究所、2019年初版9刷

「縄文」の新常識を知れば日本の謎が解ける
関裕二、ＰＨＰ研究所、2019年初版1刷

閉ざされた言語空間
江藤淳、文芸春秋、2019年14刷

ＧＨＱの検閲・諜報・宣伝工作
山本武利、岩波書店、2014年3刷

構造構成主義とは何か（次世代人間科学の原理）
西條剛央、北大路書房、2013年6刷

【世界最古】 不二阿祖山太神宮（もうこれ以上はない日本根本の秘密）
渡邉聖主（不二阿祖山太神宮大宮司）、ヒカルランド、2018年

理論近現代史学Ⅱ（誇れる祖国　日本復活への提言Ⅳ）
藤誠志　社会時評エッセイ、アップル タウン、 2015～2016

理論近現代史学Ⅲ（誇れる祖国　日本復活への提言Ⅴ）
藤誠志　社会時評エッセイ、アップル タウン、 2016～2017

理論近現代史学Ⅳ（誇れる祖国　日本復活への提言）
藤誠志　社会時評エッセイ、アップル タウン、 2017～2018

サピエンス全史（上）（文明の構造と人類の幸福）
ユヴァル・ノア・ハラリ、訳＝柴田裕之、河出書房新社、2019初版74刷

サピエンス全史（下）（文明の構造と人類の幸福）
ユヴァル・ノア・ハラリ、訳＝柴田裕之、河出書房新社、2019初版53刷

時間は存在しない
カルロ・ロヴェッリ、訳＝富永星、ＮＨＫ出版、2019初版2刷

危機と人類（上）（下）
ジャレド・ダイアモンド、訳＝小川俊子・川上純子、日本経済新聞出版社、
2019初版3刷

中村純二・著作物

一般物理：大学教科　´共著´共立出版´1978.01

（国立国会図書館蔵書）

東京大学教養課程における物理学学生実験の改善　´1978―19791

（国立国会図書館蔵書）

南極観測　´共著´出版協同社´1958

（国立国会図書館蔵書）

科学技術者のための電磁理論　´L・ソマリー著´共訳´秀潤社´1978.09

（国立国会図書館蔵書）

山（東京大学公開講座‥３２）　´共著´東京大学出版会´1981.03

（国立国会図書館蔵書）

一高旅行部五十年　´第一高等学校旅行部縦の会´共著´1968

（国立国会図書館蔵書）

山の気象研究論文集：創立三十周年記念特別号　´山の気象研究会・共著´1987.9

（国立国会図書館蔵書）

ほうおう座流星群観測余話と第一～三次南極物語　´私製版・非売品

（A5 版カラー 62 頁）2015.11.04

（国立国会図書館蔵書´秦野市立図書館蔵書）

丹沢山麓山岳文化集❶´❷´❸　´共著＝**中村純二・中村あや・田中文夫・**

岩楯岳一・岩楯志帆´私製版・非売品（A5 版カラー計 549 頁）2018.12.04

（国立国会図書館　蔵書決定 2018 年 12 月 05 日´秦野市立図書館蔵書）

複雑学　**日本文明物語&哲学（序説）**　´私製版・非売品（A4 版カラー209 頁）

2020.02.27　（国立国会図書館　蔵書）

田中文夫・著作物

青春のヒマラヤに学ぶ　´文芸社´2001.1.1　ISBN4-8355-1085-2-C0095

（国立国会図書館蔵書´公共図書館蔵書）

頂きのかなたに　´日本文学館´2003.8.15　´ISBN4-7765-0055-8-C0095

（国立国会図書館蔵書´公共図書館蔵書）

若き日の山々　´私製版・非売品（A5 版カラー　162 頁）´2014.08.15

老いの道標　´私製版・非売品（A5 版カラー　218 頁）´2014.06.10

登山の総合人間学　´私製版・非売品（A5 版カラー　266 頁）´2015.12.07

（国立国会図書館　蔵書決定 2015 年 12 月 18 日）

登山の生態分類（学）´私製版・非売品（A5 版カラー　133 頁）´2016.08.30

（国立国会図書館　蔵書決定 2016 年 9 月 5 日）

山の空気　森のざわめき´私製版・非売品（A5 版カラー　155 頁）´2017.01.16

（国立国会図書館　蔵書決定 2017 年 1 月 20 日）

山と美の終焉　´私製版・非売品（A5 版カラー 282 頁）´2017.11.02

（国立国会図書館　蔵書決定 2017 年 11 月 28 日）

雑学　**日本文明物語**　´私製版・非売品（A5 版カラー231 頁）´2018.06.07

（国立国会図書館　蔵書決定 2018 年 6 月 13 日）

烏尾山仲尾根物語　´私製版・頒布所＝作治小屋¥1,500−（A5 版カラー108 頁）´

2018.07.07

丹沢山麓山岳文化集❶´❷´❸　´共著＝**中村純二・中村あや・田中文夫・**

岩楯岳一・岩楯志帆´私製版・非売品（A5 版カラー計 549 頁）2018.12.04

（国立国会図書館　蔵書決定 2018 年 12 月 05 日´秦野市立図書館蔵書）

複雑学　**日本文明物語&哲学（本著）**　´私製版・非売品（A4 版カラー209 頁）

2020.02.27　（国立国会図書館　蔵書）

中　村　純　二

1923 年 9 月

滋賀県近江八幡市生まれ

東京帝国大学理学部物理学科卒

東京大学名誉教授（理学博士）宇宙光学

第１～３次南極観測隊員

日本山岳文化学会（元：理事）

日本山岳会（元：副会長）

東京大学スキー山岳部（元：部長）

田　中　文　夫

1946 年 3 月

神奈川県平塚市四ノ宮生まれ

（相模國第四之宮 ➡ 中郡大野町四之宮）

神奈川県立神奈川工業高等学校・電気通信科卒

専門分野 ＝ 建築設備士（電気）

2003 年から**中村純二** 先生に師事

日本山岳文化学会（元：評議員）

総合人間学会正会員

複雑学　日本文明物語＆哲学

（日本習合論からの発信）

序説　中村純二

本著　田中文夫

発行者　田中文夫

発行所　横浜市旭区東希望が丘二十三番地一

発行日　二〇二〇年二月二七日

（個人研究著作、非売品）

表 丹 沢 の 自 然

【 ソメイヨシノ】 2017 年 4 月
神奈川県立　秦野戸川公園

【日本カモシカ】 2017 年 4 月
中津川・寄沢

【 老 木 】 2020 年 2 月
四十八瀬川・本沢 界尾根

【 ヤマユリ】 2018 年 7 月
三ノ塔尾根

【ホトトギス】 2018 年 10 月
中津川・コシバ沢

国立国会図書館　蔵書

書誌ＩＤ＝030290807
日本全国書誌番号＝23350648
請求記号＝G9-M4